史跡賞田廃寺跡

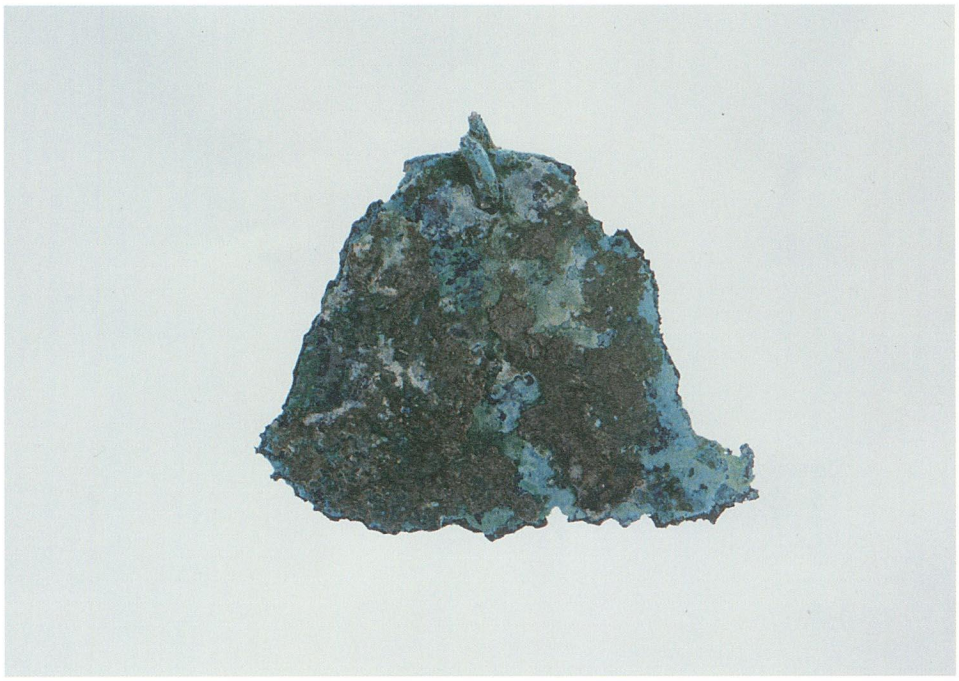
－史跡環境整備事業に伴う発掘調査報告－

2005年3月

岡山市教育委員会

金　堂　基　壇（西から）

西　塔　基　壇（東から）



風　招

擦　管

序

広大な沖積平野である岡山平野と瀬戸内海が南にあり、北には中国山地へと続く吉備高原の端部が接するといった岡山市の地勢は、まさに岡山県全体を凝縮したものといえます。

また、全長350mの造山古墳をはじめ、古代山城である大廻・小廻山城など、質的にも優れた遺跡が多数存在します。これは、かつて「大和」と匹敵する勢力を誇っていたとされる「吉備」の中心地であったことを示しています。

賞田廃寺跡は史跡環境整備に伴い発掘調査されました。当地は古代の備前国における中心となる備前国府の推定地に隣接し、備前国では最古の寺院跡と考えられております。また、1970年の調査で地方では希な壇上積基壇を備えた寺院であることが判明し、翌年には史跡に指定されました。このたびの調査でも大量の瓦などとともに瓦塔や瓦経などの貴重な遺物も出土し、地方豪族の氏寺の実態を解明する大変貴重な資料になるものと期待されます。

本報告書は、以上の調査結果をまとめたものです。岡山地方の地方史研究の基本資料としておおくの方々にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成に当たっては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と、発掘参加者のご支援をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成17年３月31日

岡山市教育委員会

教育長　玉光源爾

例　　言

1．この報告書は、岡山市教育委員会文化財課が平成１３年１２月３日から平成１４年３月３１日、平成１４年４月１日から平成１５年３月３１日、平成１５年４月１日から平成１６年３月３１日にかけて史跡賞田廃寺跡の史跡環境整備事業に伴う、岡山市賞田８４１－１他の発掘調査に関するものである。

2．この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その執筆は扇崎由、高橋伸二が担当した。なお編集は高橋がおこなった。また、遠藤亮氏には凝灰岩の石材について、ご執筆いただいた。

3．遺物の実測およびトレースは上西高登、岡山顕子、山元尚子がおこなった。遺物の写真撮影は熊澤達己・扇崎・高橋がおこなった。

4．この報告書に用いている高度値は標準海抜高度である。

5．賞田廃寺の遺構図は国土座標Ⅳ系によりグリットを設定した。この報告書に用いている方位は磁北である。

6．遺構は下記の略号を用いて表記している。
ＳＢ　建物　　ＳＤ　溝状遺構　　Ｐ　柱穴　ＳＫ　土坑　　ＳＸ　その他の遺構

7．第６図は国土交通省国土地理院発行の２万５千分の１地形図「岡山北部」「岡山南部」を複製し、加筆したものである。

8．遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

目　　次

第１章　調査の経緯と体制
　第１節　調査に至る経緯（出宮）……1
　第２節　調査組織（高橋）……2
　第３節　調査方法（高橋）……4
　第４節　調査の経緯
　　１．第１次調査（出宮）……5
　　２．第２次調査（高橋）……9

第２章　位置と環境（高橋）……16

第３章　調査の概要（高橋）……21

第４章　遺構（高橋）……34

第５章　遺物
　第１節　瓦類（扇崎）……114
　第２節　瓦経（高橋）……283
　第３節　土器（高橋）……285
　第４節　金属製品（高橋）……311
　第５節　石製品（高橋）……313

第６章　考察
　第１節　伽藍配置と堂塔の変遷（高橋）……317
　第２節　備前国府との関係（高橋）……320
　第３節　賞田廃寺の造営氏族（高橋）……321
　第４節　出土瓦の様式と分布状況（扇崎）……322
　第５節　軒平瓦２Ａ類と軒平瓦５Ｃ類の笵傷の進行と時期（扇崎）……326
　第６節　東西両塔の建立順序（扇崎）……329

第７章　今後の整備計画（出宮）……331

付載　古代「壇上積基壇」に使われた讃岐の凝灰岩（遠藤）……337

挿入図目次

第１図　第１次調査風景……9
第２図　調査区全体図……11・12
第３図　第２次調査風景……13
第４図　トレンチ配置図……14
第５図　調査区配置図……15
第６図　賞田廃寺の位置……16
第７図　主要遺跡分布図……17
第８図　旭東平野出土軒瓦……19
第９図　金堂全体図……22
第10図　東塔全体図……23
第11図　西塔全体図……24
第12図　南区画施設……25
第13図　南門推定地……26
第14図　北区画施設……27
第15図　東区画施設……28
第16図　Ｔ19・Ｔ24……29
第17図　Ｔ22・Ｔ29……30
第18図　Ｔ28・Ｔ30……31
第19図　炉跡群……32
第20図　伽藍配置図……33
第21図　Ｔ１平面・西壁実測図……35
第22図　ＳＤ９・10断面図……36
第23図　ＳＫ11・12平・断面図……36
第24図　Ｔ２平面・南壁実測図……37
第25図　Ｐ５平・断面図……37
第26図　ＳＸ18平・断面図……37
第27図　Ｔ３平面・西壁実測図……38
第28図　ＳＤ27断面図……39
第29図　ＳＫ19平・断面図……39
第30図　ＳＸ128平・断面図……40
第31図　Ｐ129・130平・断面図……40
第32図　Ｔ４平面・西壁実測図……41・42
第33図　Ｔ５平面・東壁実測図……43
第34図　ＳＫ44平・断面図……44
第35図　ＳＫ45平・断面図……44
第36図　ＳＫ46平・断面図……44
第37図　Ｔ６平面・西壁実測図……45・46
第38図　Ｔ７平面・南壁実測図……47
第39図　ＳＤ30断面図……47
第40図　Ｐ37平・断面図……48
第41図　ＳＫ36平・断面図……48
第42図　Ｐ50平・断面図……48
第43図　Ｔ８平面・西壁実測図……49・50
第44図　Ｔ９平面・東壁実測図……51・52
第45図　Ｔ10平面・南壁実測図……53
第46図　東塔基壇全体図……54
第47図　東塔基壇北辺平・立面図……55
第48図　Ｔ12北・東壁実測図……56
第49図　Ｐ53平・断面図……56
第50図　Ｐ54平・断面図……56
第51図　Ｐ55平・断面図……56
第52図　Ｐ56平・断面図……56
第53図　建物１平・断面図……57
第54図　Ｔ13平面・北壁実測図……58
第55図　ＳＤ32断面図……59
第56図　ＳＫ33平・断面図……59
第57図　Ｔ14平面・南壁実測図……61・62
第58図　ＳＸ85平・断面図……63
第59図　南石段東・西立面図……64
第60図　西塔壇上積基壇西辺平・立面図……64
第61図　西塔南石段平・立面図……65・66
第62図　西塔基壇全体図……67・68
第63図　西塔壇上積基壇東辺・東階段平・立面図……69・70
第64図　ＳＸ543平・立・断面図……71
第65図　金堂礎石・基壇北辺及び中層瓦溜平・立面図……72
第66図　金堂（Ｔ17・18）平・断面図……73・74
第67図　Ｔ19平面・東壁実測図……75・76
第68図　ＳＫ90平・断面図……78
第69図　ＳＫ93平・断面図……78
第70図　Ｔ20平面・北壁実測図……79
第71図　Ｔ21平面・東壁実測図……79
第72図　Ｔ22平面実測図……80
第73図　Ｔ24平面・北壁実測図……81
第74図　ＳＫ116平・断面図……81
第75図　ＳＸ544平・断面図……81
第76図　ＳＤ141断面図……82
第77図　ＳＤ390断面図……82
第78図　ＳＤ393・394・395断面図……82
第79図　ＳＫ342平・断面図……82
第80図　Ｔ25平面・Ｔ26平面・北・東壁実測図……83・84
第81図　ＳＸ217平・断面図……85
第82図　柱穴列１・２平・断面図……86
第83図　柱穴列３平・断面図……87
第84図　柱穴列４平・断面図……87
第85図　柱穴列５平・断面図……87
第86図　柱穴列６平・断面図……87
第87図　柱穴列７平・断面図……87
第88図　柱穴列８平・断面図……88
第89図　柱穴列９平・断面図……88
第90図　柱穴列10平・断面図……88
第91図　柱穴列11平・断面図……89
第92図　柱穴列12平・断面図……89
第93図　柱穴列13平・断面図……89
第94図　Ｔ28平面・北・西・南壁実測図……90

第95図　ＳＥ218平・断面図 ……90
第96図　Ｔ29平面・北壁実測図……91
第97図　ＳＫ493平・断面図 ……92
第98図　Ｔ30平面・東壁実測図……93
第99図　ＳＤ510断面図 ……94
第100図　ＳＫ504平・断面図……94
第101図　Ｐ513平・断面図……94
第102図　ＳＫ509平・断面図……94
第103図　Ｐ516・517・518平・断面図……95
第104図　ＳＫ498断面図……95
第105図　Ｔ31平面・西壁実測図 ……96
第106図　Ｔ32平面・西壁実測図 ……97
第107図　Ｔ33平面・北・西・南壁実測図 ……98
第108図　ＳＸ459平・断面図……99
第109図　ＳＸ460平・断面図……99
第110図　ＳＸ462平・断面図……99
第111図　ＳＸ463平・断面図……99
第112図　ＳＸ523平面図 ……100
第113図　ＳＸ524平面図 ……100
第114図　ＳＸ525平面図 ……100
第115図　ＳＸ526平面図 ……100
第116図　Ｔ34平面・西壁実測図……101
第117図　ＳＸ536・537平・断面図……102
第118図　Ｔ35平面・西・南壁実測図……103
第119図　Ｔ36平面・北・西壁実測図……104
第120図　Ｔ37平面・東壁実測図……105
第121図　Ｔ11・38平面・南壁実測図……107・108
第122図　ＳＤ531・532・534・535断面図……109
第123図　ＳＤ533断面図 ……109
第124図　ＳＫ541平・断面図 ……109
第125図　Ｔ39平面・北・西壁実測図……110
第126図　ＳＸ542平・断面図 ……111
第127図　Ｔ40平面・北壁実測図……112
第128図　Ｔ41平面・北・西壁実測図……113
第129図　軒丸瓦１類笵傷位置図……114
第130図　軒丸瓦１類・２類……115
第131図　軒丸瓦２Ａ類笵傷位置図……116
第132図　軒丸瓦３Ａ類笵傷位置図……117
第133図　軒丸瓦３Ａ類（１）……118
第134図　軒丸瓦３Ａ類（２）……119
第135図　軒丸瓦３Ａ類（３）・３Ｂ類……120
第136図　軒丸瓦４類、６Ａ・６Ｃ類笵傷進行図……121
第137図　軒丸瓦４類（１）……122
第138図　軒丸瓦４類（２）……123
第139図　軒丸瓦４類（３）……124
第140図　軒丸瓦５類・６Ａ類（１）……126
第141図　軒丸瓦６Ａ類（２）……127
第142図　軒丸瓦６Ａ類（３）・６Ｂ類・６Ｃ類……128
第143図　軒丸瓦７類～15類……130
第144図　軒平瓦１Ａ類（１）……132
第145図　軒平瓦１Ａ類（２）……133
第146図　軒平瓦１Ａ類（３）……134
第147図　軒平瓦１Ａ類（４）……135
第148図　軒平瓦１Ａ類（５）……136
第149図　軒平瓦１Ａ類（６）・１Ｂ類……137
第150図　軒平瓦１Ｃ類……138
第151図　軒平瓦１Ｄ類（１）……139
第152図　軒平瓦１Ｄ類（２）……140
第153図　軒平瓦１Ｅ類……141
第154図　軒平瓦２Ａ類笵傷進行図……142
第155図　軒平瓦２Ａ類（１）……143
第156図　軒平瓦２Ａ類（２）……144
第157図　軒平瓦２Ａ類（３）……145
第158図　軒平瓦２Ａ類（４）……146
第159図　軒平瓦２Ａ類（５）……147
第160図　軒平瓦２Ａ類（６）……148
第161図　軒平瓦２Ａ類（７）……149
第162図　軒平瓦２Ａ類（８）……150
第163図　軒平瓦２Ａ類（９）……151
第164図　軒平瓦２Ａ類（10）……152
第165図　軒平瓦２Ａ類（11）……153
第166図　軒平瓦２Ａ類（12）……154
第167図　軒平瓦２Ａ類（13）……155
第168図　軒平瓦２Ａ類（14）……156
第169図　軒平瓦２Ａ類（15）……157
第170図　軒平瓦２Ａ類（16）……158
第171図　軒平瓦２Ａ類（17）……159
第172図　軒平瓦２Ｂ類……160
第173図　軒平瓦３類・４類……162
第174図　軒平瓦５Ａ類（１）……164
第175図　軒平瓦５Ａ類（２）……165
第176図　軒平瓦５Ａ類（３）・５Ｂ類……166
第177図　軒平瓦５Ｃ類（１）……167
第178図　軒平瓦５Ｃ類（２）……168
第179図　軒平瓦５Ｃ類（３）……169
第180図　軒平瓦５Ｃ類（４）……170
第181図　軒平瓦５Ｃ類（５）……171
第182図　軒平瓦５Ｃ類（６）……172
第183図　軒平瓦５Ｃ類（７）……173
第184図　軒平瓦５Ｄ・５Ｅ類・６類～８類……174
第185図　軒平瓦５Ｃ笵傷進行図……175
第186図　軒平瓦９類～11類……177
第187図　軒平瓦12類～14類（１）……178
第188図　軒平瓦14類（２）・15類～17類……179
第189図　軒平瓦18類……180
第190図　軒平瓦19類・20類……181
第191図　行基丸瓦１類（１）……182
第192図　行基丸瓦１類（２）……184

第193図　行基丸瓦１類（３）……185
第194図　行基丸瓦１類（４）……186
第195図　行基丸瓦１類（５）……187
第196図　行基丸瓦２類（１）……188
第197図　行基丸瓦２類（２）……189
第198図　行基丸瓦２類（３）……190
第199図　行基丸瓦２類（４）……191
第200図　行基丸瓦２類（５）……192
第201図　行基丸瓦２類（６）……193
第202図　行基丸瓦３類・４類・５類（１）……195
第203図　行基丸瓦５類（２）……196
第204図　行基丸瓦６類・７類（１）……197
第205図　行基丸瓦７類（２）・８類……198
第206図　行基丸瓦９類～11類……200
第207図　行基丸瓦12類・13類、不明丸瓦１類・２類……201
第208図　玉縁丸瓦１類・２類……202
第209図　玉縁丸瓦３類・４類……203
第210図　玉縁丸瓦５類……204
第211図　玉縁丸瓦６類……205
第212図　平瓦１類（１）……207
第213図　平瓦１類（２）……208
第214図　平瓦２Ａ類（１）……210
第215図　平瓦２Ａ類（２）……211
第216図　平瓦２Ａ類（３）……212
第217図　平瓦２Ａ類（４）……213
第218図　平瓦２Ａ類（５）……214
第219図　平瓦２Ａ類（６）……215
第220図　平瓦２Ａ類（７）……216
第221図　平瓦２Ａ類（８）……217
第222図　平瓦２Ａ類（９）……218
第223図　平瓦２Ａ類（10）……219
第224図　平瓦２Ａ類（11）……220
第225図　平瓦２Ａ類（12）……221
第226図　平瓦２Ａ類（13）……222
第227図　平瓦２Ａ類（14）……223
第228図　平瓦２Ａ類（15）……224
第229図　平瓦２Ａ類（16）……225
第230図　平瓦２Ａ類（17）……226
第231図　平瓦２Ａ類（18）……227
第232図　平瓦２Ａ類（19）……228
第233図　平瓦２Ａ類（20）……229
第234図　平瓦２Ａ類（21）……230
第235図　平瓦２Ａ類（22）……231
第236図　平瓦２Ａ類（23）……232
第237図　平瓦２Ｂ類（１）……233
第238図　平瓦２Ｂ類（２）……234
第239図　平瓦２Ｃ類……235
第240図　平瓦２Ｄ類（１）……236
第241図　平瓦２Ｄ類（２）……237
第242図　平瓦２Ｅ類……238
第243図　平瓦２Ｆ類（１）……239
第244図　平瓦２Ｆ類（２）……240
第245図　平瓦３類……242
第246図　平瓦４類……243
第247図　平瓦５類（１）……244
第248図　平瓦５類（２）……245
第249図　平瓦５類（３）……246
第250図　平瓦６類……247
第251図　平瓦７類……248
第252図　平瓦８類・９類……249
第253図　平瓦10Ａ類（１）……250
第254図　平瓦10Ａ類（２）……251
第255図　平瓦10Ａ類（３）……252
第256図　平瓦10Ａ類（４）……253
第257図　平瓦10Ａ類（５）……254
第258図　平瓦10Ａ類（６）……255
第259図　平瓦10Ｂ類……256
第260図　平瓦10Ｃ類……257
第261図　平瓦11類・12類……258
第262図　平瓦13類～15類……259
第263図　平瓦16類……260
第264図　平瓦17類～20類……262
第265図　平瓦21類～23類……263
第266図　叩き目（１）……264
第267図　叩き目（２）……265
第268図　叩き目（３）……266
第269図　叩き目（４）……267
第270図　塼……268
第271図　隅切り瓦……269
第272図　不明瓦……270
第273図　朱線平瓦……271
第274図　鬼瓦類・鳥衾……272
第275図　刻印瓦……273
第276図　鴟尾（１）……274
第277図　鴟尾（２）……275
第278図　瓦塔（１）……277
第279図　瓦塔（２）……278
第280図　瓦塔（３）……279
第281図　瓦塔（４）……280
第282図　瓦経……284
第283図　Ｔ１出土土器……286
第284図　Ｔ２出土土器……287
第285図　Ｔ３出土土器……287
第286図　Ｔ４出土土器……288
第287図　Ｔ６出土土器……288
第288図　Ｔ７出土土器……288
第289図　Ｔ８出土土器……288
第290図　Ｔ９・10出土土器……289

第291図　T12出土土器……289
第292図　T13出土土器……289
第293図　T14出土土器（1）……289
第294図　T14出土土器（2）……290
第295図　T15出土土器……290
第296図　T16出土土器……290
第297図　T17出土土器……291
第298図　T19出土土器……291
第299図　T20出土土器……291
第300図　T22出土土器……292
第301図　T23出土土器……292
第302図　T24出土土器……292
第303図　T25出土土器……293
第304図　T26出土土器（1）……293
第305図　T26出土土器（2）……294
第306図　T27出土土器（1）……294
第307図　T27出土土器（2）……295
第308図　T28出土土器……295
第309図　T29出土土器……296
第310図　T30出土土器……296
第311図　T31出土土器……296
第312図　T32出土土器……296
第313図　T33出土土器……296
第314図　T34出土土器……296
第315図　T35出土土器……296
第316図　T38出土土器（1）……296
第317図　T38出土土器（2）……297
第318図　T39出土土器（1）……297
第319図　T39出土土器（2）……298
第320図　T41出土土器……299
第321図　銅製品……311
第322図　鉄釘……312
第323図　擦管……313
第324図　基壇化粧石……314
第325図　礎石……315
第326図　石鍋……316
第327図　石製品……316
第328図　伽藍配置……317
第329図　軒丸瓦復原瓦当紋様一覧……323
第330図　軒平瓦復原瓦当紋様一覧……324
第331図　軒瓦出土分布図……325
第332図　軒平瓦2A－5段階……327
第333図　軒平瓦5C－2段階……328

表目次

土器観察表……303
表1　軒丸瓦4類段階別出土点数……329
表2　軒平瓦2A類段階別出土点数……329

図版目次

巻頭図版１
１．金堂基壇（西から）
２．西塔基壇（東から）

巻頭図版２
１．風招
２．擦管

図版１
１．軒丸瓦１類
２．軒丸瓦２Ａ類

図版２
１．２様式軒丸瓦・軒平瓦
２．３様式軒丸瓦・軒平瓦

図版３
１．４様式軒丸瓦
２．５様式軒丸瓦・軒平瓦

図版４
「上道」線刻丸瓦

図版５
遺跡周辺空撮(昭和48年)

図版６
１．金堂基壇全景(西から)
２．金堂基壇北辺の礎石と瓦溜
３．金堂礎石抜き取り穴

図版７
１．金堂基壇西瓦溜
２．金堂基壇西辺(北から)
３．金堂基壇版築(東から)

図版８
１．東塔基壇北辺(西から)
２．東塔基壇と柱穴群
３．東塔基壇外装(第１次調査)

図版９
１．西塔基壇全景(東から)
２．西塔基壇外周列石と石段(南から)

図版10
１．西塔東階段近景(東から)
２．西塔東階段近景(北から)
３．西塔基壇西辺(西から)

図版11
１．西塔西階段(東から)
２．西塔基壇中央部
３．西塔基壇瓦溜

図版12
１．西塔基壇北外周列石(第１次調査)
２．西塔基壇南瓦溜
３．西塔北瓦溜　瓦・石材出土状況

図版13
１．西塔版築
２．西塔東階段部土層
３．西塔南石段部土層

図版14
１．Ｔ１全景(北から)
２．Ｔ２全景(東から)
３．Ｔ２　Ｐ５

図版15
１．Ｔ４全景(北から)
２．Ｔ４　ＳＸ128
３．Ｔ５全景(北から)

図版16
１．Ｔ６全景(北から)
２．Ｔ８上段部全景(南から)
３．Ｔ10全景(東から)

図版17
１．Ｔ19北半(北西から)
２．Ｔ24全景(西から)
３．Ｔ24　ＳＸ544

図版18
１．Ｔ26全景(西から)
２．Ｔ25全景(北から)
３．Ｔ25・26　柱穴列１とＳＤ141

図版19
１．Ｔ25・26　柱穴列１(Ｐ226)

２．Ｔ28全景(南から)
３．Ｔ28　ＳＥ218

図版20
１．Ｔ29全景(西から)
２．Ｔ30全景(北から)
３．Ｔ31全景(南から)

図版21
１．Ｔ33全景(南から)
２．Ｔ33　ＳＸ460
３．Ｔ34　ＳＸ536・537

図版22
１．Ｔ36全景(南から)
２．Ｔ37全景(南から)
３．Ｔ38全景(西から)

図版23
１．Ｔ11・38　ＳＤ531・535(北から)
２．Ｔ11・38　ＳＤ532(北から)
３．Ｔ11・38　ＳＫ541

図版24
１．Ｔ40全景(東から)
２．Ｔ39　ＳＸ542
３．Ｔ41全景(東から)

図版25
軒丸瓦１類・２類(裏面)

図版26
軒丸瓦１類

図版27
軒丸瓦２類

図版28
軒丸瓦３Ａ類
軒丸瓦３Ｂ類

図版29
軒丸瓦３Ｂ類

図版30
軒丸瓦４類

図版31
軒丸瓦５類
軒丸瓦６Ｃ類

図版32
軒丸瓦６Ａ類

図版33
軒丸瓦６Ｂ類
軒丸瓦７・８類

図版34
軒丸瓦９・10・11類

図版35
軒丸瓦13・14類
軒平瓦１類

図版36
軒平瓦２Ａ・２Ｂ・２Ａ－１類

図版37
軒平瓦２Ａ－２・２Ａ－５・２Ａ－７・２Ａ類

図版38
軒平瓦３Ａ・３Ｂ・３Ｃ類
軒平瓦５Ａ・５Ｃ類

図版39
軒平瓦５Ｂ・５Ｄ類
軒平瓦６・７・８・９類

図版40
軒平瓦10・11・12・13・14・16類

図版41
軒平瓦15・17・18類
行基丸瓦２類

図版42
行基丸瓦３・４・５Ａ・６・７・８類

図版43
行基丸瓦９・10・12・13
玉縁丸瓦１・２類

図版44
玉縁丸瓦３類
行基丸瓦１・２類

図版45
行基丸瓦２類
玉縁丸瓦４・５・６類

図版46
平瓦１類

図版47
平瓦２Ａ・２Ｂ・２Ｃ類

図版48
平瓦２Ｄ・２Ｅ・２Ｆ類

図版49
平瓦３・４・５類

図版50
平瓦６・７・８類

図版51
平瓦９・10Ａ・10Ｂ類

図版52
平瓦10Ｃ・11・12類

図版53
平瓦13・14・15類

図版54
平瓦16・17・18類

図版55
平瓦21・22・23類

図版56
平瓦・隅切瓦・朱線瓦

図版57
鬼瓦・鴟尾

図版58
鴟尾・瓦塔

図版59
瓦塔

図版60
瓦塔

図版61
瓦経・土器類

図版62
土器類

図版63
土器類

図版64
土器類

図版65
土器類

図版66
土器類

第１章　　調査の経緯と体制

第１節　　調査に至る経緯

岡山市賞田に所在する賞田廃寺は古くから奈良・白鳳期の良好な古瓦が出土する寺院跡として知られていたが、宅地開発が計画され保存問題が表面化したことから、本格的な史跡指定に向けた発掘調査を実施することとなり、１９７０年（昭和４５）６月には周辺一帯を賞田廃寺跡として史跡仮指定が行われた。

発掘調査は１９７０年（昭和４５）５月から８月にかけて実施された。この調査では事前に確認されていた基壇状の地形を中心に２９か所のトレンチを設定し、基壇遺構の検証と東西及び南側の寺域確認を主眼においたものであった。また、同時に隣接地で発見された、瓦窯跡の調査も行われた。

この調査では、塔・金堂・西門・南回廊・西回廊の各基壇をはじめ南築地・東築地の基礎地形や瓦窯等の遺構を検出し一町四方の寺域の確認が行われ、なかでも塔基壇と西門（西塔）基壇は地方寺院としては希な凝灰岩製壇上積基壇であったことと、備前国では唯一の飛鳥様式瓦や岡山市域では初の奈良三彩の出土をみた。

また、伽藍配置については調査が寺域全体の中では限られた範囲であったが不確定ながらも川原寺式か薬師寺式であると想定された。

１９７０年（昭和４５）１２月には国の文化財専門審議会は文部大臣に賞田廃寺跡の史跡指定の答申を行い、１９７２年（昭和４７）３月１６日の官報に文部省告示となり、史跡となった。

１９７１年（昭和４６）には国庫補助事業により、仮指定後に岡山県開発公社が先行取得していた住宅造成地を岡山市が買収した。また、１９７２年（昭和４７）３月の史跡指定をうけて、岡山市が国庫補助事業により指定地内民有地の買収を本格的に実施したものの、当時の狂乱物価の影響もあって計画の実施が不可能となり買収事業は頓挫したかたちとなってしまった。その後、地元からの要望もあって岡山市は文化庁に国庫補助事業による買収事業の再開を要請したものの、不調に終わっていた。

岡山市からの要望により１９９１年（平成３）から再開された用地買収も２０００年（平成１２）をもって一応の終了をみた。さらに、２００２年（平成１４）には岡山市は単独事業で指定地内に残る未買収地を買収し史跡指定地の総ての買収を完了した。

こうした状況の中、史跡整備計画の策定のために、第一次の調査では確定できなかった未確認の伽藍の追求や寺域の確定などを目的とし、平成１３年度から３か年計画で史跡環境整備にむけた発掘調査を実施することとなったのである。

第２節　　調査組織

発掘調査組織

発掘調査主体者　　岡山市教育委員会教育長　玉光源爾

発掘調査対策委員　　稲田孝司（岡山大学教授）
狩野　久（岡山市文化財保護審議会委員）
工楽善通（狭山池博物館館長）
西川　宏（岡山理科大学非常勤講師）
細見敬三（岡山市文化財保護審議会委員）
間壁忠彦（倉敷考古館館長）
水内昌康（前岡山市文化財保護審議会会長）

発掘調査担当者　　出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財課課長）
根木　修（岡山市教育委員会文化財専門監）
三宅一正（岡山市教育委員会文化財課調整主幹）平成14年まで
小林好美（岡山市教育委員会文化財課調整主幹）平成15年度
神谷正義（岡山市教育委員会文化財課主査）
乗岡　実（岡山市教育委員会文化財課主任）
（調査員）扇崎　由（岡山市教育委員会文化財主任）
高橋伸二（岡山市教育委員会文化財保護主事）
（経理員）福永みどり（岡山市教育委員会文化財課主任）

発掘調査現場作業員　　安藤益美　茨木泉　茨木勉　遠藤卓夫　大生義一　大橋弘司　大橋保子
岡本勝美　岡本久美子　片山久美子　河田多美子　近藤美登里　近藤陽子
斉藤春男　斉藤陽子　坂本健治　坂本とみ子　塩見和正　塩見繁正
塩見昭子　塩見嘉子　島村逸郎　杉野正一　野口恒子　信畑武士　服部晃一
服部須磨子　服部孝子　服部威郎　服部智幸　服部道夫　藤田一郎
平松千代子　藤田光子　別所照恵　牧野臣弘　牧野君子　光石善一
光石辰夫　光石増治　森木みどり　湯浅艶子

発掘調査現場事務員　　服部悦子　中川智子　丸山智代

出土物整理事務員　　上地洋子　上西高登　岡山顕子　小宮山泰子　都井理恵
友廣翔子　中川智子　服部悦子　平野晶子　松島智里　森由起恵
山森美代子

調査にあたり、対策委員の先生方には多大なるご指導・ご助言を頂いた。また、亀田修一氏には調査中たびたび現地にてご教示いただいた。熊澤達己氏には出土物の写真撮影のご援助をいただいた。伊藤晃、井上弘、上原真人、亀山行雄、河本清、葛原克人、澤田秀美、重根弘和、白石純、中野雅美、平井泰男、弘田和司、福田和男、正岡睦夫、松本和男、松尾麻子、柳瀬昭彦、山本悦世、賞田町内会の皆様には諸々のご教示・ご助言を頂いた。諸々にご助勢くださった方々に深謝する次第である。

第３節　調査方法

1970年の第１次調査では、当時現況で明らかであった５つの基壇状地形の１つ、第Ｉ基壇(東塔基壇)上に測量原点を設定し、磁北を基準として東西南北のグリッドを設定している。
このたびの、第２次調査においても本来ならば第１次調査のグリッドを踏襲すべきところであった。しかしながら、第１次調査から30年が経過し、当時の測量杭はもちろんのことトレンチ位置も現況で確認できない状態であった。このため、地形および推測される遺構に即してトレンチを設定し、国土座標に基づいて記録を行うこととした。そして、塔および西門(いずれも第１次調査時)の基壇外装を再検出して、第１次調査の記録と整合を行った。
トレンチは、回廊や築地などの寺院区画施設や建物施設の位置確認には幅２ｍを原則とし、その成果をもとに建物施設などの面的追求を行う場合は必要に応じて幅を広げた。検出した遺構については、中世以降の柱穴・土坑・溝などは、寺院廃絶後のあり方および下層以降の検出をはかるため全掘したが、それ以前の柱穴や土坑については半裁に、基壇の裁ち割り幅についても必要最低限にとどめ、遺構の保存をはかった。

発掘調査は、当初表土掘削から人力で行う予定であったが、トレンチおよび排土置き場確保のため竹の伐採に日数をとられ、さらにトレンチ内の竹株伐去に予想外の労力と日数がかかることが判明し、表土掘削に重機を用いた。また、調査の進展に伴いトレンチの拡張や近接しての設地の必要が生じ、排土移動にも重機を用いた。

埋め戻しは、特に保護の必要がある凝灰岩の基壇外装については土嚢を積み上げて周囲を囲った後、内部の砂締めを行った。その他の箇所についても必要に応じ人力で埋め戻しを行い保護措置を講じた後、現地表まで重機を活用して埋め戻した。

第４節　調査の経緯

１　第１次調査

(1) 調査に至る経緯

賞田廃寺跡の保存問題の発生した１９６９年（昭和４４）以前には、遺跡の立地する岡山市賞田字東山畑・字西山畑・字東谷一帯は、細分化された地籍の状況にあり、地元の人々に分筆所有されていた。この地の中央を南北に通る市道を挟んで、東側の一帯が宅地・水田・畑・果樹園・山林・竹藪となっており、西側一帯が背後の溜め池とその前面は段々畑状の水田となっていた。１９６７年（昭和４２）に西側の水田一帯が岡山市内の企業の社員住宅用地に買収され、また、東側の畑地の一画も、１９６９年に個人住宅用地に買収された。１９６９年の春に社員住宅用地造成計画が判明し、また、個人住宅用地の造成（塔基壇付近）が施工されたことにより、賞田廃寺跡の保存問題が表面化した。このため、岡山県教育委員会と岡山市教育委員会は、地元地権者と個人住宅建築者及び社宅建設の企業に、遺跡の重要性と現状保存の必要性を説明し、理解と協力を頂いて保存対策を講じたが、白鳳時代から天平時代の各種瓦当文を出土し、備前国で最古の氏寺であるこの寺院跡の内容に鑑み、究極において国指定史跡として保存を図るのが最上唯一の施策であるとの結論に至った。

こうした行政施策の方針決定に基づき、岡山県教育委員会は１９７０年６月２２日に、史跡仮指定を施行した。

また、岡山市教育委員会が、岡山県教育委員会の指導の下に、地権者と地元の協力を頂いたうえで、史跡指定に向けての緊急発掘調査を１９７０年（昭和４５）の春先から、国庫補助事業により実施することになった。発掘調査に先立ち、１９７０年４月地元地権者と県教育委員会及び市教育委員会の事前の協議が持たれ、地権者と地元の絶大なる協力と支援のもとに、発掘調査の実施の運びとなった。発掘調査は、遺構の検出と寺域の確認を基本的目的として、現状で確認できる基壇状地形５カ所と、瓦片集中散布地５カ所のうちの主要部及び寺域追求のトレンチ発掘、さらに周辺地形の測量を行ない、将来の史跡指定と保存に資する遺跡の概要を把握して、報告書にまとめることを方針とした。また、調査の実施は、岡山市教育委員会が「賞田廃寺発掘調査団」を編成して対応し、期間を５月８日から約２ヶ月を一応の予定とした。調査団の事務局は、岡山市教育委員会社会教育課文化係に置いた。

【賞田廃寺発掘調査団】

調査責任者	難　波　輝　夫（岡山市教育長）
調 査 顧 問	和　島　誠　一（岡山大学法文学部教授）
	西　原　礼之助（岡山市文化財専門委員長）
	鎌　木　義　昌（岡山理科大学教授）
	近　藤　義　郎（岡山大学法文学部助教授）
調 査 団 長	水　内　昌　康（岡山市文化財専門委員）
調 査 委 員	巌　津　政右衛門（岡山市文化財専門委員）
	西　川　　宏（山陽女子学園教諭）
	間　壁　忠　彦（倉敷考古館副館長）
	間　壁　葭　子（倉敷考古館学芸員）

	高　橋　　護	（岡山県教育委員会文化財保護主事）
	春　成　秀　爾	（岡山大学法文学部助手）
調査担当員	松　本　　猛	（岡山市教育委員会社会教育課長）
	植　田　心　壮	（岡山市教育委員会社会教育課文化係長）
	井　上　甫　之	（岡山市教育委員会社会教育課）
	伊　藤　　晃	（岡山県教育委員会文化課）
	出　宮　徳　尚	（岡山市教育委員会社会教育課）
	近　成　久美子	（事務局調査担当）
	田　渕　砂　子	（事務局庶務担当）

(2) 調査の実施

【調査目標】

１９７０年の調査は、賞田廃寺跡を国指定史跡にして保存を図るために、その必要資料の検出を大目的としたものである。したがって、発掘調査は、基壇等主要堂塔遺構の検出と、築地あるいは周溝による寺域の確認に、主点を置いてトレンチの設定が行われた。従来、賞田廃寺跡は、出土瓦により白鳳時代から室町時代の寺院址とされ、遺構も比較的よく保存されていると伝えられており、備前最古の寺院址として注目を浴びていたが、その内容、様相は全く不明のままであった。賞田廃寺跡の中心的時期は、律令体制の形成から古代荘園制の展開の時期であり、変動する古代社会の動向のなかにあって「地方」がいかなる意義をもち、役割を演じたのか。また、多くの古代地方寺院がいかなる歴史的意義を担ったのかを、一地方寺院の遺構と遺物から若干なりとも提起できればと、していた。

【調査経過】

・発掘調査事業費総額１，５００，０００円（国庫補助750,000円・県費500,000円）
　※当初内示額は１，０００，０００円で、発掘状況により１，５００，０００円の申請額に復活。
・期間は、５月８日から８月６日までで、延べ日数６１日。一部の埋め戻しは後日に行う。
・発掘は、事前踏査で確認できた５カ所の基壇状地形のうち、南の第Ⅴ基壇を除く４カ所の遺構検証と、東側・南側・西側三方向の寺域追求を、トレンチ２９カ所を設定して行う。併せて、北東隣接地で宅地造成に伴って発見された瓦窯跡焚き口部分の調査も行う。延べ面積が約５１０㎡。
・グリッドは、第Ⅰ（東塔）基壇の中央西寄りに原点を設置し、磁北（６度２７分偏西）を北方向とする東西南北の方向軸線を設定している。
・発掘調査報告書の作成は、発掘の現地作業終了後から社会教育課文化係の収蔵庫で行い、１９７１年３月３１日に発行。
・調査にあたり、文化庁及び奈良国立文化財研究所、岡山県教育委員会の埋蔵文化財関係の方々の現地指導と多大の支援を頂いている。また、岡山大学と香川大学の考古学学生の諸氏の助勢を頂いている。

(3) 調査の成果

発掘調査の結果、塔・金堂・西門・南回廊（一部）・西回廊（一部）の各基壇、小基壇及び南築地・東築地の基礎地形、窯址（焚き口）等の遺構を検出し、一町四方の寺域の確認を行っている。検出した遺構は、伽藍全体からみれば一部であり、中門・南大門・講堂・食堂の主要堂舎、さらには僧房・

雑舎・工房等の付属建物の、基壇や基礎地形の追求にまでは及び得ていない。

一方、各種瓦・奈良三彩・緑釉・各種須恵器・各種土師器・須恵質土器・瓦器・備前焼・日本製磁器・輸入磁器の各々の破片、土鈴、鉄釘等の遺物が、出土している。瓦片のうち、瓦当文は、飛鳥様式の素弁蓮花文軒丸瓦２種、白鳳時代前半の素弁蓮花文軒丸瓦と素文有顎軒平瓦、白鳳時代末期の複弁蓮花文軒丸瓦２種、平城宮式瓦当文の軒丸瓦と軒平瓦、奈良時代後期の単弁蓮花文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦、平安時代前半の単弁蓮花文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦、鎌倉時代の巴文軒丸瓦と巴文軒平瓦であった。この他に、築地軒丸瓦・築地軒平瓦、鴟尾の破片が出土している。

検出した遺構・遺物で特筆すべきは、塔基壇と西門（第二次調査の結果西塔）基壇の凝灰岩製壇上積基壇、当時としては岡山市内で最初の奈良三彩の出土、今日でも備前国領域では唯一の飛鳥様式瓦当文の出土の、三事項である。

【伽藍配置】

半数以上の主要堂舎が未検証の発掘調査結果ではあるが、上記の検出した堂塔基壇と基礎地形から、不確定ながら一町四方の川原寺式か薬師寺式の伽藍配置と、一応の想定をしている。

第Ⅰ基壇は、基壇化粧が凝灰岩製壇上積基壇であり、一辺３８尺の塔基壇と判明し、基壇規模から五重塔であった可能性が強い（第二次調査の結果で東塔基壇となる）。

第Ⅱ基壇は、基壇基礎地形の造成から小基壇の存在が想定されるが、遺構としては明確に検出できておらず、伽藍整備時の存在は否定的であった。

第Ⅲ基壇は、現存する塔基壇に先だち、白鳳時代初期に建立された堂舎の基壇で、検出した堂塔基壇の遺構では最初期のものである。所在位置と復元基壇規模や最終時までの存続から、寺院の中核堂舎すなわち金堂と判断できるが、他の地方寺院址の金堂と対比すると小さい部類になる。検出した最終形態は、乱石積基壇であったが、寺院の最盛期には凝灰岩製壇上積基壇であった可能性が強い。

第Ⅳ基壇は、方形の土壇状高まりであったが、発掘の結果が一昔前の用水荒備用砂置き場と判明し、基壇認識を削除している。

西門基壇は、基壇化粧が凝灰岩製壇上積基壇であり、一辺が小尺３６尺の方形を呈し、基壇の外周に一段積みの外護列石を伴い，変形重成基壇ともみることができる。方形基壇のため門の基壇とすることに逡巡を覚えたが、位置関係から西門と判断している。

回廊は、南側と西側の検出状態から、上幅を２０尺と想定したが、基壇築成や上部建築物を検討できるだけの遺存状況にはなかった。

築地基礎地形は、築地基底部土壇と内外両側の溝と外側犬走り状土壇の地形が、南側外周縁辺で確認でき、また東側外周縁辺でも内外両側に溝を伴う土段が検出できた。築地瓦の出土と相俟って、上部の瓦葺築地塀を復元想定している。東側築地土壇と西門基壇中央との距離が、１０８ｍを計り、１町の寺域を設定したが、北側は山寄せ状にあり、南北の寺域を１町に限る必要はなく、むしろ築地等の周囲的な区画施設が存在せず、寺域が裏山へ凹字形に延びていたとの想定をしている。

塔基壇・西門基壇・金堂（第Ⅲ）基壇の位置関係、さらに塔基壇と西門基壇の東西軸線の一致、西回廊基壇と塔基壇との間隔等から判断して、東西軸線上に一つの基壇の存在が考えられる。伽藍配置は、塔とこの推定所在基壇と金堂基壇との位置関係から、推定所在基壇を金堂とし、伽藍完備のために金堂（第Ⅲ）基壇が講堂に転用されたと考えて、法起寺式伽藍配置の想定を提起している。この推定所在基壇東側と塔基壇西側との中心線を、この伽藍配置の中軸線に見立てている。

しかし、第Ⅲ基壇は規模やその後の存続状態から金堂とし、推定所在基壇を西金堂か西塔に想定する方により妥当性があり、極めて推測的ではあるが、賞田廃寺跡の伽藍配置は、川原寺式伽藍様式、或いは薬師寺式伽藍様式であった可能性の方が、上記の伽藍推定よりも強く、この場合には中軸線が金堂（第Ⅲ）基壇の東西中央線上に一致すると考えている。

いずれにせよ、塔・金堂基壇・西回廊基壇地形の配置から、賞田廃寺跡の伽藍配置が中軸線で左右対称ではなく、偏っていたとの想定に至っていた。

【時　期】

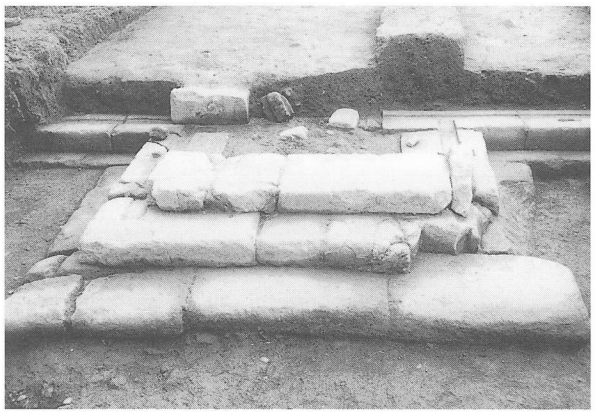
賞田廃寺跡の寺院創建は、従来は素弁蓮花文軒丸瓦と素文有顎軒平瓦の白鳳時代でも古い時期とされていたが、発掘調査で三片ながら飛鳥様式（賞田廃寺第Ⅰ様式）の軒丸瓦が出土し、飛鳥時代後半に小堂が建立されたと判断されるに至った。遺構に共伴する瓦は、賞田廃寺第Ⅱ様式瓦からであり、寺院としての本格的に造営されだすのは白鳳時代前期の金堂造営時からで、伽藍の一応の整備が完備するのは奈良時代前半であり、最盛期の奈良時代後半には主要堂塔が壇上積基壇であり、その後漸次衰微しながらも鎌倉時代前半まで存続していたことが判明した。最盛時の様相は、壇上積基壇の構築もあって、中央寺院に遜色ない佇まいを呈しており、この氏寺を造営した在地豪族上道氏の、中央政界への進出を物語ると評価できた。

とはいえ、本格的寺院として最初に金堂が造営されたのが白鳳時代前期であり，塔・西門・回廊等が造営されたのは奈良時代前半であって、金堂造営と伽藍整備の間には少なくとも５０年近い間隙が存在しており、地方寺院だとはいえ寺院造営に対する間延びが著しいのも事実であった。一方、旭川下流左岸平野（律令制下の備前国上道郡西半の平野）に所在する氏寺の、幡多廃寺跡と居都廃寺跡の造営過程と、賞田廃寺跡の造営過程には、瓦当文の使用状況に相関関係が指摘でき、工程面における企画調整の効果的運用の時期的相関性が認められている。

また、賞田廃寺跡の西に隣接して、創建の１～２世代前の首長墓に想定される巨石墳の唐人塚古墳が存在しており、氏寺の造営と運用は、この地の郡司層上道氏の動向を濃厚に反映していると、評価されるに至っている。

【史跡指定】

賞田廃寺跡は、発掘調査の成果に基づいて、１９７０年１２月１２日に国の文化財専門審議会から、史跡指定の答申がなされ、今後に国指定史跡として保存されることが確実となった。



東塔東階段

現地説明会

第１図　第１次調査風景

２　第２次調査

平成13年度（Ｔ１～Ｔ16、調査面積700㎡）

発掘調査は第１次調査の成果に基づき、講堂や門・僧房・食堂などの建物配置の解明や、点的に確認されている回廊や築地などの区画施設の範囲確定を目的として、幅２ｍのトレンチを基本として調査する事とした。中門、南門、塔と西門（いずれも第１次調査時、以下同じ）の中間に想定された基壇、講堂、北・東・西回廊、東・南築地等の調査を主眼として計画を立てた。結果、中門・南門推定地には門および回廊・築地などの区画施設は確認されなかった。金堂（第Ⅲ基壇）の北側に設定したＴ９では、花崗岩の地山がいくつかの緩やかな段を持ちつつ南に傾斜し平坦面が見られず、講堂が存在しないことも明らかとなった。Ｔ９北端の地山傾斜変換点とＴ８北端で検出した土盛りによる平坦面とが、北を区画する施設と考えられた。

当初、塔・西門基壇については調査の予定はなかったが、第１次調査との図の整合性をはかるためには両基壇を再検出する以外に方法はなく、また、両基壇の築造・廃絶の時期を明らかにするためにも調査が必要になり、塔基壇北辺、西門基壇北辺・西辺にトレンチを設定した。

塔基壇北辺には凝灰岩の延石・地覆石が良好に遺存しており、北辺中央には階段が検出されなかったので、塔基壇には東西２面の階段が設置されていたと推定される。塔基壇北の瓦溜では瓦とともに破壊された凝灰岩基壇外装石が検出され、瓦溜は13世紀後半の再堆積と判明した。西門では北辺の基壇外装石はほぼ抜き取られていたものの、西辺では階段中央から北西角までの基壇外装石が遺存していた。基壇外周の瓦溜は塔と同様に13世紀後半の再堆積であり、西瓦溜では上下２回にわたって再堆積していた。基壇外装石は西門北瓦溜からも検出され、地覆石の大きさ・溝幅などは塔北瓦溜から出土した地覆石と共通するものの、塔基壇地覆石とも西門基壇地覆石とも異なった規格で作られており、すでに破壊された第３の凝灰岩壇正積基壇の存在が想起された。

塔と西門の中間に想定された基壇については、すでに地山および造成土上面まで中世段階に削平を受けており、明らかな手がかりは得られなかった。

平成14年度（Ｔ17～Ｔ25、Ｔ８・９延長、調査面積600㎡）

金堂基壇の検出、西門の面的精査、北・西築地、北・西回廊、南門の検出をはかった。金堂基壇は

13世紀後半に周囲を１段深く掘り下げられ、14世紀初頭から前半頃に乱石積の基壇外装がなされた後、焼失したことが判明した。礎石は大半が抜き取られていたが原位置を保った礎石１つを検出した。礎石抜き取り穴から金堂は東西５間、南北４間の建物であったことが明らかとなった。

西門については正方形の基壇形状や基壇外装石の束石ほぞ穴から復原される柱配置、および西門にとりつくとされていた築地基礎地形が追認し得ないことなどから、塔基壇と判断されるにいたった。これにより、両塔建立時の伽藍計画の変更が想起されるようになった。西塔基壇については第１次調査の時点でその規模や外周を自然石の石列が取り囲むことが明らかになっていた。南石列には他辺に比べ大振りの石が使われていることが明らかとなり、その中央には石段が敷設されている可能性が窺われた。北回廊や両塔中間に想定した建物を追求したＴ19では、どちらも明確な手がかりを得られていない。

西回廊の東端部と考えられていた溝については、近世頃の暗渠と見られ回廊を追認することはできなかった。しかし、盛り土による造成と西側の段は明瞭であり、南北だけではなく東西方向にも起伏のある寺域の中で、それぞれの建物を中心として区分けした平坦面を形成しようとした現れと見られた。平成13年度の調査では南門の手がかりが得られなかったので、市道をはさんだ西側にトレンチを設定したところ、その西端にわずかに地山の高まりが検出され、基壇端部の可能性を考えた。

指定地の北に隣接する私有地にも、所有者の承諾をいただいて、寺院関連遺構の有無・寺院造成土の有無などを確認するためトレンチをもうけた。山砂の堆積が厚く湧水による壁面崩壊のため詳細な記録は作成できなかったが、地表下1.7ｍで黒褐色の造成土を確認した。

平成15年度（Ｔ25拡張、Ｔ26～Ｔ41、調査面積1,230㎡）

講堂の位置確認、西塔外周列石に付属する南石段の検出、西塔の東にある段の南への延長、東・西・南の区画施設の確定をはかることを主眼とした。講堂の位置については金堂西辺の北側、市道をはさんで西隣にトレンチを設定して調査したが、いずれも確認できなかった。西塔外周列石南石段は、幅３ｍ出1.5ｍで自然石による３段(後補により４段)で、良好に遺存していた。西塔に面する段は水田による地下げのため削平を受けていたが、面を西に向けた石を２石新たに検出し、本来この段に石が配されていたことが判明した。

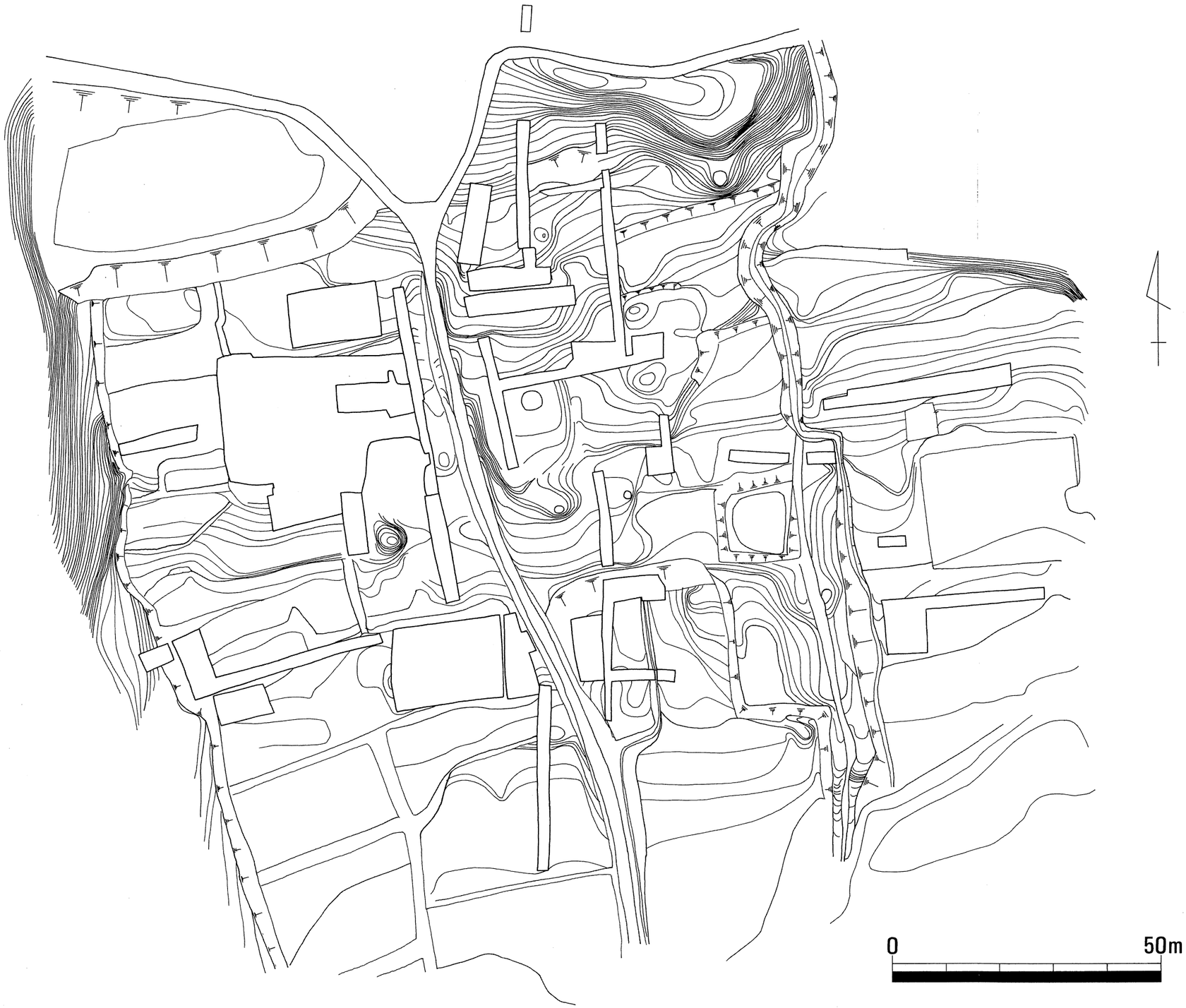
Ｔ25西端で検出した地山の高まりが基壇端部であるか否かを確認するため、Ｔ26は面積を広く取り調査したところ、東西方向の溝とそれに平行する掘立柱列が検出された。９世紀後半から10世紀の南区画施設と見られる。他にも東西に列をなす柱穴があり、わずかに南北に位置を移動させながらも何度にもわたって改修が行われたことが窺えた。門については決定的な手がかりを得ることができず、市道部分の調査の必要性が高まった。Ｔ26は第１次調査で南築地および犬走りを検出した地点でもあるが、面的調査の結果、それが中世の地下げによるものであったことが判明した。東を区画する溝については第１次調査地点の南でも追認することができた。

平成16年度

出土物の整理と報告書の作成を行った。

発掘日誌(抄)

平成１３年１２月　３日　発掘調査開始。当面の調査区および排土置き場の確保のため、竹藪伐採に２週間ほどを要す。



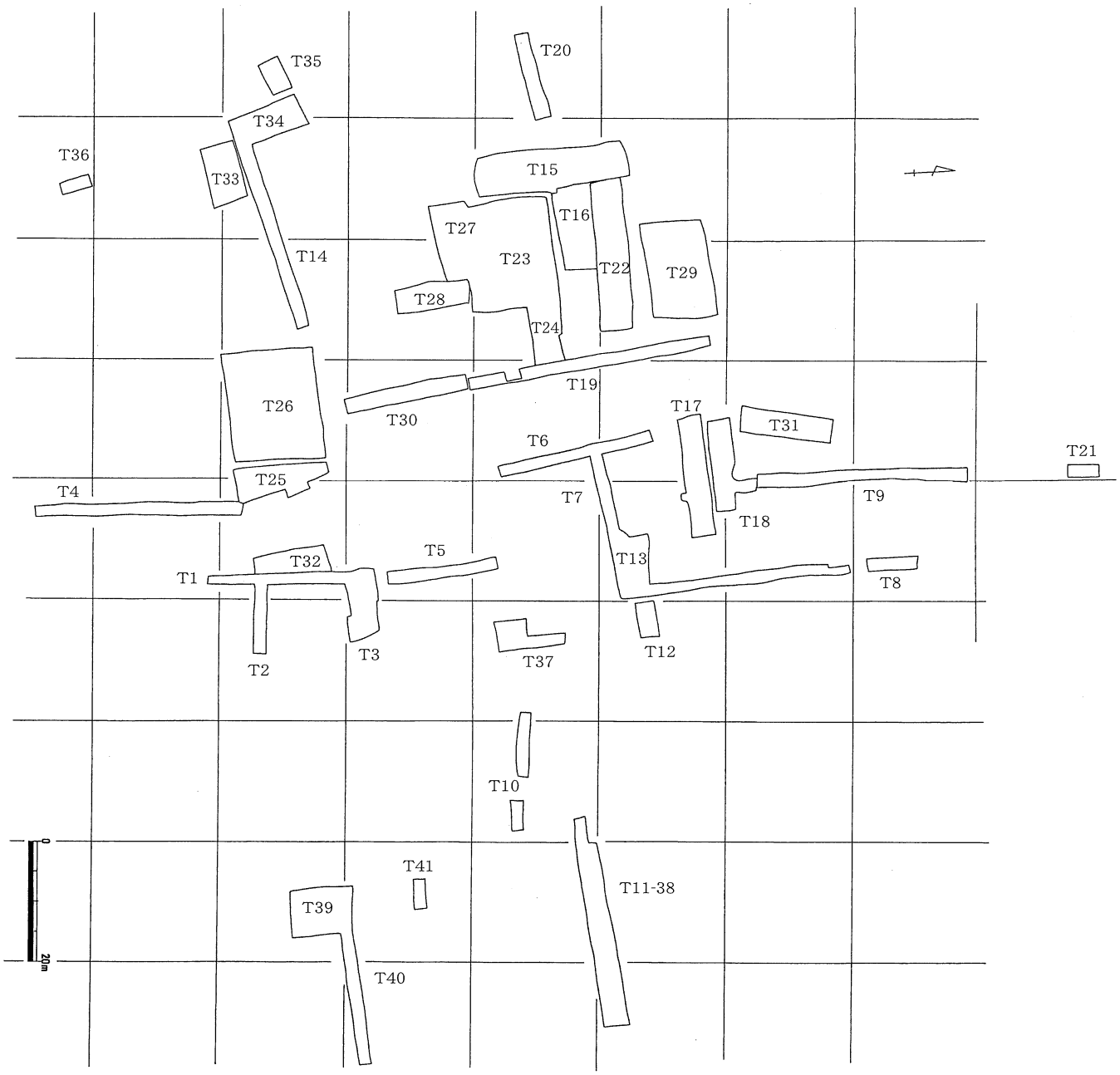
第２図　調査区全体図

調査風景

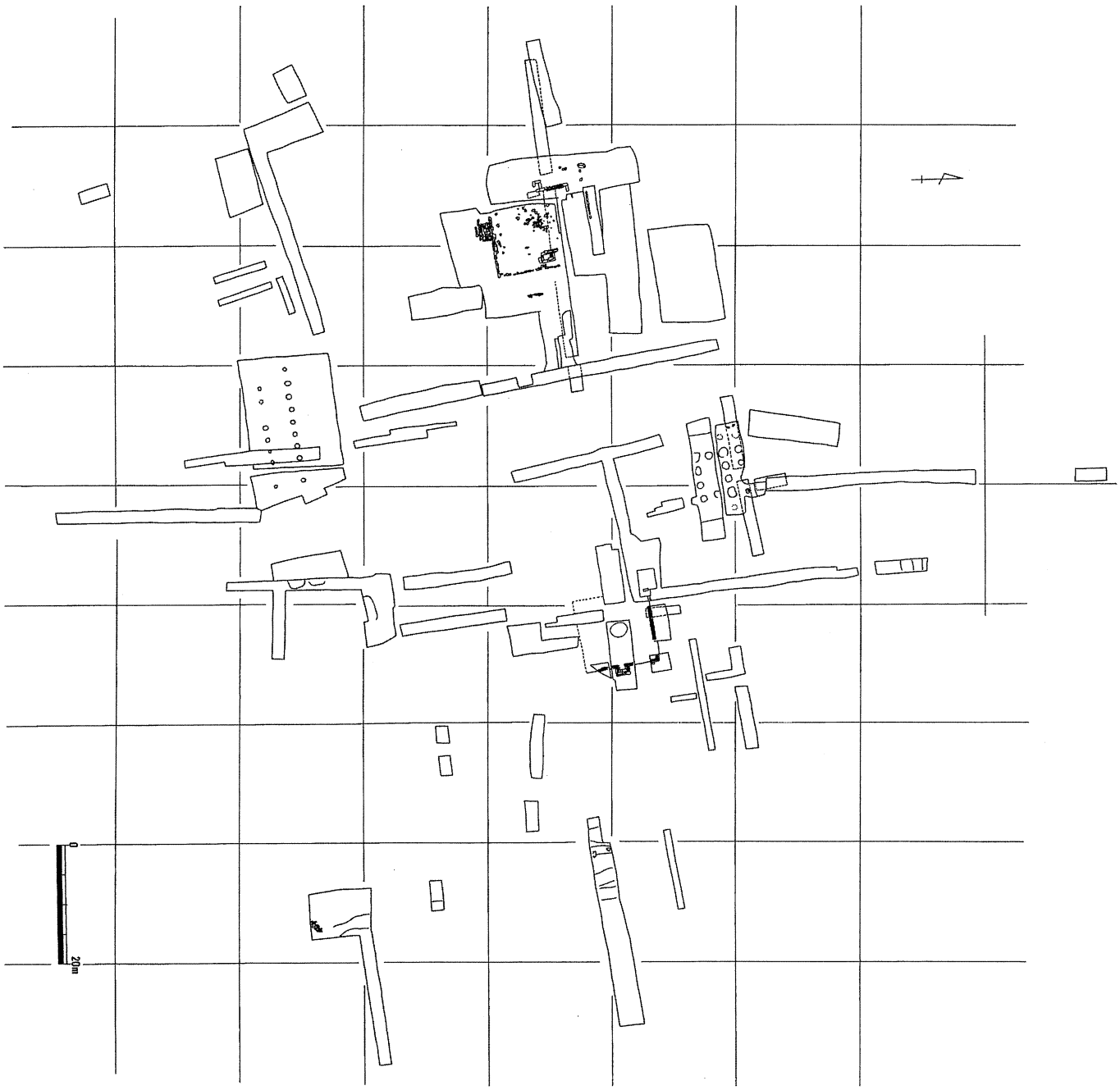
現地説明会

第３図　第２次調査風景

平成１４年	２月　１日	対策委員会開催。
	２月　７日	東塔北辺基壇外装検出。延石・地覆石が良好に遺存する。
	２月１８日	西塔西辺基壇外装検出。階段中央から北が遺存していた。
	５月２２日	金堂基壇の礎石抜き取り穴を検出する中、原位置のままの礎石１石を検出。金堂建物は５×４間と判明。
	６月２７日	対策委員会開催
	９月　６日	西塔基壇ほぼ全面検出。南列石に石段が付属する可能性が高まる。
	９月２１日	対策委員会開催
	９月２８日	現地説明会開催
	９月３０日	西塔基壇の東で、土層観察用の土手中より風招出土。
平成１５年	８月２９日	西塔南列石の石段、検出終了。
	１０月１０日	Ｔ26で東西溝とそれに平行する柱穴列を検出。南区画施設と判断。
	１１月２８日	対策委員会開催
	１２月２０日	整備委員会開催
平成１６年	１月２０日	西丘陵裾部の炉群ほぼ検出終了。丘陵裾部に鉄・銅を扱う工房の存在が明らかとなる。
	２月１７日	一部埋め戻し開始。
	２月２６日	区画施設となる溝を検出終了。１次調査成果を追認。
	３月　６日	対策委員会開催
	３月　７日	現地説明会開催
	３月１５日	埋め戻し終了
	３月１９日	撤収


T35
T20
T34
T36
T33
T15
T16
T27
T14
T23
T22
T29
T28
T24
T19
T26
T30
T17
T31
T6
T21
T4
T25
T7
T9
T18
T5
T32
T13
T1
T8
T2
T3
T37
T12
T10
0
T41
T11-38
T39
20m
T40

第4図　トレンチ配置図



第5図　調査区配置図

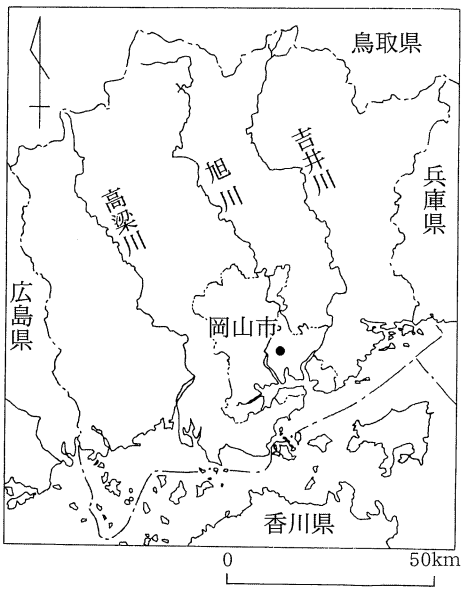
第２章　　位置と環境

賞田廃寺は岡山三大河川のひとつ旭川の東岸平野の北半に位置する。ここは岡山平野のほぼ中央部にあたり、北は竜の口山塊、東は山王山から芥子子山、南は平野部をはさんで操山丘陵、西は旭川をはさんで金山丘陵に囲まれる。

賞田廃寺のある岡山市賞田は市町村制施行に伴い明治２２年に近隣の７か村が合併して高島村となり、昭和２９年には岡山市と合併した。この高島地区でも平野部では宅地化が進み、旧来の景観は激変しているものの、賞田廃寺周辺は田園景観が残されている。

標高1000ｍを越える山々がそびえる中国山地の南には標高300～600ｍの隆起準平原である吉備高原が瀬戸内海沿岸部の平野まで続く。中国山地の西南部を源流とする旭川は吉備高原を経てその南端にある竜の口山塊と金山山塊の間を抜けて平野部へ流れ、児島湾へ流入する。児島湾はかつては「吉備の穴海」とよばれる縄文海進によって生じた海峡であった。縄文海進や沖積地の形成環境を示すものとしては、岡山城三之曲輪の発掘調査では縄文海進期の汀線を示すカキ礁の形成された波蝕台が確認され、岡山城二之丸跡や南方釜田遺跡の発掘調査では縄文海進期の海底にある生痕内で赤ホヤ火山灰（B.P6～6.54千年）や、さらにその下方で一次的な堆積とみられるＡＴ火山灰（B.P2.1～2.23千年）が確認されている。

旧石器時代の遺跡は少ないものの、操山山塊からはナイフ形石器が採集されている。平野部で遺跡が確認されるのは縄文時代後期からで、旭東平野にある百間川沢田遺跡では多くの土器とともに、炉床や貯蔵穴が認められ、旭西平野にある津島岡大遺跡でも同じ様相である。旭西平野の北端部に位置する朝寝鼻貝塚からは縄文時代前期の頃のプラントオパールが検出され、コメ栽培の起源をめぐる新たな資料を提供している。



第６図　賞田廃寺の位置

弥生時代前期初頭には旭西平野では津島遺跡が形成され、やや遅れて旭東平野では百間川沢田遺跡が形成される。津島遺跡は県下最古の拠点集落である。百間川沢田遺跡は環濠集落で内部には竪穴住居や木棺墓がある。環濠内部には遺構の認められない空白部分があり、環濠の内側に土塁がめぐっていたことも推測される。

弥生時代中期になると、旭西平野の中央部には南方遺跡群が形成される。ここでは前期の遺構や遺物も検出されていることから、前期の段階から集落域であったが、中期中葉になると爆発的に遺構・遺物が認められるようになる。南方遺跡の発掘調査では多量の土器や石器とともに極めて精巧な木製品が多量に出土しており、当時の木工技術の高さをうかがい知ることができる。旭東平野では百間川兼基遺跡から大型掘立柱建物群が、乙多見遺跡では河内産の土

散布地　　黒点（ ・ ・ ）古墳

①朝寝鼻貝塚	⑨赤田東遺跡	⑰津倉古墳	㉕金蔵山古墳	㉝幡多廃寺	㊶ハガ遺跡
②津島岡大遺跡	⑩鹿田遺跡	⑱備前車塚古墳	㉖一本松古墳	㉞居都廃寺	㊷雄町遺跡
③津島江道遺跡	⑪都月坂2号墳丘墓	⑲網浜茶臼山古墳	㉗塚の本(おつか様)古墳	㉟網ノ浜廃寺	㊸新道遺跡
④津島遺跡	⑫南国長遺跡	⑳操山109号	㉘旗振台古墳	㊱唐人塚古墳	㊹岡山城
⑤百間川沢田遺跡	⑬中井南・三反田遺跡	㉑操山103号墳	㉙操山21号墳	㊲沢田大塚古墳	
⑥南方遺跡群	⑭片山古墳	㉒山王山古墳	㉚上の山古墳	㊳備前国府推定地	
⑦百間川兼基遺跡	⑮七つ坑古墳群	㉒神宮寺山古墳	㉛百間川原尾島遺跡	㊴百間川米田遺跡	
⑧乙多見遺跡	⑯都月坂1号墳	㉔湊茶臼山古墳	㉜賞田廃寺	㊵南古市場遺跡	

第７図　主要遺跡分布図

器が出土し、赤田東遺跡でもまとまった遺構が検出されており、旭西平野と同様に拠点集落が形成されていた可能性が高い。中期末になると南方遺跡群では一部に遺構が認められる微高地があるものの、総体的には遺構や遺物は認められなくなる。津島遺跡や鹿田遺跡など周辺で新たな集落が形成され、中期末には南方遺跡群は解体したと考えられる。旭東平野においても赤田東遺跡などの新たな集落が認められることから、集落域などに変化があった可能性が高い。

弥生時代後期は大小の遺跡が各所に認められる。旭西平野では墳長が約２０ｍ四方の都月坂２号墳丘墓があるものの、古墳時代前期初頭の前方後円（方）墳の数からすると少ないという印象が強い。旭東平野では平野部の遺跡である備前国府推定地（南国長）遺跡からは特殊器台・壺が出土した土壙が検出されており、墳丘墓自体が平野部に存在していた可能性も想定される。また、時期は異なるものの備前国府推定地南方の平野部にある中井・三反田遺跡においては墳丘を削平された古墳群も検出されている。

古墳時代前期になると、墳墓の造営に顕著な差が生じてくる。旭東・旭西平野周囲の山塊上に前い方後円（方）墳が多数築かれる。それらのうちには、いわゆる最初期の埴輪である都月型埴輪を備えたものや、舶載三角縁神獣鏡を多量に副葬したものが認められる。一方、弥生時代後期段階では多数の墳丘墓を築いていた足守川流域（備中地域）では、それらの特徴を有する古墳の築造が極めて曖昧なものとなる。この差は、大和盆地と河内平野の関係に似ているようにも思われる。

古墳時代前期中頃から末にかけては、全長が 100 ｍを越える規模の前方後円墳も３基築かれる。それらは、継起的に築かれたと考えられ、とくに最後に築かれた金蔵山古墳は、該期における中・四国地域のなかでは最大規模を有する。当地が畿内以西地域の中枢地であったことをうかがわせる。しかしながら、中期になると顕著な古墳は築かれなくなり、その性格は極めて短期間で瓦解したようである。足守川流域では全長が３５０ｍにも達する造山古墳が出現しており、再び同流域へ中枢地が移動した感を受ける。

中期後半になると、中・小規模の前方後円墳墓が幾つか認められるようになるが、それらの盟主となるような古墳は出現せず、やや規模の大きな方墳など、中・小規模の多様な古墳が築かれるといった様相を呈する。これが、いわゆる吉備の反乱伝承などに反映されるような、畿内との政治的抗争の結果であるのか、当地域の集団関係によって形成された古墳の築成状況なのかは、古墳時代の社会構造に関わる重要な問題につながるものといえる。

古墳時代の集落遺跡は、かなり広範囲に展開しており、旭東平野では原尾島遺跡、沢田遺跡、米田遺跡、赤田遺跡、兼基遺跡などがある。旭西平野では津島遺跡、津島江道遺跡、南方遺跡、鹿田遺跡などがある。豪族居館などはまだ未検出であるが、なかには規模の大きな掘立柱建物が並んで検出されている例もあり、それら集落遺跡の一角に存在する可能性は高いと思われる。

古墳時代後期も、引き続き多くの古墳や集落遺跡が展開している。そのなかで、古墳については牟佐大塚古墳や沢田大塚古墳などのように、巨石を用いた規模の大きな横穴式石室を有するものが認められ、盟主的な立場の階層が成長してきていることをうかがわせる。また、竜の口山塊では群集墳も形成される。後期古墳群・巨石墳・群集墳、これら３種の古墳は、この時期における当地の状況が畿内中枢地と密接な関係であったことを示しており、その延長線上に古代寺院の造営があるといえる。

第8図　旭東平野出土軒瓦

巨石墳は、旭西平野にはなく旭東平野にだけ認められる。さらに古代寺院にしても旭東平野では4寺院があるが、旭西平野では1寺院だけである。さらに備前国府も旭東平野に想定されている。古墳時代後期に両岸平野の不均等が生じたといえる。

古代は、旭東平野が備前国上道郡、旭西平野が備前国三野郡で、旭川が郡境となる。上道郡は、吉備の有力在地豪族である上道氏の拠点であり、三野郡も同様の豪族である三野氏の拠点である。しかしながら、上道氏は、朝臣を下賜され、しかも上道臣斐太都のように宮内大輔、右兵衛督となった、いわゆる中央官人へ成長するものもあり、あくまで在地豪族の範疇であった三野氏とは異なる足跡を残している。その点は、両豪族の勢力範囲内に認められる寺院数の数に歴然とした差があることに反

映されている。さらに、上道郡域内にある賞田廃寺・幡多廃寺では、地方寺院では極めて使用の希な凝灰岩製の壇上積基壇を用いており、その基壇への整備が上道氏の中央での成長と相関関係にあることが指摘されている。また、旭東平野北半にある賞田廃寺・幡多廃寺・居都廃寺は3㎞前後の間隔で位置しているが、出土および採集されている瓦の分析から、最も古いのは賞田廃寺で、その後幡多廃寺、居都廃寺が創建され、さらにこの3寺院間では大工事が施工されるものの、1つの寺院の大工事には他の寺院の小工事が伴っていることが明らかとなった。それは、これらの寺院の造営が上道氏の一族によって協調的に行われていたことを示しており、上道氏の構造が畿内有力豪族であった蘇我氏のようであったことも示唆している。上道郡にある3寺院の構造を追求することは、古代有力豪族の構造を明らかにすることなのである。

上道郡北半の3寺院の中央には備前国府が想定されている。この位置には赤磐市馬屋で分岐した山陽道が東西に横切っており、一見山陽道沿に国府を設置したようにもみえる。しかしながら、おそらく備前国の最有力豪族であった上道氏の中枢地への楔を打ち込んだのが国府の本質であったといえる。備前国府の関連官衙であると考えられるハガ遺跡では、その初源が7世紀末まで遡る。おそらく備前国府もその時期まで設置年代を遡らせることができ、国府のなかではかなり早くに設定されたことが予想される。その後、同じく国府関連の遺跡と推測される南古市場遺跡では、土師器の食膳具が多量に出土しており，その中には越州窯産の青磁碗も含まれている。時期は9世紀後半である。ハガ遺跡では，12世紀中頃まで官衙遺構が連続的に認められことから、『倭名類聚抄』に備前国府が三野郡にあるとの記載をそのまま受け入れることはできない。備前国内における三野郡域の比重が増すのは，旭川の河口付近に殿下渡領である鹿田庄が設定されてからである。それと備前国府との関係が反映されているものと推測される。

参考文献

出宮徳尚他『賞田廃寺発掘調査』賞田廃寺発掘調査団　１９７１年
出宮徳尚他『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団　１９７５年
出宮徳尚他『岡山市四御神上の山一号墳発掘調査報告』岡山市教育委員会　１９７４年
出宮徳尚「古代寺院址」『岡山県の考古学』吉川弘文館　１９８７年
出宮徳尚他『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会　１９８１年
草原孝典『ハガ遺跡』岡山市教育委員会　２００４年

第３章　　調査の概要

第２次調査において設定した調査区は前記したとおり調査に着手した順序により便宜的に設定したものである。一方、調査によって明らかになった遺構の実体によりいくつかの地点においては、遺構の性格などから複数のトレンチを一つの調査区として区分することが可能となった。以下では、調査成果に基づき当初の調査区設定を一部再編成しつつ、地区別の調査の概要を記述する。

金堂（第Ⅲ基壇）（第９図）

丘陵部から派生する小尾根上地形上に位置する。標高16.3ｍをはかる。第１次調査で第Ⅲ基壇とされた遺構で、現状でも基壇状の地形が良好に遺存している。この壇上の東西方向に平行してＴ17、18の２本のトレンチを設定した。両トレンチともに表土を除去した段階で礎石抜き取り穴を検出し、Ｔ17においては基壇の東西両端部を検出するとともに、Ｔ18では基壇北辺と原位置を保つ礎石１基を検出した。基壇規模は東西15ｍで、南北は13ｍに復原される。抜き取り穴から復原される建物は５×４間の東西棟で、抜き取り穴の心心で平均2.43ｍである。主軸は国土座標軸から10°西へふっている。

基壇の周囲には状態のよいところでは３層の瓦溜が観察でき、中層・下層の区別の付きにくいか所もある。中・下層の瓦溜から13世紀後半の早島式土器碗がわずかに出土することから、基壇外周は13世紀後半に改変され、その際創建当初の基壇外装も除去されたものと見られる。その後、自然石を用いた乱石積の外装が付加されるが、上層の瓦溜は炭とともにこの乱石積基壇外装の上に乗っているので、建物は焼失したものと見られる。瓦は大半が賞田廃寺第２様式の瓦で、以後の瓦は少なく葺き替えに用いられた程度と見られ、創建時の姿をとどめていたものと見てよかろう。焼失の時期は上層瓦溜と中層瓦溜の中間層やや上よりで、高台が消滅直前の早島式土器碗が出土しているので、およそ14世紀前半と見られる。

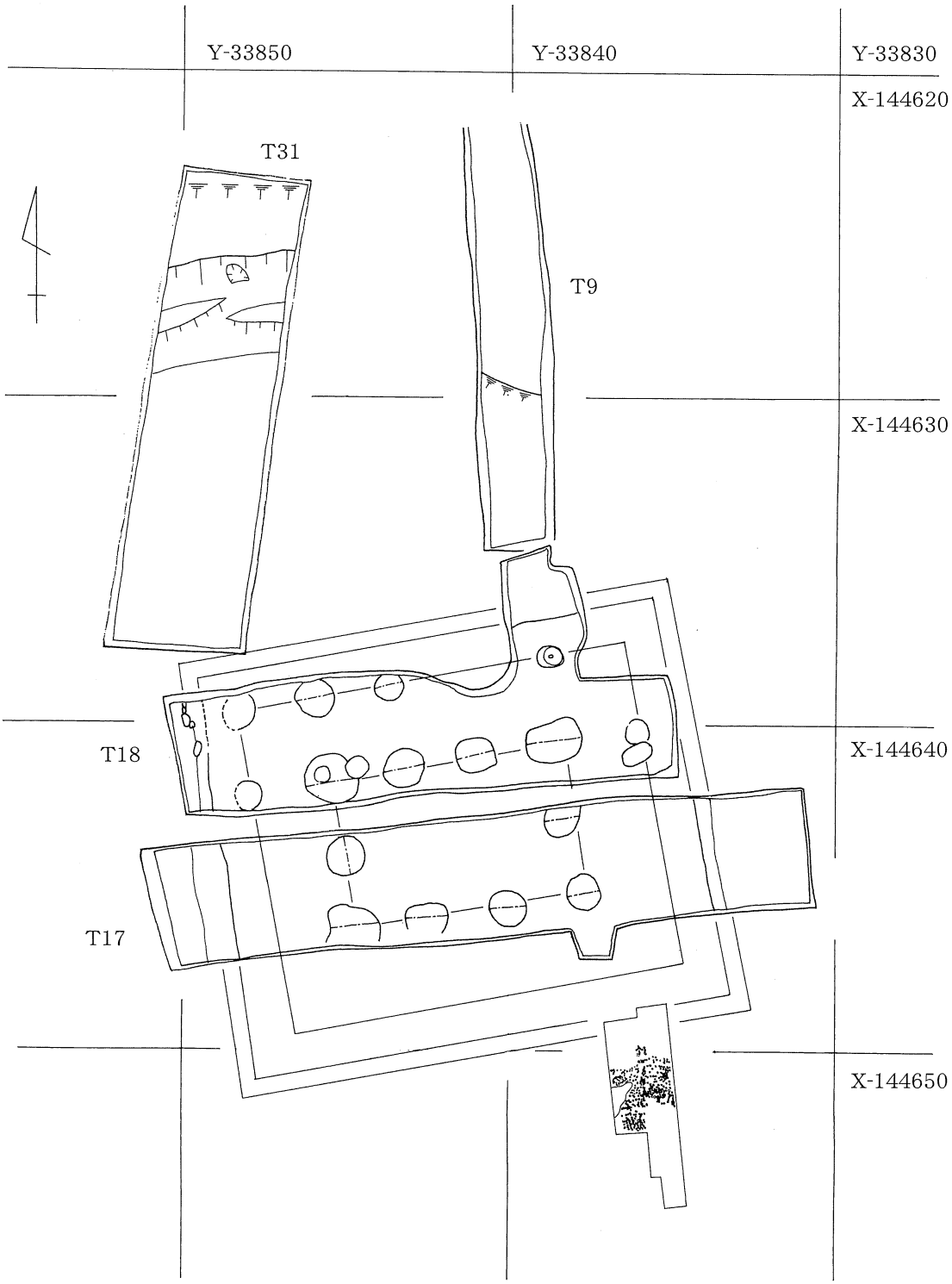
東塔（第10図）

金堂からやや東南方向に下がった場所に位置し、第１次調査において心礎抜き取り穴と凝灰岩製壇上積基壇の外装が検出された。基壇外装は北辺・東辺が残っていて、延石外面で１辺12.4ｍ地覆石外面で12.1㎝である。東辺には階段が付属し３段が遺存する。北辺には階段が残っておらず、東塔基壇は東西２面の階段をもっていたものと見られる。東階段は地覆石外幅1.8ｍ、地覆石からの出が1.2ｍである。１段の出が25㎝であるので６段が復原でき、石材の厚さが10～12㎝を掛け合わせると、延石上面から葛石上面までの高さは60～72㎝となる。しかし、現存する３段が高さ34㎝あるので、68㎝程度に復原できよう。基壇主軸は国土座標から10°西にふっている。

東西方向にＴ12を設定し、北辺の瓦溜を検出するとともに、黒褐色造成土から掘り込まれた塔建立以前と考えられる柱穴を検出した。瓦溜中からも破壊された基壇外装石が出土するので、瓦溜自体は13世紀後半に基壇が破壊されたときの２次堆積と判断される。また、西側に設定したＴ13では雨落ち溝と考えられる土坑を検出した。

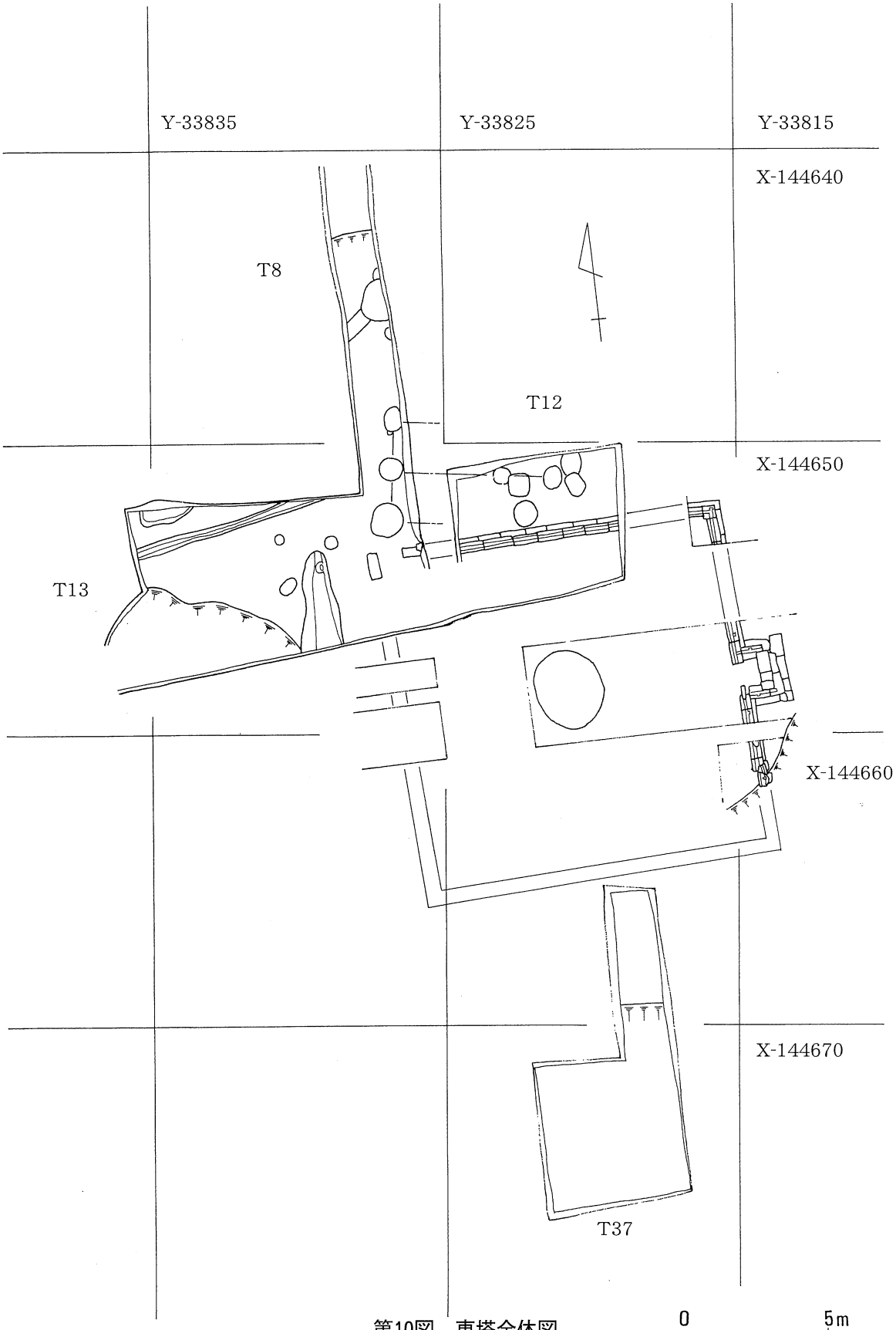
西塔（第11図）

尾根稜線の最高所から西南方にあり、谷地形の中央部よりに位置する。このため、後に述べる瓦溜や西辺基壇外装石は西に傾いていた。第１次調査で西門とされた遺構である。遺構西辺の南北方



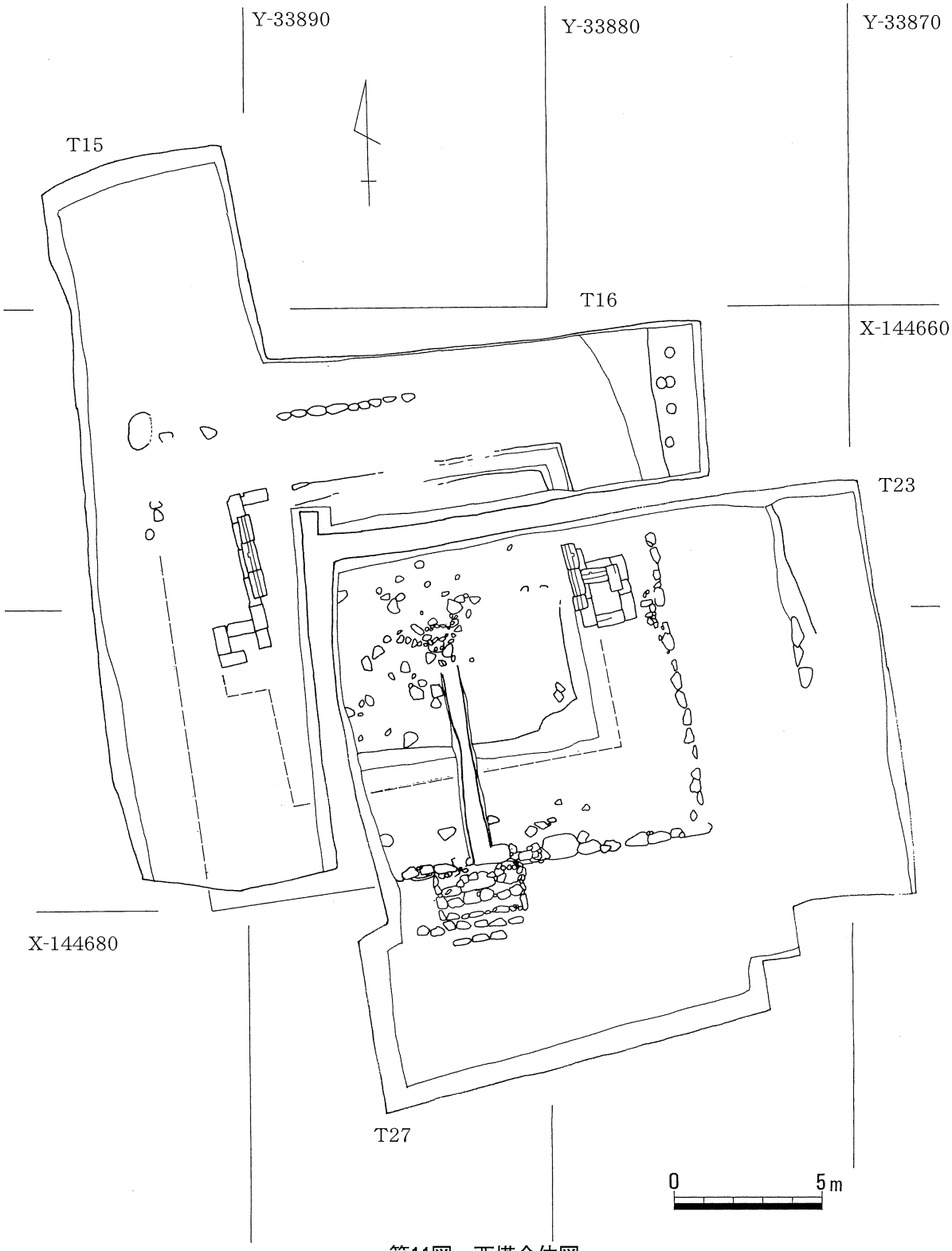
第９図　金堂全体図

向に設定されたＴ15においては瓦溜、凝灰岩製壇上積基壇外装と西階段の一部を検出した。北辺側の東西方向に設定したＴ16においても瓦溜を検出するとともに、基壇外装石材の抜き取り穴を検出



第10図　東塔全体図

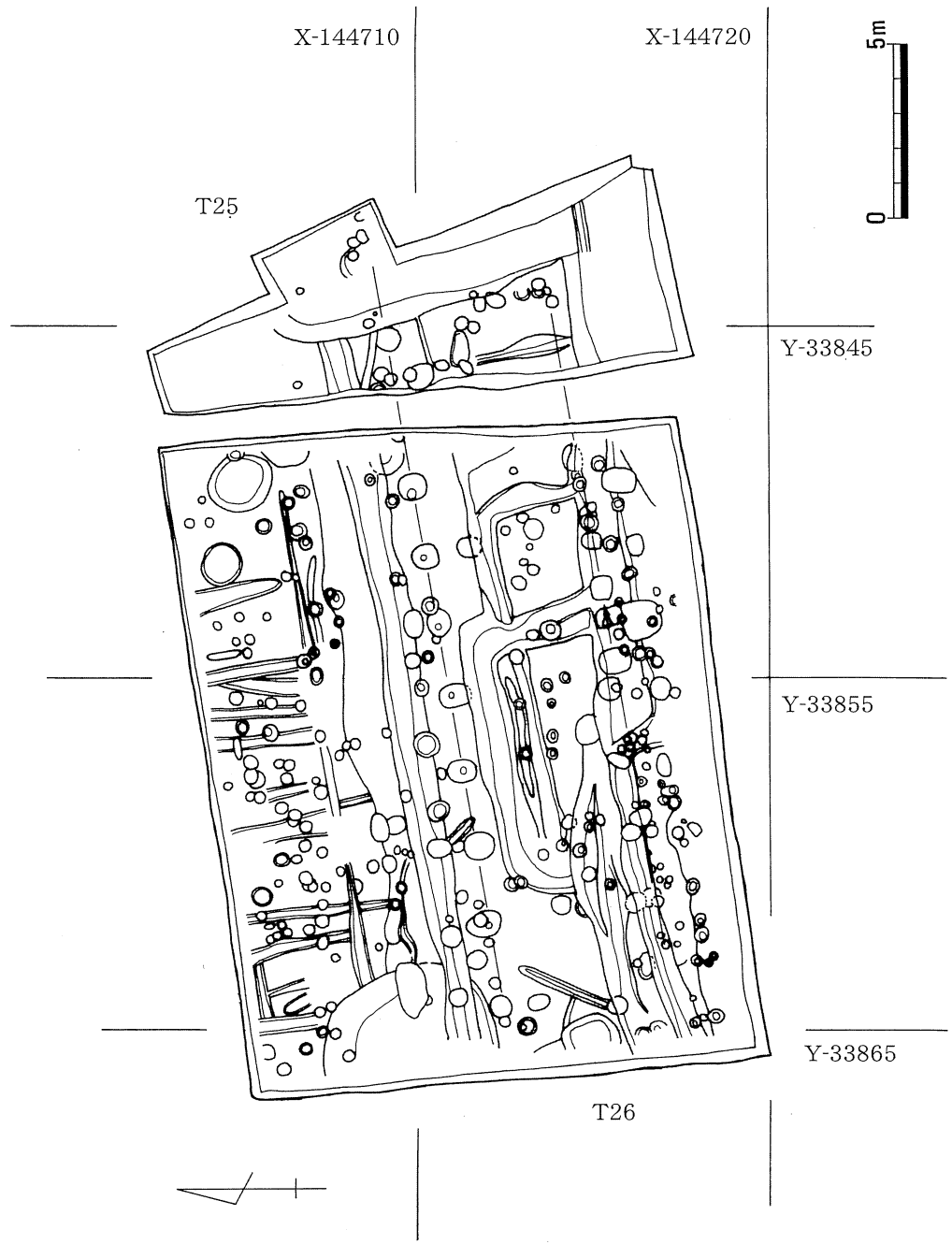
した。また壇上積基壇の外周にも石列が存在することから変則的な二重基壇であることが判明した。



第11図　西塔全体図

凝灰岩基壇外装石は西辺階段中央から北西角にかけて延石と一部地覆石が、東辺では階段部分の延石と地覆石が残っているにすぎず、北辺では石材抜き取り痕が溝状に検出された。

これによる基壇規模は延石外面で11.2ｍ地覆石外面で10.8ｍである。遺存状態のよい東階段では

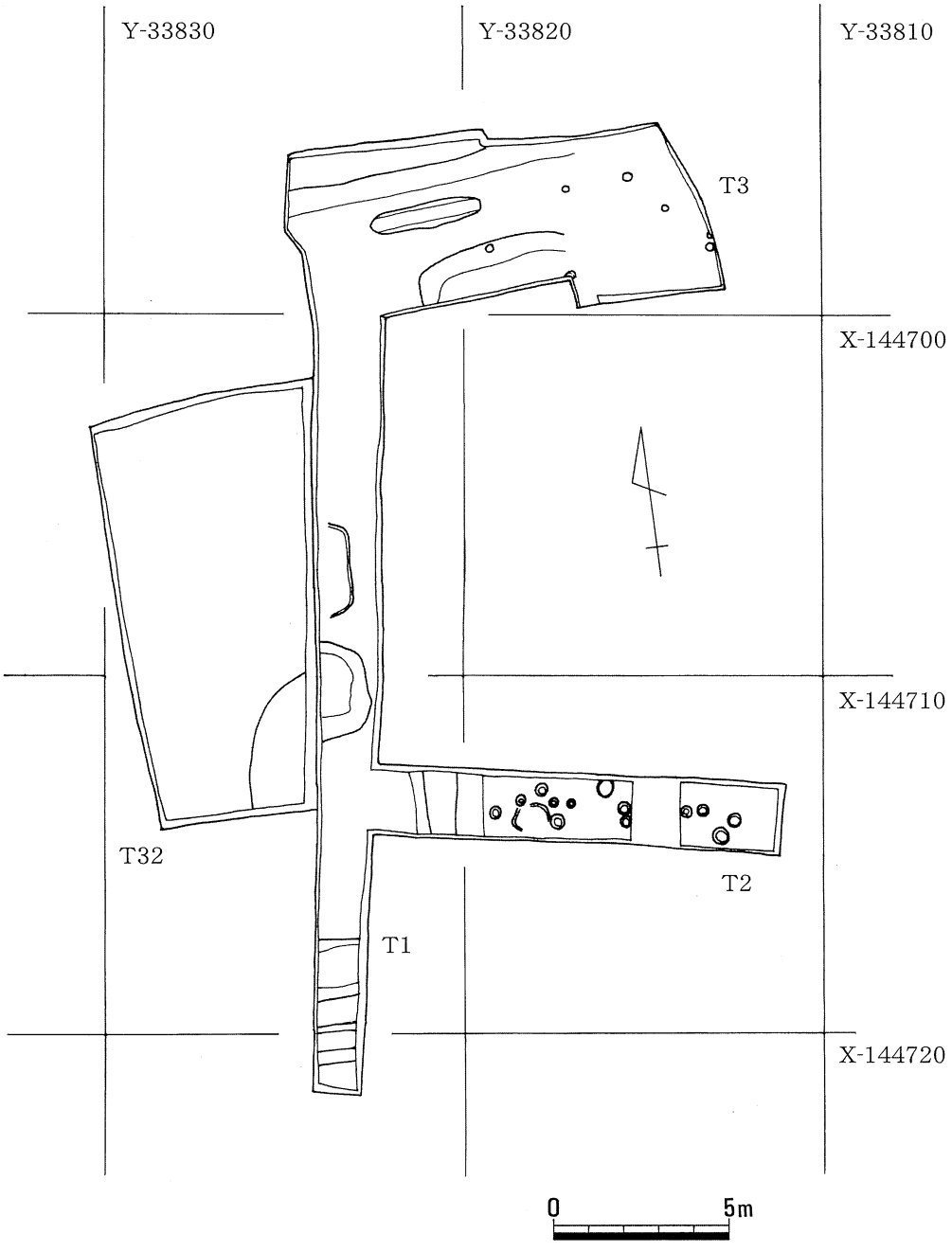


第12図　南区画施設

地覆石幅1.75m、地覆石からの出が1.3mで、東塔東階段とほぼ同規模で段数も同じである。ただ西塔の方が基壇石材の厚さが15cmと厚いため、復原される地覆石から葛石までの高さが90cmと高い。この凝灰岩壇上積基壇を取り囲む自然石を用いた外周列石は1辺16mで、北辺では1石であるが、南辺では他辺より大きな石を用いて2段以上に積んでいる。下段の力強さと上段の精緻さを兼ね備えた基壇であったろう。なお、基壇の主軸は国土座標からおおむね10°西にふっている。

南区画施設（第12図）

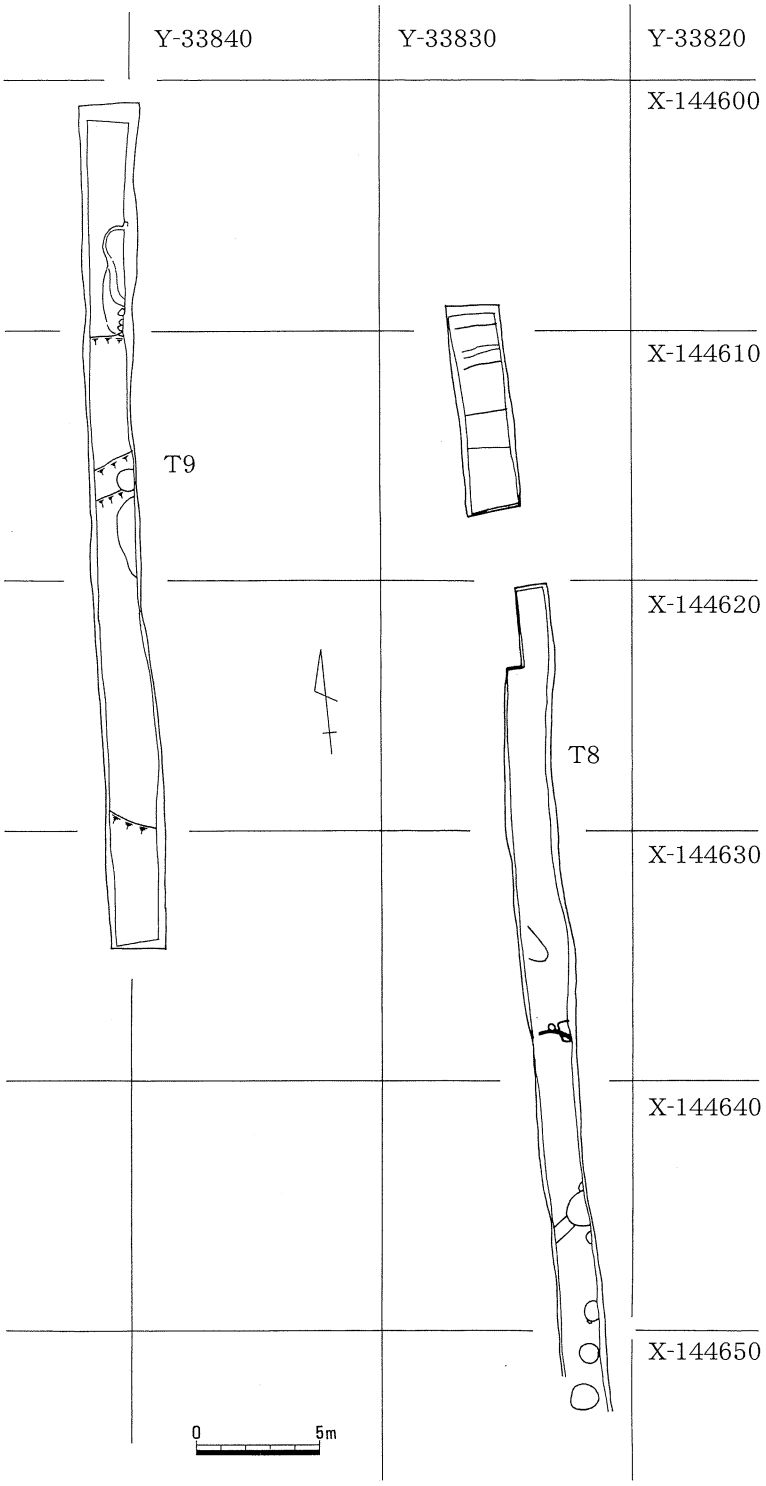
第1次調査で南門を想定していた地点の市道をはさんで設定したT25・26では、東西方向のSD141に平行して9基の柱穴が列をなして検出された。時期はいずれも9世紀後半から10世紀にかけてで



第13図　南門推定地

ある。多数検出された柱穴の中には東西に列をなすものがいくつもみられ、近接した時期に南北に位置を少しずつ移動させながらも、主要建物群を配する地域の南を区切る施設として、掘立柱塀などが何度も立て直されたものとみられる。

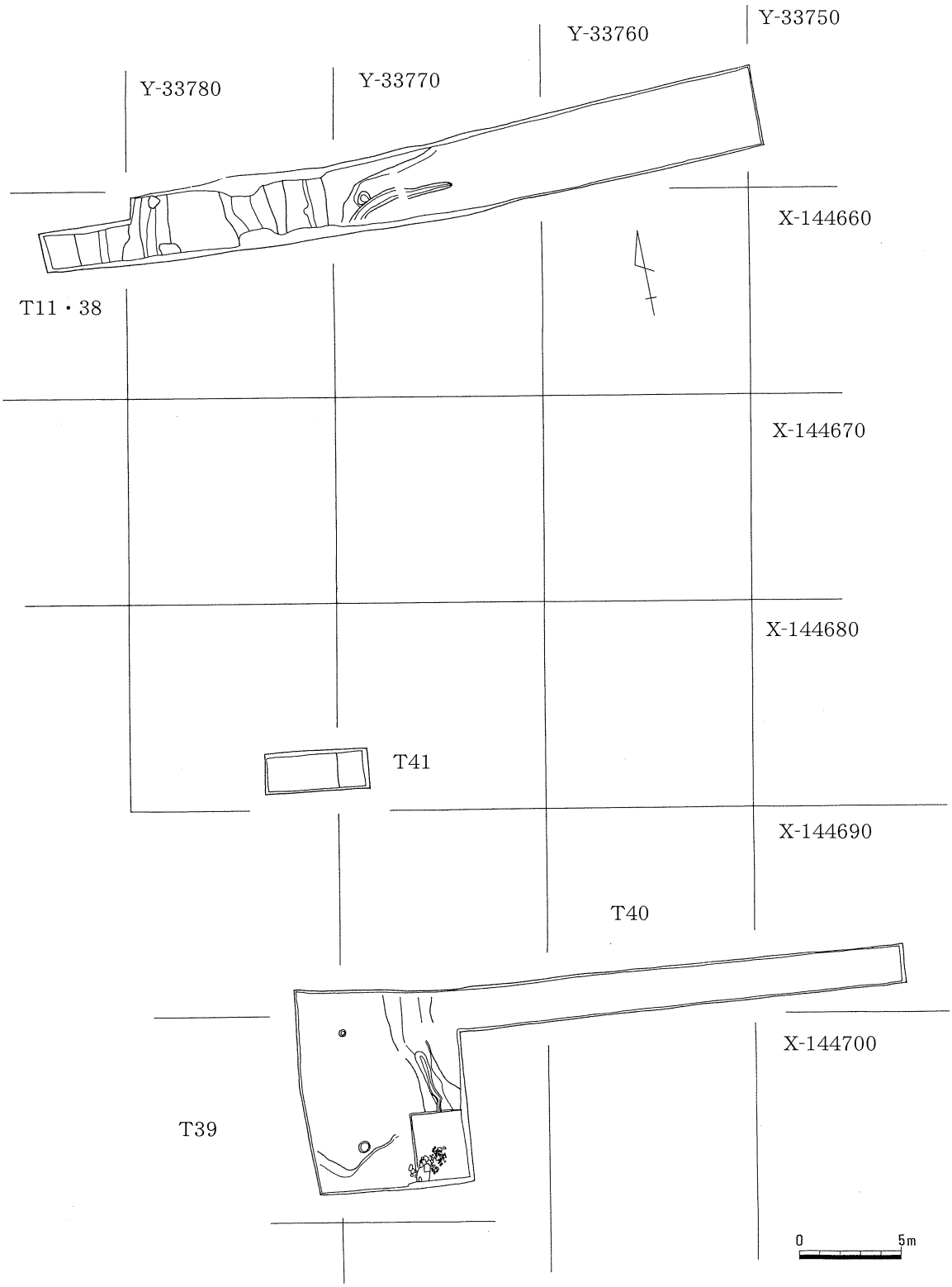
その後、13世紀には、この地点での寺院機能が失われ、南から段状の地下げを伴う改変が施され、明確にはとらえられないが掘立柱建物も建てられたようだ。なお、第１次調査で、築地と犬走りと把握していた遺構は、面的調査の結果、築地の北側の溝はＳＤ141であったが、南側および犬走りについては、中世の段状改変部をとらえていたことが判明した。トレンチがわずかでも東西どちらかにずれていたならば判断も違っていたことだろうが、トレンチ内では見事に完結していた。



第14図　北区画施設

南門推定地（第13図）

発掘調査開始当初、南門を措定して設定したＴ１～３では、Ｔ26で検出したＳＤ141やその南の柱穴列１のような区画施設を検出していない。Ｔ26の知見を得て新たにＴ１と市道との間にＴ32を設定し調査したが、黒褐色の造成土面まで削平を受けていた。ただ、柱穴列は深さ80㎝近くあり、設営されていたならば底部なりの遺存は十分見込まれるから、市道から東には何らかの理由により設

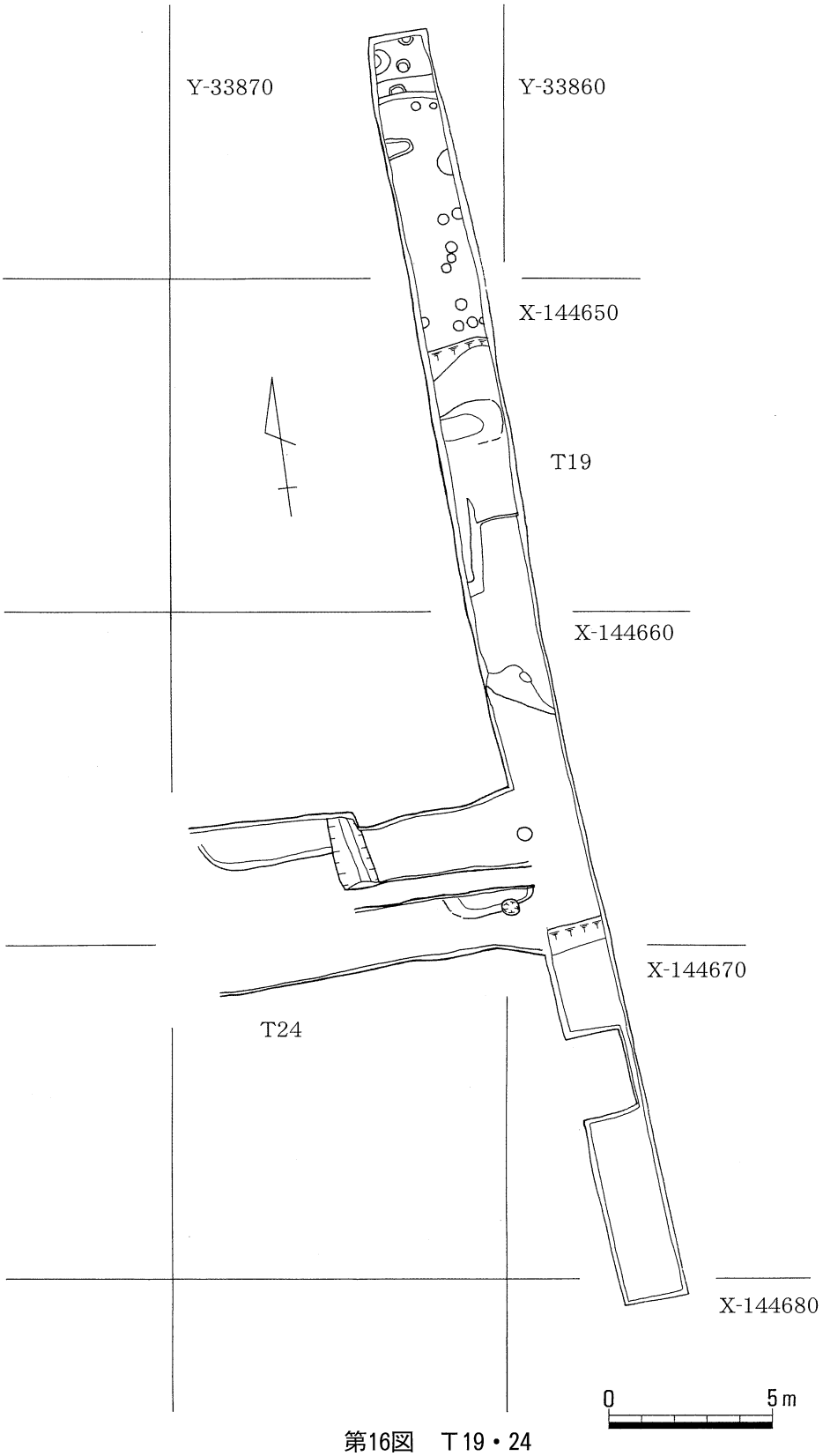


第15図　東区画施設

営されなかったともみられる。

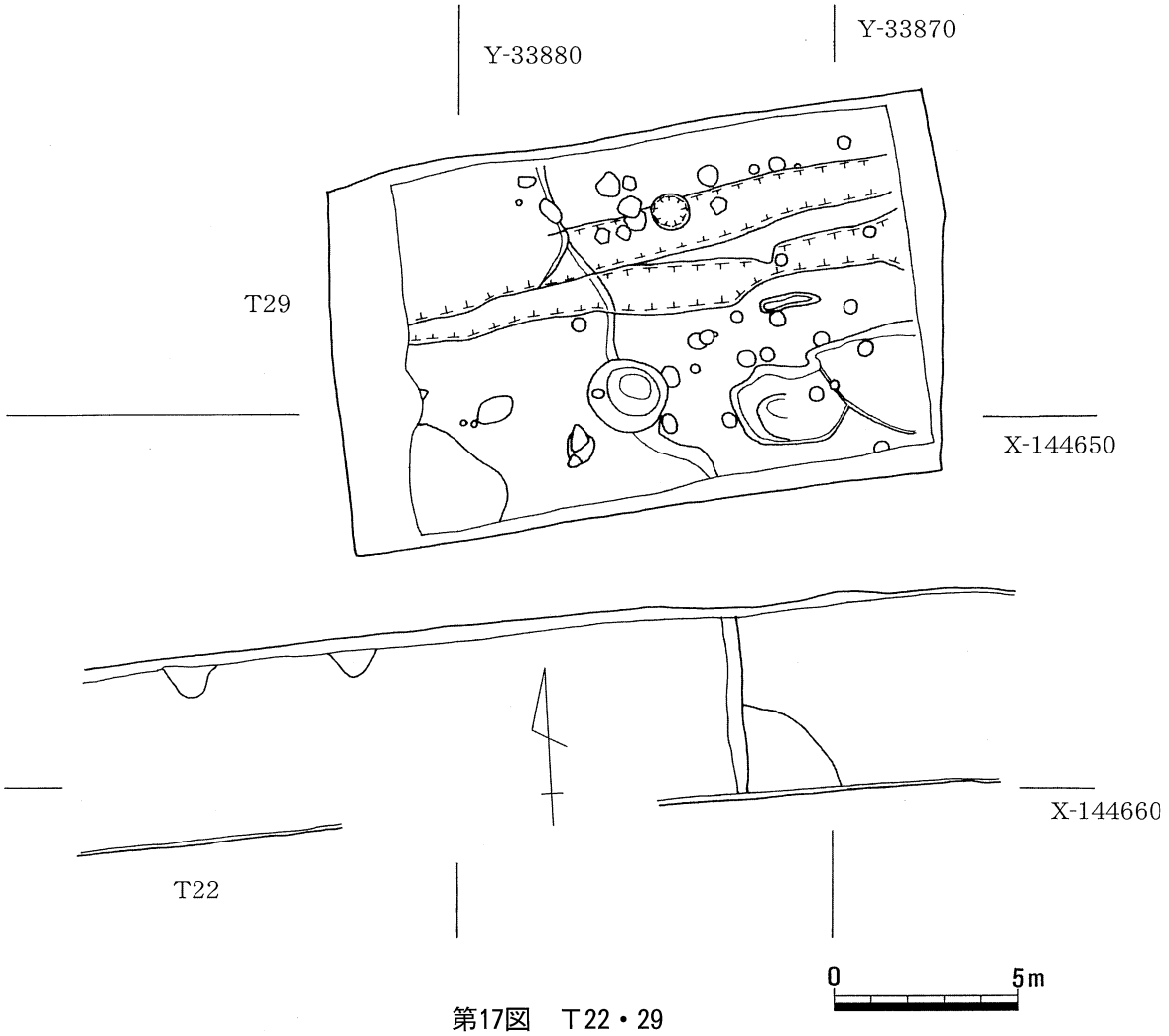
講堂推定地（第14図）

Ｔ８は、金堂の東側で北面回廊やその北の区画施設を想定して設定した。調査の結果、金堂東側では十分な確証を得るにはいたっていないが、Ｘ＝－144635とＸ＝－144640の中間で検出した浅い



第16図　T19・24

溝やその南の後世の水田による削平の段が、回廊の痕跡を反映していることも考えられる。また、T8北端では、盛り土が確認され、その南斜面は山砂により埋まっていた。これに対応するT9では盛り土はみられなかったが、自然地形の変換点が観察されこの両者を結ぶ線が北の区画施設と考



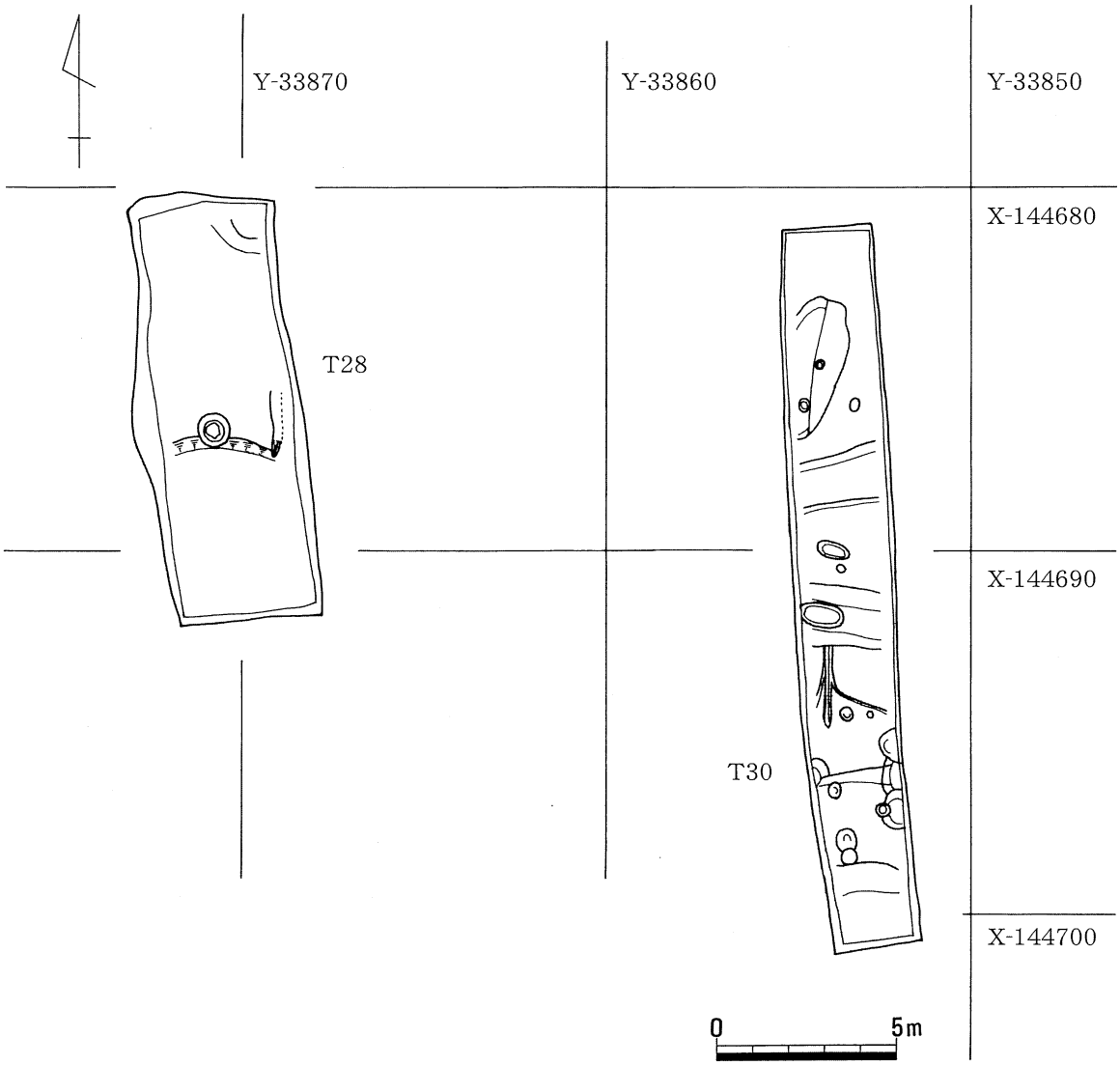
第17図　T22・29

えられる。これとT26で検出した区画施設との距離は約90mである。

T9の南半とT31は、金堂の北側に講堂の有無を確認するため調査した。結果的には、どちらのトレンチにおいても自然地形が確認されて、講堂が設営されうる様な平坦面は存在しなかった。金堂の市道をはさんで西に設定したT29は、金堂・講堂の横並びや金堂から西に延びる北回廊を想定して調査を行ったが、地山面まで中世段階の削平を受けており、近世以降の耕作に伴う溝や埋め甕、中世の柱穴や井戸をわずかに検出したにすぎない。ほかに、時期は不詳であるが、露岩を切り割って採石をしようとした痕跡が残っていた。

東区画施設（第15図）

第1次調査で東築地を検出した地点の8m南に、トレンチを設定した。ここでは、南北方向の溝SD531・532・534・535の4本の溝が平行して検出された。第1次調査で検出した溝につながるのがSD534とSD535とみられ、さらに南のT39•40、T41においても重なり合いは見られないのでSD531・532はそれぞれの局所的な付け替えと考えられる。新旧の溝の内側の肩間隔がどちらも5～5.5mであり、第1次調査の溝間隔と等しい。時期は13世紀の早島式土器碗が出土しており、中世にいたっても区画施設として、山からの雨水・湧き水を流下する施設として機能していたと考えられる。



第18図　T28・30

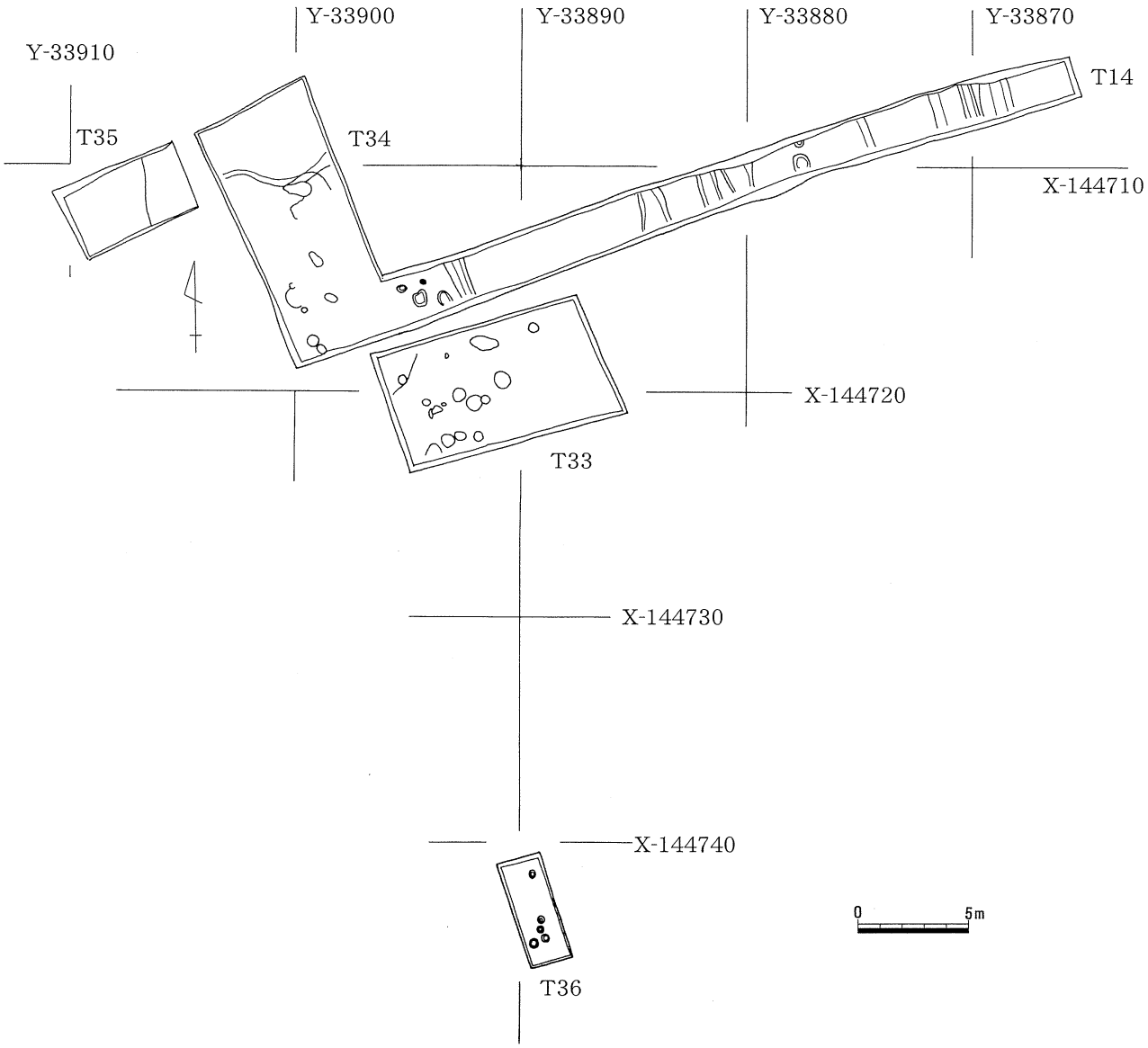
T19・24（第16図）

T19は市道の西側に沿って、北回廊や東塔・西塔間の想定建物の手がかりを得るべく設定した。中世以降の削平を受け、どちらの手がかりも得られていない。T19北端部には中世の柱穴・土坑・溝などが確認された。

T24は第１次調査で西回廊としていた部分である。回廊東肩としていた溝は近世頃の所産と見られ、回廊を積極的に裏付ける遺構は確認されなかった。しかし、西塔に面する段から東へは盛り土がされており、平坦面造成がなされていたことが判明した。盛り土の単位は金堂や両塔基壇の版築とはことなり、大きな単位で施されているので、建物基壇盛り土ではなく平坦面を形成するためのものと見てよかろう。

T28・30（第18図）

第１次調査で南回廊を想定していた地点である。T30では黄褐色の地山面で、柱穴・土坑・溝などを検出しており、回廊が設営された痕跡は残されていない。T28でも14世紀前半頃の大甕の上半

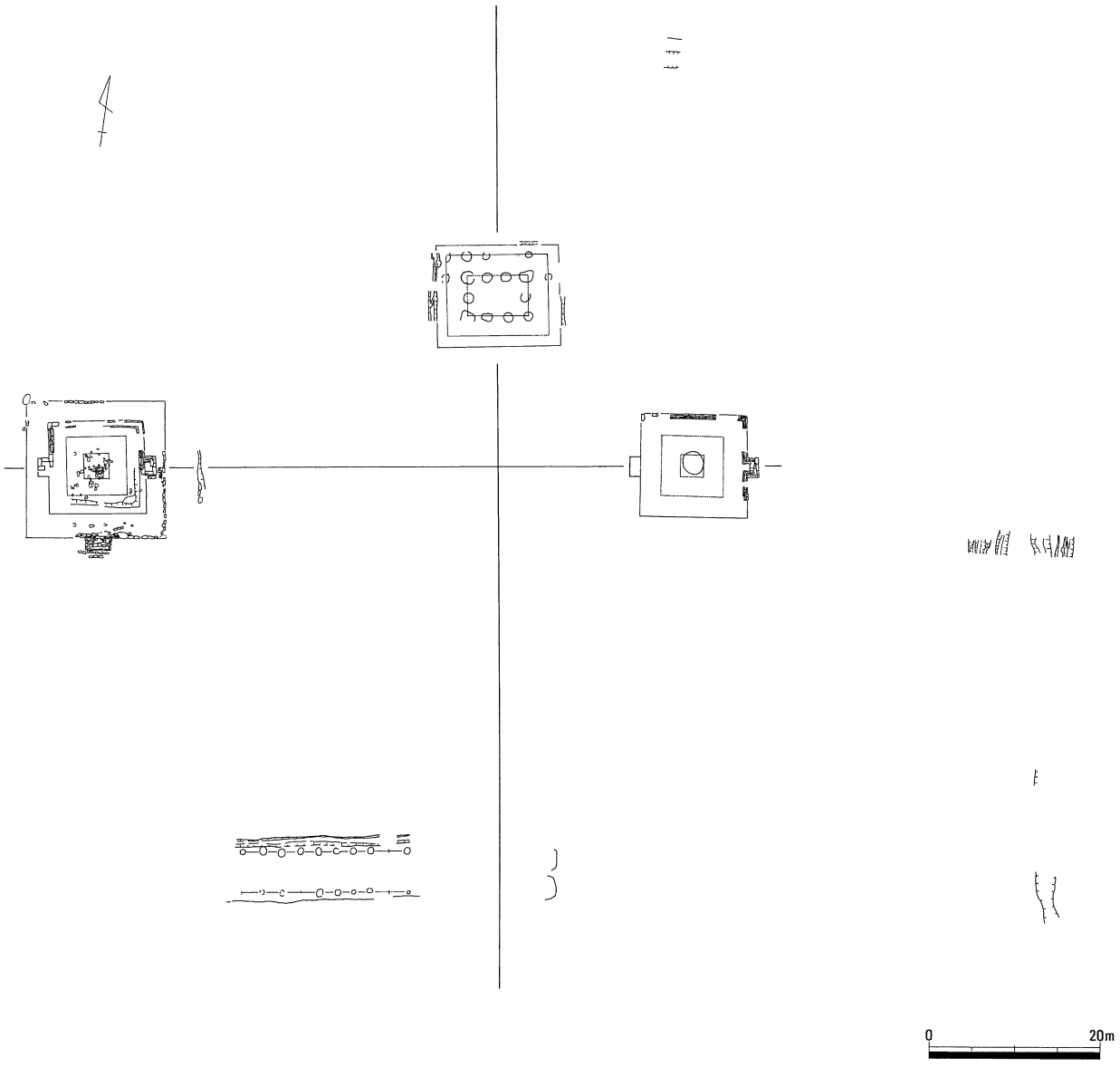


第19図　炉跡群

部を据えた溜井を検出したにすぎない。他に鉄滓の出土がある程度まとまって見られたので、周囲に関連施設が存在する可能性がある。同じく、南回廊を想定したＴ５においても手がかりは得られなかった。

炉跡群（第19図）

Ｔ14・33・34・35は推定寺域の南西部に位置し、谷地形の中央部から西側尾根丘陵部の東裾に設定された調査区である。Ｔ14西端とＴ33・34の丘陵端部斜面では炉跡群が検出された。Ｔ34で地山上に構築された炉跡は時期不明であるが、Ｔ33で谷部への斜面にかけて検出された炉群は上層で13世紀頃、下層で10世紀頃である。炉滓は鉄滓と銅滓の両方が認められ、寺院に付属する工房の存在が想定される。なお、Ｔ33はＴ26で検出した南区画施設の延長上に当たるが、相応の遺構は確認されなかった。



第20図　伽藍配置図

第4章　遺　構

本章では第2次調査で明らかになった、賞田廃寺伽藍と関連遺構、賞田廃寺造営以前と廃絶以後の遺構をとりあげている。

今回の調査により賞田廃寺は盛期の奈良時代には2塔1金堂形式の伽藍配置をとる寺院であることが明らかとなった。

地形的には、現状で中央部に市道が走っているが、この部分はもともとの尾根筋に当たり、地山面のレベルも高い。白鳳期創建の金堂はこの尾根筋の安定した箇所に造営されている。西側には茶臼山と呼ばれている尾根があり、中央の市道との間は谷地形となっている。奈良期創建の西塔はこの谷地形のほぼ中央に造営されている。市道から東へも西側ほど顕著ではないが緩く東に傾斜している。同じく奈良期創建の東塔はこの東への傾斜部分に造営されている。後に述べるように発掘調査では中門・南門を明らかにすることができなかった。一つには、この市道が設けられていることにより、もっとも地盤のよい尾根筋上にトレンチを設定できなかったことによる。もう一つには、東塔・西塔より北側と南側では基壇遺構の遺存状態に差があって、南側では中世以降の削平がより顕著に行われているためと見られる。

Ｔ１（第21図）

第1次調査の成果から推定された寺域の南辺中央部に位置し、南門の存在が想定された場所である。元は民家の建っていた場所にあたり、建物や耕作等によってかなり地下げが行われているものと予想された。Ｔ１で検出された遺構はトレンチ南端のＳＤ９・10の溝2条と、中央部において黒褐色の造成土上で確認された、くぼみ状のＳＫ11・12の土坑2基である。南門やそれに伴う区画施設に相当する遺構は検出されなかった。

1層から8層は近・現代の耕作に伴う土層である。9層から13層は調査では上部を灰褐色層、下部を灰褐色砂層と大枠でとらえた。いずれも13世紀頃の堆積層で、瓦経（Ｇ１）もここから出土している。遺構埋土を除き、15層から26層は褐灰色砂層ととらえ、ここからは10・11世紀頃の土器片が出土し、一部では瓦がまとまって出土した。27層は造成土と見られる黒褐色土層である。地山は黄褐色のやや粘質を帯びた細砂・シルトで北側ほど3㎝程度の礫を含む。調査では北からＳＤ10付近まで地山を検出したが、以南は湧水等による壁面崩壊のおそれがあり、27層上面でとどめている。

ＳＤ９（第22図）

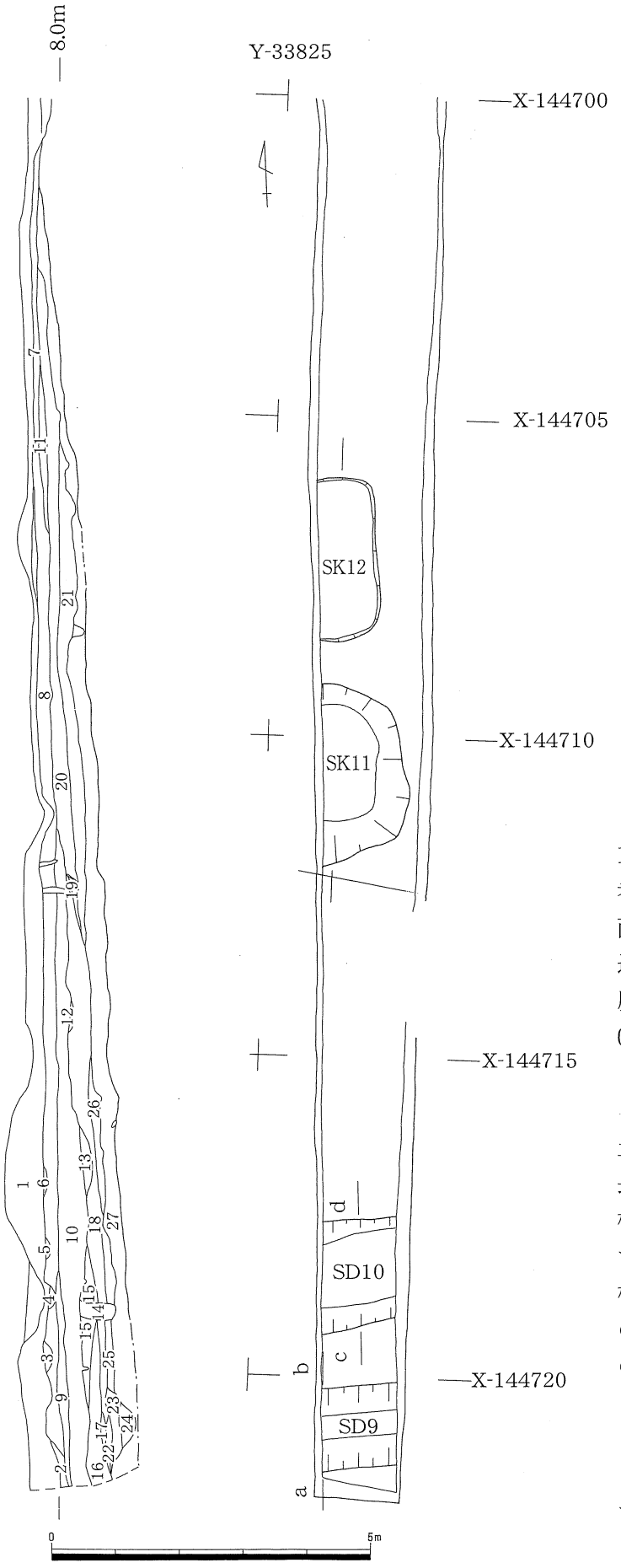
Ｔ１南端部で検出された東西方向の溝である。検出面で幅1.3ｍ、深さ0.48ｍである。断面はＵ字形で土層は3層確認できる。上層は粗砂で粗いが、中・下層はシルトが混ざり下層ほど粘性が高くなっている。遺物は瓦と土師質土器の細片が出土したのみである。

ＳＤ10（第22図）

溝9に平行し東西方向にのびる溝である。幅1.6ｍ、検出面からの深さ0.21ｍで断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色の微砂で、遺物は瓦片と土師器小皿（７・８）が出土した。

ＳＫ11（第23図）

Ｔ１の中央部付近で検出された。西側は調査区外にのびるため不明な点もあるが、平面形は長軸



1　暗褐色(表土)
2　黒灰色細砂、炭・灰多量
3　淡黄淡灰色砂礫
4　淡灰褐色細砂
5　淡褐色細砂
6　淡灰褐色細砂
7　淡灰褐色細砂
8　淡灰黄褐色細砂
9　淡褐色細砂
10　灰褐色粗砂、小礫含む
11　淡灰褐色細砂
12　灰褐色細砂、黒褐色土をブロック状に含む
13　灰褐色砂礫、3～4㎝の多礫多量
14　灰褐色細砂、暗褐色砂質土をブロック状に含む
15　淡灰暗褐色細砂
16　淡褐灰色細砂
17　暗褐灰色細砂
18　褐灰色砂(粗砂・細砂)、炭・焼土粒を多量に含む
19　黒灰褐色細砂、炭粒少量
20　褐灰色砂
21　暗褐灰色砂
22　灰褐色粗砂
23　暗黄褐色細砂シルト
24　黒灰色微砂シルト
25　暗褐色微砂
26　淡灰暗褐色微砂
27　黒褐色土

第21図　Ｔ１平面・西壁実測図

1.35ｍ、短軸0.8ｍ以上の楕円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは0.1ｍで断面は南と東で立ち上がりの緩い逆台形で、造成土上のくぼみ状を呈する。埋土は暗褐灰色の砂で、遺物は奈良時代の瓦とともに10～11世紀頃の土師器片が出土した。

ＳＫ12(第23図)

ＳＫ11に北側に隣接し、ＳＫ11同様、造成土上の浅いくぼみ状とみられる。平面形は長軸1.28ｍの隅丸方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは0.05ｍ断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐灰色の砂で、出土物は小格子叩き目を一部ナデ消した瓦や縄目叩きの瓦、平安後半の高台の付く土師器椀などの土器細片がある。

Ｔ２(第24図)

Ｔ１の東側に位置し、西端部はＴ１に接する。近代の攪乱によって部分的に掘り下げられているものの、古代と中世の２時期の遺構面が確認された。

南壁の７層および８層上面に相当する中世遺構面(上層遺構面)では９基の柱穴が検出されたが、組合せ等は不明である。これら柱穴の埋土は黒褐色の細砂ないし暗褐色の細砂である。16層は黄褐色の粘土を使った造成土層(下層遺構面)で、この上面で柱穴４基と焼土坑１基が検出された。４基の柱穴の埋土は淡褐色ないし灰褐色の砂質シルトである。

西端部では高さ80cm上面幅１ｍで断面蒲鉾状の土盛り遺構を検出した。先述の16層がこの中に潜り込むので、少なくとも１度は修復されており、のちに中世の砂層堆積(５・６層、Ｔ１での灰褐色砂層)で覆われている。

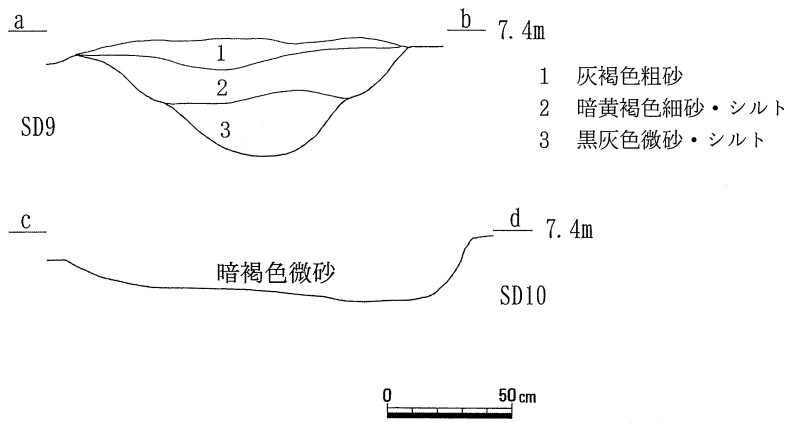
Ｔ２で確認された地山は標高6.6～6.8ｍで、後述のように市道の西のＴ26の南端では標高８ｍほどであるから、Ｔ２が1.2～1.4ｍほど低くなっている。

Ｐ５（第25図）

Ｔ２東半の中世面で検出された柱穴で、平面形は径0.42ｍの円形を呈する。検出面からの深さは20cmで、断面形はＵ字形である。埋土は暗褐色砂質土で、底面には軒丸瓦４類(Ｋ30)が瓦当面を上に向けて置かれていた。根石代わりに使用されていたと思われる。

ＳＸ18（第26図）

16層上面で検出した焼土坑で、深さが深いところでも２～３cmほどしか残っていないが、平面形はやや不整形ないし隅丸長方形に近いと見られる。灰褐色粗砂の埋土には炭や焼土粒が多く含まれて、10cm前後の礫も散乱していた。



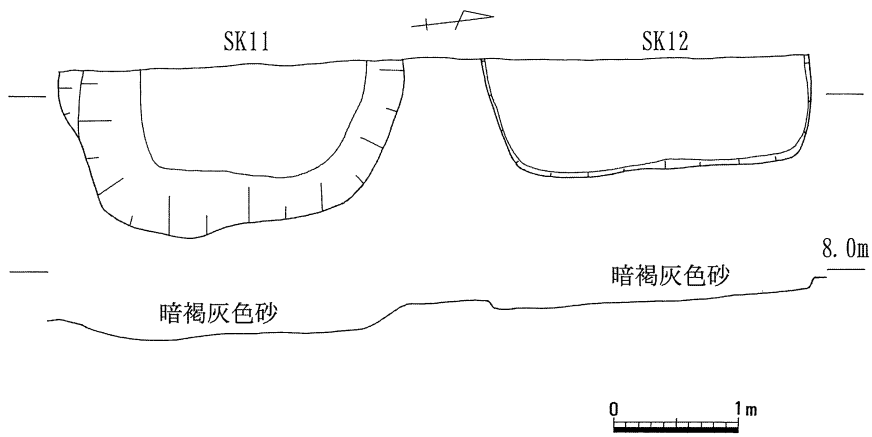
第22図　ＳＤ９・10断面図

Ｔ３（第27図）

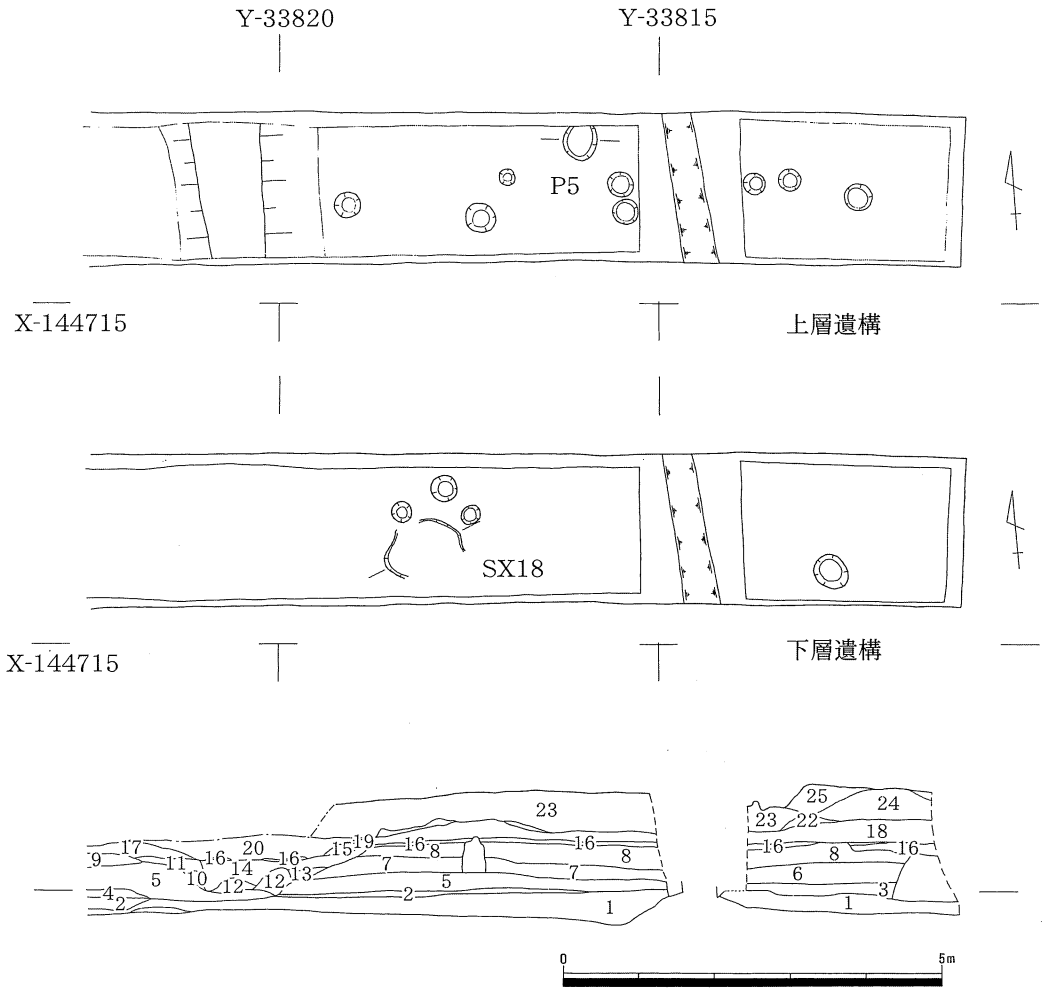
Ｔ１の北端に接する東西方向のトレンチである。現状で２ｍほどの段差の端部にあたる。地山上面まで耕作による削平を受けており、地山上面で溝ＳＤ27と土坑ＳＫ19、中世と考えられる柱穴７基が検出された。Ｔ２で検出した土盛り遺構の延長は確認されなかった。

ＳＤ27（第28図）

Ｔ３中央付近で検出された。幅0.7m、深さ0.1ｍで、断面はＵ字形を呈する。削平によって両端は不明確なものの、東西方向の溝と考えられる。遺物は検出されなかったが、中世以降のものとみられる。

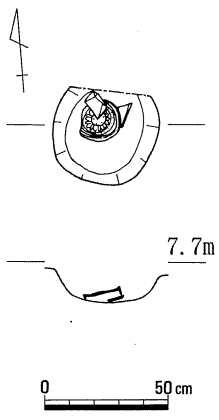


第23図　ＳＫ11・12平・断面図

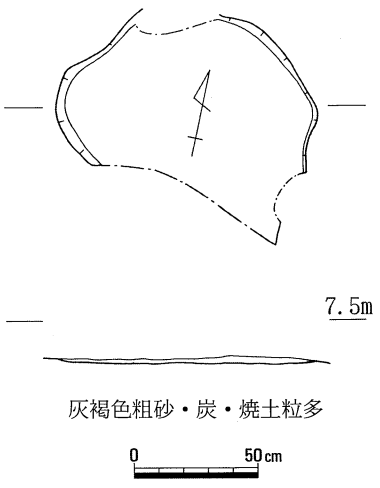


1 表土
2 淡黄灰白色細砂
3 淡褐色微砂
4 灰褐色細砂(鉄分多量)
5 灰褐色細砂(灰褐色砂)中世遺物含む
6 暗灰褐色細砂
7 明灰褐色細砂
8 暗褐色微砂
9 褐灰色細砂、平安期遺物含む
10 淡黄淡褐色細砂(盛土)盛りなおし？
11 淡褐灰白色シルト（盛土）
12 暗黄淡褐色微砂、黒褐・灰白色粘土含む
13 暗黄淡褐色微砂
14 黒褐色土、小礫多量含む
15 明灰褐色砂礫
16 黄褐色粘土（造成土）
17 褐灰色シルト・細砂(平安期土器出土)
18 暗褐色微砂・シルト
19 暗褐色細砂、小礫含む
20 暗褐色細砂
21 淡褐色微砂、黒褐色土含む
22 淡黄・暗橙色細砂・シルト
23 黒褐色土
24 淡黄・黒灰色シルト、
黄褐色土ブロック状に含む
25 黒灰色微砂シルト

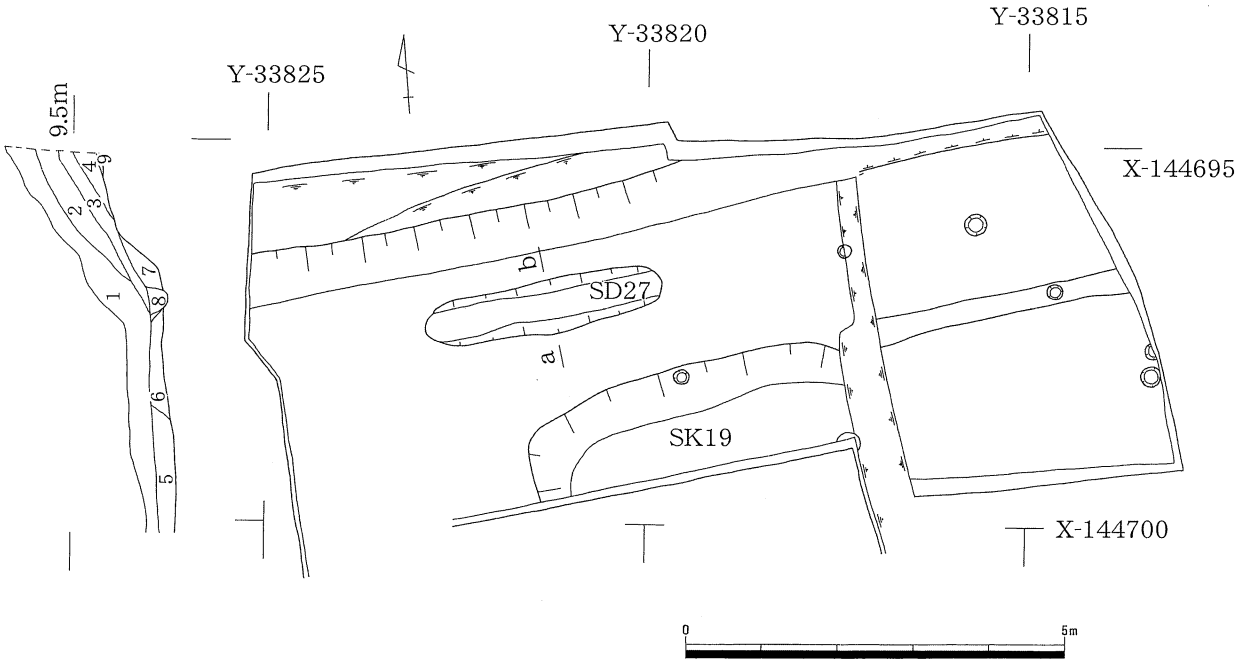
第24図　Ｔ２平面・南壁実測図



第25図　Ｐ５平・断面図



第26図　ＳＸ18平・断面図



1　暗褐色土(表土)
2　淡褐色微砂
3　淡黄淡灰褐色細砂、微細な土器片含む
4　褐灰色粗砂・細砂、瓦溜形成、10㎝位の角礫混
5　淡黄灰白色砂礫(近世土坑)
6　淡灰淡褐色細砂
7　淡褐灰白色細砂
8　黒灰褐色細砂、瓦・角礫混
9　淡黄灰白色細砂、5～10㎝の角礫少量含む

第27図　T3平面・西壁実測図

ＳＫ19（第29図）

調査区限界で全形は不明であるが、長軸2.7ｍ以上短軸1.5ｍ以上の方形もしくは楕円形であると考えられる。深さは0.25ｍで、断面は逆台形と考えられる。瓦類とともに土師器杯や丹塗り土師器皿(23・24)や丹塗り土師器高台付杯(25)などが出土し、時期は９世紀末から10世紀頃と考えられる。上部の溜まりでは10・11世紀の土師器がまとまって出土している。

Ｔ４（第32図）

第１次調査で想定した南築地から南側での遺構の広がりを確認するために設定した。現況での水田の段差部から南では、地山面で幅40㎝弱の東西溝２本と不定形な土坑１基を検出したにすぎない。遺物が出土せず、ともに時期は不明である。地山面の上層には現代まで一貫して水田層が形成されている。

一方、段差部から北では、地山のたわみ状の部分(西壁の19・20層)の上部で奈良・平安時代の土器や瓦がまとまって出土した。平面的にはこのたわみ状の部分が、Ｔ１南端で検出したＳＤ９やＳＤ10に対応する可能性もある。他に、たわみ状部分よりやや上層で、柱穴２基(Ｐ129・130)と石組み遺構(ＳＸ128)を検出した。

遺物は、灰褐色層(西壁では17層)から灰釉の高台付杯(40)が、段差部より南の近・現代の水田暗渠から「安養寺」の刻印のある瓦(Ｋ326)が出土している。

P129（第31図）

調査区北寄りで検出された柱穴である。径0.75m、検出面からの深さは0.4mで断面は台形を呈する。遺物は検出されておらず詳細な時期については不明である。

P130（第31図）

P129に接して検出され、柱穴と考えられる。径0.4m深さ0.25mで断面は台形を呈する。遺物は検出されておらず詳細な時期については不明である。

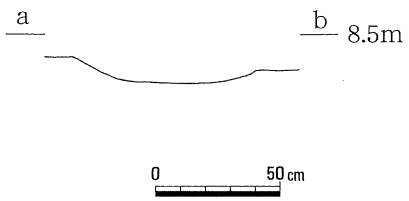
SX128（第30図）

調査区限界で一部は未検出であるが、1m×0.4mの範囲に、長さ30cm以上の石を箱式石棺状に組んで蓋石を乗せたような石組み遺構と、その北側で10cm前後の集石がまとまって検出された。時期は古代末から中世と考えられるが、調査可能範囲内では石組み内部からも遺物は出土しておらず詳細な時期や性格についても不明である。

T5（第33図）

T3の北側斜面の段上に位置する。中門の推定地として、南北方向に設定したトレンチである。暗褐色造成土(東壁の12層)上面で、東西方向の溝1条を検出したが、遺物は確認できず詳細な時期については不明である。北端で地表下30cm、南端で同じく1.5mで造成土を検出した。しかし、暗褐色の造成土上面まで灰褐色ないし淡灰褐色土が堆積しており、後世の削平が及んでいるとみられて、中門・回廊などの施設につながる手がかりは得られなかった。

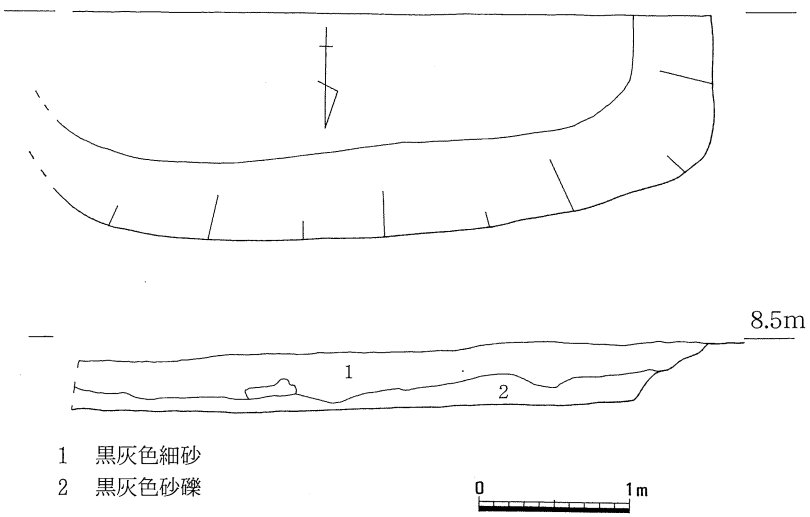
トレンチ南端では、造成土上面で2次的な瓦溜が検出された。



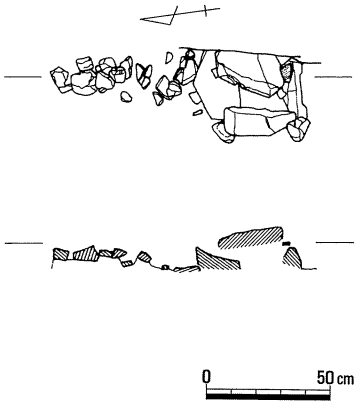
第28図　SD27断面図

T6（第37図）

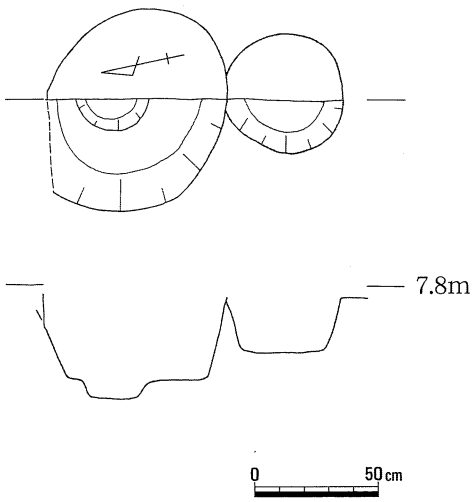
金堂前面や第1次調査で両塔間に想定された基壇の有無を明らかにするために設定した。トレンチ北端では、買収前に宅地造成による車の乗り入れのため、地層が踏み固められていたことから調査に障害を来したが、結論的には、地山上面まで中世段階で削平を受けており、中世の不整形の土坑4基を検出した他は、遺構は確認されなかった。また、



第29図　SK19平・断面図



第30図　ＳＸ128平・断面図



第31図　Ｐ129・130平・断面図

中世層で小円礫がまとまって出土する箇所があったが、上記の踏み固めのため掘り込み等の土層把握が困難で、第１次調査で検出した金堂前面の小円礫敷きとの関連も定かではない。ほかには、淡褐灰色の造成土(西壁の15層)上面がＸ＝－144670とＸ＝－144675の中間でくぼんで、深さ10㎝幅2.2ｍの浅い溝状を呈する箇所があり、埋土には数は多くないが瓦も含まれていた。想定建物の南面の溝の可能性もあるが、確証は得られない。

ＳＫ44（第34図）

Ｔ６北端で検出された土坑である。トレンチ壁面の北と西に続くため全容は明らかではないが、平面形は長径１ｍ以上の方形もしくは隅丸方形と考えられる。検出面からの深さは南側で0.2ｍ、北側で0.4ｍあり、断面形は不整形な逆台形を呈する。埋土はやや黄色がかった淡褐色の砂質土で、中世土器の細片や炭を多量に含んでいる。

ＳＫ45（第35図）

Ｔ６北側で検出された土坑である。一部がトレンチ西壁にかかっているため全形は不明であるが、平面形は一辺３ｍ程度の不整形の方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは10㎝で、断面形は逆台形を呈する。埋土は暗黄褐色の砂質土で、中世と思われる微細な土師器片が多量に出土している。

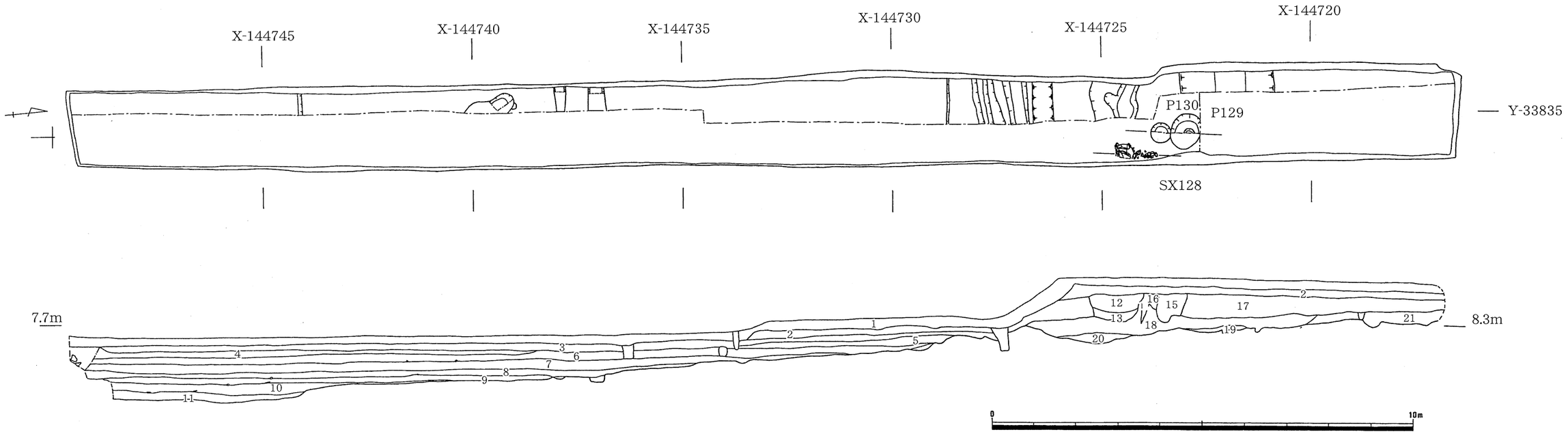
ＳＫ46（第36図）

Ｔ６中央部で検出された土坑である。調査区限界のため全形は不明であるが、平面形は長さ1.3ｍ以上、幅1.05ｍの楕円形ないし溝状と考えられる。検出面からの深さは0.1ｍで断面は逆台形を呈する。埋土は暗黄褐色の砂質土で、ＳＫ44・45と同様に微細な中世土器片を多量に含んでいる。

Ｔ７（第38図）

東塔北西角から中軸方向への遺構のあり方を確認するために設定した、東西方向のトレンチである。西はＴ６と東はＴ12とつながっている。両塔間に想定された建物が存在するならば、このトレンチで東の端が押さえられるものと考えられた。Ｔ７東半部分は北側を拡張してＴ13を設定したので、東側部分についてはＴ13のところで記述することとし、ここでは西半部分についてのみ述べる。

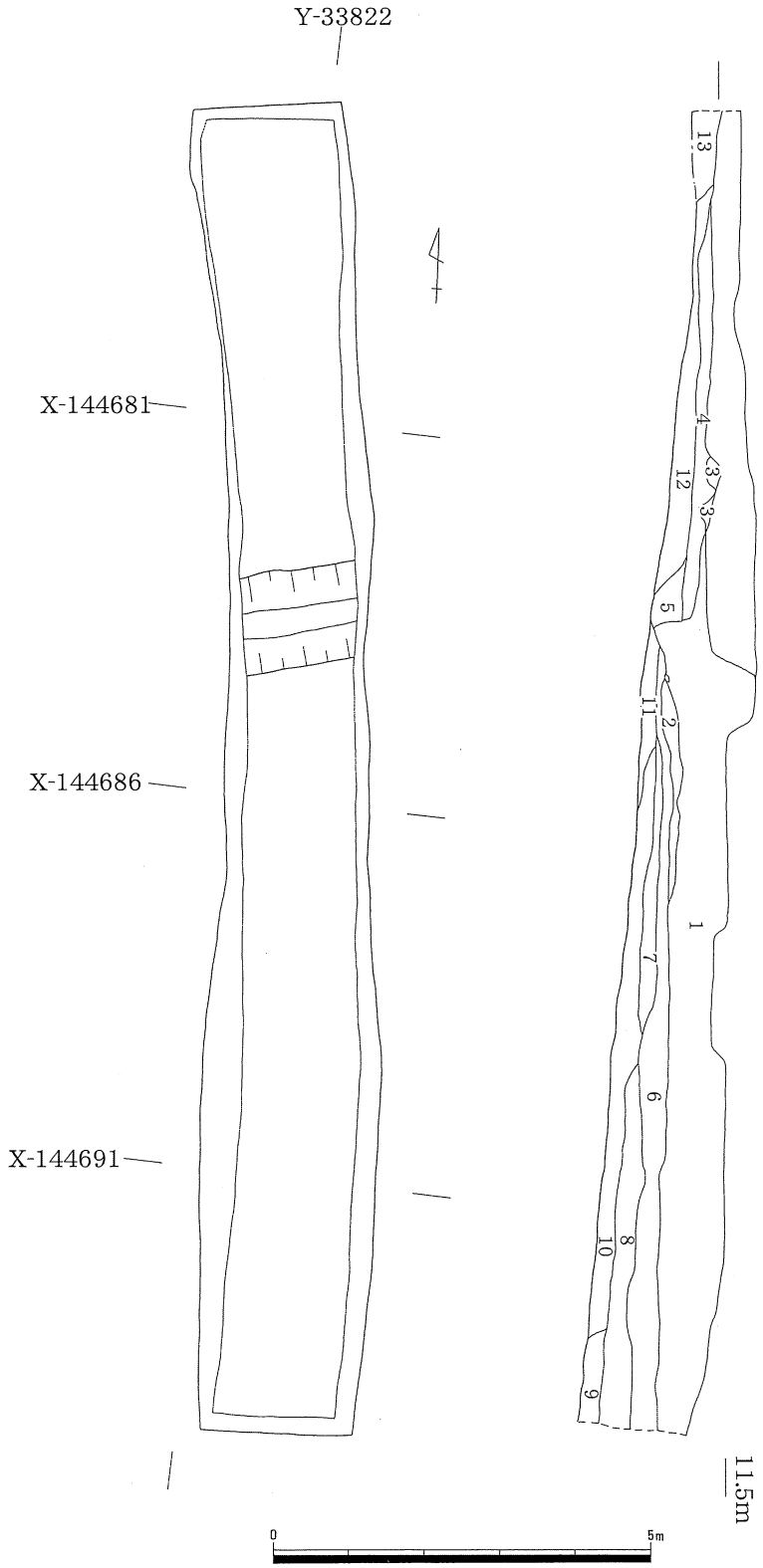
地山および褐灰色の造成土の上には淡灰褐色の粗い山砂が厚く堆積していて、地山および造成土上面まで削平を受けている。この上面で南北方向の溝ＳＤ30とその東に溝１条を検出した他には、遺構



第32図　Ｔ４平面・西壁実測図

1　現水田耕土
2　橙褐色細砂
3　淡灰橙褐色細砂
4　淡黄灰白色細砂
5　淡褐灰白色細砂
6　淡灰暗褐色細砂
7　暗灰褐色細砂
8　暗灰褐色微砂
9　黒灰色微砂粘土
10　暗灰淡橙褐色細砂、焼土塊・土器片多量
11　黒灰色細砂粘土、瓦片・土器片
12　淡褐色微砂
13　淡褐色砂礫
14　灰白色微砂
15　灰褐色微砂
16　淡灰黄褐色細砂
17　淡灰淡褐色細砂、瓦・土器片多量
18　暗褐色細砂
19　淡黄明灰褐色微砂
20　暗黄淡褐色細砂(粘土混)
21　淡褐色細砂、土器細片少量

は確認されなかった。地山は淡灰黄色の粗砂・微礫(南壁の11層、以下同じ)で、トレンチ西端に見られ上面は東に下がっている。東に下がった部分には造成土の褐灰色の粗砂・微礫(10層)がみられ堅くしまっている。上面の高さは地山の上面にほぼそろえられている。



第33図　Ｔ５平面・東壁実測図

ＳＤ30（第39図）

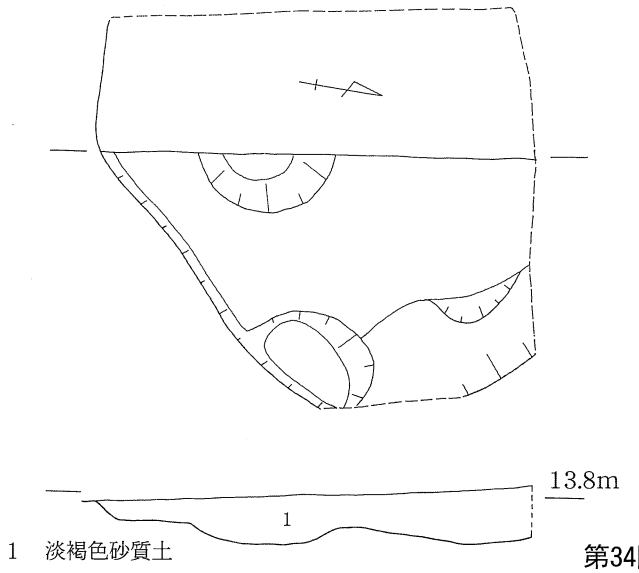
Ｙ＝－33840とＹ＝－33835の中間付近で検出された南北溝とみられる。幅２ｍ、検出面からの深さは0.6ｍで断面は台形を呈する。奈良時代の瓦が多量に出土したが、埋土が後に述べる東塔基壇削平後に堆積した黄灰色の砂(Ｔ12南壁の２層)と近似していたので、中世以降の所産と見られた。

Ｔ８（第43図）

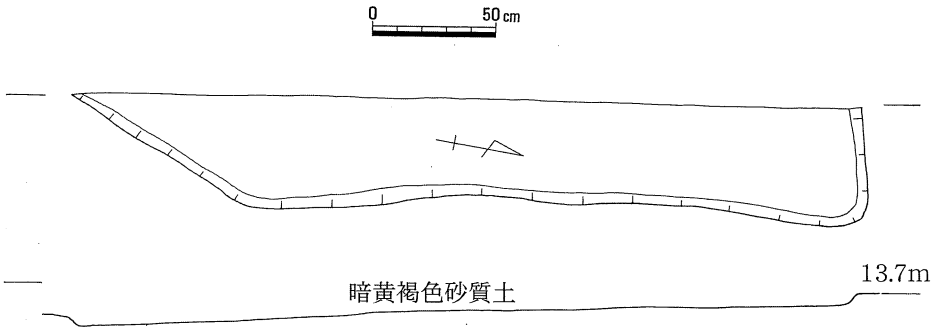
金堂の東側で北回廊や北築地などを追求のため設定した南北方向のトレンチである。トレンチ北端付近で築地状の土盛り遺構を検出したほか、トレンチ南端付近では柱穴列を検出した。

トレンチ北端の土盛り遺構は検出部分で上面幅3.5ｍ、下端部幅６ｍある。上端面には後世に溝状の掘り込み(西壁の１～５層)がされている。南斜面は山砂(西壁の10～12層)で埋まっている。西壁で観察すると、土盛りは下部では幅0.5～１ｍ、厚さ0.5ｍほどの単位位で北から南へ横積

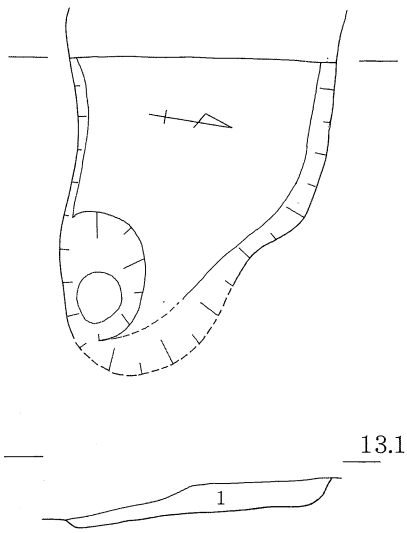
1　淡灰黄褐色砂礫層、江戸～明治期の遺物含む
2　黄灰褐色細砂
3　暗褐色細砂
4　淡灰暗黄褐色細砂
5　淡黄暗灰褐色微砂
6　淡黄灰褐色細砂
7　暗褐色砂質土、小礫含む
8　淡灰暗褐色砂質土
9　暗褐色砂礫(瓦溜)
10　暗褐色砂礫、３～６㎝の角礫を多量に含む
11　淡灰暗褐色土、若干粘質有り
(道路遺構等でみられる造成土と同一か？)
12　暗褐色土、２～３㎝の小礫を少量含む
焼土粒、土器細片微量
13　暗褐色砂礫、10㎝前後の角礫多量



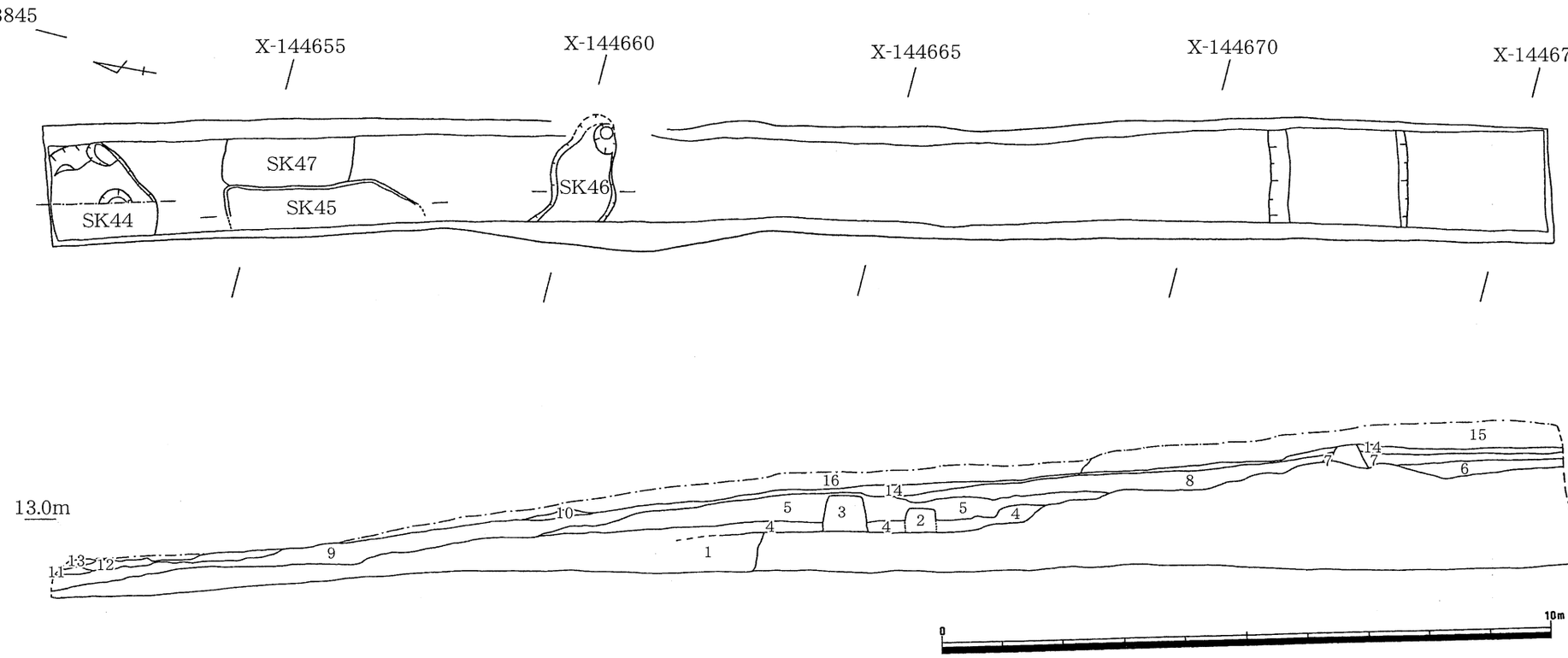
第34図　ＳＫ44平・断面図



第35図　ＳＫ45平・断面図

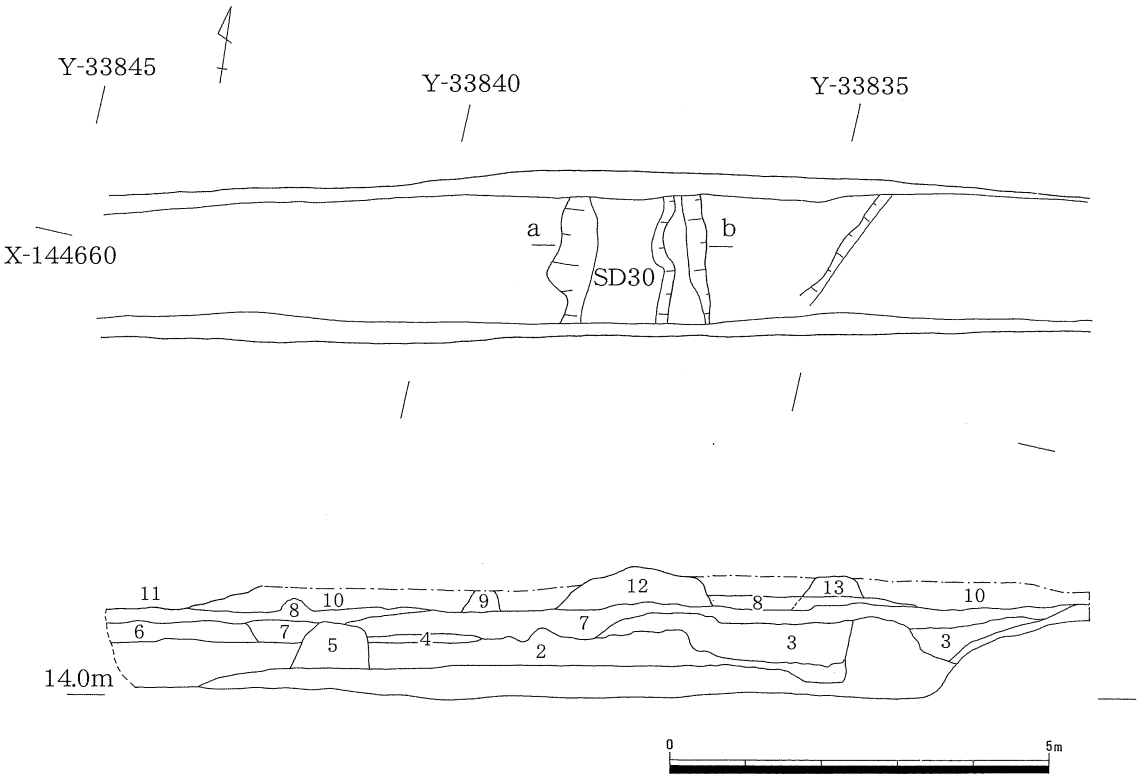


第36図　ＳＫ46平・断面図



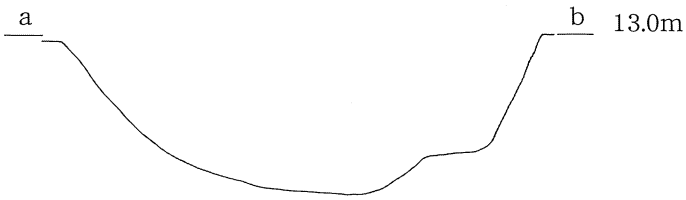
1 表土
2 灰黒色中砂・細砂
3 灰黒色中砂・細砂
4 旧耕土？灰黒色細砂
5 黄橙色中礫・小礫(真砂)
6 灰茶色中砂・細砂
7 灰褐色中砂・細砂
8 灰黄色中砂・細砂
9 黄褐色小礫混中砂、中世土器含む
10 灰褐色中砂、土器小片・瓦含む
11 灰褐色小礫混中砂、土器片・炭混
12 淡灰褐色微礫混中砂
13 灰黄色微礫混中砂、堅い
14 淡灰褐色中砂(黒色土上灰褐色砂)
15 淡褐灰色中砂・細砂・整地土(他に比べ砂質強く、やや淡い)
16 灰白色中砂・細砂、Mn粒目立つ

第37図　Ｔ６平面・西壁実測図



1　黒灰色細砂
2　暗灰橙色粗砂・中砂
3　暗灰黄色微礫・粗砂(やや粘質)(山砂)
4　暗灰黄色微礫・粗砂(山砂)
5　灰黒色粘質粗砂
6　暗灰黄色微礫・粗砂(山砂)
7　暗灰黄色微礫・粗砂(6よりやや明るい)(山砂)
8　灰褐色粗砂(微礫混)、瓦・土器含む
9　黄灰色微砂、土器小片含む
10　褐灰色粗砂・微礫(堅い)
11　淡灰黄色粗砂・微礫(Mn大粒含む)
12　黄灰色細砂
13　黄灰色細砂

第38図　Ｔ７平面・南壁実測図



第39図　ＳＤ30断面図

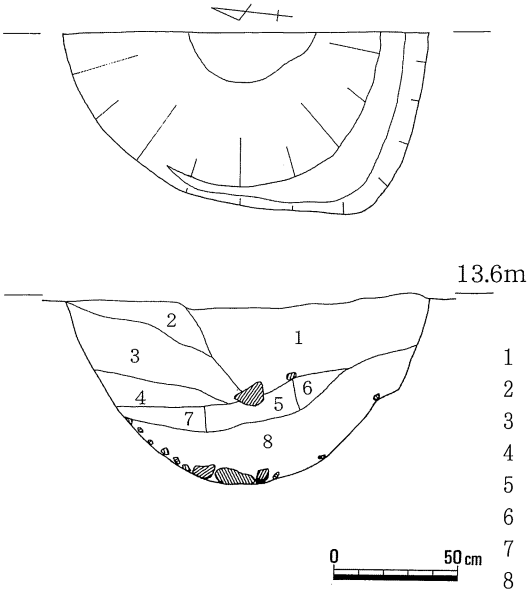
し、その上層は15～30ｍ単位で横積している。金堂や両塔で見られるような数㎝ほどの細かな単位は観察されない。

金堂の東側に当たるＸ＝－144635～Ｘ＝－144640では、柱穴２基と土坑１基を検出したにすぎないが、10・11世紀の土器とともに瓦の出土は少なからずあった。この中には、見込み部分に漆の付着する高高台の土師器も出土している。さらに上層の灰褐色層からは13世紀後半の早島式土器碗が出土している。また、Ｘ＝－144635～Ｘ＝－144640間の中央に見られるわずかな段と南の現地形で見られる段とが、回廊の痕跡である可能性も残っている。

Ｔ８南端部は、Ｔ12・13など東塔の瓦溜と同一面である。黒褐色の造成土上面で柱穴や溝を検出している。Ｐ37や建物１の一部であるＰ39・41・42の埋土は黒褐色で造成土と区別が付きにくく、東塔に先行した遺構と見られる。Ｐ39・41・42はＴ12の項でほかの柱穴と一括して述べる。

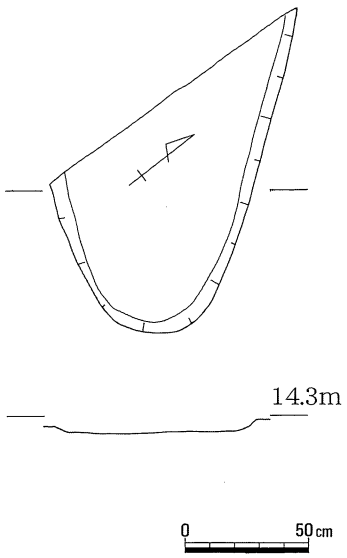
Ｐ37（第40図）

東半部は調査区限界のため不明であるが径1.45ｍの円形で、検出面からの深さ0.8ｍで断面はＵ字形を呈する。埋土は暗褐色や黒灰色を呈し、礫が多く入っている。

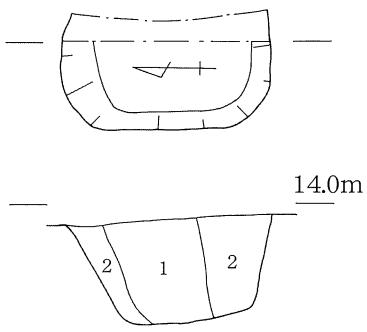


1 黒灰色砂礫
2 暗褐色土
3 暗褐色砂質土
4 淡黄灰褐色砂質土
5 灰褐色細砂・シルト
6 暗褐色土
7 淡黄暗褐色微砂・シルト
8 黒灰褐色砂

第40図　P37平・断面図



第41図　ＳＫ36平・断面図



1 灰褐色砂質土
2 淡灰暗褐色砂質土、少量小礫含

第42図　P50平・断面図

ＳＫ36（第41図）

全形は調査区限界のため未検出であるが平面形は短径0.9m程度の楕円形であると考えられる。検出面からの深さは５cmでごく浅く、断面は台形を呈する。

P50（第42図）

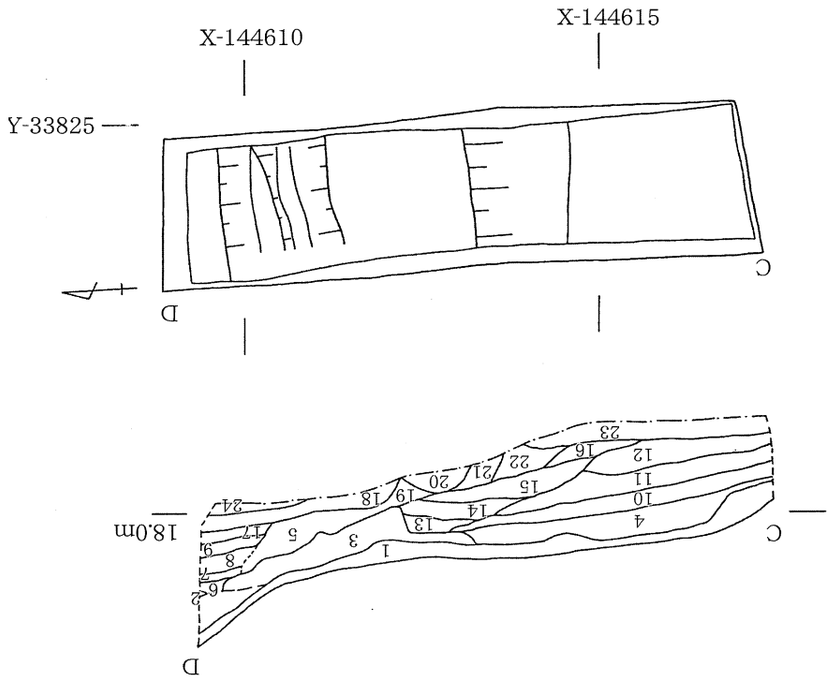
全形は調査区限界のため未検出であるが平面形は長軸0.8mの隅丸方形と考えられる。検出面からの深さは0.4mで断面形は台形を呈する。埋土は灰褐色の砂質土で、外側がやや色薄く小礫が混じっている。

Ｔ９（第44図）

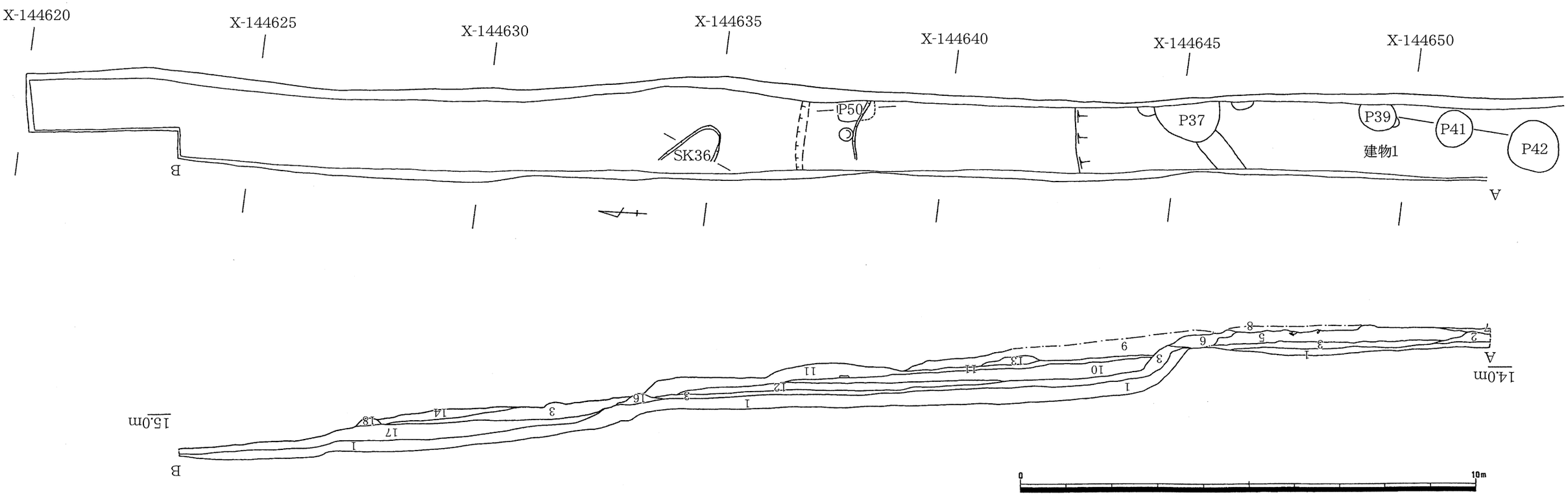
金堂の北で、講堂や北築地などの追求を目的とした南北方向のトレンチである。トレンチ北端付近で近代の炭窯を検出したほか、南端部では金堂北側の瓦溜を検出した。地山上では自然地形が緩やかに南に下がっていき、講堂が営造されたような平坦面は見られない。なお、Ｘ＝－144615付近で自然地形の傾斜の変換が見られ、これがＴ８の土盛り遺構と続く北区画施設の名残と見られる。地山は花崗岩バイラン土で、その上面には黄褐色の微礫・粗砂からなる山砂層(東壁の８層)が堆積し、金堂北側の上層瓦溜もこの中にある。

Ｔ10（第45図）

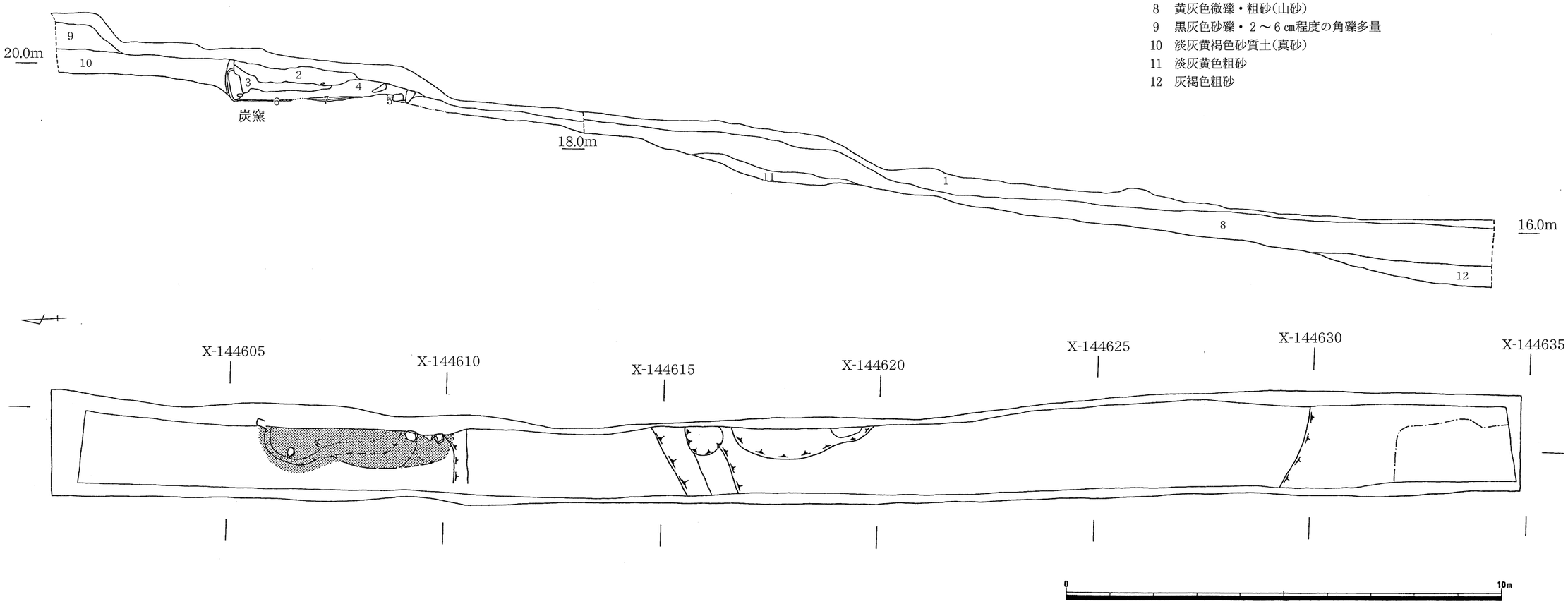
東回廊追求を目的として設定したトレンチである。東塔の東には南に流下する溝があって、塔から南ではほぼ磁北方位に沿っている。このため、回廊や築地などの区画施設を反映しているともいわれていた。そこで、この溝の両側にまたがる形でトレンチをもうけた。調査の結果、地山の上に西に傾斜する黒褐色や暗褐色の造成層(南壁の10・11層)が見られた。10層上面がわずかにたわんだ箇所(平面図の落ち表示箇所)では上層の８・９層に瓦や土器が集中して出土した。他に遺構は検出されず、回廊の存在を明らかにすることはできな



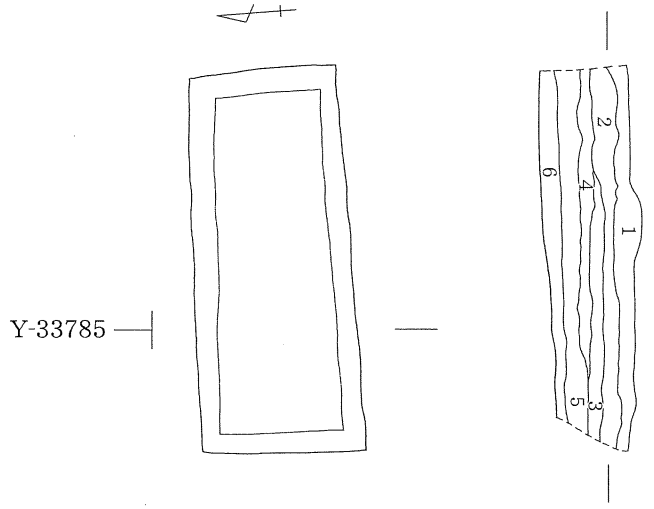
1 表土
2 褐黒色微砂・小礫
3 暗灰黄色粗砂・微礫
4 黄灰色粗砂・微礫
5 淡灰黄色粗砂・微礫、須恵器・土師器・瓦・早島片含む
6 灰黄色粗砂・微礫
7 淡灰緑色粗砂・微礫(やや暗)
8 淡灰緑色粗砂・微礫
9 灰緑色粗砂・微礫
10 淡灰褐色粗砂・微礫
11 淡褐黄色粗砂・微礫
12 淡褐灰色粗砂・微礫
13 淡褐灰色細砂・粗砂・微礫
14 褐黒色細砂・粗砂・中・小礫
15 灰褐色細砂・粗砂・小礫
16 暗灰黄色微礫・粗砂・小礫
17 緑灰黄色粘質粗砂・細砂・微礫
18 暗灰色粘質微砂(一部暗褐色)
19 灰褐色砂質粗砂・微礫・中礫
20 褐灰色微砂・粗砂・小礫
21 灰褐色砂質粗砂・微砂・小礫
22 淡褐灰色粘質微砂・小礫
23 暗褐灰色粘質細砂・小礫・中礫
24 暗灰緑色粘質細砂・上面に小礫

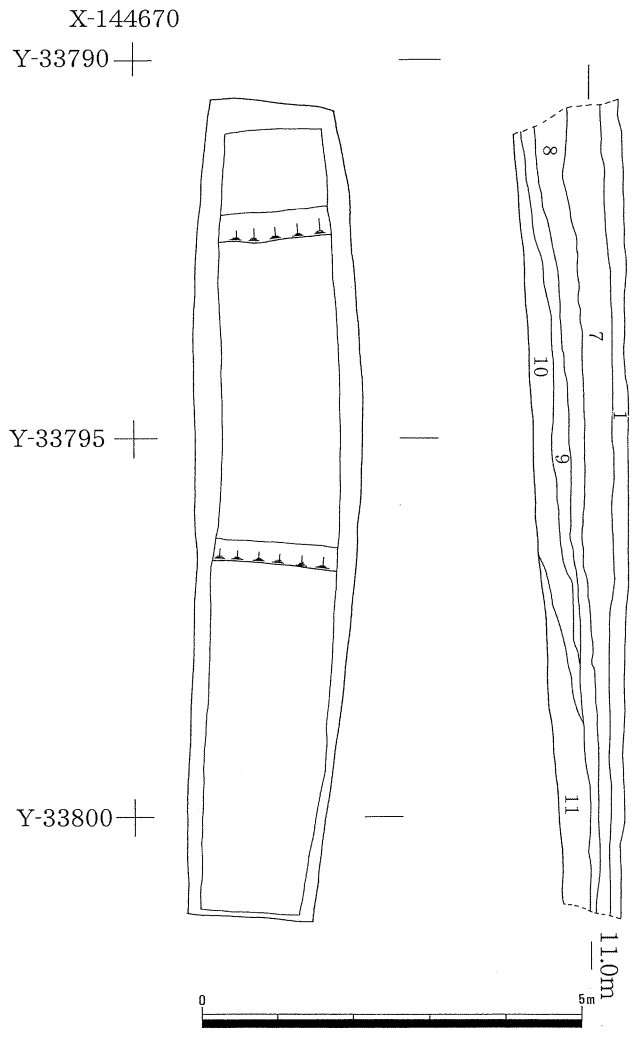


第43図　Ｔ８平面・西壁実測図



第44図　Ｔ９平面・東壁実測図





第45図　T10平面・南壁実測図

1　表土
2　淡黄暗灰色細砂
3　淡黄灰褐色細砂
4　淡黄灰褐色微砂
5　暗褐色砂礫(造成土層)
6　青灰色粗砂・シルト
7　淡褐色細砂
8　淡灰褐色細砂
9　暗褐色粗砂・シルト(瓦溜)瓦多量
(平城宮式軒丸等)土師・須恵片・小礫含む
10　黒褐色土(造成土)
11　暗褐色砂礫、5～8㎝程度の角礫多量

かった。

T11（第121図）

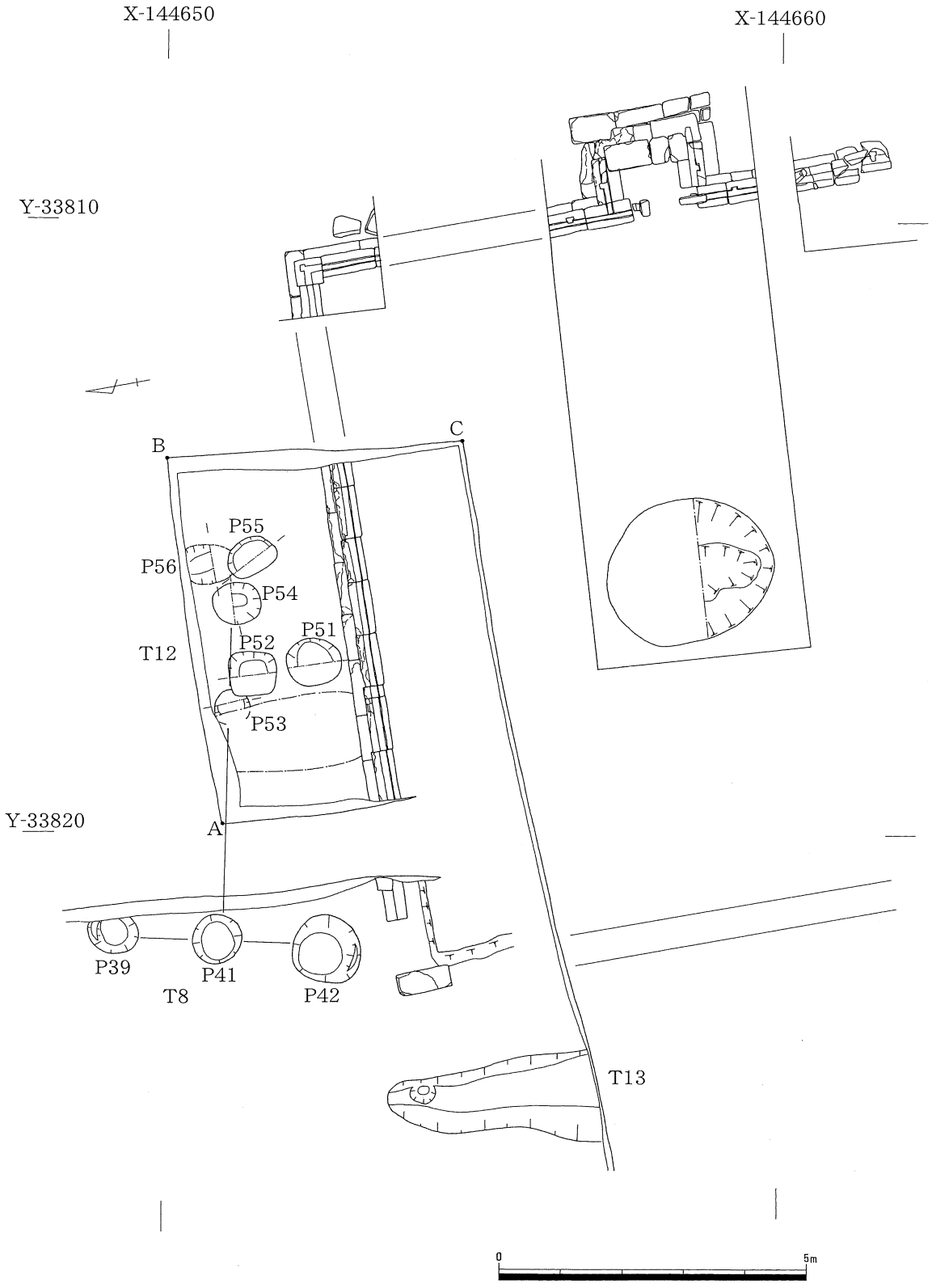
T11は、第1次調査で検出した東築地を検証するために、第1次調査E1トレンチの南8mにトレンチをもうけた。調査の進展により北側・東側を拡張してT38を設定したので、T38の項で一括して述べる。

T12、東塔（第46図）

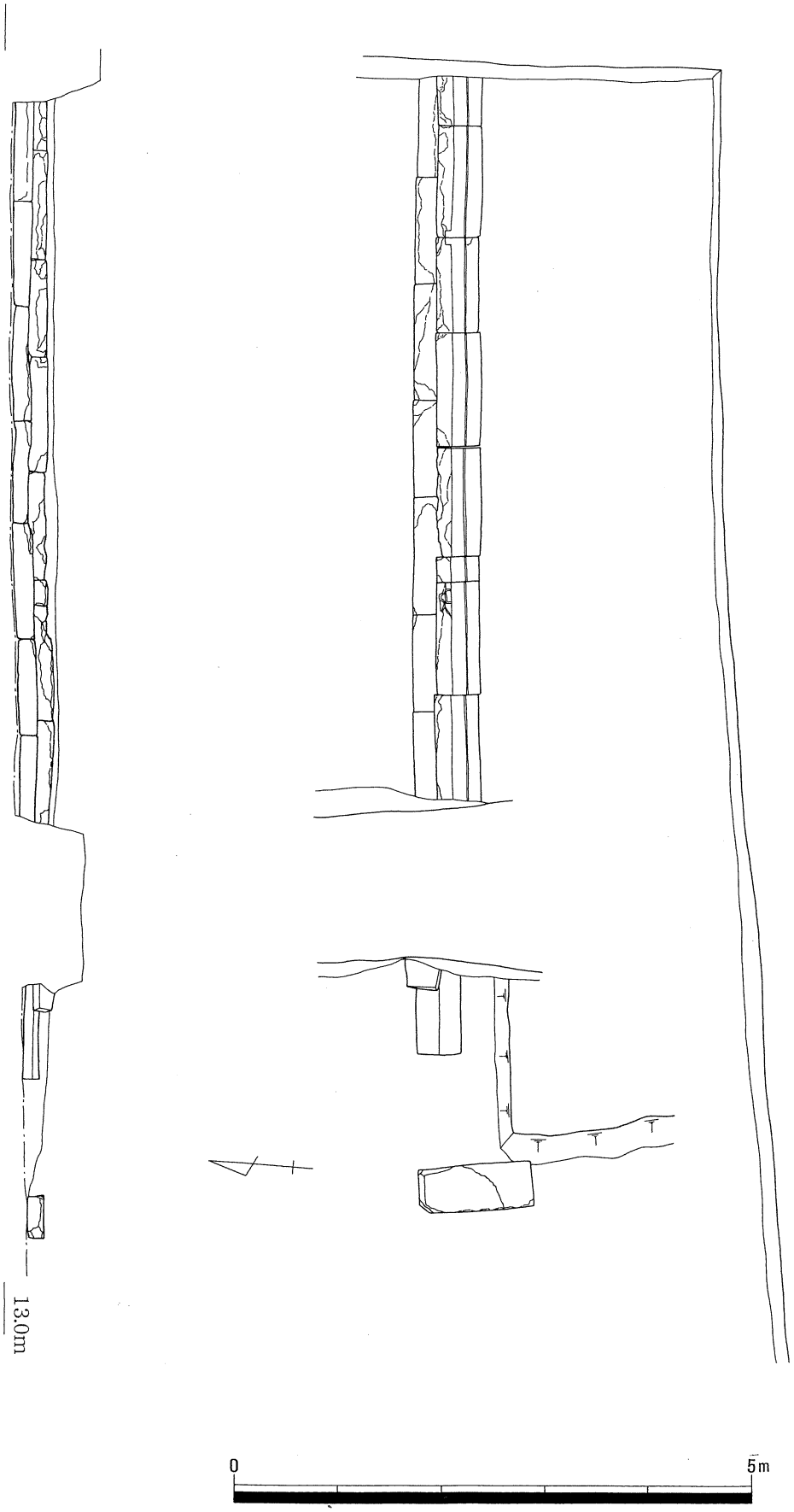
第1次調査で検出された塔基壇の北辺部周辺を検出するために設定したトレンチである。現地表から0.35m程度で凝灰岩製基壇外装を検出したほか、基壇の北側で柱穴群を検出した。

東塔基壇

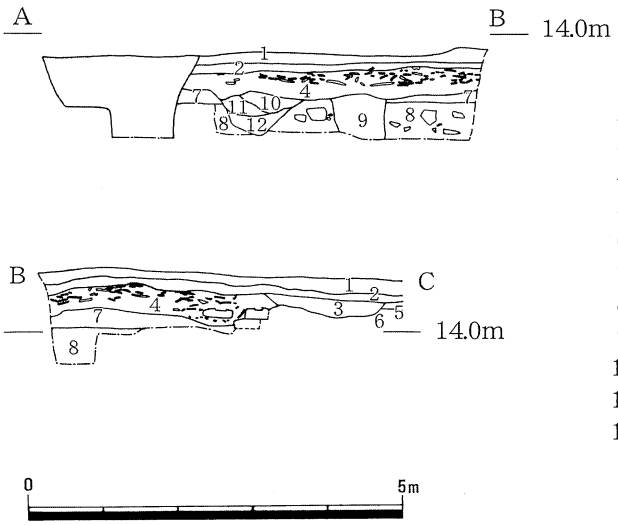
東塔基壇は凝灰岩製の壇上積基壇外装が用いられている。基壇上面は後世の耕作等による削平を受け、浅い所で30㎝足らず深い所でも50㎝ほどで基壇外装石が露出する。凝灰岩製基壇外装は北辺・東辺が遺存しており、西辺・南辺が破壊されていることは第1次調査で確認されている。北辺で計測すると、延石外面で1辺12.4m、地覆石外面で12.1㎝である。基壇外装石は幅33～35㎝厚さ12～15㎝長さ最長90㎝ほどの石材を必要に応じて長辺を切りつめて用いている。地覆石には上面で幅10.5㎝底で幅9.5㎝、深さ1.5㎝の溝を彫っている。各辺および角には



第46図　東塔基壇全体図

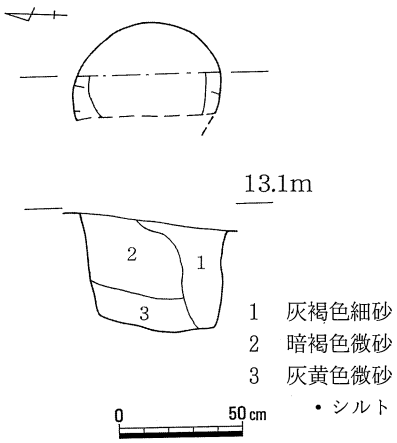


第47図　東塔基壇北辺　平・立面図



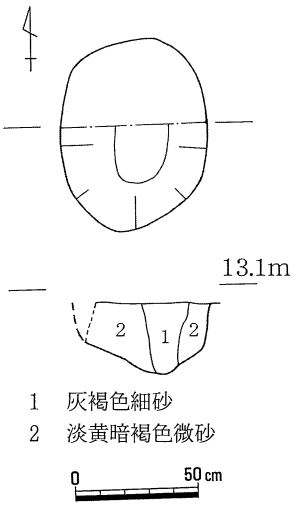
1　表土・灰黄色細砂
2　黄灰色細砂・微砂
3　黄灰色細砂
4　瓦溜・灰褐色細砂・微礫
5　暗灰灰色微礫・細砂(粘質系)
6　灰黄色細砂・微礫(砂質系)
7　褐黒色細砂、砂礫～小礫
8　灰黄色細砂小礫～中礫
9　暗褐色粘質細砂・小礫
10　褐黒色粘質細砂・小礫
11　淡褐黄色細砂
12　暗灰黄色小礫・細砂・中礫

第48図　T12北・東壁実測図



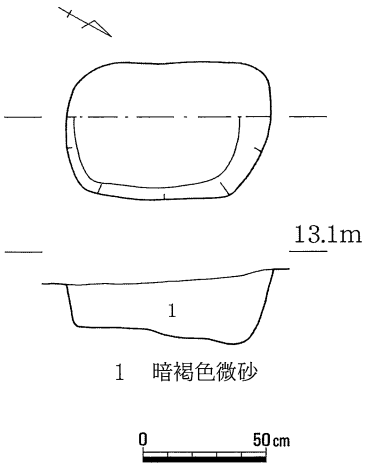
1　灰褐色細砂
2　暗褐色微砂
3　灰黄色微砂
・シルト

第49図　P53平・断面図



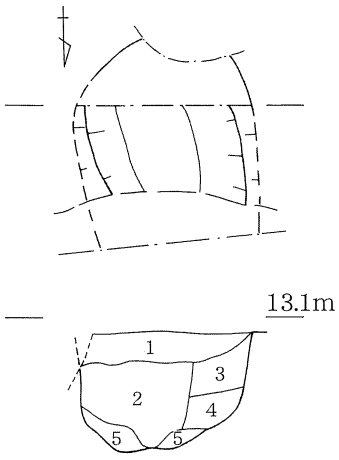
1　灰褐色細砂
2　淡黄暗褐色微砂

第50図　P54平・断面図



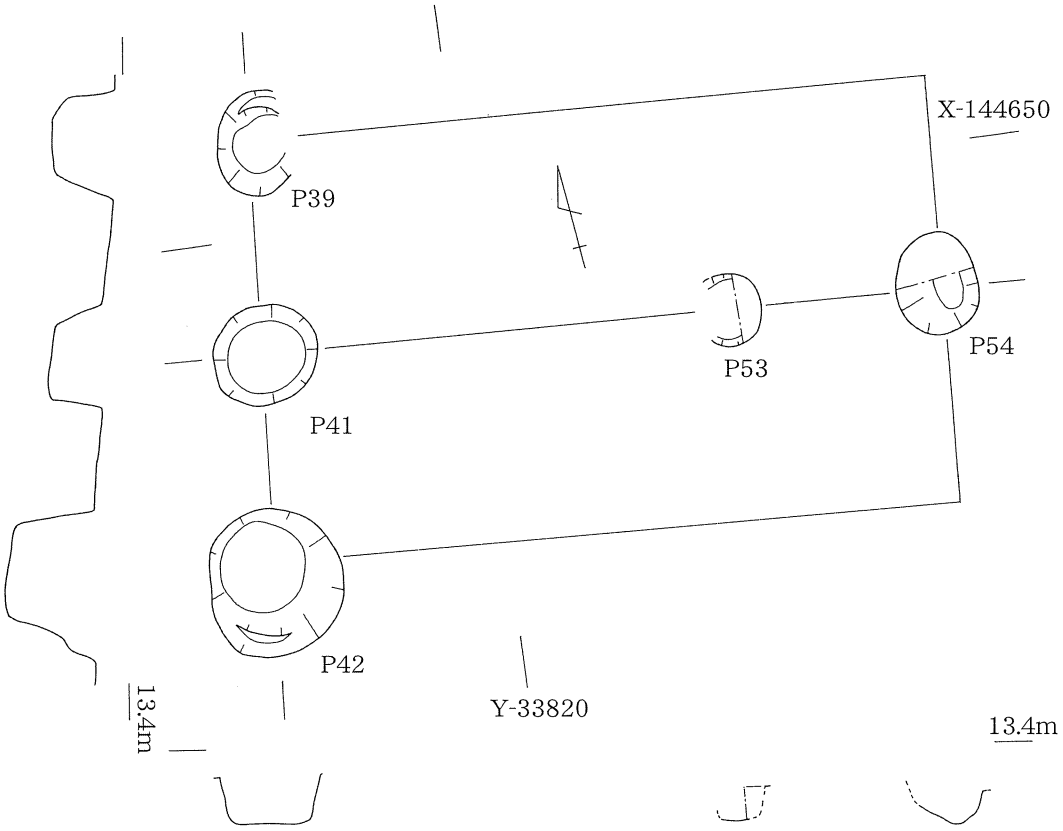
1　暗褐色微砂

第51図　P55平・断面図



1　黒褐色土
2　暗褐色微砂
3　淡黄暗褐色微砂
4　暗褐色微砂
5　灰褐色粗砂・シルト

第52図　P56平・断面図　0　50cm



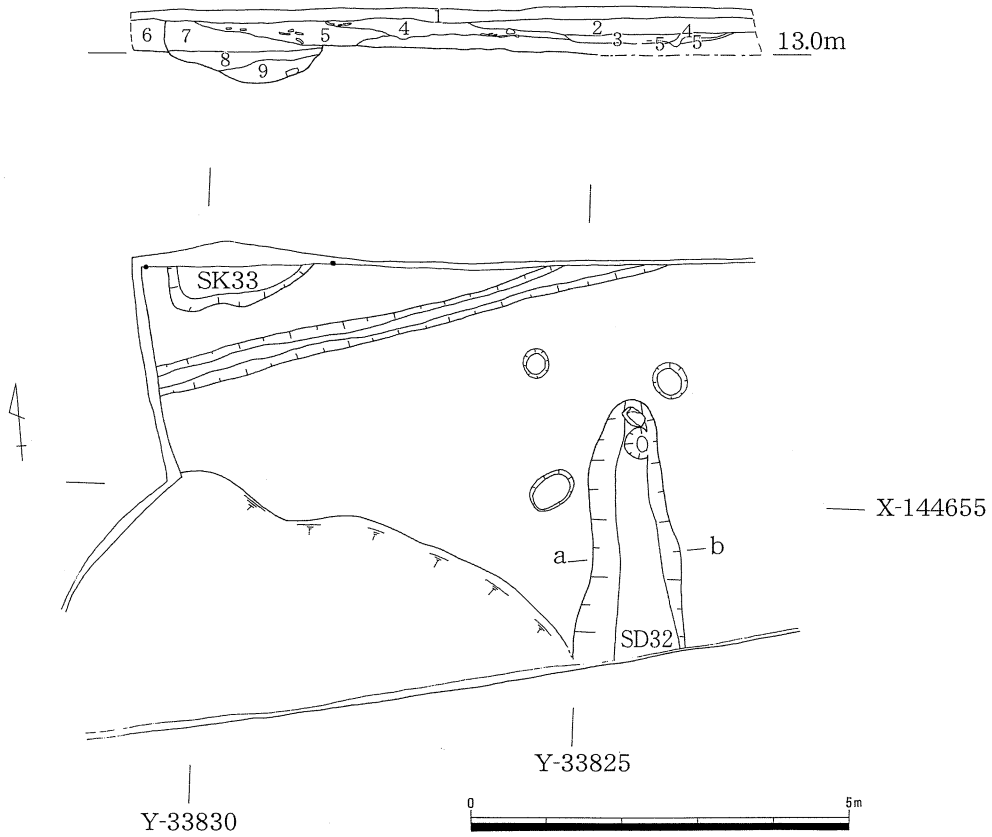
第53図　建物１平・断面図　0　50cm

束石ほぞ穴がつけられているので、柱筋に束石のある壇上積基壇であったことがわかる。後述する東階段を手がかりとして中軸を割り出し、束石ほぞ穴から柱位置を復原すると、東塔は中央間2.7ｍ脇間2.1ｍの建物であったことがわかる。

東辺中央には階段が付属し現状で延石から３段が遺存している。北辺には階段が残っていない。東塔地覆石には階段耳石のほぞ溝が設けられているが、北辺地覆石にはこれが認められない。したがって、北辺にはもともと階段は付属せず、東塔基壇は東西２面の階段をもっていたものと見られる。東階段は地覆石外側で幅1.8ｍ、東辺地覆石から階段地覆石前面までの出が1.2ｍある。１段の出が25㎝であるので計６段が復原でき、石材の厚さ10～12㎝を掛け合わせると、延石上面から葛石上面までの高さは60～72㎝となる。しかし、現存する３段が高さ34㎝あるので、68㎝程度に復原するのが妥当と思われる。

Ｔ12西壁で延石と地覆石の重なりを観察した。地覆石は外側での厚さは12㎝であるが、内側(盛り土側)では15㎝ある。したがって、東塔では地覆石底面を延石と重なる部分について深さ３㎝ほど削っているものと考えられる。

北辺では延石・地覆石は造成土上に設置されている。Ｔ12西壁では延石・地覆石の内側には明瞭な掘り肩が見られない。第１次調査の塔基壇南トレンチでは、基壇外装石は検出されなかったが、黒褐



1　暗灰黄色細砂(表土)
2　灰黄色細砂
3　淡灰褐黄色細砂、T13北部の東西溝埋土
4　灰褐色粘質微砂・シルト、
　T8対応層から古い目薬瓶出土
5　灰褐色細砂・微礫、瓦溜
6　黄灰色細砂・粗砂・微礫
7　褐黒色粗砂・微礫
8　暗褐黒色微砂・細砂
9　暗褐黒色砂質細砂・微砂

第54図　T13平面・北壁実測図

色有機質粘質土・山土・花崗岩バイラン土からなる乱れた版築層を削って延石・地覆石を設置したことが明らかとなっている。基壇北辺では、造成土上面は地覆石上面の高さとそろっており、この面が工程上の1区切りととらえられる。延石・地覆石の設置は、基壇南側など低い箇所においては黒褐色の造成土上に版築盛り土を施し、地覆石上面レベルで水平面をとった後、北辺においては黒褐色造成土、南辺においては版築盛り土を削ってなされた。

基壇中央には2×2.3mのほぼ円形の塔心礎抜き取り穴があったことが第1次調査で判明している。

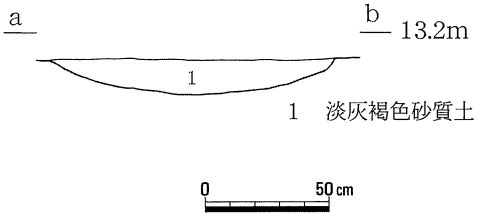
基壇北辺の外側には膨大な量の瓦溜が形成されている。瓦は後述する賞田廃寺第3様式の瓦である。この瓦溜からは平安期の土器とともに、13世紀後半の早島式土器碗が出土するので、この瓦溜は再堆積であることが知れ、また、同時に出土する凝灰岩製基壇外装石から13世紀後半に基壇が破壊されたと見られる。なお、瓦溜出土基壇外装石のほぞ溝・束石ほぞ穴、石材規模などからみると東塔・西塔に用いられた規格とは異なった規格のもとに製作されている。

基壇主軸は国土座標軸から10°西にふっている。

建物1(第53図)

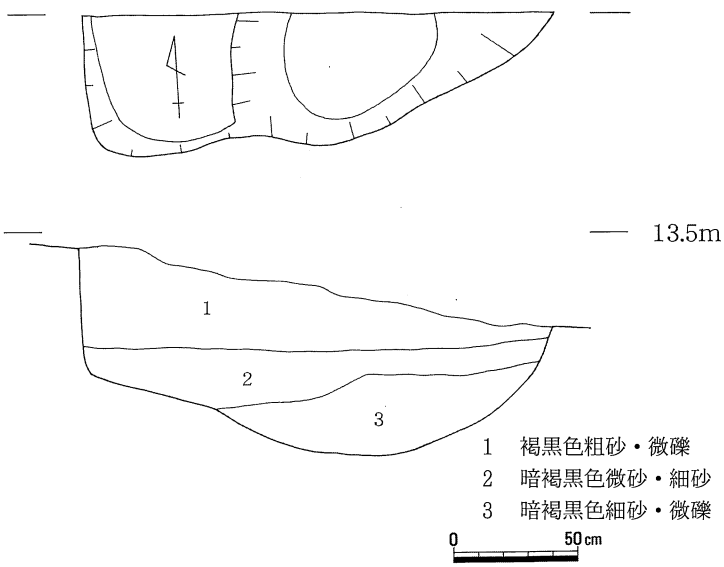
黒褐色の造成土上面でT8南端部の3基と合わせて、計9基の柱穴を検出した。埋土はいずれも黒

褐色土であるので、造成後期間をさほどおかずに設けられたものと見られる。柱穴規模が多少不揃いではあるが、P39・41・42・53・54が組み合って、一つの建物を構成すると見られる。心心で柱間は1.7mである。未掘部分もあって定かではないが、この建物復原が正しいとすると、東塔基壇に先行して作られた可能性がある。P41からは土師器・須恵器小片が出土している他は出土物がなく、明確に時期を提示し得ない。



第55図　ＳＤ32断面図

P39は長径75cmの楕円形の柱穴で、検出面からの深さは48cmである。埋土は4層に分かれるが、黒褐色土を主体とし、砂礫の含み方により細分される。柱根痕跡部分は淡褐色微砂で、他の埋土と区別が付きやすい。P41は、直径74cmの平面ほぼ円形の柱穴で、検出面からの深さは45cmある。埋土は黒褐色土を主体とし、砂礫の含み方により細分される点はP39と同様である。柱根痕跡部分の下部では黒灰色のシルト質になっていた。P42は元は直径110cm程度の平面円形の柱穴であったと思われるが、検出面では上部の肩がくずれやや楕円形に広がっている。検出面からの深さは75cmあって、他の2基よりも規模が大きい。埋土はやはり黒灰色土を主体とする。底部付近では黄褐色土がブロック状にみられる。柱根痕跡部分はP39と同様淡褐色の微砂である。



第56図　ＳＫ33平・断面図

P51は平面はやや不整形な円形を呈し、断面は台形である。深さは検出面から38cmである。埋土は暗褐灰色ないし褐黒色の粘質細砂を主体とし、中小の礫が混じる。P52は平面隅丸方形で、断面形は台形を呈する。深さは30cmで、埋土は暗灰褐色の粘質微砂を主体として、中小の礫が混じる。

P53（第49図）

西側は第1次調査に掘削されているので、不確かな部分もあるが、平面直径約60cmの円形の柱穴で、深さは検出面から45cmある。壁面はほぼ直立する。埋土は暗褐色の微砂で底部付近は灰黄色を呈する。柱根痕跡には灰褐色の細砂が入っている。

P54（第50図）

未掘部分もあるので未確定ではあるが、75×55cm程度の隅丸方形の平面形を呈するとみられる。

断面は角の取れた５角形状で、埋土は暗褐色の微砂に黄褐色土が混じっている。

P55（第51図）

平面形は82×54cmの隅丸方形で、断面は北側が深くなる不整形な箱形である。検出面からの深さは北側で30cm南側で17cmである。埋土は暗褐色の微砂に黄褐色土が均質に混じっている。

P56（第52図）

平面形は長軸0.75m以上、0.62mの楕円形を呈すると考えられるが南側をP55に切られるため不明である。検出面からの深さは0.45mで断面形はU字形を呈する。埋土は黒褐色土・暗褐色土を主体とする。遺物は出土しなかった。

T13（第54図）

T13は、東塔北西部から金堂にかけての遺構の有無を追求するために設置した。瓦溜はT12と同様で、その量はおびただしいものであった。ここからも凝灰岩製葛石が出土している。黒褐色の造成土、北西半端においては地山面で溝２条土坑１基柱穴５基を検出した。このうち、トレンチ北西部で検出した東西方向の溝、SD34は後に目薬ガラス瓶が出土した層を切っていることが判明し、現代のものであることが判明した。

SD32（第55図）

SD32は、Y＝－33825付近で検出した南北方向の溝である。黒褐色の造成土面で検出し、南へ深く残っている。出土物は土師器細片であるので、時期の明示はしがたい。これとともに弥生中期後半の壺も出土している。

SK33（第56図）

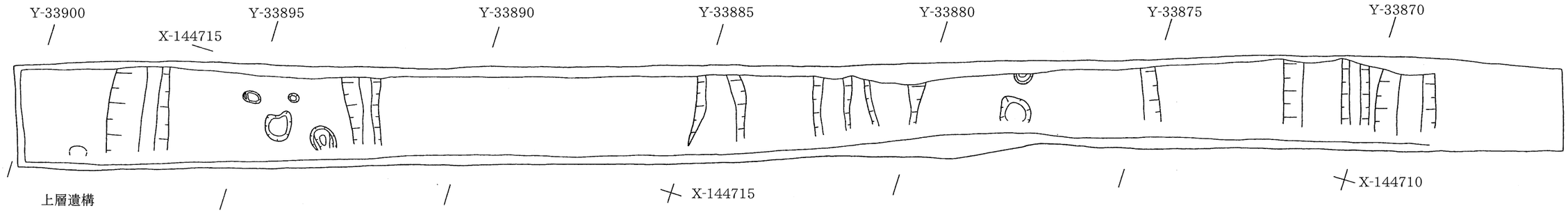
SK33はトレンチ北西角で検出した不整形の土坑である。地山上から掘り込まれており、埋土は３層に分かれ、いずれも褐黒色ないし暗褐黒色土である。西側の壁面はほぼ垂直に立ち上がり相当する底面もほぼ平坦であるが、東側部分では壁面が斜めに立ち上がり、底面も曲面である。

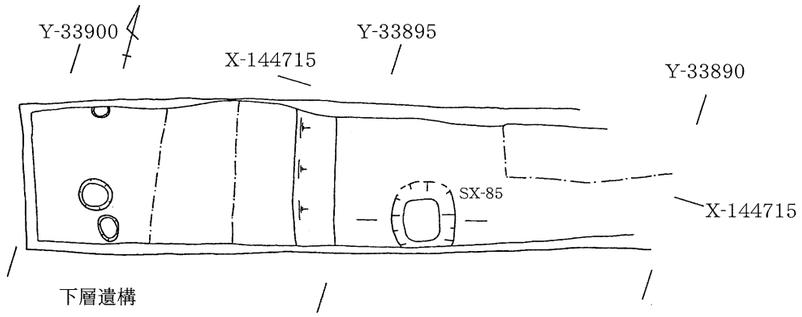
T14（第57図）

西塔の南側に位置する東西方向のトレンチである。東西を尾根状地形にはさまれた谷状地形の中央部にあたる。トレンチ中央部では中世以降の溝群や柱穴等が検出されたが、特に寺院の廃絶以降は流路となっていたようであり、崩落の危険があるため底面の完全な検出は断念した。したがって、第１次調査で検出した西築地地形基礎部の追認にはいたらなかった。しかし、後に述べるように、第１次調査で検出した西塔外周列石北側の築地基礎部は、西塔基礎地形の盛り土単位の見誤りと判断されることから、当該部分に築地が営まれたことには否定的である。西築地地形基礎部とした遺構については別の性格を検討する必要がある。また、トレンチ西端付近では中世の柱穴群が検出され、さらにその下層では炉跡(SX85)が検出された。

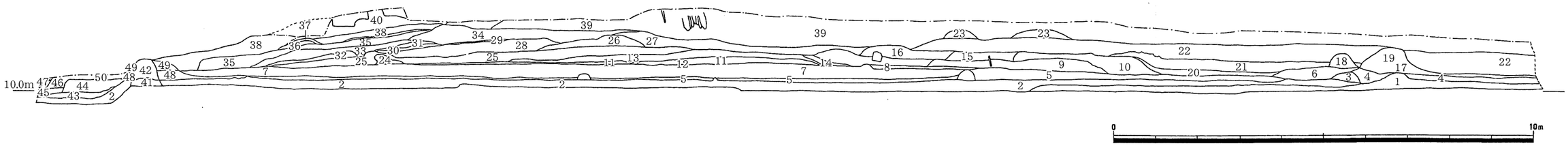
トレンチ中央部では表土下1.8m(南壁39層)からも13世紀の早島式土器碗が出土し、谷地形に深く中世層が堆積している。同じ39層中に杭が何本と打ち込まれているのが確認されている。より上層に当たるSD79からSD83の検出面では、鉄分やマンガンの堅い集積が見られた。SD80からは須恵器・土師器・中世の土鍋とともに滑石製石鍋(S15)が出土している。

SX85（第58図）

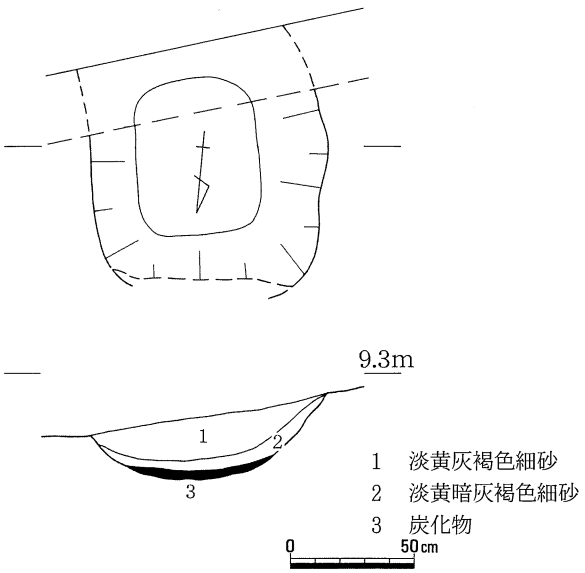




1 淡褐色細砂(耕作土)
2 灰褐色細砂(耕作土)
3 灰白色粗砂
4 淡灰橙褐色砂礫(真砂土)
5 暗橙褐色細砂(鋤床)
6 橙褐色砂礫
7 灰白色粗砂・細砂
8 橙褐色細砂
9 暗褐色砂質土、少量土器片含む
10 淡灰暗褐色細砂
11 淡褐色粗砂
12 暗赤褐色細砂、Fe・Mn多量
13 灰褐色砂礫
14 淡褐色粗砂
15 淡灰暗褐色粗砂
16 灰褐色粗砂
17 暗黄褐色砂質土(真砂土)
18 淡黄暗褐色砂礫(真砂土)
19 灰褐色粗砂、角礫含む
20 淡黄褐色砂礫(真砂土)
21 淡褐灰白色細砂
22 暗赤褐色砂質土、
中世土器・瓦・須恵器含む
23 淡黄灰褐色粗砂・シルト
24 灰白色粗砂
25 暗赤褐色粗砂・細砂
26 暗赤褐色細砂、灰褐色微砂粒土塊含む、
少量の炭・焼土粒含む
27 橙褐色粗砂
28 暗黄褐色細砂
29 黄白色粗砂
30 淡黄黒灰色細砂
31 暗黄褐色細砂
32 淡黄灰白色細砂
33 黒灰褐色細砂、炭多量含む
34 暗灰褐色細砂・粗砂、炭微量
35 淡黄灰褐色細砂、瓦・土師器・須恵器含む
36 淡黄灰褐色細砂、黄褐色土ブロック状に含む
37 焼土、炭微量
38 淡灰淡褐色細砂
39 青灰色粗砂・粘土・シルト、
土師器・須恵器・中世土器含む
40 黒褐色粗砂
41 腐植土
42 現代溝
43 淡褐色砂質土
44 淡黄灰褐色細砂
45 淡灰淡褐色細砂
46 淡灰淡黄褐色細砂(粘性有)
47 暗灰褐色砂礫
48 淡灰橙褐色細砂
49 灰褐色粗砂
50 灰褐色微砂・シルト



第57図　T14平面・南壁実測図



第58図　ＳＸ85平・断面図

南端が調査区限界のため未検出であるが、平面形は長軸1.2ｍ以上、短軸1ｍの楕円形であると考えられる。検出面からの深さは0.4ｍで断面はＵ字形を呈する。埋土は３層確認でき最下層は炭化物層である。底面はほぼ全面にわたって被熱による硬化が認められ、検出面での掘り肩外周でも、土色が橙色や暗赤褐色に変化した部分が見られた。南壁実測図では36・37層が対応する。銅滓が出土しており炉上面では土師器片、須恵器片が出土した。時期は10世紀後半と考えられる。

Ｔ15・Ｔ16・Ｔ23・Ｔ27、西塔(第62図)

金堂のある小尾根状の地形と西側の尾根部との中間にあたる谷状地形の中に位置する。西塔基壇の構造は凝灰岩製壇上積基壇の外周に石列を巡らすことを特徴とするいわば二重の基壇の構造をとる。第１次の調査では西門と判断されたが、今回の調査では、基壇の平面形や束石ほぞ穴から復原される建物柱配置などから、塔基壇であることが確実となり西塔と位置づけられた。

Ｔ15から遊離状態で滑石製の勾玉(Ｓ17)が、Ｔ16の灰褐色層から碁石(S19)、滑石製紡錘車(Ｓ20)が出土している。

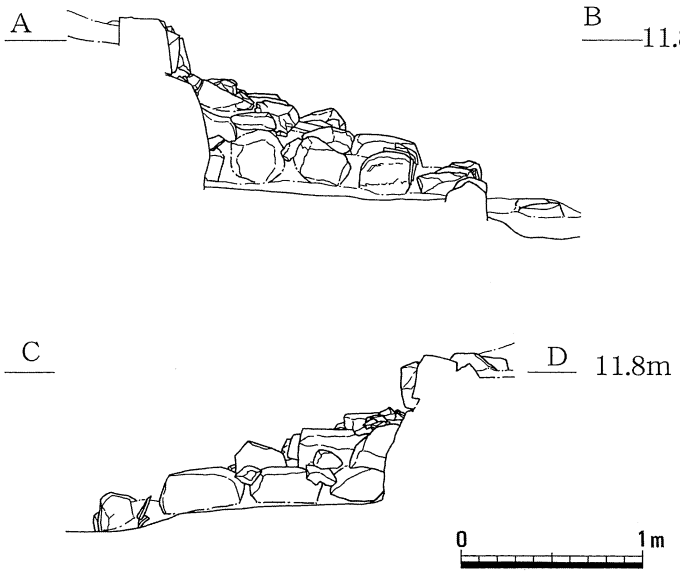
壇上積基壇（第60・63図）

第１次調査で西門とされた遺構である。上面は中世の段階で大きく削平を受けている。遺構西辺の南北方向に設定されたＴ15においては瓦溜、凝灰岩製壇上積基壇外装とそれに付属する西階段の一部を検出した。北辺側の東西方向に設定したＴ16においても瓦溜を検出するとともに、基壇外装石材の抜き取り穴を検出した。

凝灰岩基壇外装石は西辺階段中央から北西角にかけて延石と地覆石３石が、東辺では階段取り付け部分の延石と地覆石および階段延石・地覆石が残っているにすぎない。北辺では石材抜き取り痕が幅80㎝で溝状に検出された。北辺の基壇石材はかろうじて小片となりながらも原位置を保った石材が見られた。

西階段は北半部分の延石しか残っていないが、延石の使い方が東階段や東塔東階段と異なっている。すなわち、東階段や東塔東階段では延石長辺を階段輪郭に合わせている。正確には東階段では短辺の長さに正方形に切った石材を中央に置いている。これに対し、西階段では階段中央に１石階段の出方向に長辺を合わせて置いている。これは、瓦溜や西辺基壇外装石は西に傾いていたので、谷地形の中央に位置する西階段の不当沈下を防ぐためと考えられる。なお、延石の下に瓦塔片(瓦塔K342に類似)が挟まっていた。

石材は幅41～45㎝、厚さ14～15㎝、長さは最長94㎝の大きさである。地覆石のほぞ溝は上面で11.5～12㎝、底部で11.5㎝、深さ２㎝である。12×７㎝の束石ほぞ穴が１箇所観察できる。



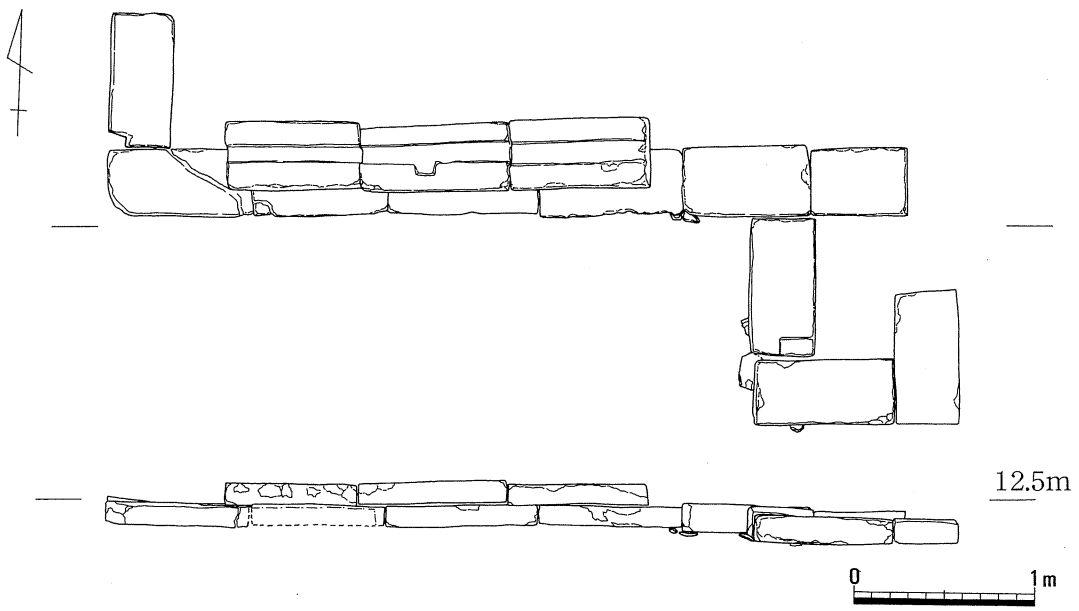
第59図　南石段　東・西立面図

ＳＸ543（第64図）

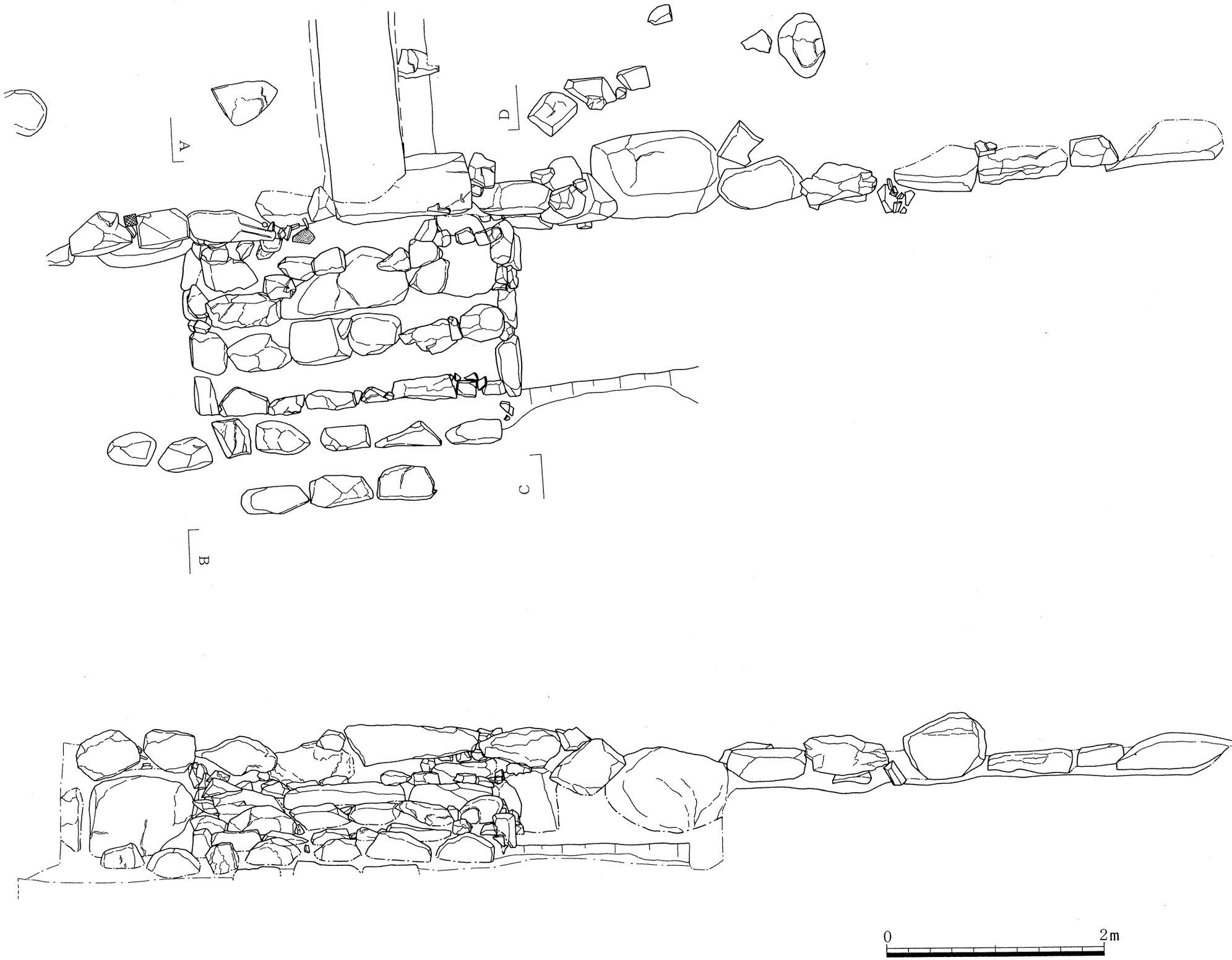
西塔外周東列石の東４ｍに段があり、幅70～80㎝の３石のみ面を西に向けて石列が残っていた。西塔東瓦溜がこの石列の下半を埋めており、西塔存続時もこの石列が存在したことは明らかである。段数は不明であるが、この段前面に石列がおかれていたものと考えられる。残存する石列から南側は、後世の水田の段などにより破壊されている。

Ｔ17・Ｔ18、金堂（第66図）

標高16.3ｍの小尾根状地形の中央部に位置する。基壇南辺部は削平を受けているものの、現状でも基壇状の地形が良好に観察できる。第一次調査では乱石積みの基壇外装と遊離した状態の礎石が確認



第60図　西塔壇上積基壇西辺平・立面図



第61図　西塔南石段平・立面図

Y-33895
T15
Y-33890
X-144660
Y-33880
Y-33885
T16
X-144665
Y-33870
T23
X-144670
B
A
D
X-144675
X-144680
T27
X-144685
Y-33875
C

〈T23南たちわり西壁〉

1 山土
2 灰黄色微砂まじり細砂・瓦含む
3 灰黒色微砂
4 灰褐色微砂まじり粗砂
中世包含層。瓦・土器砕片凝灰岩含む
5 灰褐色微礫まじり粗砂中世包含層
6 淡灰茶色粗砂・中砂
7 灰褐色粗砂砕片凝灰岩を多く含む
8 淡灰褐黄色粗砂・微礫
9 淡灰茶色粗砂・中砂。6層に近似
10 灰黒色粗砂
11 黄灰色微礫・粗砂
12 灰(黒)色中砂と橙灰色微礫の互層
13 灰黒色中砂と橙灰色微礫の互層
14 橙灰色微礫と灰黄色中砂の互層

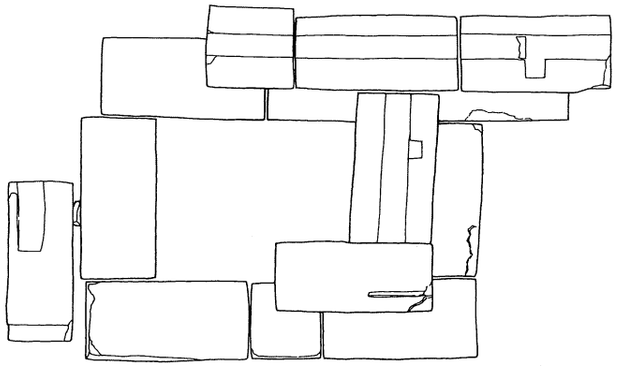
〈T23西塔中央土手南壁〉

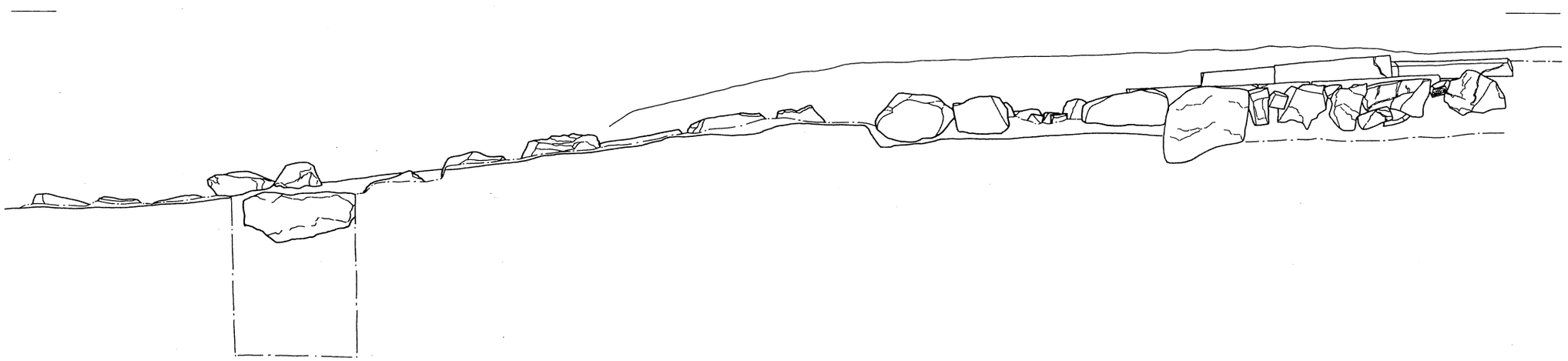
15 灰青色粗砂
16 灰橙色細砂
17 褐色小礫～大礫
18 淡灰褐色粗砂・微礫
19 灰黄色微砂
20 灰褐色粗砂。微礫
下面付近に土器片・灰有。点線より上瓦溜。下瓦溜下
21 灰茶褐色山土
22 淡灰茶色粗砂・微礫。凝灰岩含む
23 灰褐色微砂
24 灰褐色粗砂・微礫。炭を含む
25 淡褐灰色粗砂(盛土。かたい)

B —13.0m
A
D —12.0m
C
10m
0

第62図　西塔基壇全体図

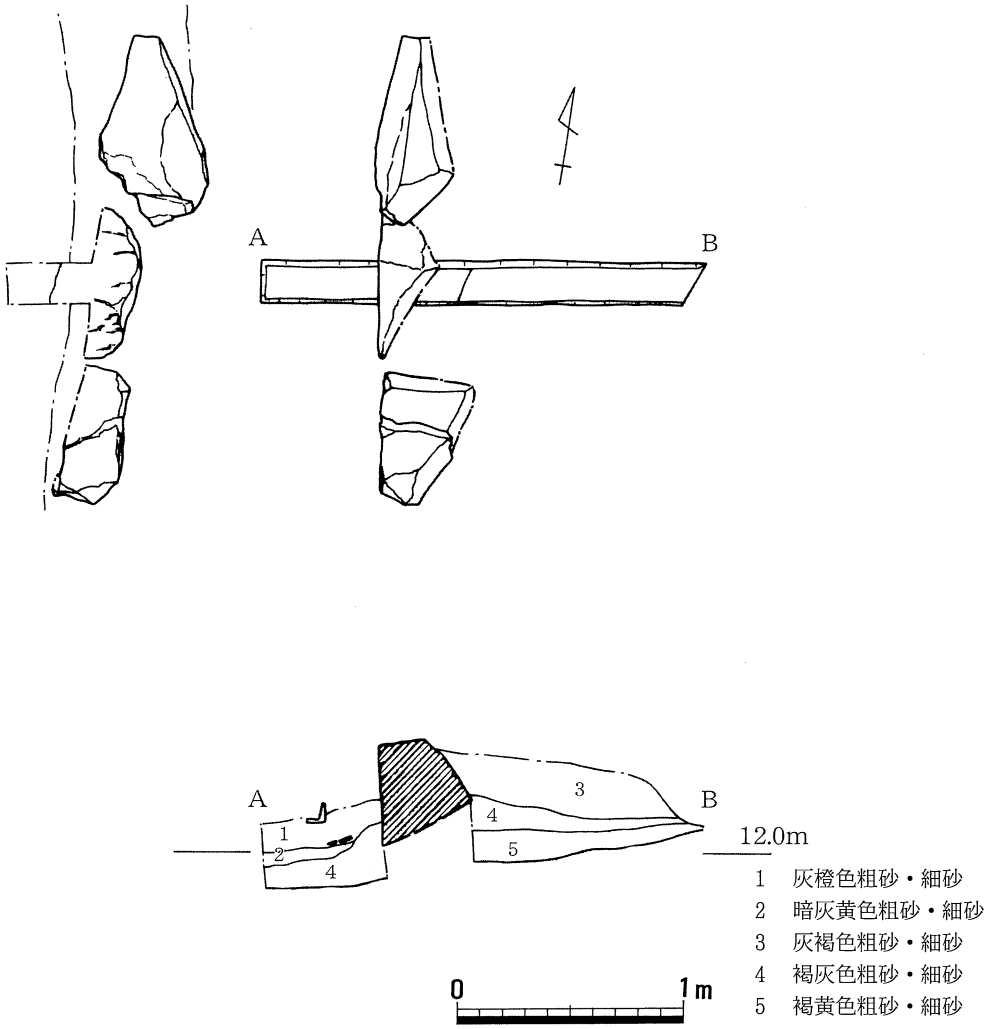
西塔東階段





第63図　西塔壇上積基壇東辺・東階段平・立面図

0　2m



第64図　ＳＸ543平・立・断面図

されている。今回の調査では基壇上面の調査によって、礎石抜き取り穴と原位置を保った礎石１基を検出し、東西５間、南北４間の建物であったことが判明した。この建物柱配置と後述する基壇の規模や位置関係により金堂と判断された。なお、T17の表土から瓦経２が出土している。

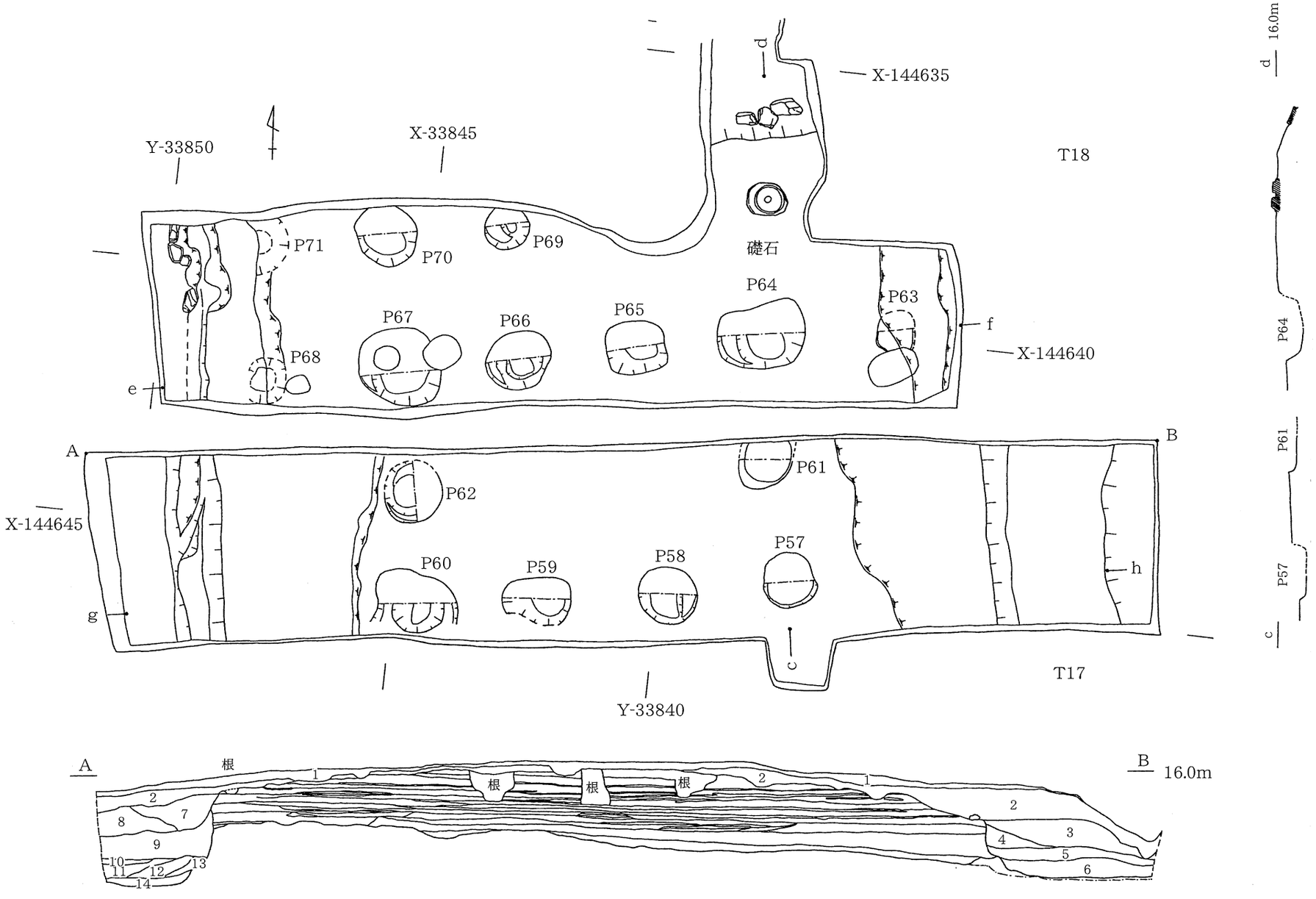
基壇

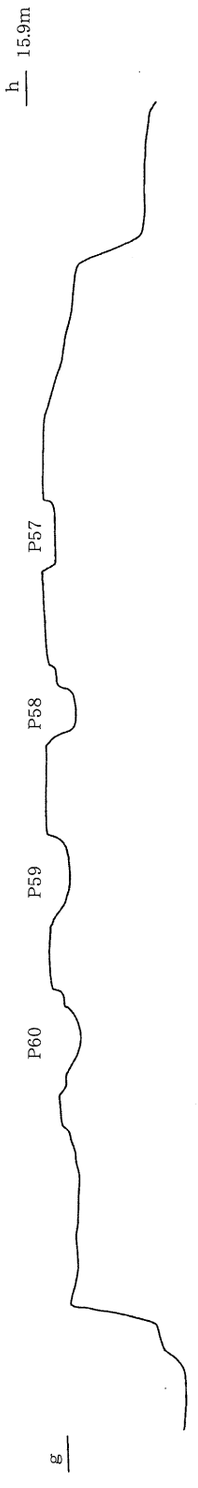
第１次調査のＮ１トレンチでは瓦溜が３層にわたって検出され、２度の改築が行われていると判断された。今回設定したT17では、東・西の両端部とも上層の瓦溜は顕著であるが、中層・下層の区別は必ずしも判然とはしなかった。上層瓦溜の下方(土層図の９層中)から高台消滅間近の早島式土器碗が出土したことから、上層瓦溜の形成は14世紀前半頃と想定される。西端の底部よりやや上層で13世紀後半の早島式土器碗が出土しており、金堂基壇は13世紀頃に西側では深さ2.4ｍ東側では2.2ｍ掘り下げられているのが明らかとなった。おそらく、その際に基壇外装も除去されたものと思われる。その後、自然石を１列並べた基壇外装が施されている。上層瓦溜は、基壇北側でこの外装上に乗っていたので、基壇外装は元々１段であったと思われる。なお、上層瓦溜では炭も出土し、一部には組み合った状態で瓦が出土することから、建物は火事により北側へ倒壊したものと見られる。

基壇の規模は東西15ｍ、南北約13ｍ(復原値)、高さは2.4ｍを測る。基壇は基盤層を削り出して整

第65図　金堂礎石・基壇北辺及び中層瓦溜平・立面図

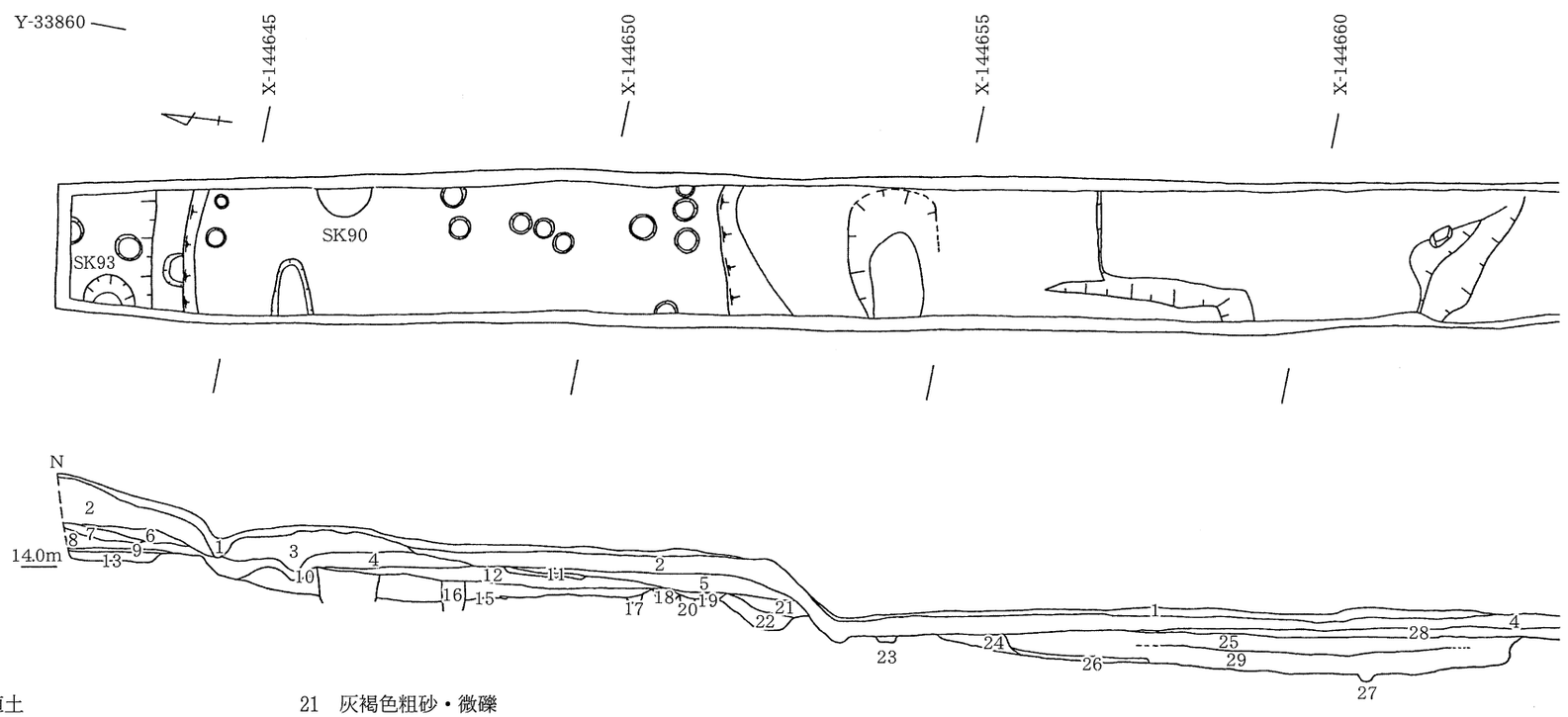
地した後、版築によって造成されたものである。版築は地山の上面に白色・黄色・黒色の土１～10㎝の厚さで積み上げている。場所によってはそれぞれの土の混ざり合った中間色を呈する部分もある。総じて黒色系の土でやや粘質がある。土盛りは水平を意識しているとは思われるが、やや東に傾いている。この版築層はよく叩き締められていて堅い。





1　腐植土
2　黄灰色粗砂・微礫
3　黄灰色粗砂・微礫（2よりやや暗）、上層瓦溜
4　灰黄色粗砂・微礫
5　淡灰褐色粗砂・微礫、中層瓦溜
6　灰褐色粗砂・微礫、下層瓦溜
7　灰橙色微礫・細礫
8　暗灰黄色粗砂・微礫・細礫
9　暗灰褐色粗砂・微礫、上面は上層瓦溜
10　灰褐色粗砂・微礫、中層瓦溜
11　灰黄色粗砂・微礫、中層瓦溜
12　暗灰黄色粗砂・微礫
13　淡灰褐色粗砂・微礫、下層瓦溜
14　暗灰黄色粗砂・微礫

第66図　金堂（T17・18）平面・断面図



1　表土、腐植土
2　暗灰黄色粗砂・微礫
3　黄灰色粗砂・微礫
4　灰青色細砂・粗砂・微礫(旧水田)
5　灰茶褐色微礫・粗砂・中砂
6　灰橙色粗砂・中砂・微礫
7　淡灰黄色細砂、瓦・礫の再堆積
8　淡灰橙色微礫・小礫・粗砂
9　淡灰色中砂・微礫
10　淡灰青色粗砂・中砂
11　淡灰緑色微砂・シルト
12　灰橙色微礫・粗砂
13　淡灰褐色微礫・粗砂、土師器片目立つ
14　淡灰褐色微礫・粗砂
15　灰褐色微礫・粗砂
16　暗灰褐色粗砂・中砂
17　灰褐色粗砂・微礫、土師器小片
18　灰茶褐色粗砂・微礫
19　暗灰褐色粗砂・微礫
20　灰褐色粗砂微礫
21　灰褐色粗砂・微礫
22　灰茶褐色粗砂・微礫、土師器・瓦含む
23　茶褐色粗砂・微礫
24　灰茶褐色粗砂・微礫
25　灰橙色微礫・粗砂
26　灰青色シルト・微砂
27　灰褐色細砂・中砂
28　灰黄色微礫とシルト・微砂の互層
29　暗灰褐色粘質粗砂・微礫
30　28層の埋めもどし
31　淡灰褐色粗砂・微礫
32　淡灰褐色粗砂・微礫
33　淡灰褐色粗砂・微礫
34　灰橙色粗砂・中砂・微礫
35　淡灰褐色粗砂・微礫(造成土)
36　褐灰色粗砂・微礫
37　灰橙色粗砂・微礫
38　灰白色シルト

第67図　Ｔ19平面・東壁実測図

東辺は、階段付属部分の延石・地覆石がそれぞれ3石、階段延石が5石地覆石が2石遺存しており、南側に登り葛石が転落していた。階段南辺の延石中央西半には、地覆石を受けるわずかな段がつけられ、また、階段東辺北端の地覆石には登り葛石先端が当たる受けを作っている。

凝灰岩製壇上積基壇規模は延石外面で11.2m地覆石外面で10.8mである。遺存状態のよい東階段では地覆石間1.75m、地覆石から階段地覆石前面の出が1.3mであり、東塔東階段とほぼ同規模で段数も同じとみてよい。ただ西塔の方が基壇石材の厚さが15cmと厚いため、復原される地覆石から葛石上面までの高さが90cmと高い。なお、基壇の主軸は国土座標からおおむね10°西にふっている。

版築

版築盛り土は白色・黄色・黒色の3種の土を用いて、1～20cmの厚さで積み上げている。わずかな範囲で観察した限りでは、基壇中央が高く、東西にやや傾いている。地下水の影響もあるかと思われるが、堅くて鍬で掘り割るのにも苦労した金堂の版築と異なり、西塔の版築はスコップで容易に掘ることができた。盛り土内には20～50cmほどの礫が埋め込まれている。特に、基壇中央部では規則性はないが、多く用いられている。塔心礎の加重を支えるためより多くの礫を埋めておいたものと見られる。なお、盛り土中から銅製品(M2)が出土している。

外周列石（第59・61・63図）

凝灰岩壇上積基壇を取り囲む自然石を用いた外周列石は、1辺約16mで、北辺では1石であるが、南辺では他辺より大きな石を用いて2段以上に積んでいる。賞田廃寺背後の山で採取可能な花崗岩を主体としている。外周列石南辺で見ると、列石背後(内側)に凝灰岩の砕片が埋められているので、工程上は壇上積基壇より後になるが、同時に凝灰岩の加工・整形が進行していたと見られる。

南辺中央には石段が付属する。外幅3m、出が1.7m、高さ1.7mである。1段の出は40cmであるが、3段目は出が80cmと広く列石上段まで1m近く高さがあることから、後補により4段としている。

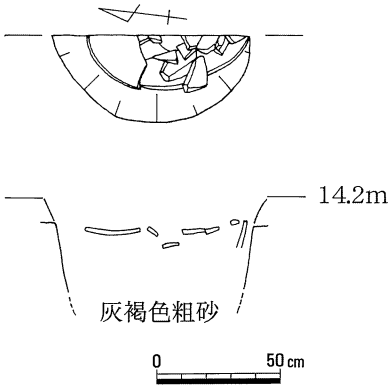
石列の前面には幅1.5mの犬走りがあり、7石しか検出していないが、犬走り前面にも石がおかれていた。その南に3石並んでいるのは参道の敷石と思われる。

地形遺構

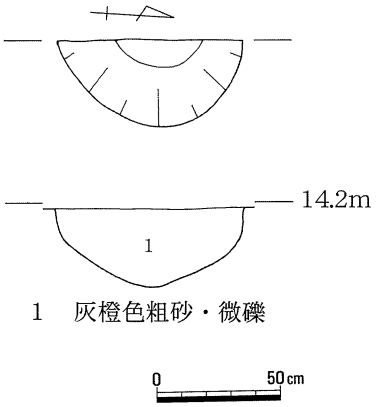
第1次調査で西塔(西門、当時)外周列石の北側に、築地基礎地形部を検出している。しかし、西門基壇が塔基壇と評価されるにいたって、築地を再検証する必要がでてきた。門ならばともかく、塔基壇に築地が接続する例は見られないからであり、もしそうであるならば極めて特異な建物配置形態をとることとなる。そこで、改めて幅の狭いトレンチをあけてみたところ、西に傾斜する盛り土の単位は確認できるが、それが明確に東に落ちる部分がなく、造成盛り土の単位を見誤ったものと思われた。したがって、この部分には築地は存在しないものと判断される。なお、この深掘り部分で、TK43の須恵器杯などとともに、縄目叩きのある瓦片が出土している。

瓦溜

基壇周囲には膨大な量の瓦溜が形成されている。この中で最も多いのが賞田廃寺第3様式の瓦で、後に述べるように軒瓦の笵傷などの比較から、両塔の創建順序は東塔が先で、西塔が後であると判明した。他に白磁や13世紀の早島式土器碗も出土するので、瓦溜は東塔と同じく基壇が破壊されたときの再堆積と考えられる。北瓦溜から、東塔基壇石材とも西塔基壇石材とも異なる規格で作られた地覆石・羽目石が出土している。また、東瓦溜からは風招(M3)が出土している。



第68図　ＳＫ90平・断面図



第69図　ＳＫ93平・断面図

礎石・礎石抜き取り穴

基壇上面では礎石１個と15個の礎石抜き取り穴を検出した。礎石は花崗岩製で、径約50㎝高さ３㎝の柱座を造り、中心に直径12㎝のほぞ穴がある。礎石抜き取り穴の中には、グリ石が残っているものも２・３基ある。基壇南辺は削平を受けているため南側では礎石・抜き取り穴は検出できなかった。礎石が抜き取られてのは近世以降と考えられ、かつては賞田廃寺周辺の用水路の護岸などに転用されていたとの伝承がある。

建物

基壇上に遺存する礎石と抜き取り穴により、建物の規模は南北５間、東西４間に復原できる。柱間は心心で約2.4ｍの等間であると考えられる。建物主軸は国土座標軸から10°西にふっている。先述の上層瓦溜から出土する瓦の大半は、後述する賞田廃寺第２様式の瓦である。破片も大きく、また接合率も中層・下層に比べ格段に高いので、金堂焼失時には白鳳瓦が屋根に葺かれており、その建物もまた創建時のものであったと思われる。

基壇外装

先述のように金堂創建時の基壇外装は遺存していない。おそらく13世紀に基壇外周が掘り下げられた際に除去されたものと見られる。したがって、当時どのような基壇外装が用いられたかは定かでないが、一般的な瓦積基壇であったのではなかろうか。現状で残っている基壇外装は、自然石を１石のみ並べたものである。ただ、Ｔ18西端では大きな炉壁が１つ使われている。上層瓦溜が直接堆積しているので、基壇外装石は段積みされていなかったと見られる。

Ｔ19（第67図）

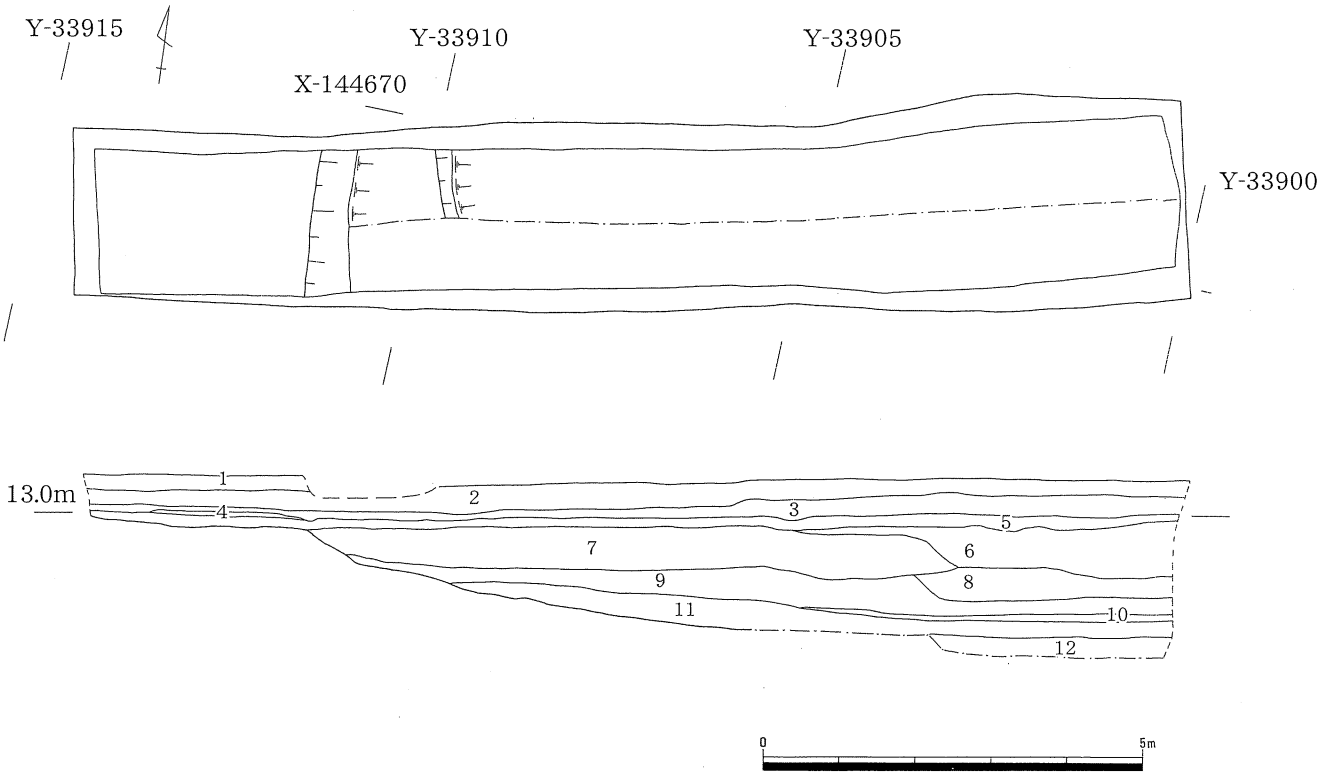
市道西側で、北回廊・両塔間想定建物の有無などを追求するために設定した、南北方向のトレンチである。トレンチ北端付近では、表土から70～80㎝まで削平を受けていて、地山面で中世の柱穴や土坑が検出された。想定建物が期待されるトレンチ中央付近では、近世以降の掘削が及んでいた。このため、北回廊・両塔間想定建物双方について、存在の手がかりを得ることができなかった。

ＳＫ90（第68図）

平面形は東半部がトレンチ壁面にかかっているため不明であるが、径0.8ｍの円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは0.5ｍ以上である。備前焼の甕が中央に据えられており、内部に割れた上半部の破片が落ち込んでいた。検出部から下半は備前焼が割れておらず、壁面からの抜き取りは行わず、埋め戻した。備前焼の時期は、間壁編年のⅣＢ期である。

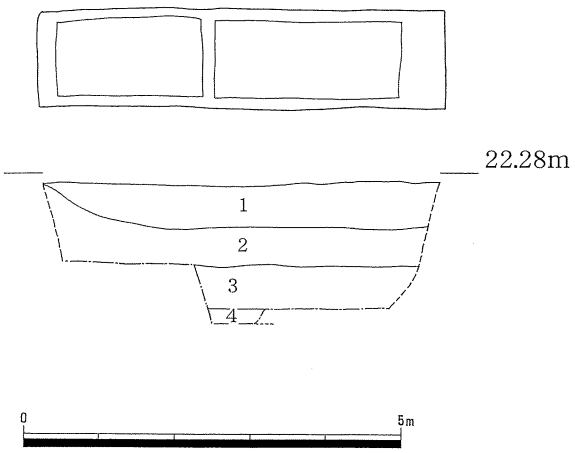
ＳＫ93（第69図）

トレンチ北端で検出している。平面形は西半部がトレンチ外のため不明であるが、直径0.75ｍの円



1　表土(旧耕土)
2　表土
3　暗黄褐色砂質土
4　暗赤褐色粗砂
5　淡灰暗褐色砂質土
6　淡黄灰色砂質土、黄褐色砂質土ブロック状に含む
7　暗褐色砂質土　5㎝位の円礫と土器片含む
8　青灰色砂質粘土、土器片含む
9　淡灰暗褐色砂質土
10　青灰色粘土
11　淡青灰色砂質土
12　黒褐色砂質土

第70図　T20平面・北壁実測図



1　暗褐色砂質土（表土）小礫含む
2　灰褐色砂礫層
3　青灰色粗砂粘土
4　黒褐色土（造成土層）

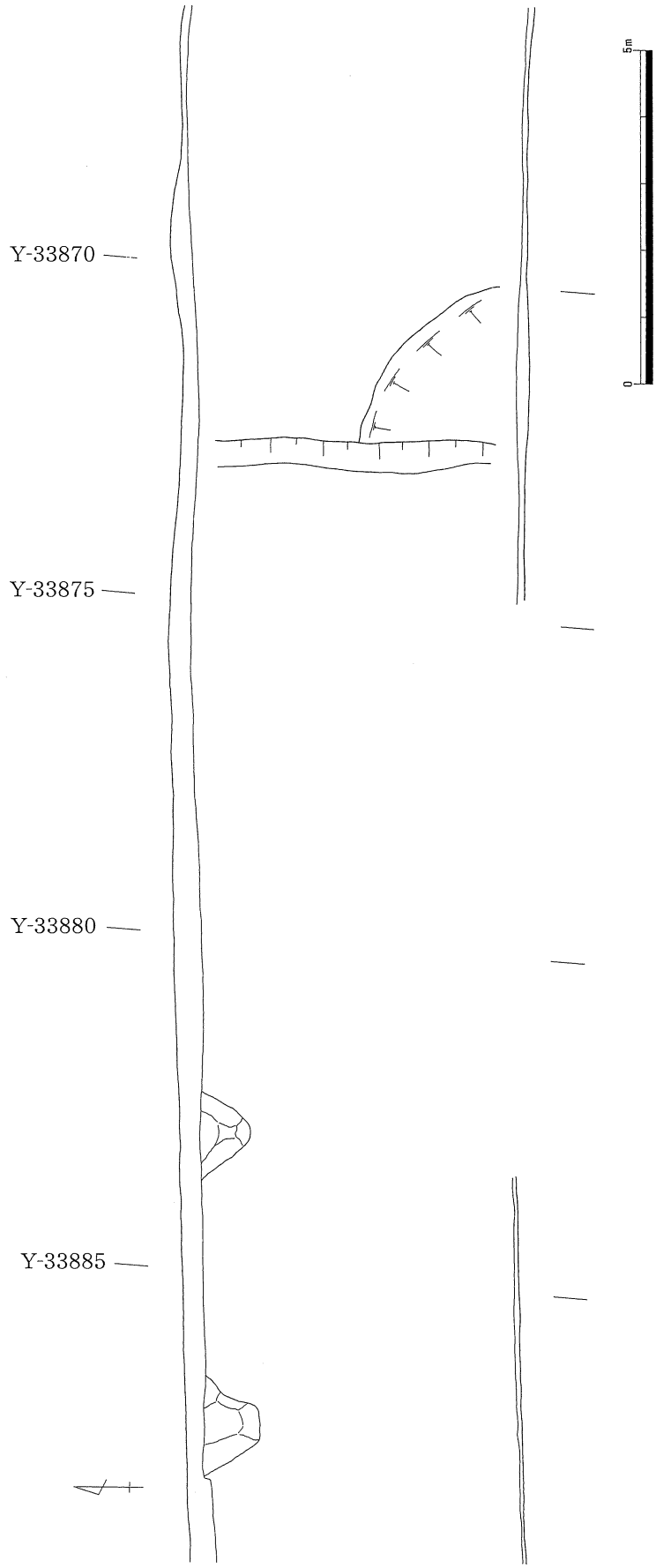
第71図　T21平面・東壁実測図

形を呈すると考えられる。検出面からの深さは0.3ｍで、トレンチ西壁で見ると60㎝ある。断面はU字形を呈する。埋土は灰橙色の粗砂・微礫である。

T20（第70図）

西塔と西の尾根の間での遺構の有無を確認するために設置した東西方向のトレンチである。西門・西築地(第１次調査時)と西の尾根の間を、工房など何らかの寺院関連施設を設けて利用していたかどうかを明らかにするのが主目的であった。

調査の結果、谷状地形の中央部に位置しており、近現代の水田層の下は1.5ｍ以上(湧水による崩落のため以下は調査不能であった）灰褐色土を主体とした総じて粒子の粗い砂質土の厚い堆積がみられて、寺院廃絶以後は流路となったものと考えられる。トレンチ全体でみても遺物の出土量は多くない。



第72図　T22平面実測図

T21（第71図）

金堂北背後の丘陵平坦部に位置する。中央の尾根筋の東側には広い範囲で平坦面が広がっている。このため、いまだ所在の明らかとなっていない僧房・食堂等の諸施設が、金堂背後に当たるこの平坦部に所在する可能性も考えられる。このため、史跡指定域外であり民地ではあるが、地権者の承諾を得て寺院関連施設の有無追求のため設定した。

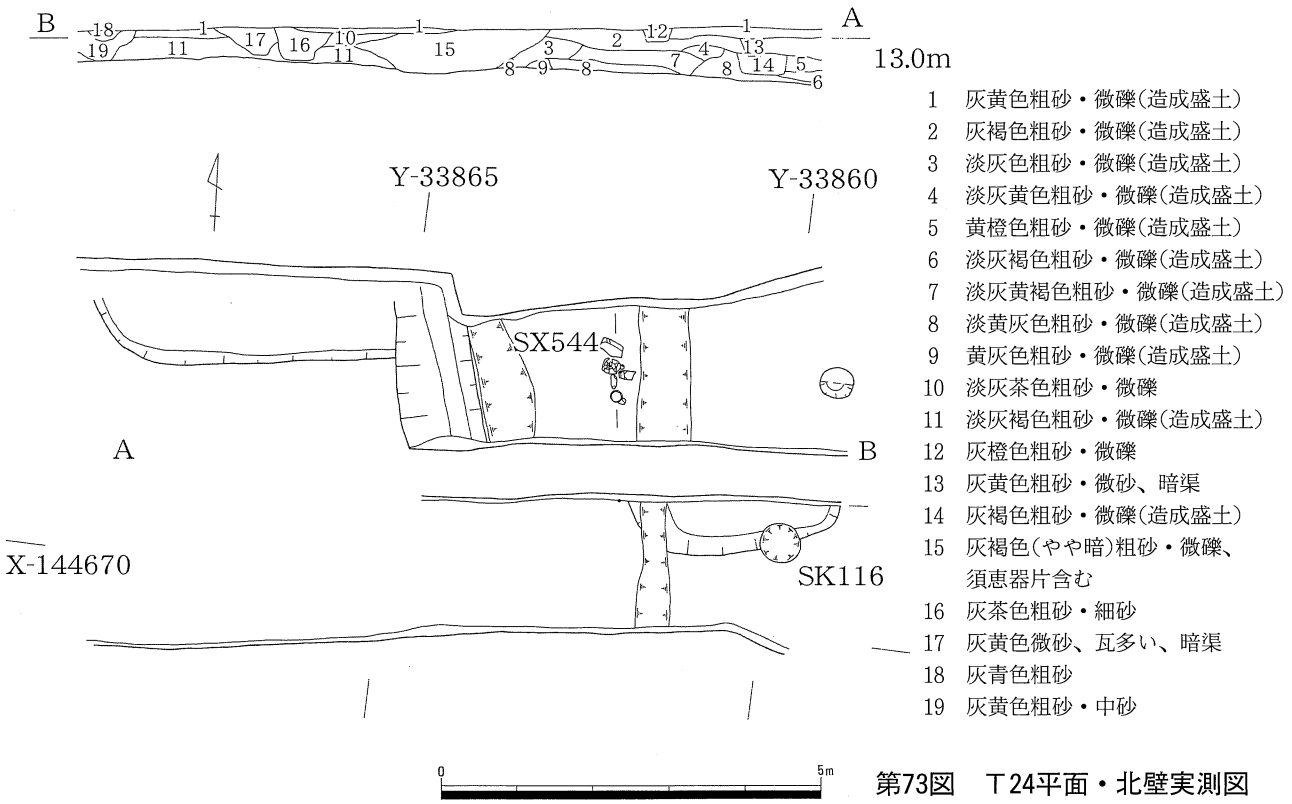
現地表から1.7ｍ程度で黒褐色の造成土層が確認され、遺構は未検出であるが寺院関連施設がさらに北側に広がる可能性も考えられる。

暗褐色砂質土の表土の下には灰褐色の砂礫層があって、その下は青灰色の粗砂・粘土で不透水層になっている。このため灰褐色砂礫層からの湧水が著しく、壁面崩壊のため簡略的に記録を取ることとして、最下部で黒褐色の造成層が存在することを確認してすぐに埋め戻しを行った。出土物は見られなかった。

T22（第72図）

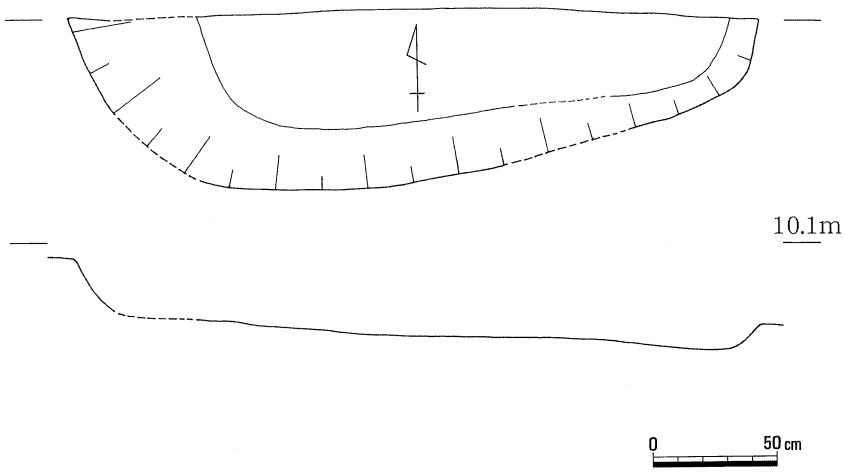
西塔の北に位置する東西方向のトレンチである。第１次調査時の西築地や西回廊を追求のため設定したが、築地はこの箇所に存在しないことが明らかとなり、回廊については手がかりが得られなかった。

西塔東の段（ＳＸ543）の延長は段差が40cm（西塔東では80cm）と低くなっているものの確認することができた。表土中から円形の柱座に地覆座が１方につく礎石（Ｓ14）が出土した。

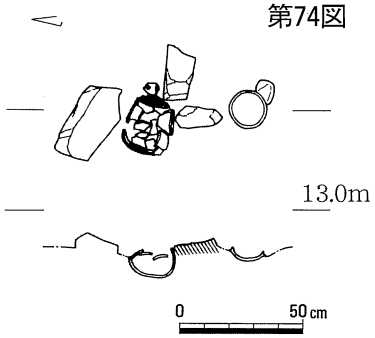


1 灰黄色粗砂・微礫(造成盛土)
2 灰褐色粗砂・微礫(造成盛土)
3 淡灰色粗砂・微礫(造成盛土)
4 淡灰黄色粗砂・微礫(造成盛土)
5 黄橙色粗砂・微礫(造成盛土)
6 淡灰褐色粗砂・微礫(造成盛土)
7 淡灰黄褐色粗砂・微礫(造成盛土)
8 淡黄灰色粗砂・微礫(造成盛土)
9 黄灰色粗砂・微礫(造成盛土)
10 淡灰茶色粗砂・微礫
11 淡灰褐色粗砂・微礫(造成盛土)
12 灰橙色粗砂・微礫
13 灰黄色粗砂・微砂、暗渠
14 灰褐色粗砂・微礫(造成盛土)
15 灰褐色(やや暗)粗砂・微礫、須恵器片含む
16 灰茶色粗砂・細砂
17 灰黄色微砂、瓦多い、暗渠
18 灰青色粗砂
19 灰黄色粗砂・中砂

第73図　Ｔ24平面・北壁実測図



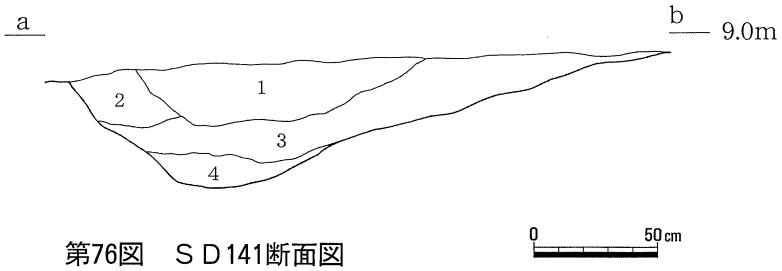
第74図　ＳＫ116平・断面図



第75図　ＳＸ544平・断面図

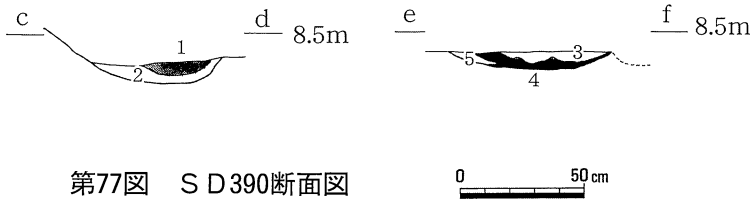
Ｔ24（第73図）

西塔東方から中央の市道方向に位置する東西方向のトレンチである。第１次調査では、上面を耕作のため削平を受け両肩を暗渠で破壊されているものの幅6.1ｍの回廊が考えられた。しかし、暗渠に一部破壊された溝も、暗渠に先行する近世の所産であり、回廊遺構とは無関係と判断された。



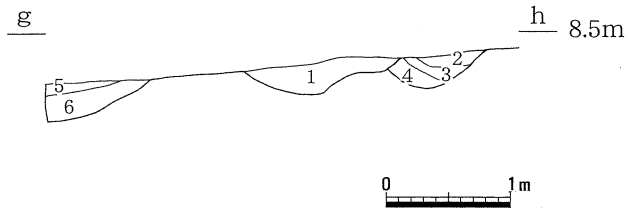
1　灰褐色粗砂・細砂
2　灰褐色粗砂・細砂
3　暗褐灰色粗砂・細砂
4　暗灰黄色粗砂・細砂

第76図　ＳＤ141断面図



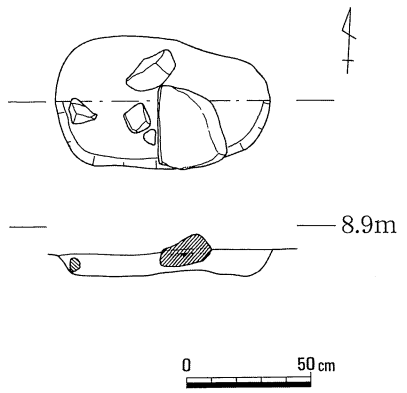
1　焼土
2　淡灰褐色細砂
3　淡黄灰褐色粗砂
4　焼土
5　暗灰褐色細砂

第77図　ＳＤ390断面図



1　暗灰色細砂
2　暗灰褐色細砂
3　暗黄褐色細砂
4　暗灰褐色粗砂
5　淡黄黒灰色微砂
6　黒灰色微砂

第78図　ＳＤ393・394・395断面図



第79図　ＳＫ342平・断面図

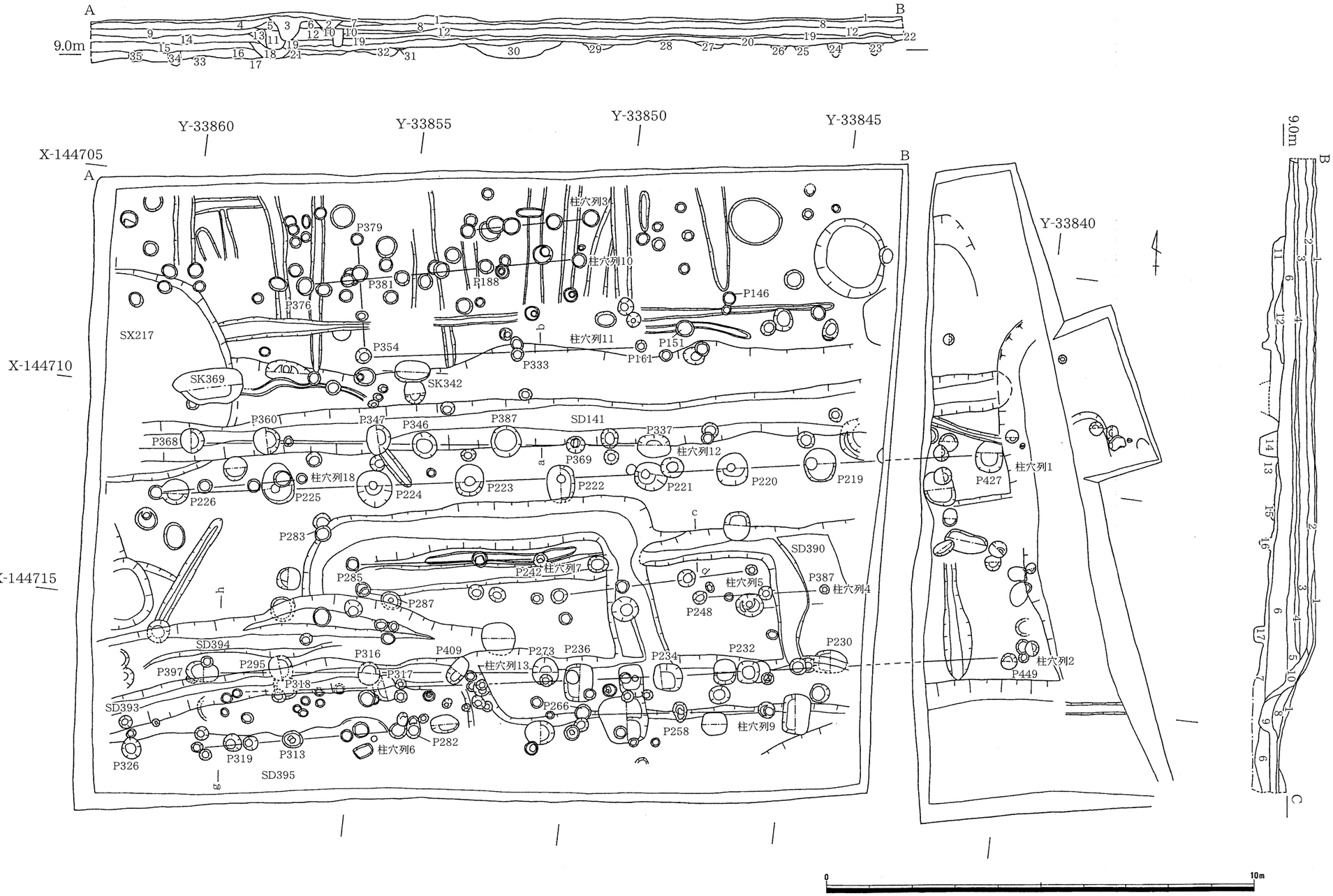
Ｔ24中央を東西に裁ち割ったところ、近世の耕作のため削平を受けているものの、厚いところで60㎝、薄いところでも25㎝ほどの盛り土層の存在を確認した。この盛り土層は、金堂や西塔に見られる版築層とは異なり、幅も厚さも大きな単位で行われていることから、造成盛り土と考えられる。トレンチ西端で西塔の東に位置する段(ＳＸ543)が、建物基壇の西端部というわけではなく、南北だけでなく、東西にも起伏のある寺地の中で、金堂・塔など主要建物ごとにある程度の範囲で平坦面を確保しようとした現れであると考えられる。

ＳＫ116（第74図）

平面形は長径2.8m、短径1.3m、検出面からの深さ20㎝ほどの楕円形の土坑である。遺物が出土していないので定かではない点もあるが、中世以降の所産と思われる。

ＳＸ544（第75図）

堅くしまった、やや暗い灰褐色の粗砂・微礫中(土層図の15層)で礫とともにほぼ完形の須恵器横瓶・杯身(ＴＫ43型式)が出土した。明瞭な掘り込みは確認されず、この層の上層におかれてものと見られる。この15層は土層断面では、造成土を掘り込むように観察できる。平面では不整形な土坑



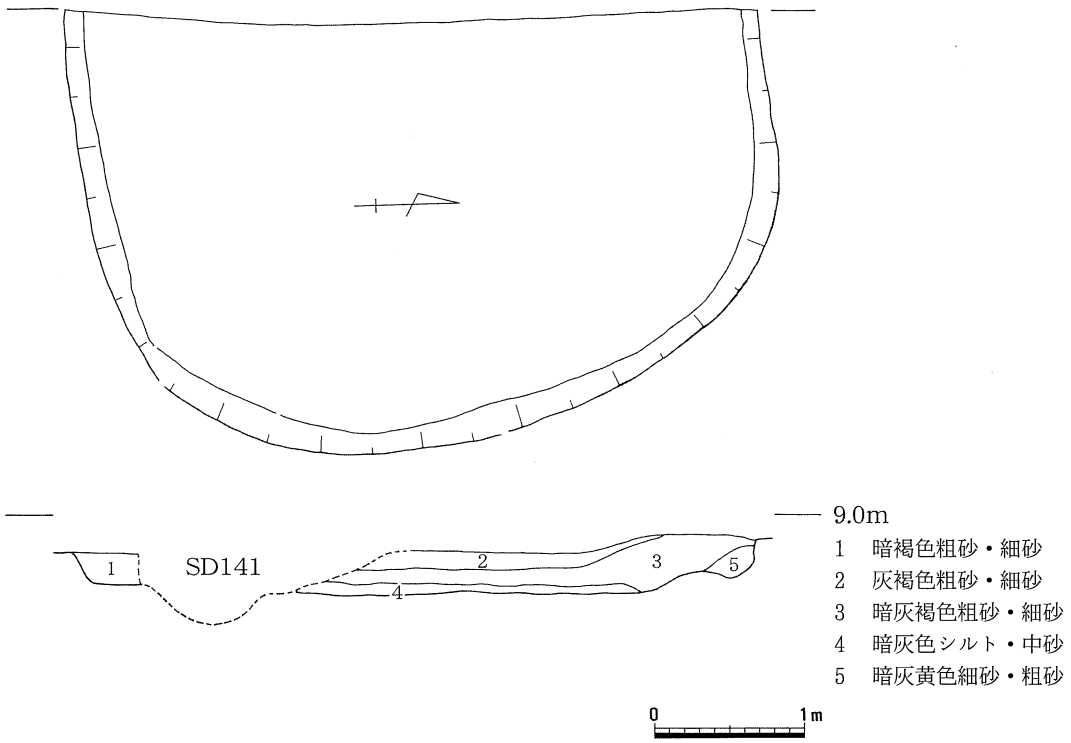
＜T26　北壁＞

1　表土、腐植土
2　灰色砂質粗砂
3　灰色砂質粗砂
4　灰青色細砂・中砂
5　淡灰橙色細砂・中砂
6　淡灰橙色粗砂・中砂
7　灰色粗砂
8　灰青色細砂・中砂
9　灰橙色細砂・中砂、Fe・Mn含む
10　灰橙色細砂・微砂
11　灰色粗砂
12　灰橙褐色細砂
13　褐灰色粗砂
14　灰褐色粗砂・細砂・Mn含む
15　灰褐色粗砂・細砂
16　褐灰色粗砂・細砂
17　明黄色細砂・粗砂
18　灰色粗砂
19　淡灰褐色細砂・粗砂
20　褐灰色細砂・粗砂
21　暗灰褐色細砂・粗砂
22　灰色粗砂
23　暗灰黄色粗砂・細砂
24　暗灰黄色細砂・粗砂
25　灰黄色細砂
26　灰黄色細砂・中砂
27　暗灰黄色粗砂・細砂
28　灰褐色粗砂・細砂
29　暗灰黄色細砂・細砂
30　暗灰褐色粗砂・細砂、
　5～20㎝の礫・瓦片含む
31　灰褐色粗砂・細砂
32　灰黄色粗砂・細砂
33　暗灰褐色粗砂・細砂
34　暗灰褐色粗砂・細砂、
　瓦片・土師器片含む
35　暗灰褐色粗砂・細砂

＜T26　東壁＞

1　旧表土、腐植土
2　灰青色微砂・細砂、旧水田
3　淡灰褐色細砂・微砂・粗砂
4　淡灰橙色細砂・微砂
5　淡灰褐色中砂・細砂
6　褐灰色細砂・粗砂
7　褐灰色粗砂・細砂
8　暗灰黄色微砂
9　灰青色微砂
10　暗灰黄色微砂・細砂
11　暗褐灰色細砂・粗砂、
　複数の土坑・溝・柱穴埋土
12　灰黄色粗砂
13　明黄色粗砂･細砂
14　褐灰色粗砂・細砂
15　褐灰色粗砂・細砂
16　褐灰色粗砂・細砂
17　褐灰色粗砂・細砂

第80図　T25平面・T26平面・北・東壁実測図



第81図　ＳＸ217平・断面図

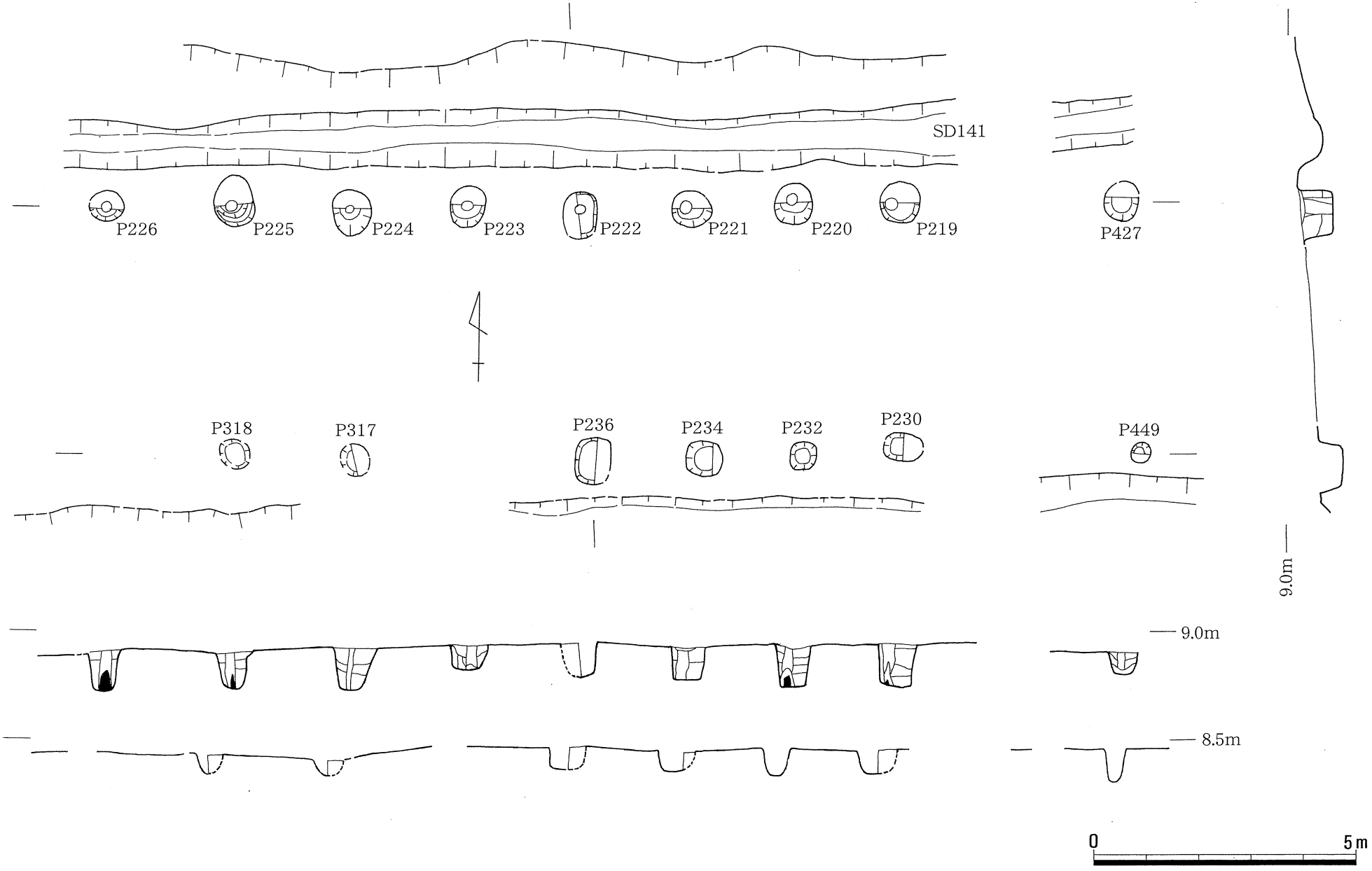
状ないし溝状を呈している。盛り土の１単位である可能性もある。なお、Ｔ24中央の裁ち割り中に出土した完形に近い提瓶もこれと関連する可能性もある。

Ｔ25・Ｔ26（第80図）

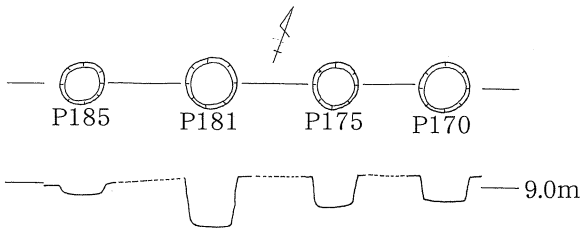
Ｔ25は、南門を想定して調査したＴ１～３で南門が検出されなかったことから、市道の西に所在する可能性を考え、当初幅２ｍで設定した。地山直上まで褐灰色の粗砂・細砂層が堆積し、部分的には瓦や土器片がまとまって出土する箇所もあった。下部でやや土色が濃くなるものの、上層と同じく中世の包含層と認識していた。しかし、壁面精査のため西壁を整えたところ、トレンチ中央やや北寄りで地山が南に高くなる箇所があることが判明した。これにより、検出部分は基壇等の高まりの東端を引っかけていて、トレンチは溝と重なるようになっていたと判断された。これにより、Ｔ26を広く設定し、Ｔ25を拡張した。

Ｔ26は、第１次調査で幅2.4ｍで両側に溝を持つ築地基壇部と、その前面の３段の犬走りを検出したＳⅡ－１トレンチと一部重なっている。今回、面的に広げて調査した結果、その時期を明らかにすることができ、また、築地南溝および前面の犬走りについては評価が改められた。

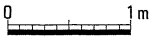
Ｔ25・26両トレンチで検出した中世の遺構は、柱穴・土坑・溝・段状遺構などがある。北端部分では、褐灰色層（Ｔ26北壁の20層）でも検出された遺構もあるが、大半は地山上面で検出している。柱穴列３、柱穴列４、柱穴列５、柱穴列６、柱穴列７、柱穴列８、柱穴列９、柱穴列10、柱穴列11がこの時期に該当すると見られる。

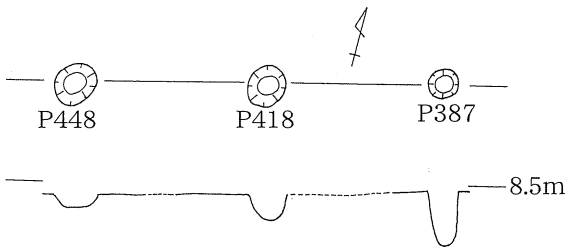


第82図　柱穴列１・２平・断面図

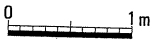


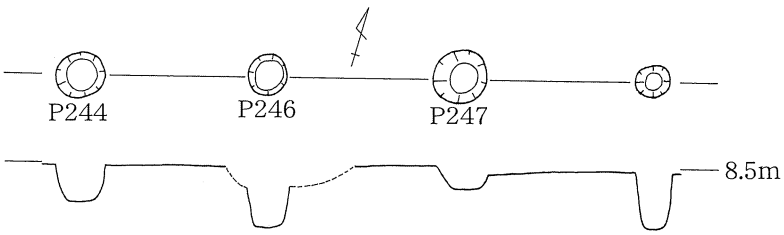
第83図　柱穴列 3 平・断面図



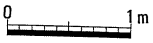


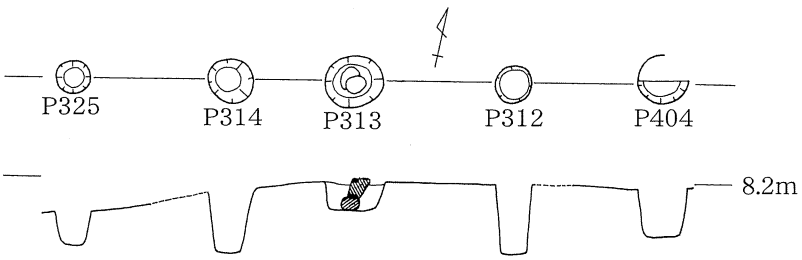
第84図　柱穴列 4 平・断面図



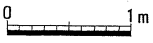


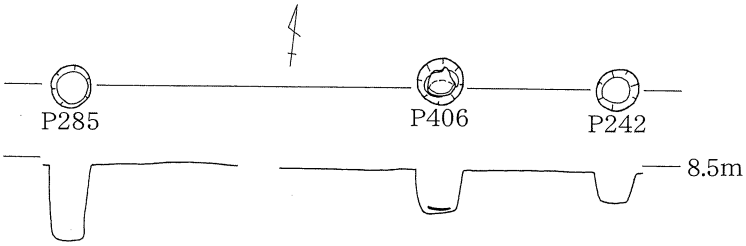
第85図　柱穴列 5 平・断面図



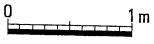


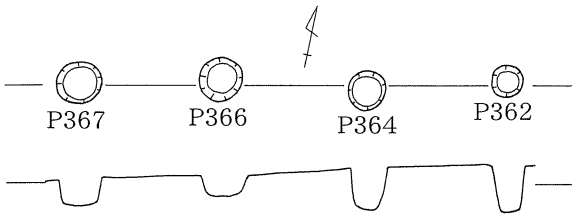
第86図　柱穴列 6 平・断面図



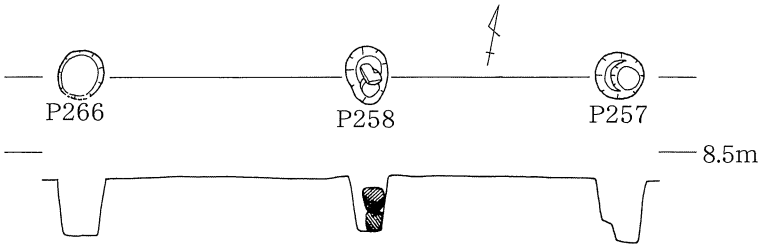


第87図　柱穴列 7 平・断面図

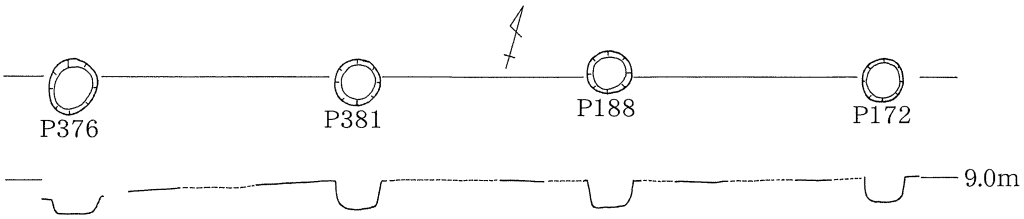




第88図　柱穴列8平・断面図



第89図　柱穴列9平・断面図



第90図　柱穴列10平・断面図

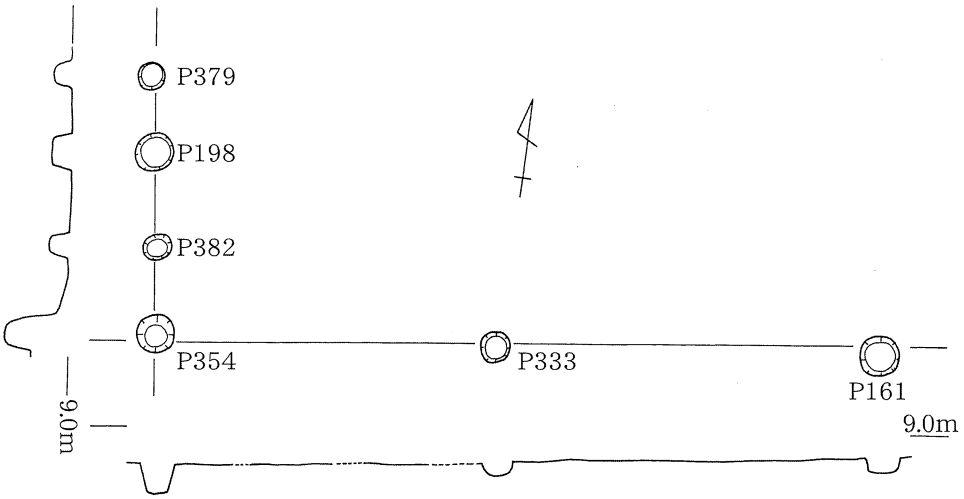
築地南溝・および犬走りとされた遺構については、中世段階(13世紀)で南からの削平によるものであることが明らかとなった。この時期の削平が１度に広域に行われるものではなく、小単位を段階的に繰り返しており、その１単位をとらえたものと見られる。トレンチの位置が東か西にすこしでもずれていたならば、その評価は自ずから異なっていたものと思われる。

平安期の遺構には柱穴・溝がある。ＳＤ141と柱穴列１は約40㎝離れて平行して検出された。ＳＤ141は築地北側溝とされた遺構である。金堂・塔などが配置された主要建物域の南を区画する、掘立柱塀および北面溝と考えられる。ＳＤ141や柱穴列１にほぼ平行する柱穴列も見られるので、この区画施設は何度かにわたって修復されたものと考えられる。

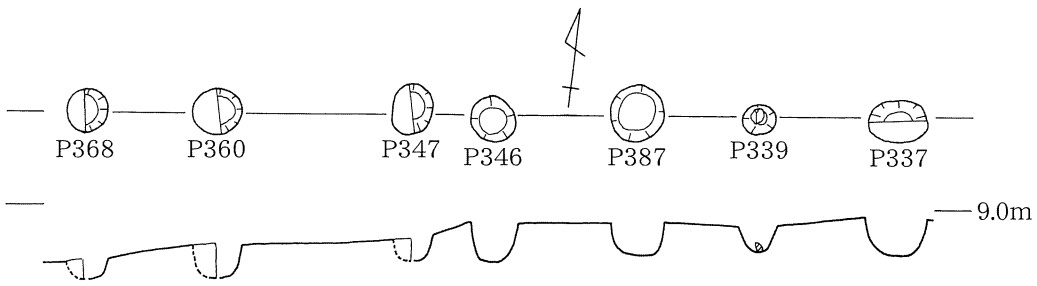
トレンチ南端の暗褐色粗砂層では、湧水の影響もあり遺構埋土との区別が付きにくく、地山面や根石などの検出により柱穴が判明するなど、遺構検出順序の逆転が再々生じた。

出土物は奈良時代～中世の土器・瓦のほか、Ｔ26の淡褐色層からは滑石製石鍋の破片や滑石製円板(Ｓ18)が、Ｔ26のＰ278からは銅鈴(Ｍ３)が出土している。また、Ｔ26のＰ234からは鴟尾(Ｋ327)も出土した。

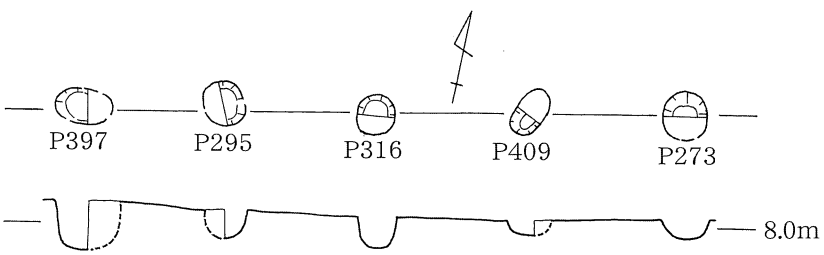
ＳＤ141（第76図）



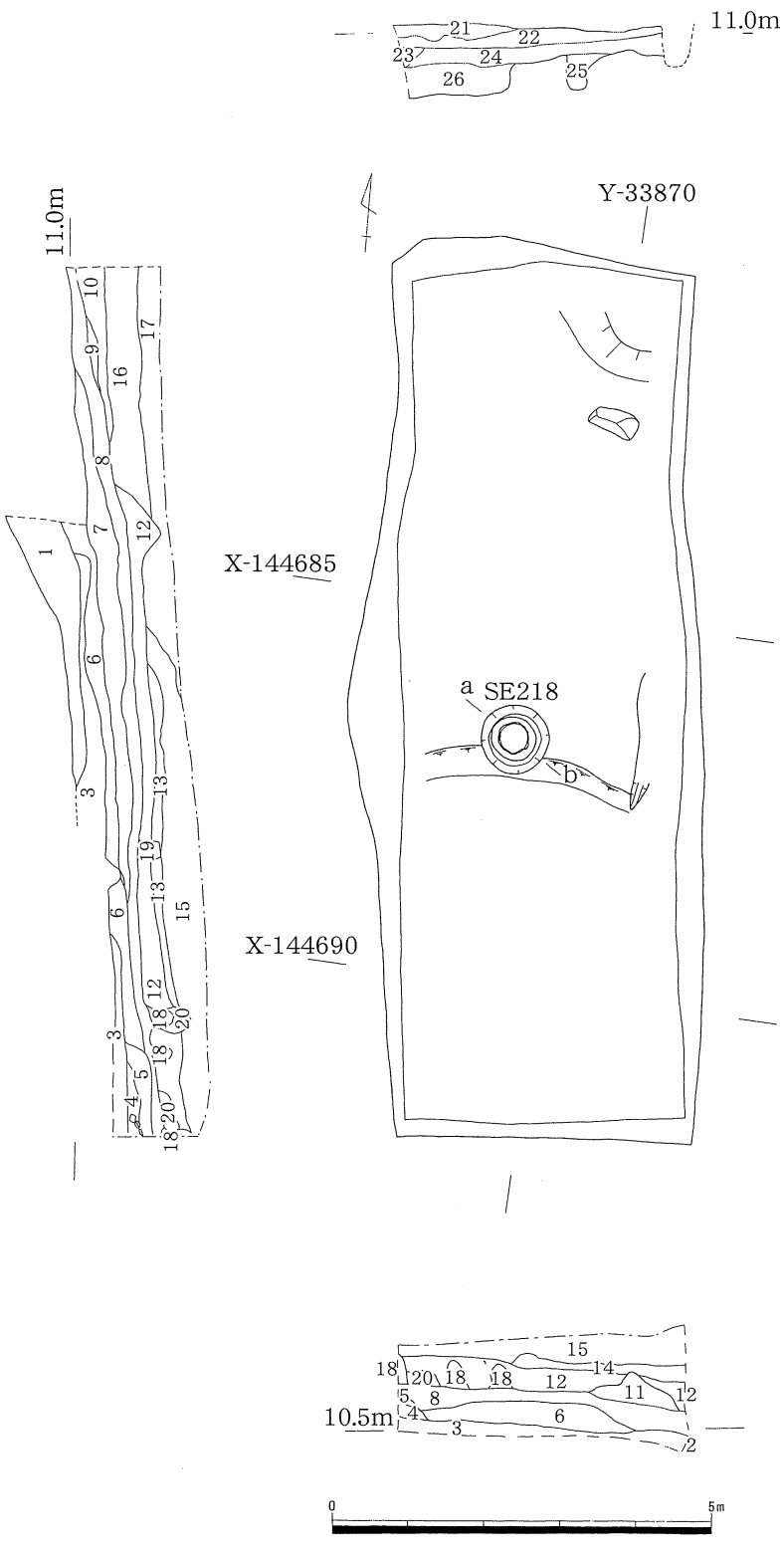
第91図　柱穴列11平・断面図　0　5m



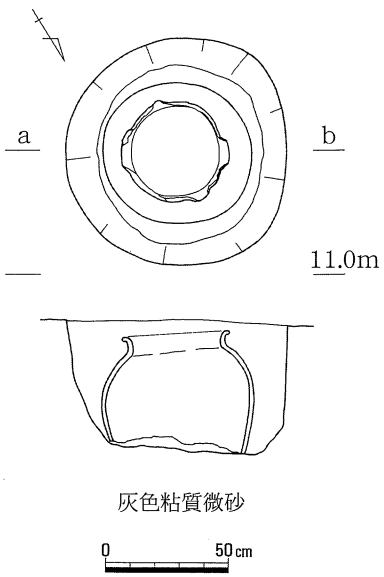
第92図　柱穴列12平・断面図　0　5m



第93図　柱穴列13平・断面図　0　5m

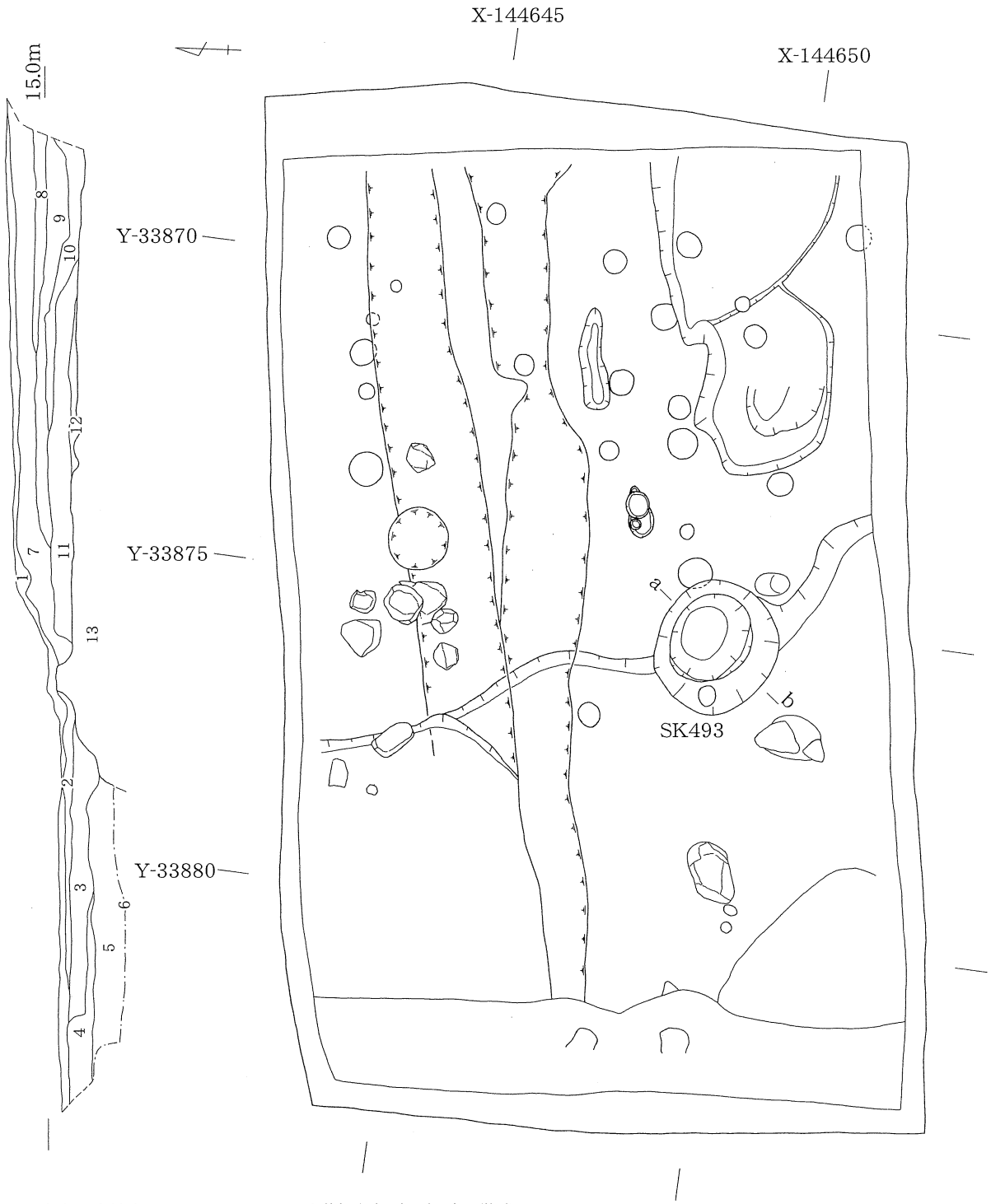


1 黒褐色細砂・シルト
2 暗灰色細砂
3 淡橙褐色細砂
4 淡褐色細砂
5 淡黄灰褐色細砂
6 暗黄褐色砂礫、瓦片等少量含む
7 暗灰褐色細砂
8 暗灰褐色細砂・シルト、瓦多量含む
9 暗灰色細砂
10 暗黄褐色細砂・粗砂
11 淡灰橙褐色細砂
12 暗橙色細砂
13 橙褐色細砂、焼土・酸化鉄含む
14 暗褐色細砂
15 黒灰色微砂
16 淡灰褐色粗砂
17 淡褐色粗砂
18 淡灰色粗砂・シルト
19 淡灰色粗砂・シルト、微量炭含む
20 暗褐色微砂
21 灰黄褐色粗砂・細砂・瓦溜下層土師器片、炭含む
22 淡灰褐色粗砂・細砂
23 淡茶褐色粗砂
24 淡褐灰色粗砂・細砂
25 淡灰褐黄色粗砂・細砂(木の根か？)
26 暗灰黄色粘質粗砂・細砂



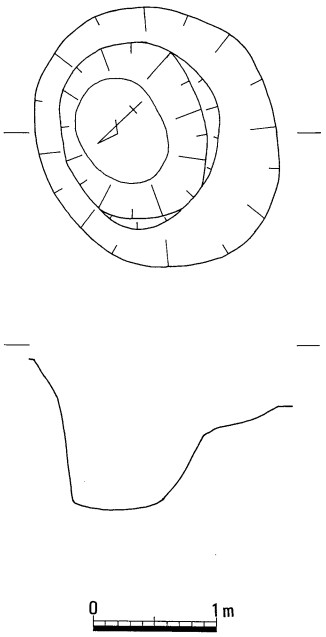
第94図　Ｔ28平面・北・西・南壁実測図

第95図　ＳＥ218平・断面図



1　表土、腐植土
2　灰青色粗砂・細砂
3　灰橙色粗砂・細砂
4　灰橙色粗砂・微礫・細礫
5　灰黄色微礫・細礫・粗砂
6　灰黄色粗砂
7　淡灰黄(青)色粗砂・細砂
8　淡黄褐色粗砂・細砂・微礫
9　黄褐色粗砂・微礫
10　灰黄褐色粗砂・微礫
11　黄褐色粗砂・微礫
12　淡灰橙色粗砂・微礫
13　地山、花崗岩バイラン土及び露岩
　　岩脈数カ所あり

第96図　T29平面・北壁実測図



第97図　ＳＫ493平・断面図

Ｔ25・26の中央部で検出された、主要建物域の南を区画する施設に伴う東西方向の溝である。検出面での幅2.2ｍ深さ50㎝である。底部断面はやや丸く、南側の立ち上がりは急であるが、北側では溝の最深部から40㎝ほどが急に立ち上がり、これより上は緩やかに開いて立ち上がる。遺物は緩やかに立ち上がる部分を上層、これより下を下層として取り上げている。Ｔ25では下層部分のみ検出している。埋土は４層に分層できるが、上層は灰褐色ないし暗褐灰色の粗砂・細砂で、下層は暗灰黄色の粗砂・細砂である。時期は、奈良時代の瓦も多数出土しているが、土師器の特徴から９世紀後半から10世紀と見られる。

ＳＸ217（第81図）

Ｔ26中央の西端で検出した、ＳＤ141に先行する直径4.9ｍの平面円形ないし隅丸方形の大型土坑である。西半分はトレンチ外で、深さは検出面から40㎝である。埋土は灰褐色ないし暗灰褐色の粗砂・細砂を主体としていて、底部では粘質が増し、暗灰色のシルト・中砂である。

柱穴列１・２（第82図）

柱穴列１はＳＤ141に平行して並んでいる。ＳＤ141との間隔は検出面の肩どうしで30～40㎝、溝最深部と柱根で1.2～1.4ｍである。Ｐ219～226・Ｐ427の９基を検出した。柱間は柱痕跡ではかって1.8ｍ～2.3ｍで、西に行くほどわずかずつ広がっている。平面形は長径60～100㎝の不整形な円形ないし方形で、深さは検出面から60～80㎝である。Ｐ220・225・226では柱根が残っていて、Ｐ226にはコウヤマキ（京都大学大学院生　藤井裕之氏の教示による）が用いられている。時期はいずれの柱穴からも小片しか出土していないが、９世紀後半から10世紀と見られる。柱穴列１は国土座標東西軸から北に約10°ふっている。

柱穴列２は、柱穴列１のほぼ南に心心距離4.8ｍで、柱穴列１に平行して並んでいる。Ｐ230・232・234・236・317・318・449の７基である。平面形は長径40～70㎝の円形ないし楕円形で、柱穴列１に比べ一回り小さい。深さは検出面から30～50㎝で、平面の標高は８ｍ前後で柱穴列１とほぼ等しい。柱間は1.8～2.3ｍとこれも柱穴列１に近似する。

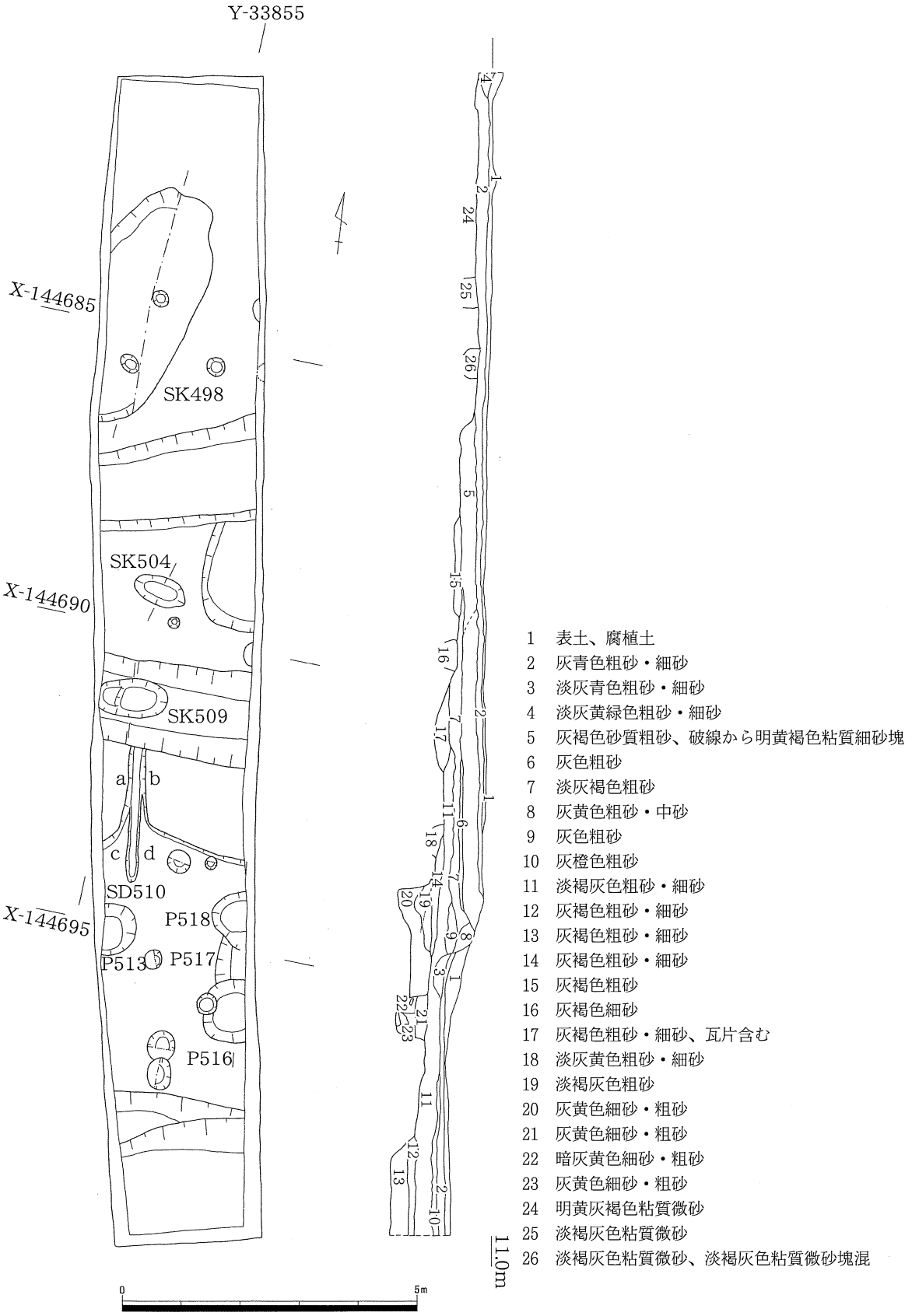
この２つの柱穴列を同時に組み合わせる考えもあるが、心心距離で4.8ｍの掘立柱建物は考えがたい。柱穴列２の柱穴平面規模が柱穴列１よりもやや小さいことや、柱穴列１に柱根が遺存する柱穴が存在することをあわせると、柱穴列２は柱穴列１から距離をおいて、修復した結果と考えられる。

柱穴列３（第83図）

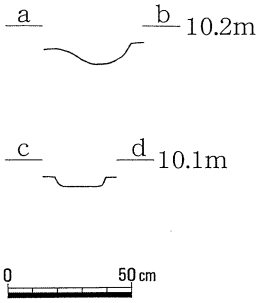
Ｔ26中央、北壁よりで東西方向に検出した。Ｐ170・175・181・185の４基で、柱間は0.8～１ｍである。直径は30～40㎝で、埋土は灰褐色の粗砂である。時期は中世である。

柱穴列４（第84図）

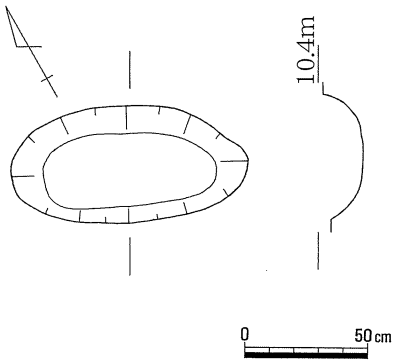
Ｔ26東端の南よりで検出した東西方向の柱穴列である。段状遺構の南1.5ｍに位置する。Ｐ387・418・248の３基で、柱穴直径は22～35㎝である。埋土は褐灰色粗砂で、柱間は1.4～1.5ｍである。時期は中世と見られる。



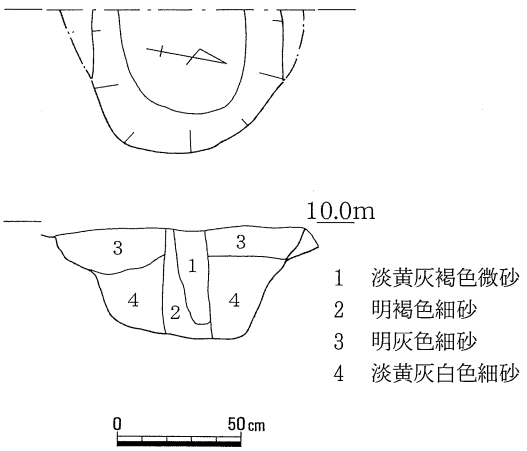
第98図　T30平面・東壁実測図



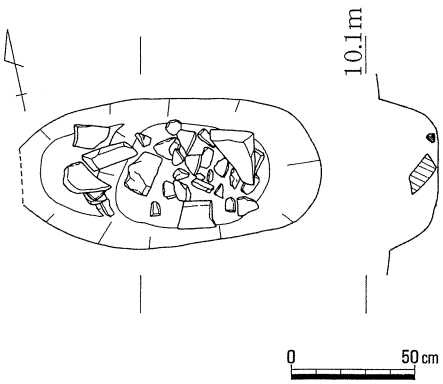
第99図　ＳＤ510断面図



第100図　ＳＫ504平・断面図



第101図　Ｐ513平・断面図



第102図　ＳＫ509平・断面図

柱穴列５（第85図）

柱穴列４の北東部で検出した東西方向の柱穴列である。鉤状に残った段状遺構からは南に1.2ｍ離れる。Ｐ388・247・246・244の４基で、柱間は1.5ｍである。柱穴直径は30～40㎝で、埋土は褐灰色粗砂である。時期は中世と見られる。

柱穴列６（第86図）

Ｔ26南西端部で検出した。Ｐ404・312・313・314・325の５基で、Ｐ313の中央には根石が２つ重ねられていた。柱穴直径は30～50㎝、柱間は１～1.3ｍで、埋土は黒灰色ないし暗灰色の細砂である。時期は中世と見られる。

柱穴列７（第87図）

Ｔ26中央やや南よりで、コの字状の段状遺構の南1.3ｍに位置する。Ｐ242・406・285の３基からなる。柱穴直径は38㎝で、柱間はＰ242・406で1.4ｍ、Ｐ406・285で３ｍである。埋土は暗灰褐色の細砂で、Ｐ406には軒丸瓦が根石代わりに使われていた。時期は中世と見られる。

柱穴列８（第88図）

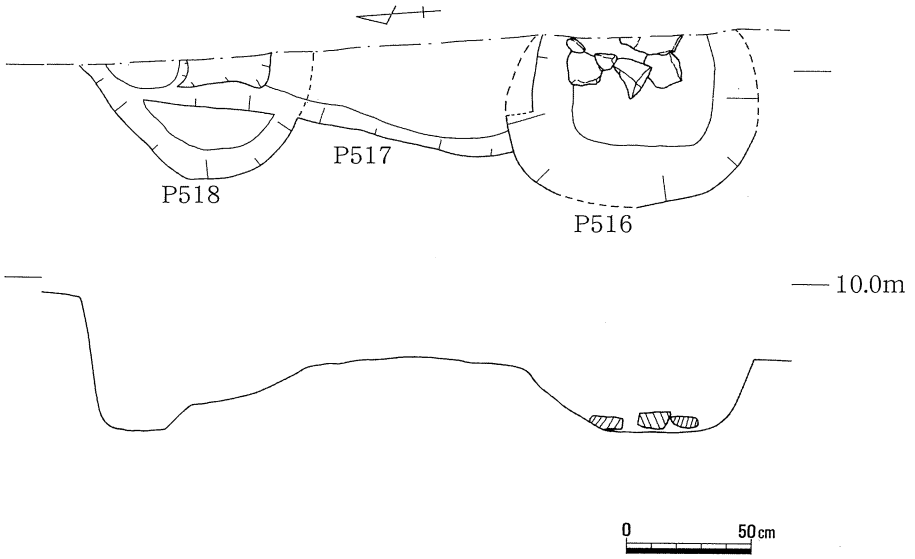
Ｔ26西端中央に位置する。Ｐ362・364・366・367の４基からなり、柱穴直径は22～38㎝である。柱間は１～1.2ｍと狭い。埋土は灰色の粗砂である。Ｐ367はＰ226を切っていて、時期は中世と見られる。

柱穴列９（第89図）

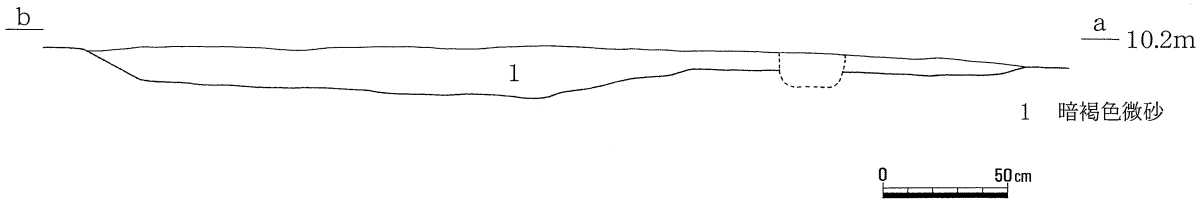
Ｔ26南東端部に位置する。Ｐ257・258・266の３基からなる。Ｐ258には根石が２個重ねておかれていた。Ｐ257では柱部分の沈み込みが見られる。柱穴直径はほぼ40㎝で、柱間は２～2.3ｍとやや広い。埋土は暗褐色の細砂である。時期は中世と見られる。

柱穴列10（第90図）

Ｔ26中央やや東よりで、柱穴列３の南に位置する。Ｐ172・188・381・376の４基からなる。柱穴直径は30～40㎝で、柱間は２～2.4ｍとやや広い。埋土は褐灰色ないし暗灰褐色の粗砂である。時期は中世である。



第103図　P516・517・518平・断面図



第104図　ＳＫ498断面図

柱穴列11（第91図）

Ｔ26中央やや東よりで、柱穴列10の南ＳＤ141の北に位置する。掘立柱建物の西辺と南辺の可能性がある。Ｐ161・333・354・382・198・379の６基から構成される。柱穴直径は20～30㎝で、柱間は、南列で2.5～2.8ｍと広く北列で0.6～0.8ｍとごく狭い。埋土は灰褐色の粗砂を主体としている。時期は中世と見られる。

柱穴列12（第92図）

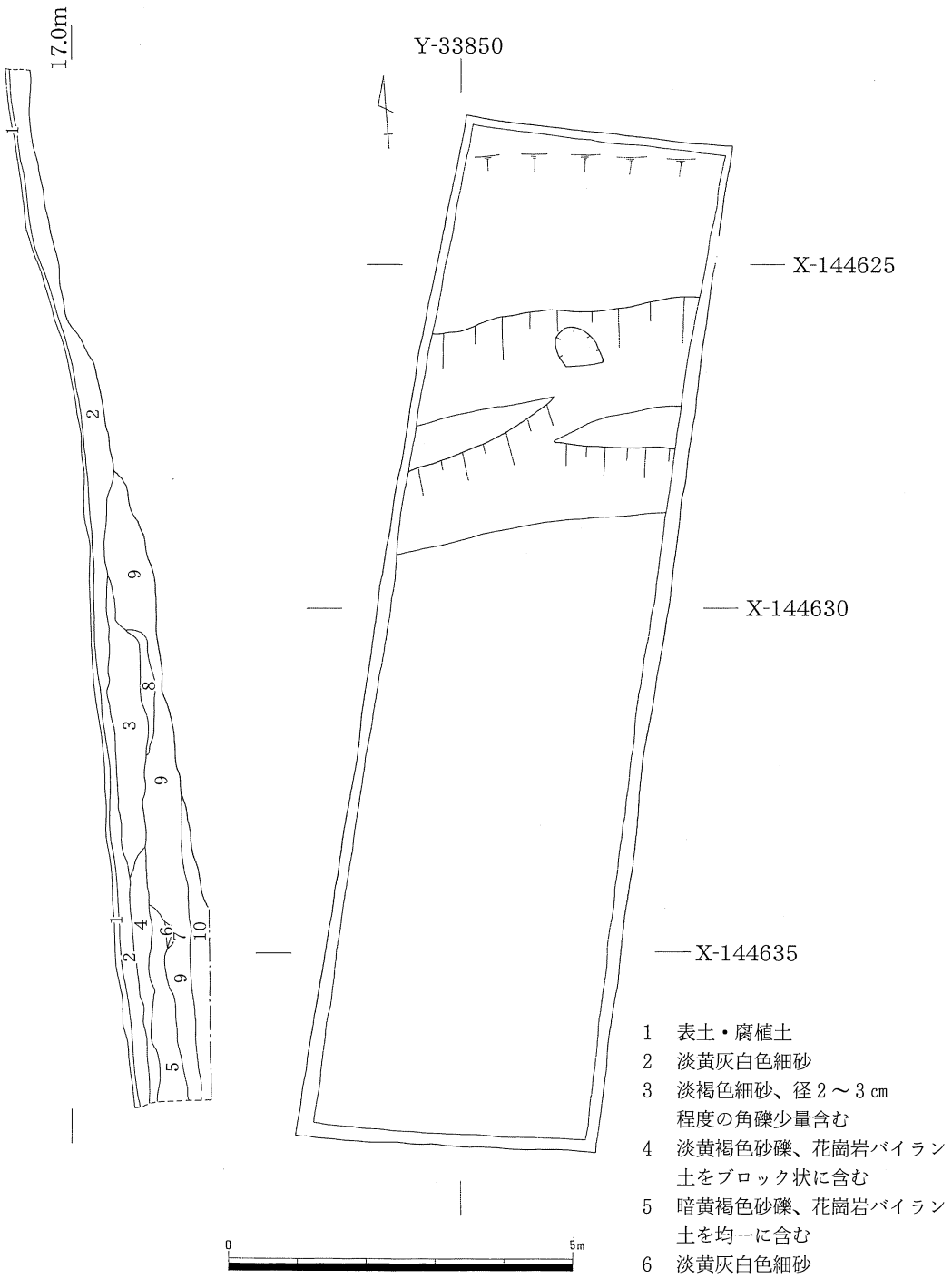
一部ＳＤ141の肩を切って検出した。Ｐ337・339・387・346・347・360・368の７基で構成される。柱穴直径は22～40㎝で柱間も0.4～1.4ｍと不揃いである。柱穴列１の修復と見られる。

柱穴列13（第93図）

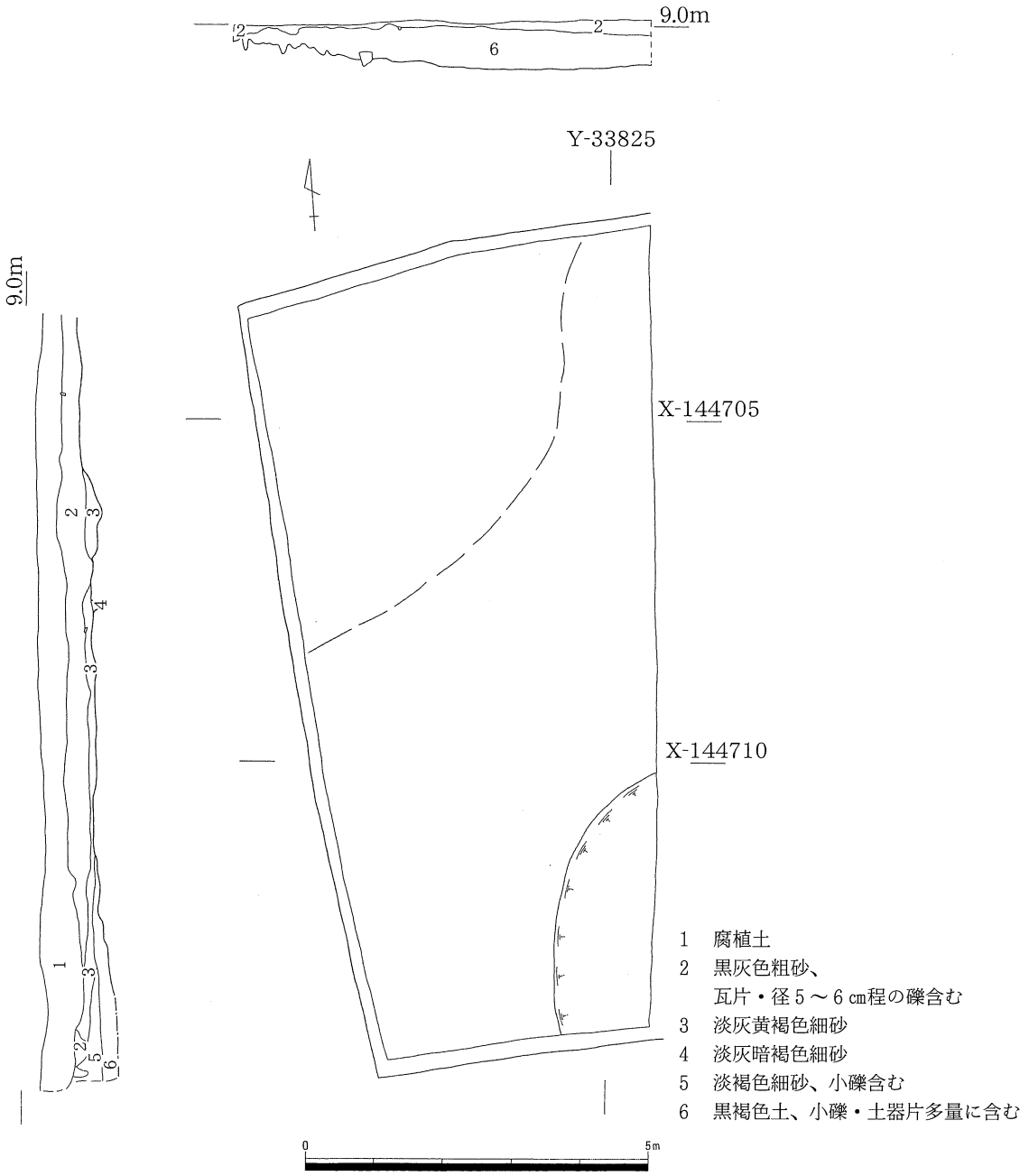
柱穴列２の西半部で北に接して位置する。Ｐ273・409・316・295・397の５基からなる。柱穴直径は30～40㎝で、柱間は１～1.2ｍである。

Ｔ28（第94図）

西塔の東南に位置する南北方向のトレンチである。トレンチ中央で中世の井戸が検出された。現代水田の耕作土の下には、黄褐色・暗褐灰色の粗砂・細砂で特に南半は厚く堆積している。ここには中

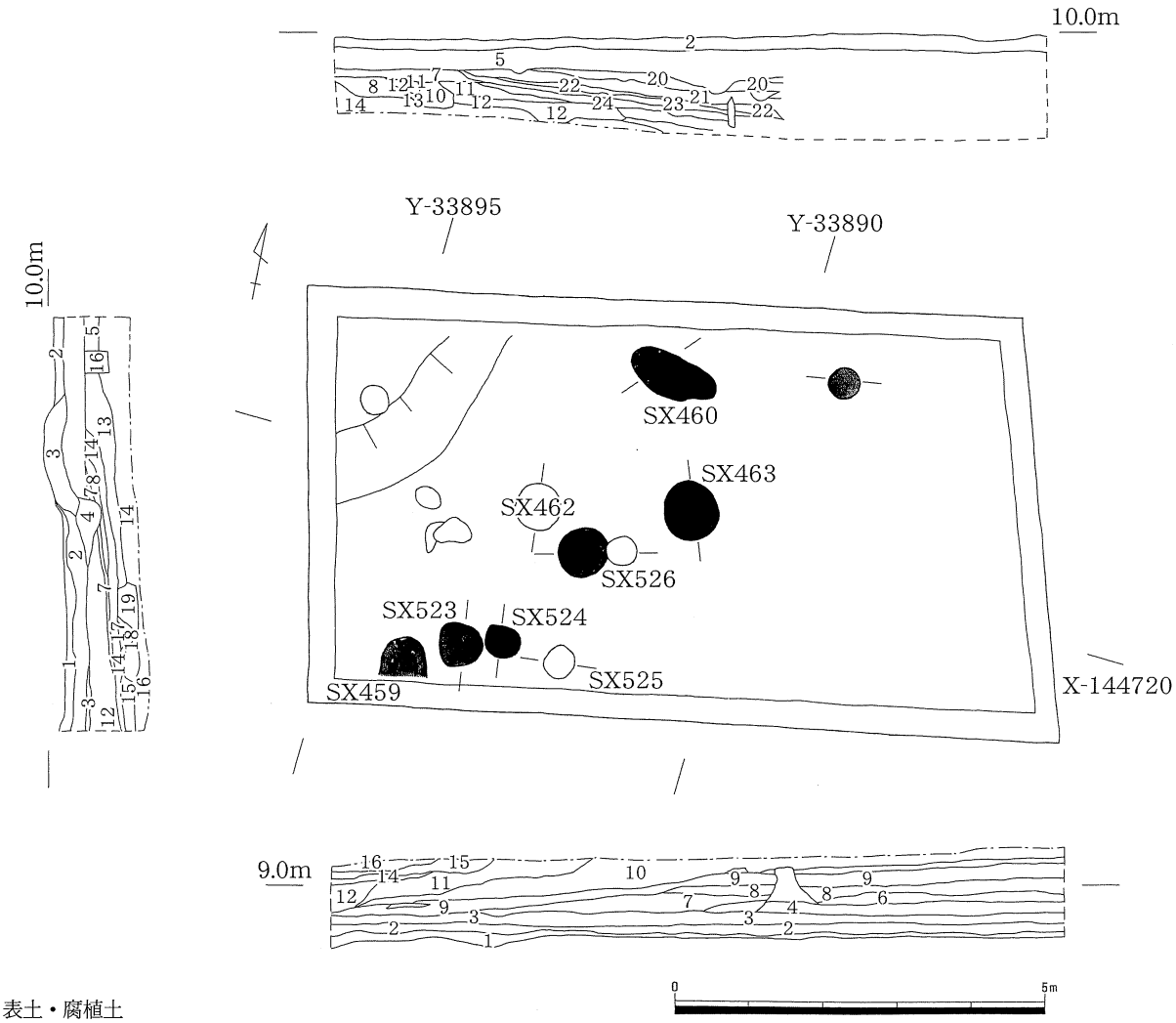


第105図　T31平面・西壁実測図



第106図　T32平面・西壁実測図

世土器や鉄滓を含んでいる。東壁では地山の南への傾斜が観察できるが、南端部では湧水と上層の粗砂層による崩落の危険が高く、検出にはいたっていない。北壁では、標高10.8ｍのあたりでほぼ水平に地山上面が観察できる。26層は地山を40㎝ほど垂直に切り込んでいる。西塔の基礎地形掘り肩の可能性がある。26層からは賞田廃寺第１様式軒丸瓦・６世紀後半の須恵器などが出土している。トレンチ北半の近世頃と思われる真砂土層から凝灰岩製の擦管（Ｓ１）が出土している。

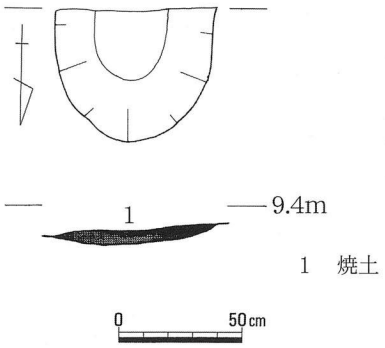


1 表土・腐植土
2 灰青緑粗砂・細砂
3 淡灰褐色粗砂・細砂
4 淡灰橙色粗砂・細砂
5 灰色粗砂
6 淡灰褐色粗砂・中砂
7 淡灰褐黄色粗砂・中砂、土師器片含む
8 褐茶色粗砂・中砂、土師器片含む
9 淡灰黄茶色粗砂・中砂土師器・炭含む
10 黄褐色粗砂・中砂
11 灰黄茶色粗砂・中砂、炭含む
12 暗灰黄色粗砂・中砂、炭、焼土灰
13 暗灰褐色粗砂・中砂、比較的締まりなし
14 淡茶色粗砂・中砂、淡黄橙色焼土含良く締まる
15 暗灰茶褐色粗砂・中砂、良く締まる
16 淡茶褐色粗砂・中砂
17 淡褐色粗砂・中砂
18 灰黄色粗砂・中砂
19 暗灰茶褐色粗砂、良く締まる
20 淡灰褐色粗砂・中砂炭、やや黒い
21 淡灰茶色粗砂・中砂
22 淡灰黒色粗砂・中砂、第2炭層
23 淡灰黄色粗砂・中砂、炭・銅細片含む
24 淡黒色粗砂・細砂、炭多

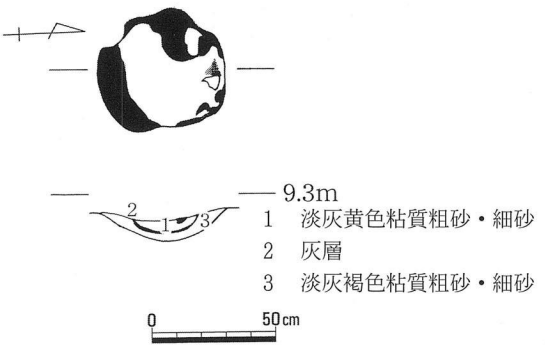
第107図　T33平面・北・西・南壁実測図

ＳＥ218(第95図)

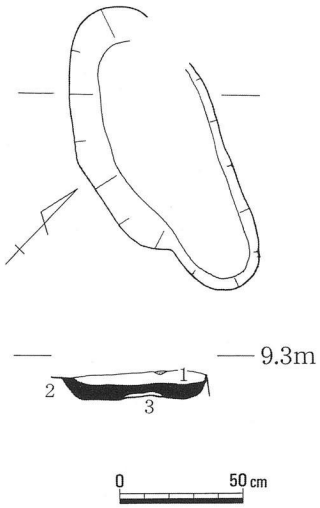
平面形は径0.9ｍの円形で、検出面からの深さは0.5ｍで断面は台形を呈する。備前焼大甕(194)の上半部が据えられている。底面は湧水層に達していないので、雨水や周囲からのしみ込みを集めた溜井と考えられる。掘り肩内部・大甕内部から須恵器や多量の奈良時代の瓦が出土した。埋土は粘質を帯びた灰褐色の粗砂質である。この井戸の時期は備前焼大甕形態からの13世紀末から14世紀前半である。



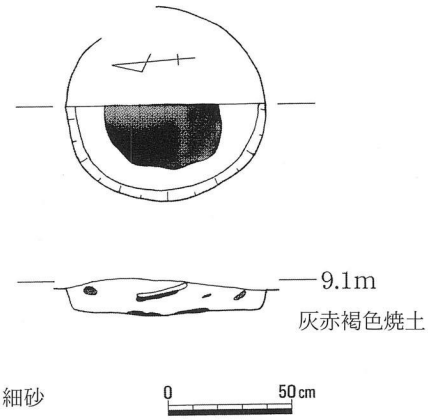
第108図　ＳＸ459平・断面図



第110図　ＳＸ462平・断面図



第109図　ＳＸ460平・断面図



第111図　ＳＸ463平・断面図

Ｔ29（第96図）

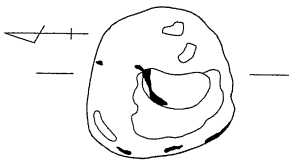
Ｔ９の調査で金堂の北側には、講堂が存在しないことが明らかとなったので、金堂・講堂が横並びする、すなわち金堂の西隣に講堂が存在する可能性をふまえてトレンチを設定した。結果的には地山上面まで、中世から近現代にかけて削平を受けており、近現代の耕作に伴う溝や段・埋め甕、中世の柱穴や溜井を検出したにとどまり、講堂の存在を明らかにすることはできなかった。なお、トレンチ内で大小の露岩が検出され、時期不詳ではあるが、ノミ痕が顕著で切り割りを行っている痕跡が観察できた。

ＳＫ493（第97図）

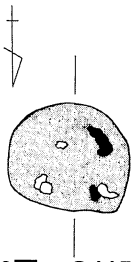
トレンチ中央のやや南よりで検出した、平面形が長径2.2ｍ短径1.9ｍの楕円形の井戸である。深さは検出面から1.2ｍあり、断面形は台形である。埋土は灰黄色の粗砂混じりの細砂で、緩くしまりがなかった。この中には、白鳳・奈良時代の瓦が捨てられていた。

Ｔ30（第98図）

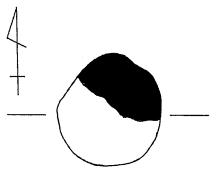
Ｔ９をＴ26の北側まで南に延長し、南回廊やその他寺院関連遺構の追求をはかった。



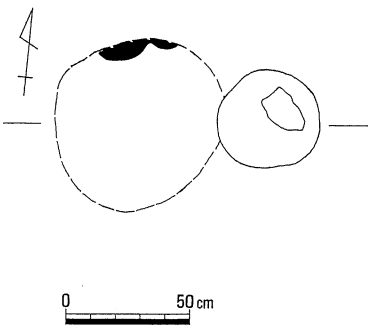
第112図　ＳＸ523平面図



第113図　ＳＸ524平面図



第114図　ＳＸ525平面図



第115図　ＳＸ526平面図

北端部では近現代の水田による削平を受け、表土から25cmで地山に達した。南端でも中世の包含層を間に挟み表土から１ｍで地山に到達している。遺構は柱穴・土坑・溝などがみられたが、いずれも地山上面で検出している。遺構に伴う遺物がほとんどなく、時期を明らかにできるものはほとんどない。結局の所、回廊に関連する遺構は検出されなかった。

ＳＤ510（第99図）

トレンチ中央東よりで検出した、幅30cm深さ10cm足らずの南北方向の細溝である。埋土は灰褐色の細砂である。時期のわかる遺物は出土していない。

ＳＫ504（第100図）

トレンチ中央部で検出した東西方向に楕円形の土坑である。長径95cm短径48cmで、検出面からの深さは25cmある。埋土は灰褐色の細砂である。時期のわかる遺物は出土していない。

Ｐ513（第101図）

トレンチ南半で西壁面にかかった円形の柱穴で、直径約80cmであるが、上端部は肩が崩れて広がっている。検出面からの深さは45cmあって、埋土は黄灰色の細砂を主とし、中央には柱痕跡が観察された。

ＳＫ509（第102図）

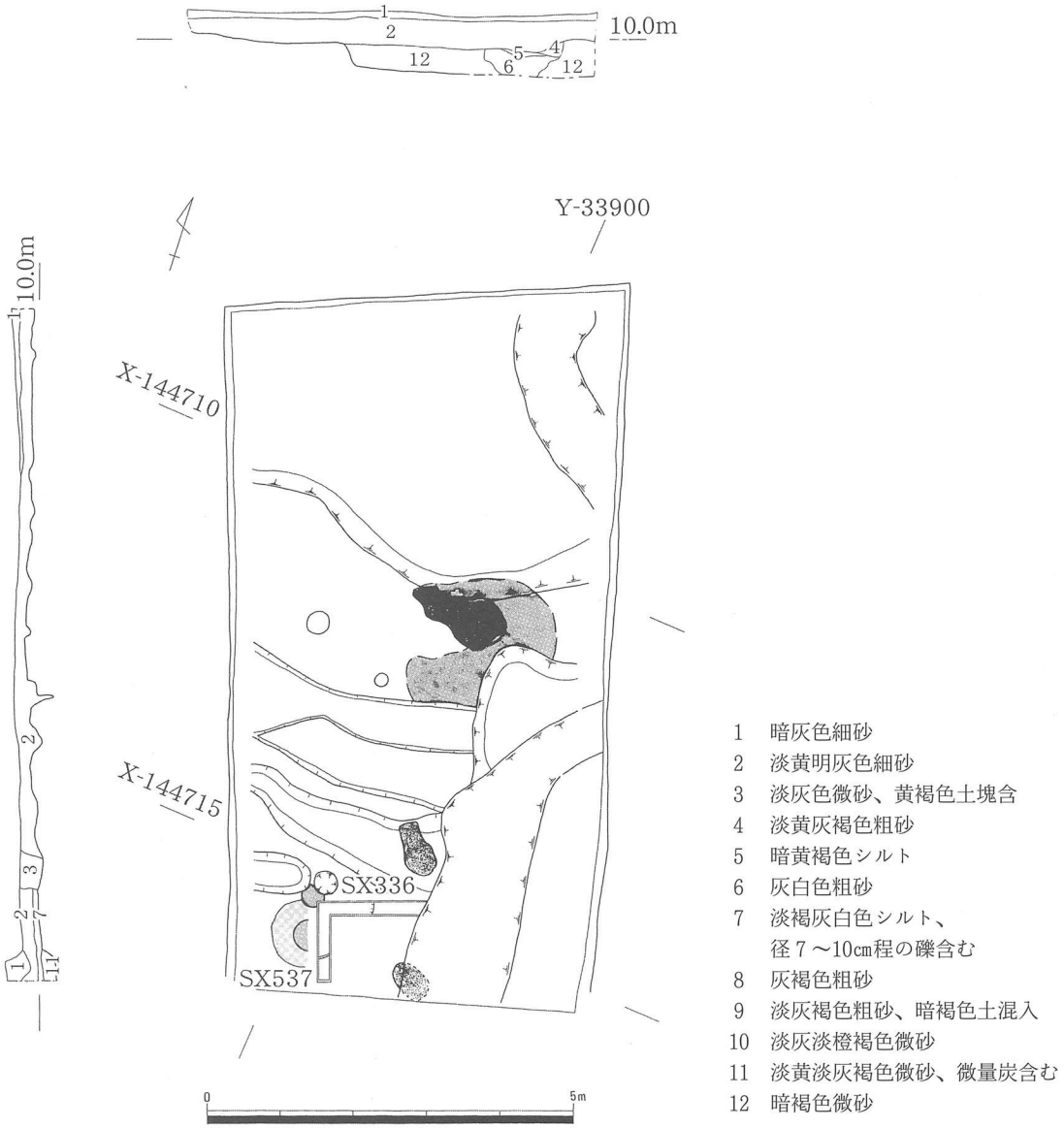
トレンチ中央部のＳＤ507中央西端で検出した。長径1.2ｍ短径0.6ｍの楕円形の土坑で、検出面からの深さは25cmで、埋土は灰褐色の細砂である。土坑内には５～20cm大の円礫・角礫とともに縄目の平瓦が出土した。

Ｐ516・517・518（第103図）

トレンチ南半で東壁にかかって検出した。Ｐ516は直径約１ｍの円形の柱穴で、深さは50cmある。断面形は緩い台形で、底部には20cm大の角礫がおかれていた。東壁の観察ではＰ517を切っている。埋土は灰黄色の細砂・粗砂を主体とする。時期の手がかりとなるような遺物は出土していない。Ｐ517はＰ516と518の間に位置し、方形の土坑ないし柱穴と見られる。南はＰ516に切られているが、Ｐ518との関係は東壁では判然としない。深さは35cmで埋土は灰黄色の細砂・粗砂である。Ｐ518は長径80cm以上となる柱穴と見られる。深さは60cmあり、Ｐ517の関係は判然とはしない。Ｐ518とは心心距離で1.8ｍである。

ＳＫ498（第104図）

トレンチ北端で検出した不定形の土坑である。長径が４ｍ以上短径が1.8ｍ以上と見られる。深さは検出面から20cmあり、断面形は浅い皿形を呈する。埋土は暗褐色の微砂で、明瞭な出土物は見られず時期は不明である。

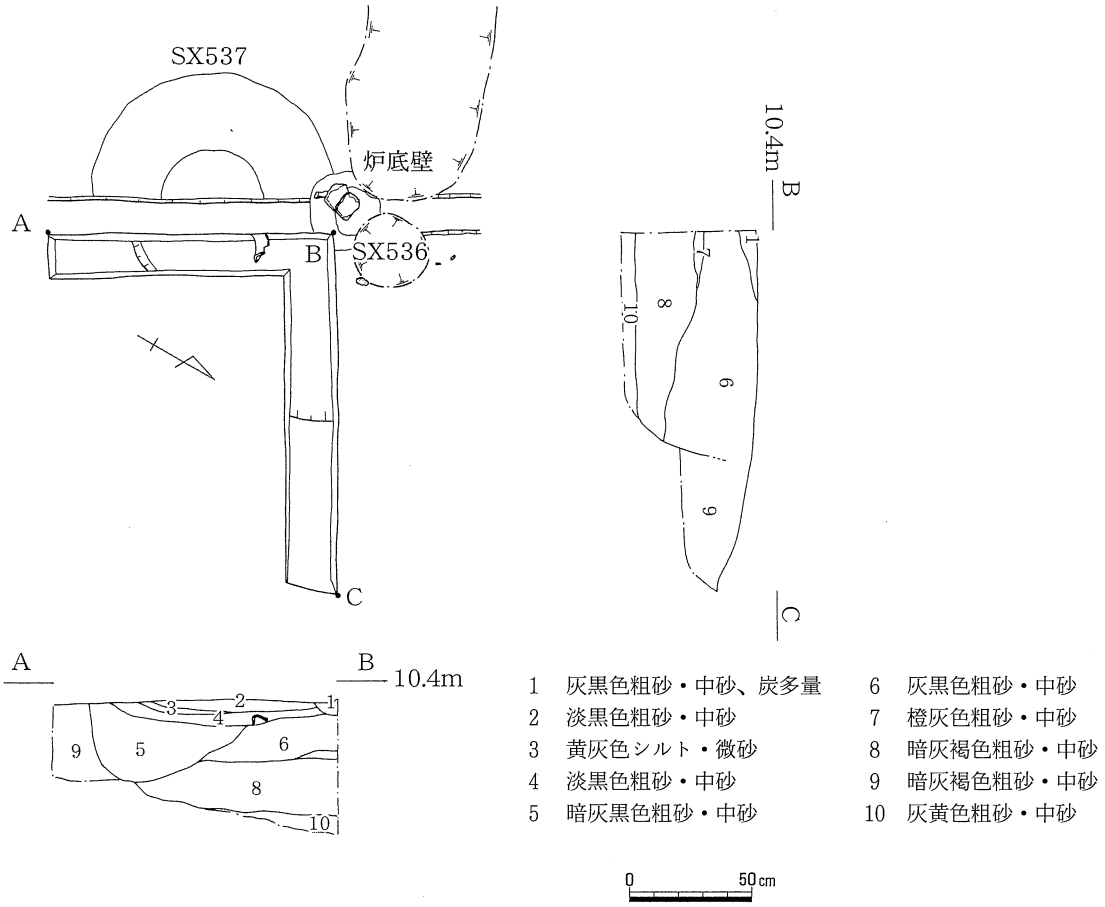


第116図　Ｔ34平面・西壁実測図

Ｔ31（第105図）

金堂の北に接する南北方向のトレンチである。講堂が金堂の西に横並びに所在する可能性を追求したＴ29でも、講堂の存在が明らかにされなかったので、改めて講堂の追求を目的として、金堂の北東部にトレンチを設定した。Ｔ９と同様に、地山面までは淡褐色を主体とした粗砂・微礫の堆積が見られた。また、地山上面の傾斜も自然地形のものであり、ここにおいても講堂が設営されるような平坦面の存在は確認できなかった。また、そのほかの遺構も検出されていない。

Ｔ９・29・31と３箇所のトレンチで、講堂の所在を追求しようと試みたが、結局は明らかにはさ



第117図　ＳＸ536・537平・断面図

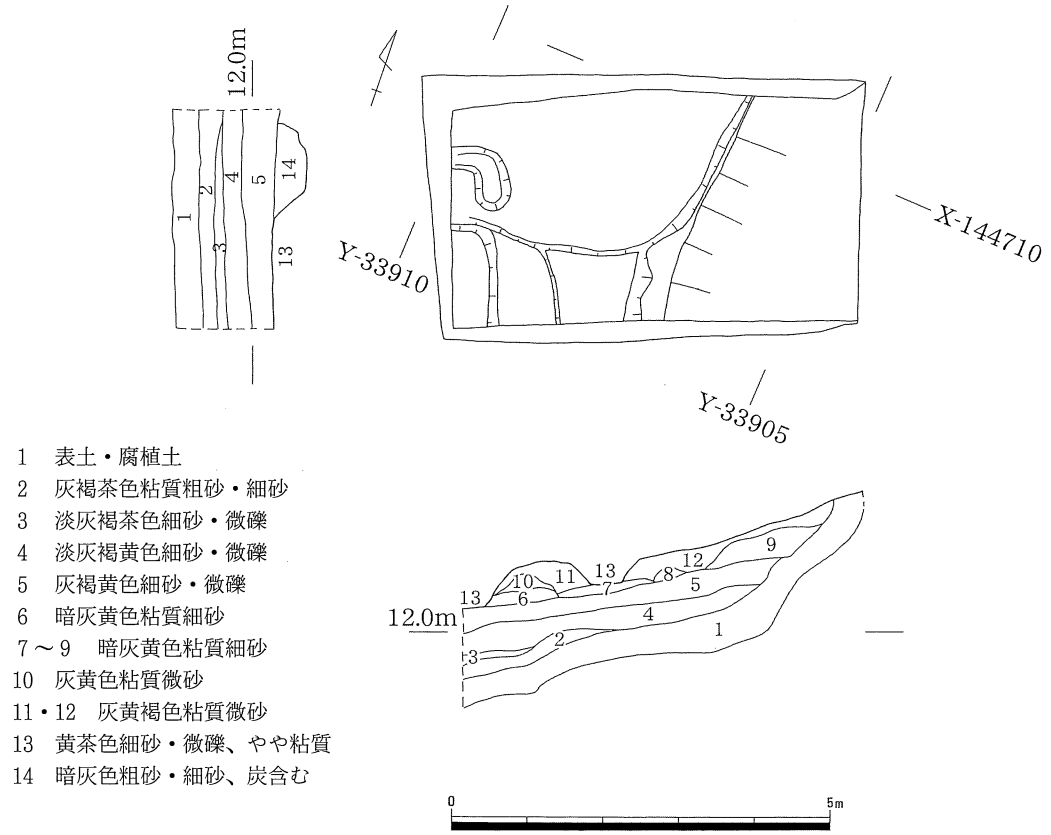
れなかった。

Ｔ32（第106図）

Ｔ１の西に接する南北調査区である。Ｔ25・26で南限の区画施設と考えられる溝（ＳＤ141）と柱穴列１が検出されたことにより、Ｔ１と市道との間でＳＤ141や柱穴列１の東への延長部分や、南門遺構の有無などを追求するために設定した。

調査の結果、腐植土・畑耕作土のほぼ直下で、黒褐色の造成土が検出され、すでに大きく削平を受けていて、関連する遺構が存在しないことが明らかとなった。地山上面の標高は、Ｔ26とＴ31とでは１ｍ近くＴ26が低い。黒褐色造成土の上面が標高８～8.5ｍ、Ｔ26の柱穴列１の底部が標高7.7～8.3ｍであるから、柱穴列１の延長部があったならば、底部が残っていることは十分に考えられる高さである。このことから、市道から東にはＳＤ141や柱穴列１は設けられなかったものと推察される。

この点については、確たる根拠は明示できないが、次のようなことも考えられよう。すなわち、ＳＤ141や柱穴列１が市道西側に作られた10世紀、およびその後何度か区画施設を修復する期間は、市道東側には築地が存在していた。その後、区画施設の修復を停止した後（寺院廃絶後？）、市道東側の築地が基礎部分まで削平された。



1　表土・腐植土
2　灰褐茶色粘質粗砂・細砂
3　淡灰褐茶色細砂・微礫
4　淡灰褐黄色細砂・微礫
5　灰褐黄色細砂・微礫
6　暗灰黄色粘質細砂
7～9　暗灰黄色粘質細砂
10　灰黄色粘質微砂
11・12　灰黄褐色粘質微砂
13　黄茶色細砂・微礫、やや粘質
14　暗灰色粗砂・細砂、炭含む

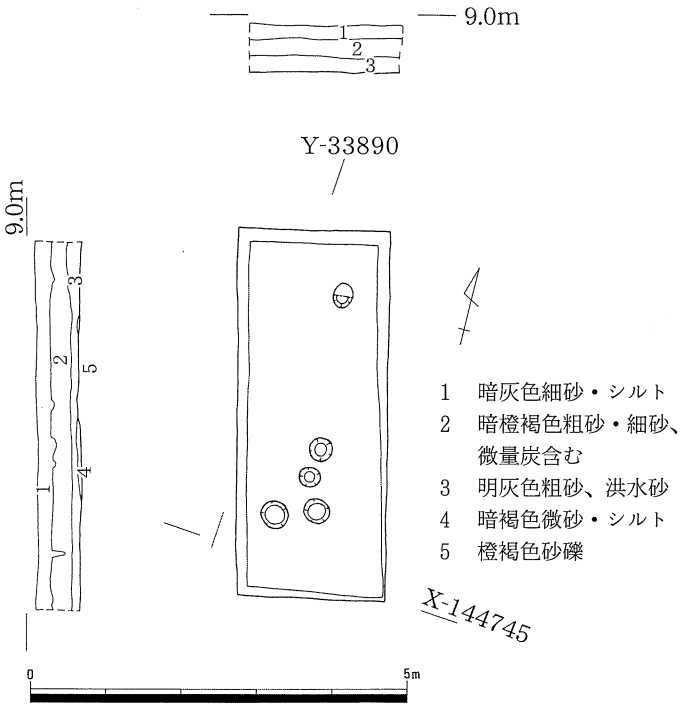
第118図　Ｔ35平面・西・南壁実測図

Ｔ33（第107図）

Ｔ25・26で検出した南区画施設ＳＤ141と柱穴列１が、西の尾根とどのように連絡するのか、そもそもＴ31では東側の延長は見られなかったので、はたして尾根裾部までのびているのかどうか、そして、尾根裾部ではそのほか関連遺構が存在するのか否か、といったことを明らかにすることを主眼としてトレンチを設定した。

トレンチ北西角で地山を検出し、それが南西方向に低くなっていく状況が見て取れた。近現代の水田層の下は、灰褐色の粗砂・中砂層が主体であり、時期的に中世層が大半である点はＴ14の調査結果と変わらない。Ｔ14でも１基炉跡（ＳＸ85）を検出しているが、Ｔ33でも南東方向に落ちていく斜面部で、３面の炭層とそれに対応する炉跡を検出した。時期的には上層の炉跡群検出時に13世紀の早島式土器碗が出土し、中層・下層では10～11世紀の土師器・須恵器が出土している。他には鉄滓・銅滓が出土しているので、この炉跡群が鉄・銅の製作に関わった工房の一部であったと考えられる。炉跡群が営まれた地盤としては、南西に傾く砂地の面であり、調査時には湧水も恒常的に認められるので、決して適した選地であったとは思われない。ただ、ＳＸ460からＳＸ459にかけて微高地基盤を取り巻くように幅1.5ｍで黄褐色粗砂・細砂や淡黄褐色粗砂・細砂で造成され、固められていた。ただ、湧水した砂地のため検出の問題も関わり、下方では端部がアメーバ状に入り乱れている。

炉跡はＳＸ459が上層に、ＳＸ460～463が中層に、ＳＸ523～528が下層に対応する。ＳＸ459～463は記録のため半裁したが、ＳＸ523～528は上面での記録にとどめた。



第119図　T36平面・北・西壁実施図

当初の主眼の一つである南区画施設ＳＤ141と柱穴列１の存在の追求については、下層炉跡群検出面においても溝・柱列の延長は確認されなかった。

ＳＸ459（第108図）

トレンチ南西角で検出し、トレンチ南壁の９層中で断面が観察できる。楕円形の炉跡と見られ、長軸50㎝以上短軸62㎝で、深さは検出面で12㎝である。埋土は赤褐色の粗砂で炭を含んでいる。遺物は出土していない。

ＳＸ460（第109図）

トレンチ中央北端に位置する。1.25×0.55ｍの楕円形を呈する。検出面からの深さは10㎝あまりで、断面形は箱形を呈する。埋土には上層では炭・焼土がまじり、下層では炭が多く含まれる。時期を示す遺物は出土していない。

ＳＸ461

トレンチ北端東より検出した。直径45㎝の範囲に焼土・炭・鉱滓が分布し、厚みは約10㎝あった。

ＳＸ462（第110図）

トレンチ中央やや西よりで検出した。平面は直径50㎝の円形で、断面は深さ12㎝の皿状を呈する。埋土は上層が淡灰黄色粘質粗砂・細砂、下層が淡灰褐色粘質粗砂・細砂で、間層として灰層が入る。外周部分で多くの炭と一部で赤褐色の焼土がみられたが、底面は硬化や土色の変化は見られなかった。時期を示す遺物は出土していない。

ＳＸ463（第111図）

トレンチ中央で検出した。平面形は直径80㎝の円形で、断面形は深さ15㎝の箱形である。埋土は灰赤褐色の焼土で炭を含み、底部中央はやや硬化がみられる。時期を示す遺物は出土していない。

ＳＸ523（第112図）

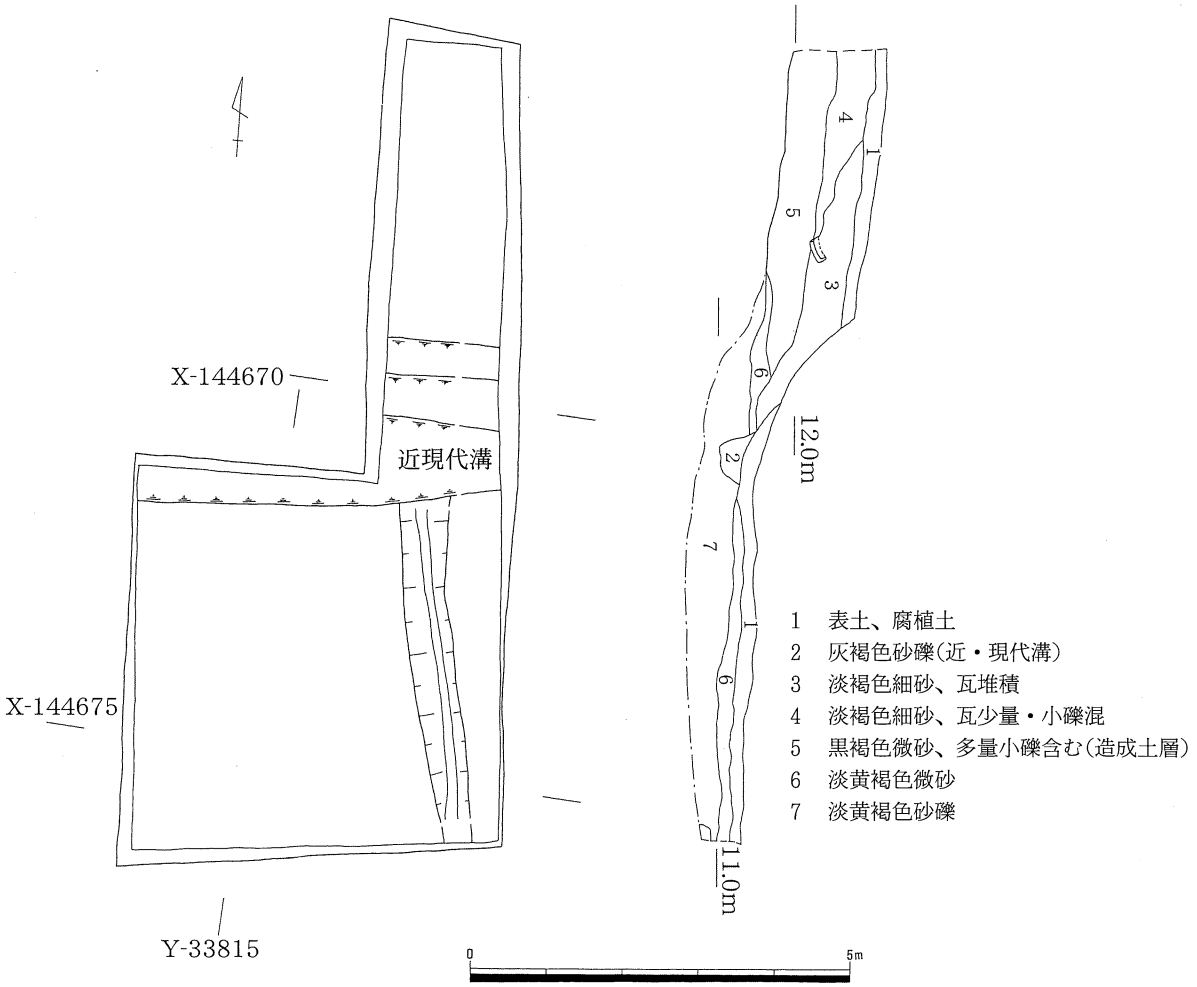
トレンチの南西端でＳＫ459の東に位置する。直径55～60cmの不整形の円形を呈する。埋土は暗灰黄色の粘土で、橙灰色粘土や緑灰色粘土が中央に見られ、周囲には炉壁や炭が見られた。

ＳＸ524（第113図）

ＳＸ523の東に隣接する。直径50cmのほぼ円形を呈する。埋土は灰黒色粘土で、炭や炉壁が見られた。

ＳＸ525（第114図）

ＳＸ524の東に隣接する。直径45㎝程度の円形を呈する。埋土は灰黒色の粘土で、北側に赤褐色の



第120図　T37平面・東壁実測図

焼土が見られる。

SX526（第115図）

SX462と463の中間でわずかに南に位置する。直径40cmの円形である。埋土は炭混じりの灰黒色細砂・粗砂で、中央に10×20cmの炉壁がある。この西に隣接して、直径70cm程度の浅いくぼみを検出した。周囲の硬い土に対し柔らかい部分が先に掘れてしまった様な状況である。輪郭の北側で炭が観察されたので、ほぼ全面にわたって失われてはいるが、これも炉跡であったかも知れない。

T34（第116図）

西の尾根裾部での寺院関連遺構の有無を明らかにするためにトレンチを設定した。トレンチ北半および南東角は水田耕作およびそれに伴う溝により削平されていた。しかし、トレンチ南西側1／2の範囲では、耕作土直下で地山が検出され、上面でT33と同様に炉跡群を検出した。

SX536・537（第117図）

SX536は、地山上で炉底滓を検出したのでその周囲を精査した。炉底滓の下はおよそ直径20cmの範囲で黒色固化が見られ、さらにその周囲は、一部近現代の溝や穴に破壊を受けているが、直径30cmの範囲で橙色から白橙色に変化した部分が広がっていた。炉底部の状況と考えられる。

ＳＸ537はＳＸ536の南で貼り粘土が観察された部分である。淡黄灰色の貼り粘土は西側のみ直径40㎝の半円形で検出した。その周囲には直径１ｍの同心円状に橙灰色の粘土塊や炭が混ざる範囲が広がっている。ここも、炉底の下部と見てよかろう。

ＳＸ536を中心として南と東に裁ち割りを行った。その結果、ＳＸ536を中心として東に75㎝南に80㎝で、深さ45㎝の円形に復原できる地山の掘り込みを検出した。ＳＸ536だけでは炉の下部構造としては大きすぎるので、この地点で何度か作り直すことを前提として、大きく地形を施し下部構造体を整備したのではなかろうか。

Ｔ35（第118図）

Ｔ34の西に隣接し、尾根状地形の上部にあたる。金堂や塔などの主用建物が所在する範囲の西側は、尾根を利用していわゆる山寄せで区切っていると想定した。尾根上に築地などの痕跡がないか追求するため、Ｔ35を設定した。

調査の結果、壁面の５層で近世の陶磁器が出土し、地山直上まで削平を受けていることが判明した。地山上で時期不明の土坑を確認したが、築地などの区画施設を示す遺構等は検出されなかった。

Ｔ36（第119図）

Ｔ33・34で炉跡群を検出し、西の尾根裾に工房が営まれていることが判明したので、Ｔ33の南でも炉跡が検出されるのか追求するために設定した。表土および鋤床の下は橙褐色の砂礫層で、その上面で中世と考えられる柱穴５基を検出したが、炉跡は見られなかった。工房の南限はここより北に求められる。

Ｔ37（第120図）

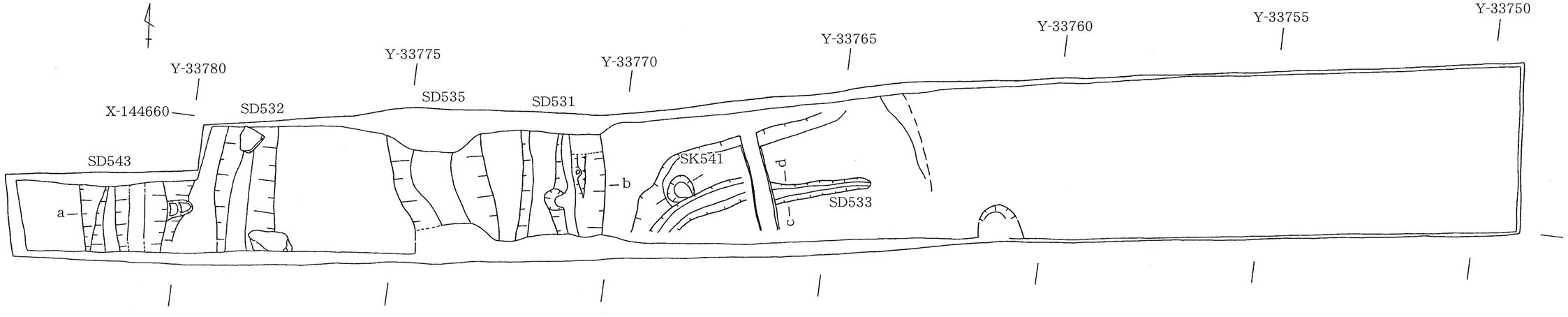
東塔の南に隣接する。Ｔ５で南回廊が追従できなかったため、第１次調査トレンチの東に改めてトレンチを設置した。東側を幅２ｍで北に延長し、東塔前面のあり方を確かめることを目的とした。現状の段差から南では、淡黄褐色砂礫の地山まで耕作により削平を受けており、寺院に関連する遺構は検出されなかった。検出された溝は、近現代の耕作に伴うものであった。

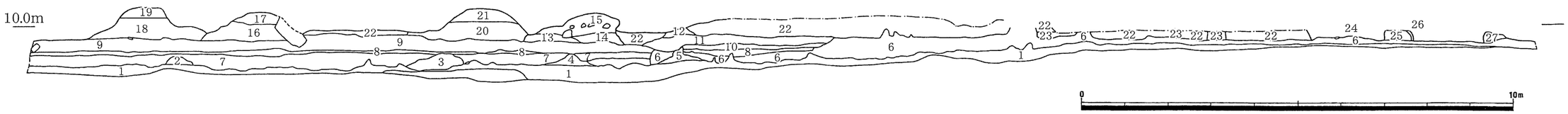
一方、段差から北では黒褐色造成土上層の淡褐色層が瓦溜層であったが、２次的堆積と判明した。ここからは平城宮式6225・6663型式(賞田廃寺５様式)の軒丸・軒平瓦が多量に出土した。東塔北側の瓦溜から出土した軒瓦は賞田廃寺３様式瓦が大多数であり、建物の北と南で用いられている軒瓦が異なっていることが判明した。後で述べるように、東塔の南面は、少なくとも初層はある時期、平城宮式の瓦で軒先が整えられたと思われる。

Ｔ11・38（第121図）

第１次調査で検出された東築地と両側の溝の延長を確認するため、第１次調査の南10ｍにＴ11を設定した。ここで、築地両側の延長上で４本の溝を確認したため、北に拡張し、さらに東区画施設東方での工房などの寺院関連遺構の有無を確認するため、東にも合わせて拡張してＴ38を設定した。

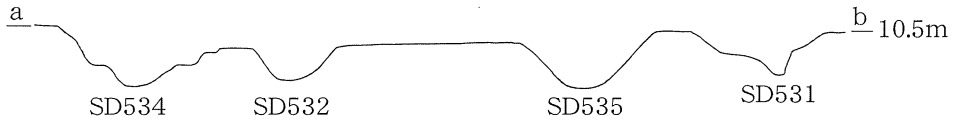
調査の結果、南北方向の２条の切り合いのある溝が２組、計４条が検出された。それぞれは東側の溝が隣り合う西側の溝を切っている。掘り肩上面で６ｍの間隔をもっていた２本の溝がそれぞれ東に



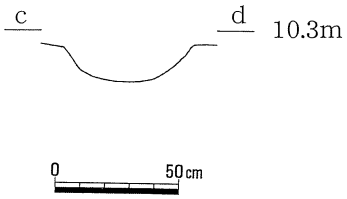


1 暗褐色微砂(表土)
2 黒灰色微砂
3 淡黄灰褐色細砂
4 灰白色粗砂
5 灰白色砂礫、4～5㎝程度の円礫を多量含む
6 淡黄褐色微砂(近世～近代耕作土)
7 暗黄淡褐色微砂(6に似るがやや暗い)
8 淡灰橙褐色細砂、少量の小礫ふくむ
9 暗褐色砂礫
10 暗黄灰白色細砂
11 淡灰橙褐色微砂(溝又は段状の落ち)
12 黒灰色粗砂・シルト
13 暗灰色粗砂
14 暗褐色砂礫、粗砂及び5～10㎝程の礫混
15 黒灰色礫層、拳～人頭大の礫多量
16 黒灰色粗砂、4～5㎝角礫を部分的に含む
17 黒灰色礫層、5～10㎝程の円礫・角礫
18 黒灰色粗砂、5～10㎝程の礫少量含む
19 暗灰色砂礫
20 暗褐色微砂・細砂、少量の礫含む(造成土層に似る)
21 暗褐色礫層、拳～人頭大の角礫
22 暗褐色微砂(造成土)
23 淡黄灰褐色細砂(微量の炭含む)
24 黄褐色砂礫(東に行くほどシルト強)
25 淡灰黒褐色細砂(22に似る)
26 淡灰褐色細砂
27 淡褐色細砂

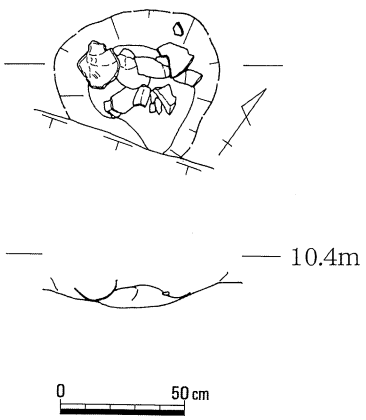
第121図　T11・38平面・南壁実測図



第122図　ＳＤ531・532・534・535断面図



第123図　ＳＤ533断面図



第124図　ＳＫ541平・断面図

新しく掘り直された結果であると判明した。第１次調査で検出した２本の溝の延長と考えられるが、後述のように、Ｔ39・40・41では外側の延長と考えられる１本が検出されていることから、ここでの切り合いは局所的な修復を示すものであろう。

出土物には中世土器があり、最終的に埋没したのは中世と考えられる。このあたりは、現在でも北の山からの雨水や湧き水を流す溝が設けられている。おそらく、寺院廃絶後も流水機能を維持させて中世まで活用されたのであろう。

ほかに幅の狭い溝や土師器甕(242)が出土した土坑(ＳＫ541)が検出されたが、Ｙ＝－33760から東では、表土直下で地山を検出したが、遺構は見られなかった。

溝　東区画施設（第122図）

ＳＤ531

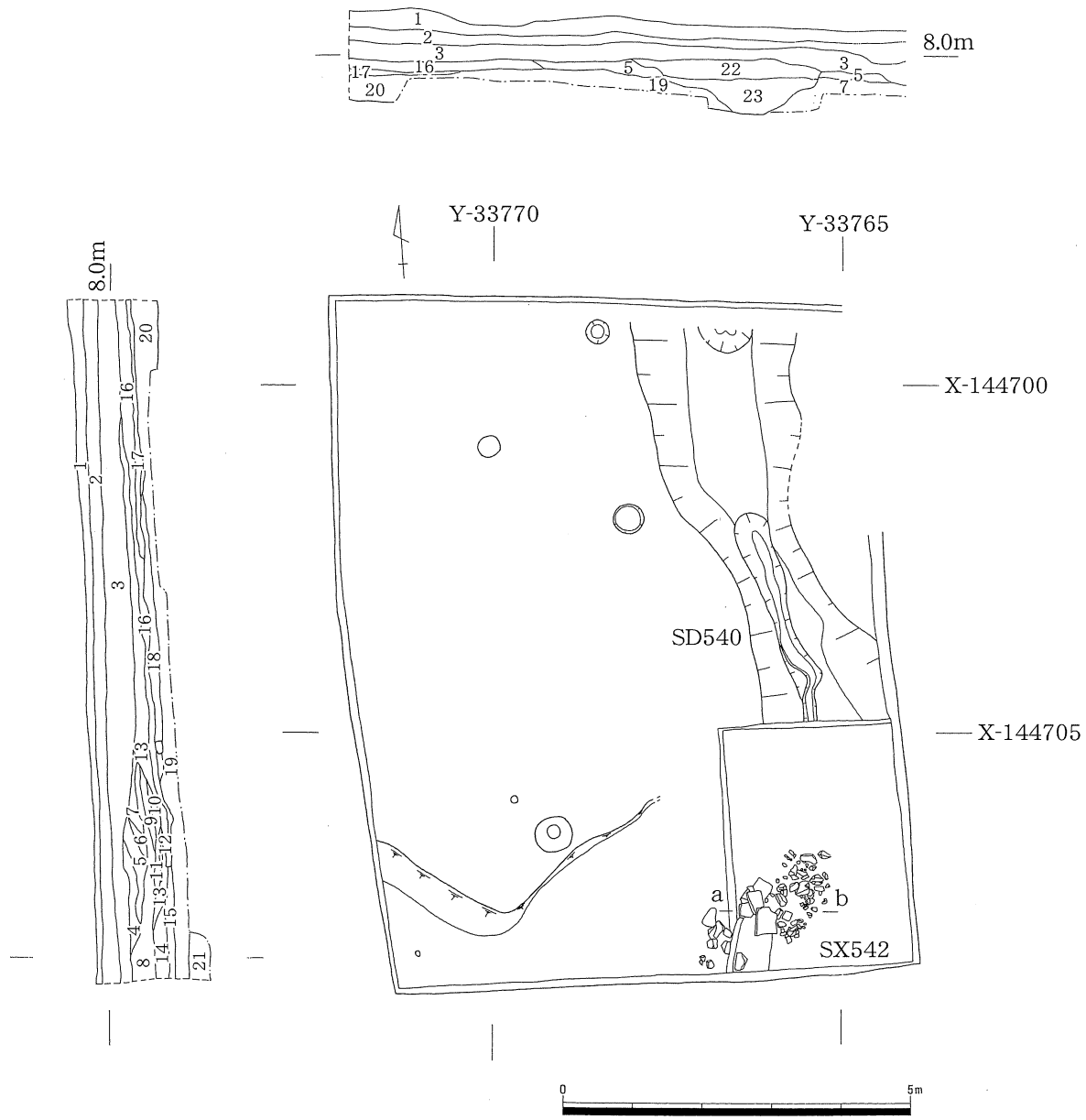
東区画施設と考えられる４本の溝のうち、もっとも東に位置する。検出面で幅1.95ｍ、深さ0.7ｍある。埋土は暗灰色粗砂・暗褐色砂礫・黒灰色礫からなる。特に底部付近は20㎝を越える礫を多く含んでいる。断面形は東側が底部からの立ち上がりが急で、西側に緩く立ち上がる。西側はＳＤ535の東肩を切っている。埋土からは奈良時代の瓦・土器とともに、早島式土器碗をはじめとする中世土器が出土している。

ＳＤ532

ＳＤ531と対になって新しく修築された区画施設の東側を構成すると見られる。検出面の幅は1.4ｍで深さは0.85ｍである。埋土は黒灰色の粗砂や暗灰色の砂礫である。断面形は緩いＵ字形である。ＳＤ534の東肩を切っていて、埋土からは中世土器が出土している。ＳＤ531との内々の間隔は5.1ｍである。

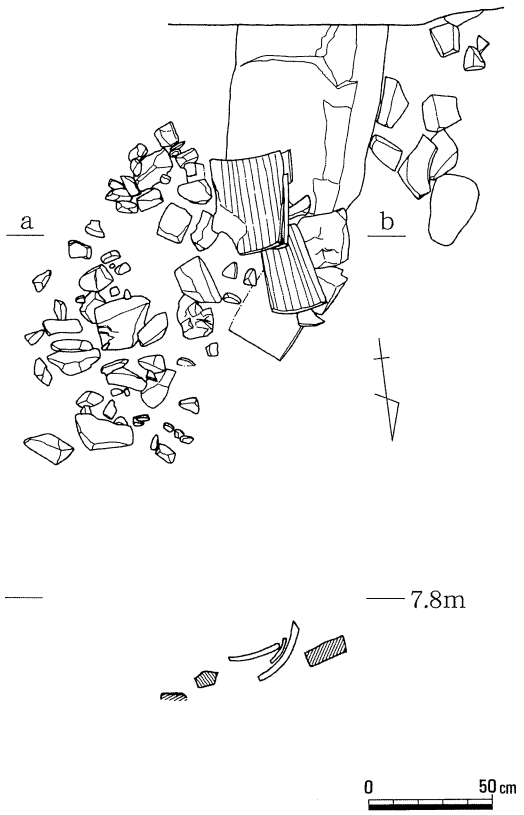
ＳＤ535

ＳＤ531に東の肩を切られている。検出面で幅2.1ｍ深さは0.7ｍある。断面形は緩いＵ字形である。埋土は上層が暗褐色の微砂・細砂で、下層は暗褐色のこぶし大から人頭大の礫層である。ここから



1　表土
2　暗黄灰色細砂・中砂
3　淡灰褐色粗砂・中礫
4　暗灰色中砂・粗砂
5　暗灰色粗砂・微礫・中砂
6　灰褐色微砂、灰色小葉状層理目立つ
7　褐灰色粗砂・微礫
8　暗灰黄色粘質微砂
9　褐灰色粗砂
10　暗灰黄色粘質微砂・シルト
11　暗灰黄色　粘質細砂
12　灰色粗砂
13　暗灰黄色粘質細砂
14　暗灰黄色粗砂・中砂
15　黄灰色粗砂・中砂
16　淡灰黄色粗砂・中砂、細層からなる
17　淡灰色粘質シルト
18　暗灰黄色粘質シルト
19　暗灰色粘質シルト
20　淡灰黄色粘質細砂・粗砂
21　淡灰青色粘質微砂・シルト
22　褐灰色粗砂・細礫・微礫
23　暗灰色粗砂・中砂

第125図　T39平面・北・西壁実測図



第126図　ＳＸ542平・断面図

中世土器が出土している。

ＳＤ534

ＳＤ535と対をなす西側の溝である。東肩はＳＤ532に切られる。検出面で幅1.9ｍ深さ72㎝ある。断面形は最深部が幅1.1ｍで25㎝ほど急に立ち上がった後、上部が緩く開いている。同じく中世土器が出土している。ＳＤ535との内々の間隔は５ｍである。

ＳＤ533（第123図）

トレンチ中央で検出した南北方向から東へカーブする幅50㎝深さ20㎝の溝である。

ＳＫ541（第124図）

トレンチ中央でＳＤ533に南接する直径60㎝ほどのやや不整形な円形の土坑で、底部からは土師器鍋や須恵器壺・坏が出土した。

Ｔ39（第125図）

Ｔ11・38で東区画施設と見られる溝を確認したので、その南の延長上でＴ25・26で確認した南区画施設の延長上との交点となる地点にトレンチを設けた。トレンチ全体では粗い粗砂の堆積を基本としている。

トレンチ中央やや東よりで南北方向の溝１条（ＳＤ540）を検出した。トレンチ北壁で観察すると、幅2.7ｍあって深さは80㎝である。断面形が東の立ち上がりが急で西に緩く開いている点は、Ｔ11・38で検出したＳＤ531と同様である。埋土は上層が褐灰色ないし暗灰色の粗砂で、最下部は暗灰色の粘質微砂である。位置からすると区画施設東側の溝の延長と考えられる。この溝は検出部のほぼ中央で少し東に折れている。南区画施設交点から北側では南北方向を意識するが、これより南では特に方向を意識せず、地形に任せた状態であったのではなかろうか。

このほかトレンチ南東隅で大小の礫の上に平瓦を数枚並べ重ねられて検出された（ＳＸ542）。

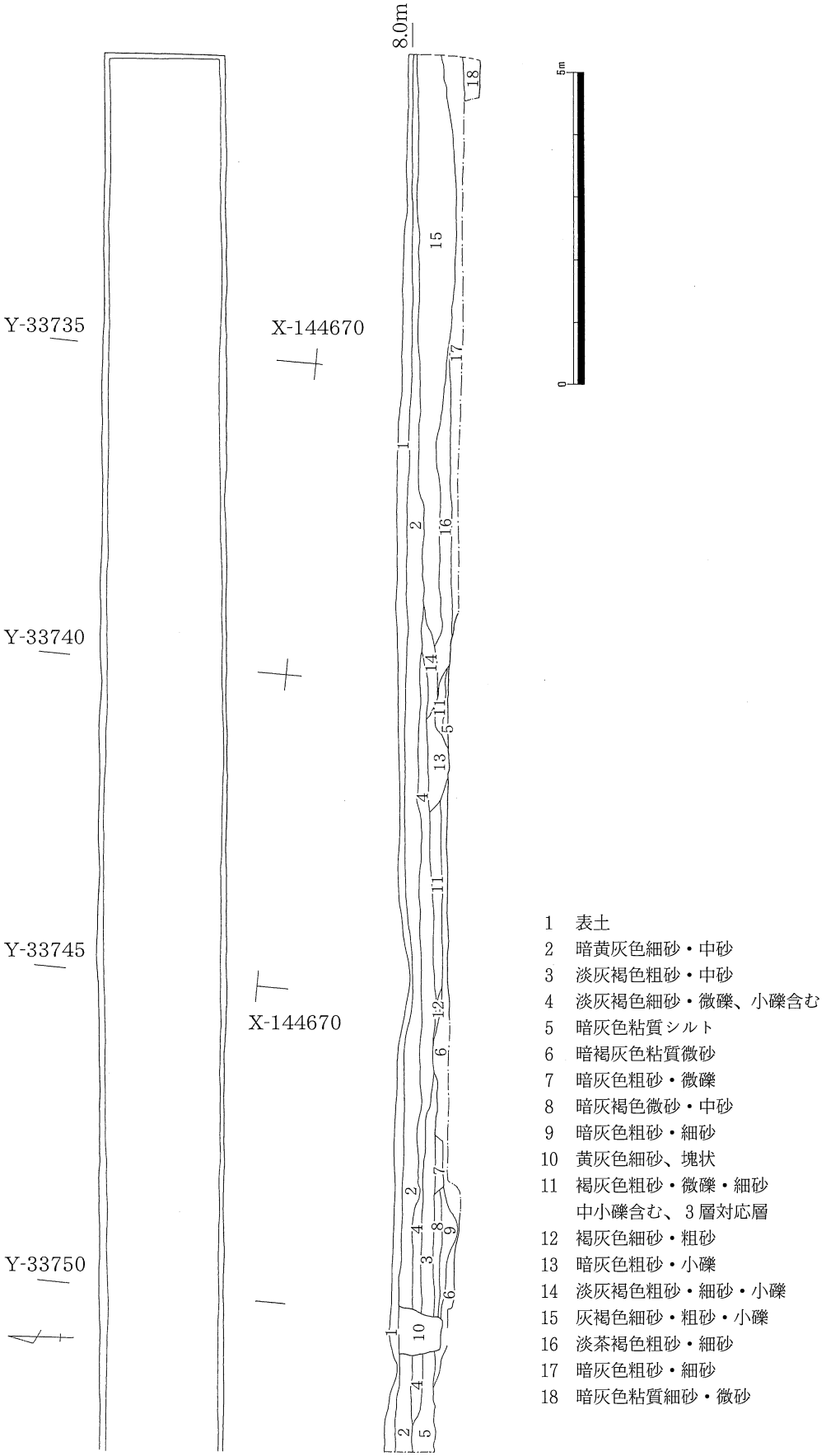
遺物では、遺構には伴わないが、小格子叩き目を一部ナデ消す、賞田廃寺第１様式の丸瓦・平瓦の出土がある程度まとまってみられ、６世紀後半の須恵器の出土もほかのトレンチに比べ多い。

ＳＸ542（第126図）

トレンチ南東角で長さ80㎝以上幅60㎝の方形板石周囲に10～30㎝大の礫が集中した。その上に検出時は４枚の白鳳期の平瓦が重ね並べられていた。性格は不明ながら、面的には西壁の13層に相当するので、瓦が並べられたのは中世以降のことと考えられる。

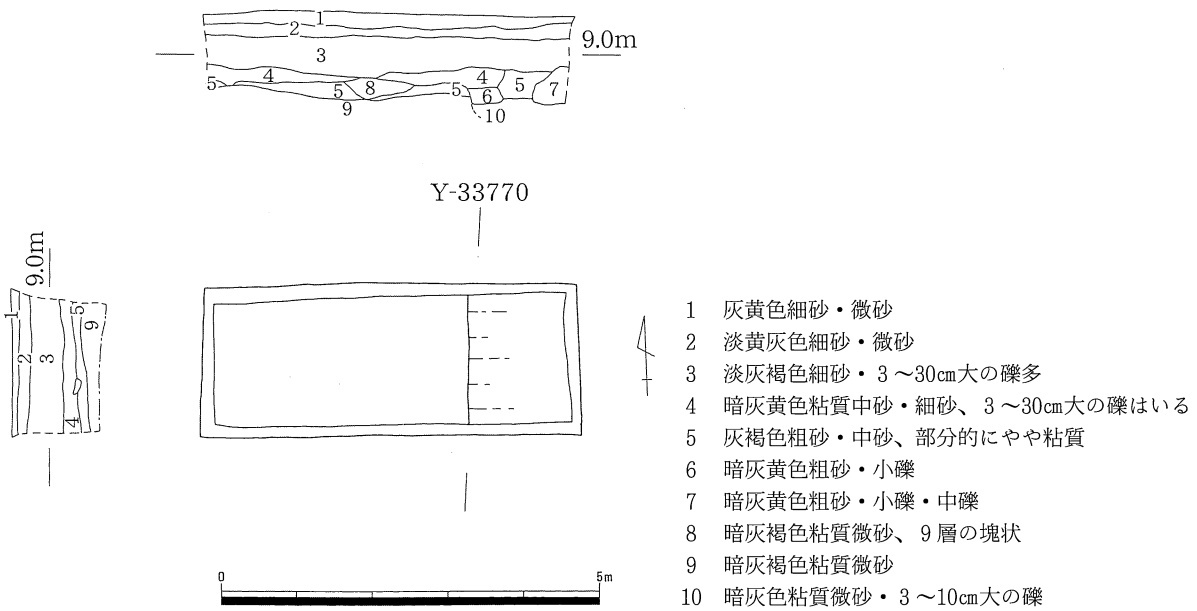
Ｔ40（第127図）

Ｔ39に隣接する東西方向のトレンチである。東区画施設から東方での寺院関連遺構の有無を確認するために設けた。黒褐色土から上層は平安時代以降の砂礫堆積である。明瞭な遺構は検出されなかった。



1　表土
2　暗黄灰色細砂・中砂
3　淡灰褐色粗砂・中砂
4　淡灰褐色細砂・微礫、小礫含む
5　暗灰色粘質シルト
6　暗褐灰色粘質微砂
7　暗灰色粗砂・微礫
8　暗灰褐色微砂・中砂
9　暗灰色粗砂・細砂
10　黄灰色細砂、塊状
11　褐灰色粗砂・微礫・細砂
　中小礫含む、３層対応層
12　褐灰色細砂・粗砂
13　暗灰色粗砂・小礫
14　淡灰褐色粗砂・細砂・小礫
15　灰褐色細砂・粗砂・小礫
16　淡茶褐色粗砂・細砂
17　暗灰色粗砂・細砂
18　暗灰色粘質細砂・微砂

第127図　Ｔ40平面・北壁実測図



第128図　T41平面・北・西壁実測図

T41（第128図）

T39の北に位置する東西方向のトレンチである。トレンチ東端で、黒褐色土上面で区画施設東側の溝の延長とみられる溝を検出した。黒褐色土上面では特に遺構は検出されなかった。黒褐色土から上層は砂礫堆積である。溝の埋土は暗灰色の粘質微砂および3～10㎝大の礫である。この上部には3～20㎝大の礫が集中する箇所も見られた。溝は湧水による崩落の危険が生じたため、底部を確認していない。

追記

入稿後、西塔東瓦溜から文字瓦が出土していることがわかった。急遽、カラー図版(図版4)を差し替え、概略をここに紹介する。瓦は土師質ないし甘い瓦質の丸瓦で、9.7×5.7㎝の小片である。胎土は白色の微砂質で、表面のみ灰色になっている。広端面は残っていて、文字は広端面側を上にしてヘラ書きしており、「上道」と読める。「上」の字の第2画の横棒はチョンとヘラを当てた程度である。「道」の字の下部は欠損している。造営氏族名・寺名・郡名いずれの可能性もある。文字判読に当たっては狩野久先生にご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

第５章　遺　物

第１節　　瓦　　類

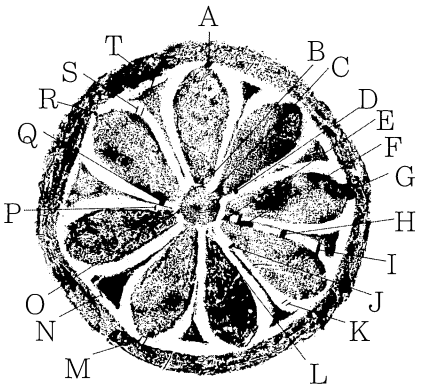
瓦類は、金堂及び東西両塔周囲の瓦溜まりからの出土が顕著ではあるが、地点によらず丸瓦・平瓦が数量ともに最も多い。軒瓦がこれに次ぐが鴟尾を除くと、塼と隅切り瓦・不明道具瓦などが数点出土しているのみで、熨斗瓦や面戸瓦などその他の道具瓦は出土していない。また、文字瓦の出土もみなかった。一方Ｔ4・Ｔ22・Ｔ24・Ｔ29などで検出した近・現代水田の暗渠からは中世後半の丸・平瓦とともに鬼瓦・鳥衾・「安養寺」刻印瓦などが出土している。

１．軒丸瓦

軒丸瓦は小片も含めて451点が出土し、15類に分類した。このほか、板谷重郎治氏により岡山市津高北廃寺出土の単弁12弁軒丸瓦と同紋の軒丸瓦が収集されている(1)が、１次２次の発掘調査では出土していないので、今回の分類には入れなかった。ただし、１次２次調査あわせて１点しか出土していない瓦が軒丸瓦で６個体、軒平瓦で13個体あるので、将来、調査で出土することも十分考えられる。

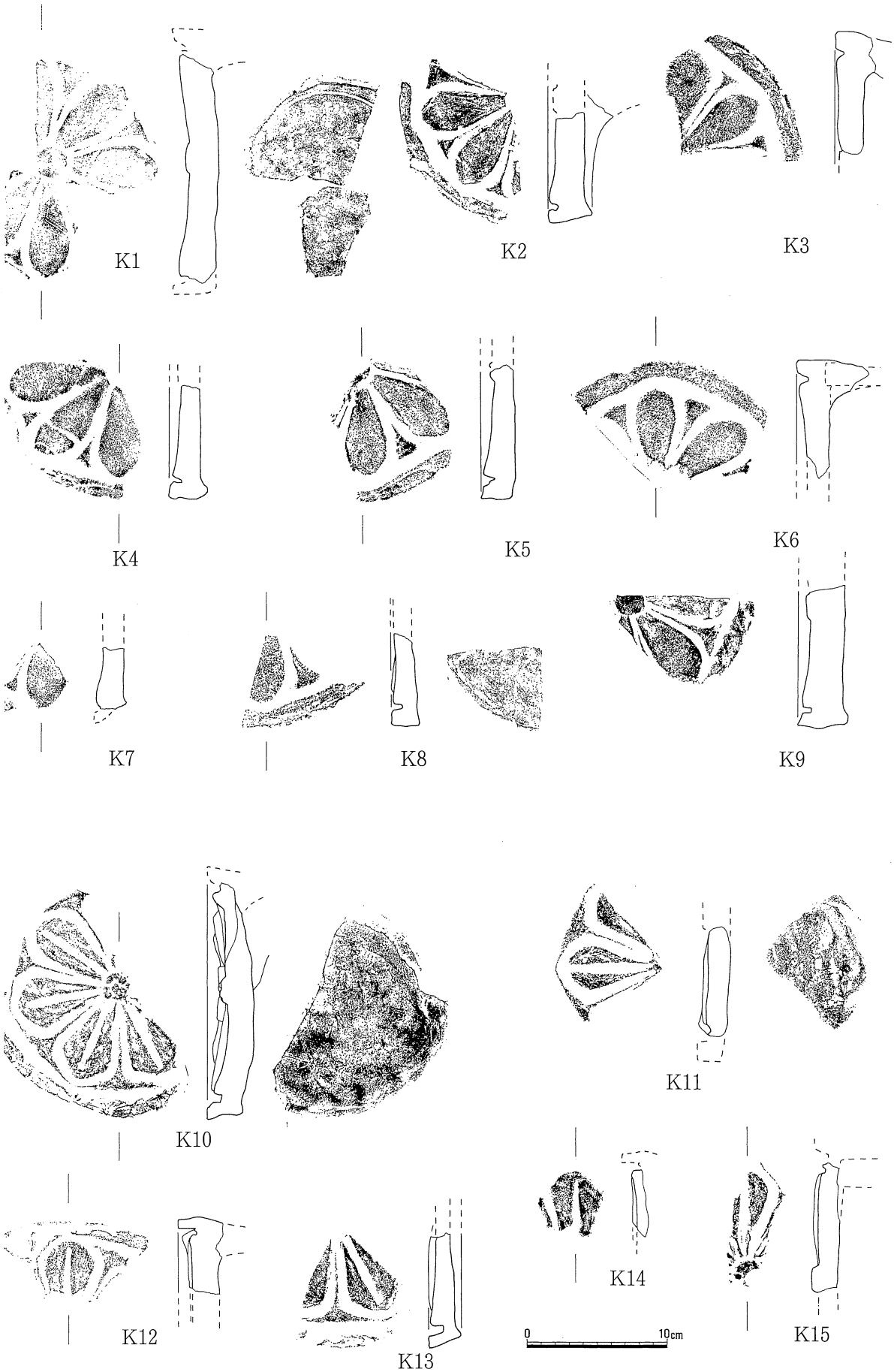
軒丸瓦１類（第130図）　素弁八葉蓮華紋軒丸瓦（Ｋ１～Ｋ９）。１次調査で賞田廃寺第１様式軒丸瓦としていたものの１種である。１次２次調査分をあわせて９点出土している。瓦当径は17㎝、中房は径2.3㎝高さ２～３㎜で蓮子は形跡をほとんどとどめないが１＋４と思われる。紡錘形の蓮弁は８葉。蓮弁、間弁ともにやや肉厚で、弁厚は弁央でわずかに厚みを減じ弁端に向け厚みを増す。間弁は弁間内に収まり足は中房の５㎜手前まで細くのびる。瓦当厚は弁央部で1.5～2.7㎝である。外縁は素紋の平縁だが、粘土の押し込み不足による斜縁のものも１点ある(2)。外縁内側を蓮弁先端にあわせて角をもたせ３～５㎜の幅で縁取り、蓮弁・間弁にも同様のしっかりとした縁取りがなされている。瓦当縦断面形は内湾する。瓦当裏面は全体に指押さえをし、外周に沿ってなでているため端部は断面三角形状に盛り上がる。丸瓦は瓦当裏面上端に沿った浅い接合溝に接合し、凹面に少量の補足粘土を貼り付けているが、なかには凸面に補足するものもある。丸瓦先端は無加工とみられ、接合強化のための傷は見られない。丸瓦部分がほとんど残っておらず、接合した丸瓦の特徴は言及できないが、接合部分での厚さは1.5cmである。硬質で焼き上がりの良い須恵器様のものと軟質で灰白色ないし灰色を呈するものとがあり、前者には薄手のものが後者には厚手のものがみられる。

范傷は多く観察され、第129図にその位置を概略的に示した。図示した以外にも木目に沿った小さく薄い傷が見られるが、粘土の押しつけ具合や遺存状態等により確認が左右されそうなため、顕著なもの以外は省略した。弁端から斜め右方向に外縁を接する幅㎜の范傷Ａを持つ蓮弁を蓮弁１、その右隣の間弁を間弁１として順次時計回りに数える(3)。



第129図　軒丸瓦１類范傷位置図

Ｋ１は外縁を欠くが、中房及び蓮弁１・２の一部・３・４の一部・５の一部・７の一部・８間弁１の一



第130図　軒丸瓦１類・２類

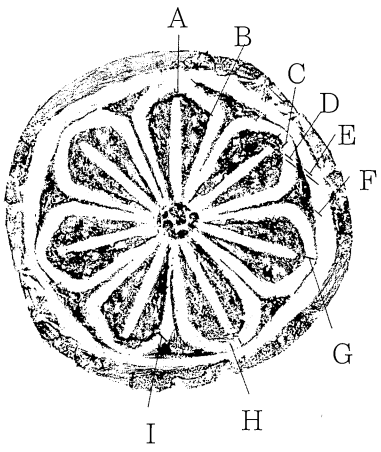
部・２の一部・３・４の一部・７・８からなるもっとも大きな破片で笵傷も多く、笵傷Ｂ・Ｃ・Ｆ・Ｇ・Ｉ・Ｊ・Ｏ・Ｐ・Ｑ・Ｓがある。傷Ａ・Ｅはないが共に根元から折れた痕跡がある。Ｋ２は蓮弁５の一部・６・７間弁５・６・７及び外縁からなり、笵傷Ｋ・Ｌ・Ｍ・Ｎがある。Ｋ３は蓮弁４の一部・５間弁４・５及び外縁の破片で、表面の風化もあるが明瞭な笵傷は観察されない。Ｋ４は蓮弁２・３・４間弁２・３及び外縁がのこり、笵傷Ｄ・Ｅ・Ｆがある。Ｋ５は蓮弁６・７間弁６・７の一部及び外縁の破片で、笵傷Ｍ・Ｎ・Ｏ・Ｐ・Ｑがある。Ｋ６は蓮弁７・８間弁６・７・８の一部及び外縁からなる破片で、笵傷Ｎ・Ｐ・Ｑ・Ｒがある。Ｋ７は蓮弁３の一部間弁３の一部の小片で、笵傷Ｅ・Ｈ・Ｉがみられる。Ｋ８は中房蓮弁１・２の一部・８の一部間弁１の一部・８及び外縁が残り、笵傷Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｓ・Ｔがある。Ｋ９は蓮弁８の一部間弁７の一部及び外縁の小片で、笵傷Ｒがみられる。以上のように、笵傷を手がかりとして蓮弁・間弁の形状を加味すればこれら９点は同笵品といえる。

軒丸瓦２類（第130図）　素弁七葉蓮華紋軒丸瓦（Ｋ10～Ｋ15）。１次調査で賞田廃寺第１様式軒丸瓦としていた瓦のうち、蓮弁中軸に溝を刻む瓦である。１次調査では蓮弁数を８葉と考えたが、今回の調査で瓦当面の１／２の破片が出土し、七葉蓮華紋軒丸瓦であることが判明した。軒丸瓦２類は溝が蓮弁内に収まる２Ａ類と弁端にまで達する２Ｂ類とに分かれる。また、蓮弁が中房と接する付け根部分において、２Ａ類が蓮弁に厚みを持つのに対し２Ｂ類ではほとんど厚みがない点も異なっている。２Ｂ類は小片のため不確定部分が多いが、上記の点や後述の弁端の傷の共通性からすると２Ａ類は２Ｂ類の彫り直しの可能性もある。２類軒丸瓦の特徴については２Ａ類を以って２類を代表して記述することとする。なお、１次調査分をあわせて２Ａ類が４点、２Ｂ類が２点、どちらか不明の小片が１点出土している。

瓦当径は17.6㎝、中房は径1.8㎝、高さ５㎜で蓮子を１＋４に配し、蓮弁はやや幅広の紡錘形で７葉、厚みはほぼ均一である。間弁は弁端を覆う大きなＴ字形で足は中房につくものもある。蓮弁・間弁ともにやや肉厚で、瓦当厚は弁央部で1.7～1.9㎝である。外縁は素紋の平縁で、外縁内側は蓮弁と同数の角をもたせて３～５㎜の幅で縁取る点、蓮弁・間弁にも同様のしっかりと縁取られる点、瓦当縦断面形が内湾する点、瓦当裏面を全体に指押さえをして端部がやや断面三角形状に盛り上がる点、丸瓦を瓦当裏面上端に沿った浅い接合溝に接合し、凹面に少量の補足粘土を貼り付ける点など、製作手法や胎土・焼成は軒丸瓦１類と共通する。

２Ａ類（Ｋ10・Ｋ12～Ｋ14）の笵傷は９箇所確認できる（第131図）。Ｋ10は瓦当面の１／２の破片で外縁の欠損度が高いが中房と蓮弁１・２・３・４間弁１・２・３・４がのこり、笵傷Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉがみられる。Ｋ12は蓮弁４の一部間弁４の一部及び外縁の破片で、笵傷Ｈ・Ｉが認められる。Ｋ13は蓮弁２・３の一部間弁２及び外縁の破片で、笵傷Ｃ・Ｄ・Ｅがある。

２Ｂ類（Ｋ11・Ｋ15）は２点とも小片であるが、弁端の溝の延長上に２すじ笵傷がみられる点は２Ａ類と共通する。Ｋ11は弁端の傷のほか、蓮弁の側縁が弁端に

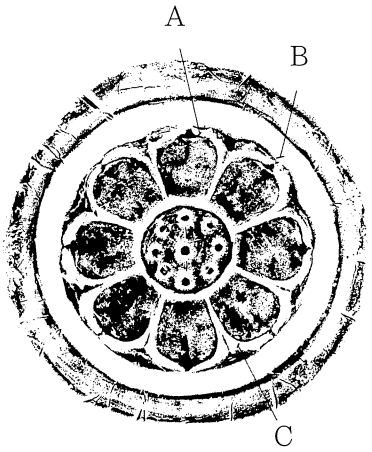


第131図　軒丸瓦２Ａ類笵傷位置図

向け屈曲する部分で幾筋もみられる。K15も遺存部分は少ないが、K11と同様に傷が見られる。

軒丸瓦３類（第133～135図）　素弁八葉蓮華紋軒丸瓦（K16～K26）。ＡＢ二つに細分したが、３Ａ類は１次調査で賞田廃寺第２様式軒丸瓦としていた瓦、３Ｂ類は第２様式軒丸瓦と紋様構成が類似しながらも瓦当径がやや小さいために築地瓦としていた瓦である。しかし、３Ｂ類は出土状況や瓦当径では築地所用と積極的に裏付けることが困難であるので、軒丸瓦３類に含めることとした。２者とも外縁は素縁で外区と内区の境には幅広で山形の圏線が巡るが、外縁と弁端との間をＵ字型の溝が２本接して巡る感じである。やや突出する中房には蓮子が１＋８に配され、蓮弁はやや扁平であるが弁端は反転し、蓮弁中軸に稜を持つ。瓦当裏面はナデがおこなわれ、外縁は平坦であるが、３Ｂ類ではふくらみを持つものがある。

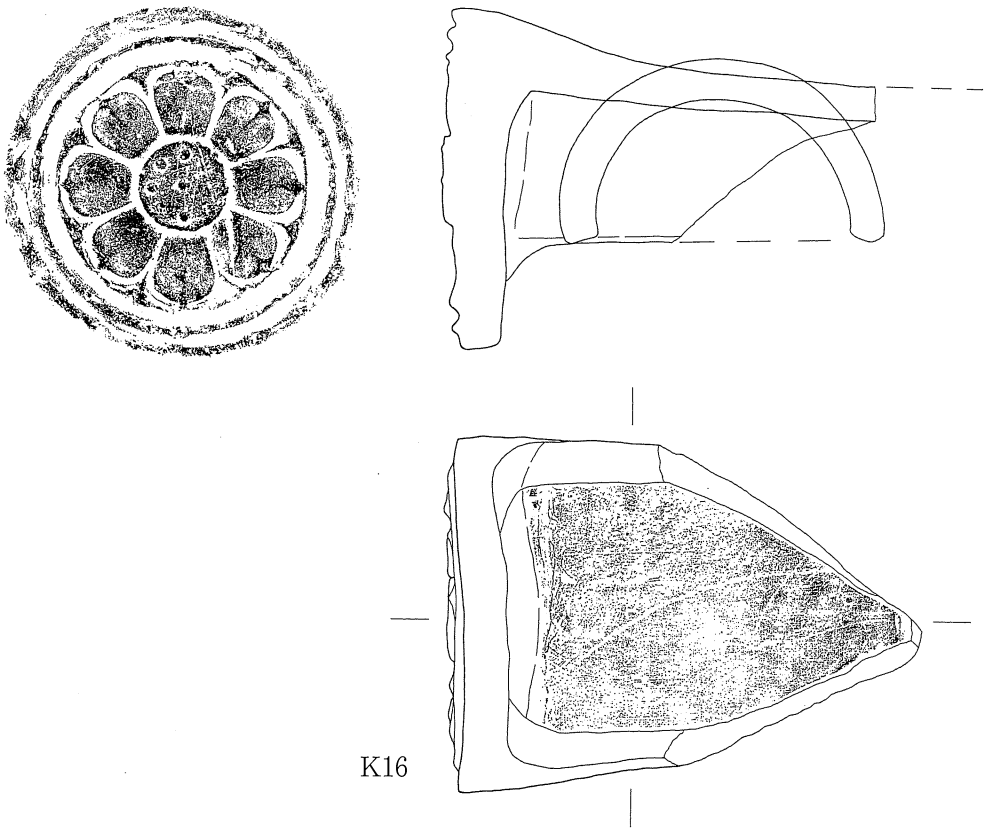
３Ａ類（K16～K22）の瓦当径は18㎝、中房は径4.6㎝高さ３㎜で、瓦当厚は2.4～2.8㎝ある。蓮子は径５㎜と小ぶりである。間弁は大きめのＴ字形で弁端をおおい、反転した弁端よりわずかに突出する。また、間弁の脚は蓮弁のほぼ中央付近までである。外縁は斜縁で、圏線や間弁ほどは突出しない。K20～K22で粘土接合痕をみると、まず瓦笵に厚さ1.5～２㎝程度の粘土を詰め、次に外周から５㎜～1.5㎝離して丸瓦をおく。瓦当裏面にさらに１～２㎝の粘土を足し、丸瓦接合強化のため凸面・凹面双方に粘土を貼り足す。丸瓦の接合位置は個体によりばらつきがあるが、これが時期差を示すものかは、次に述べる笵傷とも照合を試みたが資料点数のなどの制約により答えをみなかった。丸瓦先端は無加工で、接合強化のための刻みも確認されない。焼き上がりは灰青色で硬質の須恵質、灰色でやや軟質の須恵質、褐茶色で硬質の土師質の３者がある。笵傷は３箇所確認できる。傷Ａは蓮弁１の弁端の右横に、傷Ｂは蓮弁２の弁端と圏線の間の溝に、傷Ｃは蓮弁４の右肩部にそれぞれあり、傷Ｂはわずかに進行がみられる。（第132図）

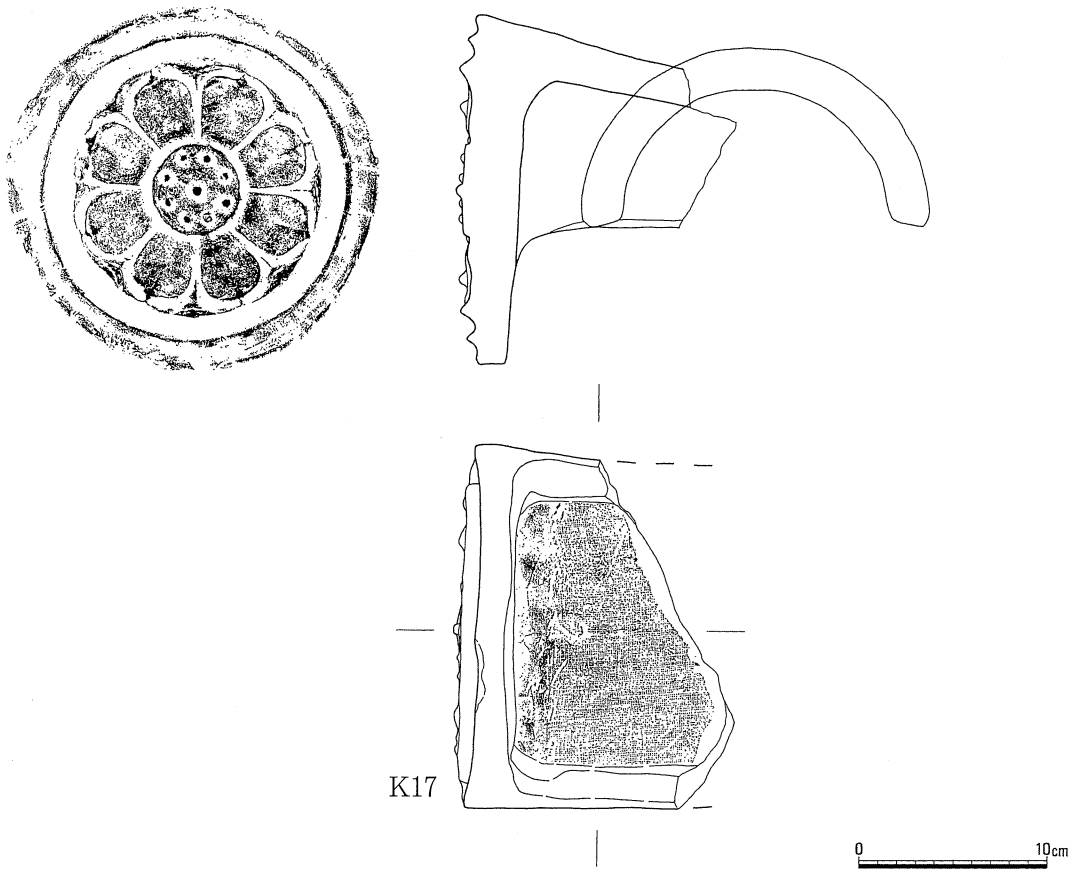


第132図　軒丸瓦３Ａ類笵傷位置図

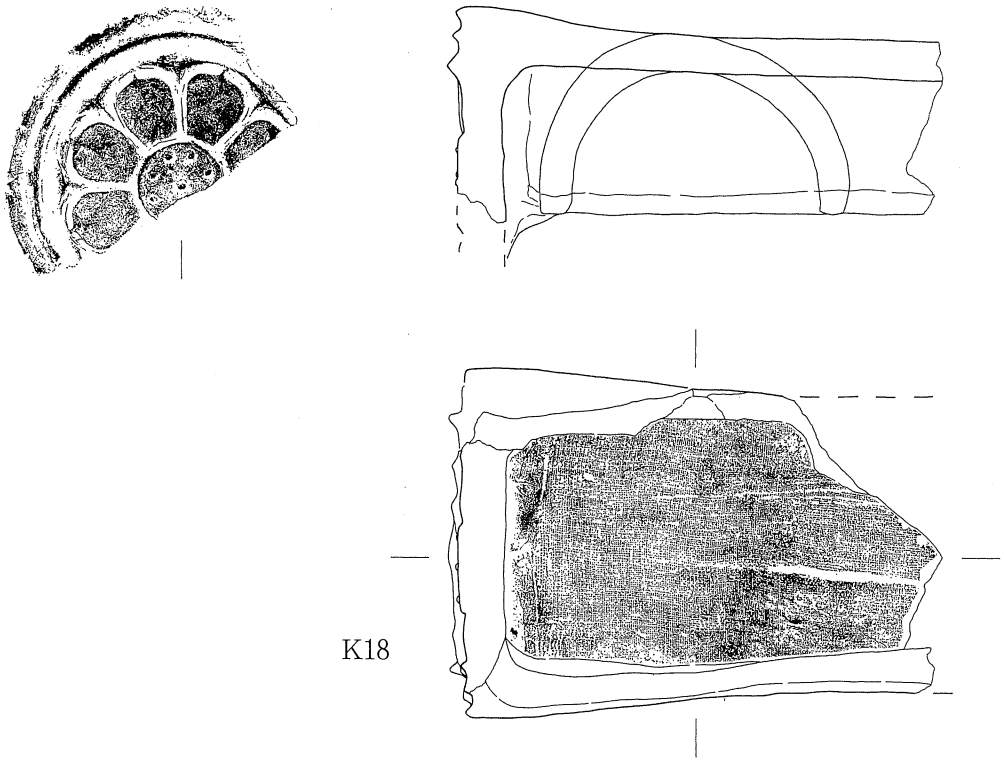
３Ｂ類（K23～K26）は瓦当径16.6㎝で、径3.8㎝高さ４㎜の中房には小ぶりの蓮子が１＋８に配置される。瓦当厚は1.8～3.6㎝で、２㎝前後の薄手のものと３㎝を超える厚手のものとがある。蓮弁と中房は溝で縁取りがされる。間弁は３Ａ類同様Ｔ字形で弁端を覆うが、脚が短く弁端から１／３程度までしかない。外縁は幅の狭い平縁ないし斜縁で圏線や弁区よりも突出する。丸瓦は広端部の幅13.8㎝高さ6.9㎝厚さ1.4～1.7㎝で外周に接して接合され、広端面には接合強化のための平行線の傷が施されるが凹面にはない。瓦当裏面の接合部には指頭圧痕が残るものもある。

軒丸瓦４類（第137～139図）　単弁八葉蓮華紋軒丸瓦（K27～K39）。１次調査で賞田廃寺第３様式軒丸瓦としたものである。瓦当径は17.4㎝で、高さ５㎜とやや突出した直径4.8㎝の中房には、蓮子が１＋８に配置される。蓮弁は細く縁が突出して、中軸に稜が走り中央にふくらみを持ち、間弁は蓮弁と同様の表現で裏弁様に配される。瓦当厚は弁央のふくらみの横で2.5～3㎝である。外区内縁の二重圏線内には28の珠紋がめぐる。外縁は直立した平縁で紋様はない。瓦当裏面は平坦で、指ナデ痕跡の残る個体もある。丸瓦広端部は幅10.5㎝高さ5.2㎝厚さ1.5～1.8㎝で、凹凸両面に長軸に沿って１～２㎝間隔で長さ約10㎝のすじを刻む。瓦当面から３～８㎜離れた外周には段ないし突線がめぐり瓦笵は



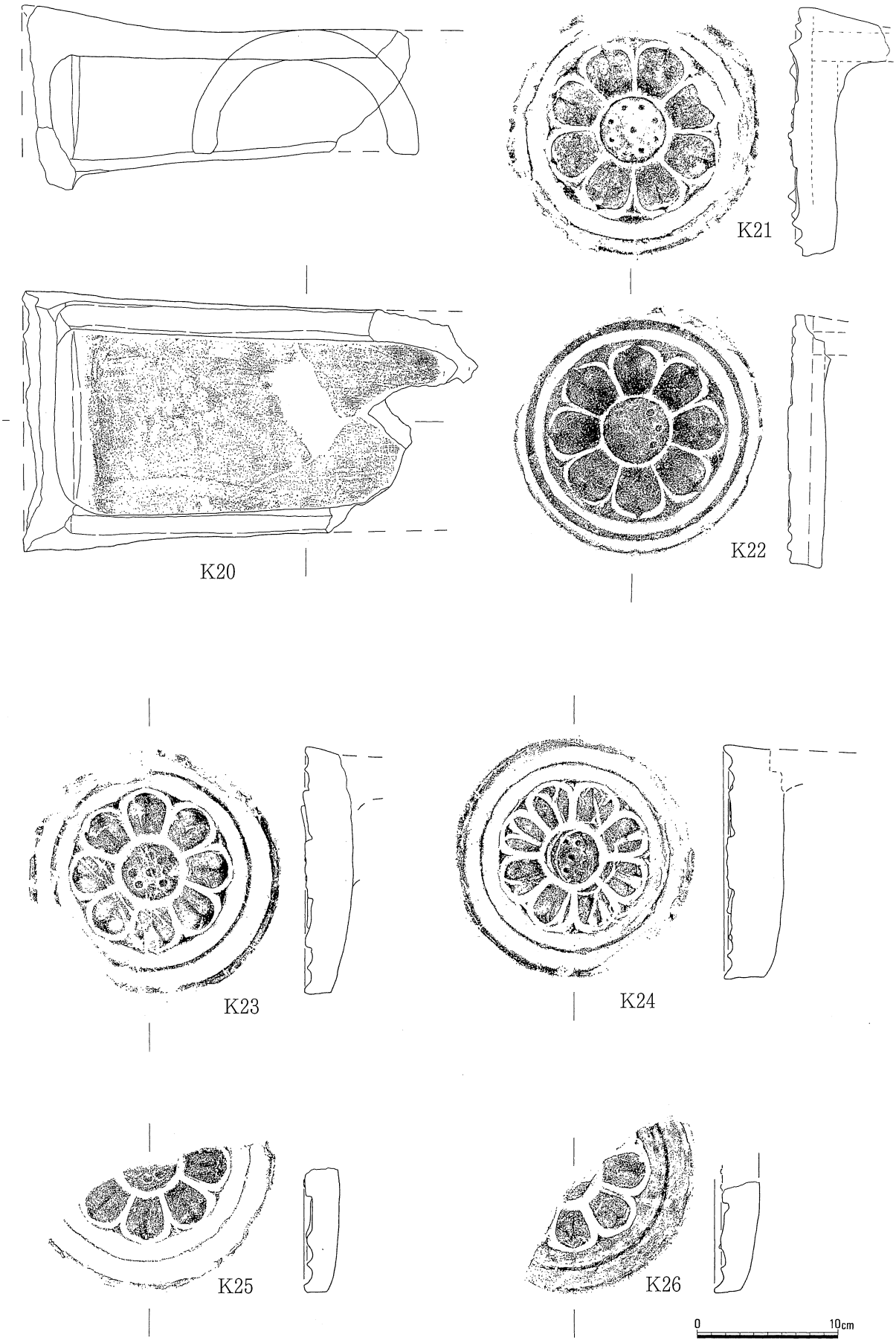


第133図　軒丸瓦３Ａ類(1)



第134図　軒丸瓦３Ａ類(2)

0　10cm



第135図　軒丸瓦３Ａ類(3)・３Ｂ類

瓦当を包み込んでいたとみられる。また、突線に直交する合わせ目痕跡から枷型も使用していたことが分かる。

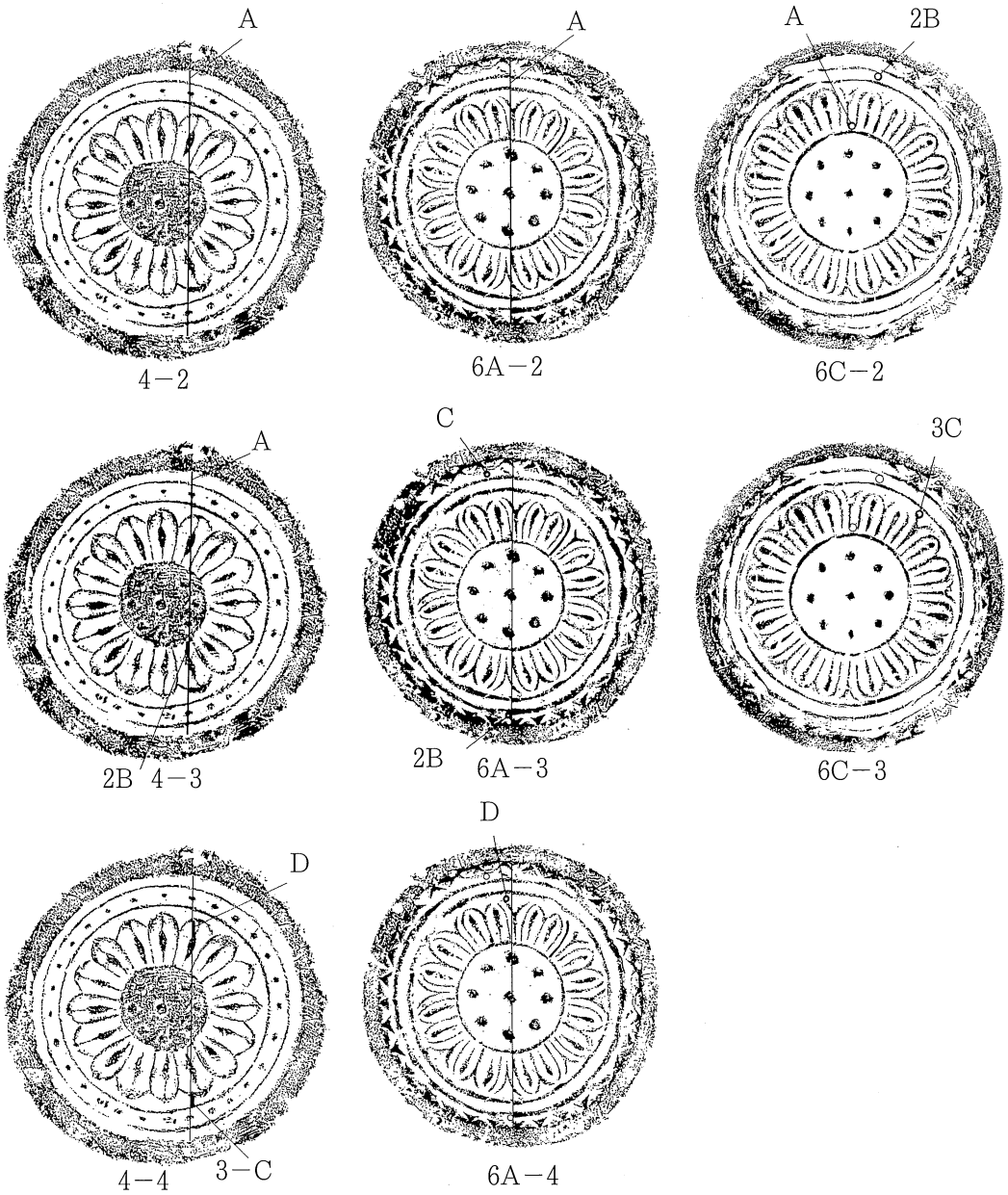
瓦笵は使用に伴い笵傷や笵割れが現れており、次の４段階に分類できる(第136図)。

４－１：無傷の段階。K27～K30。

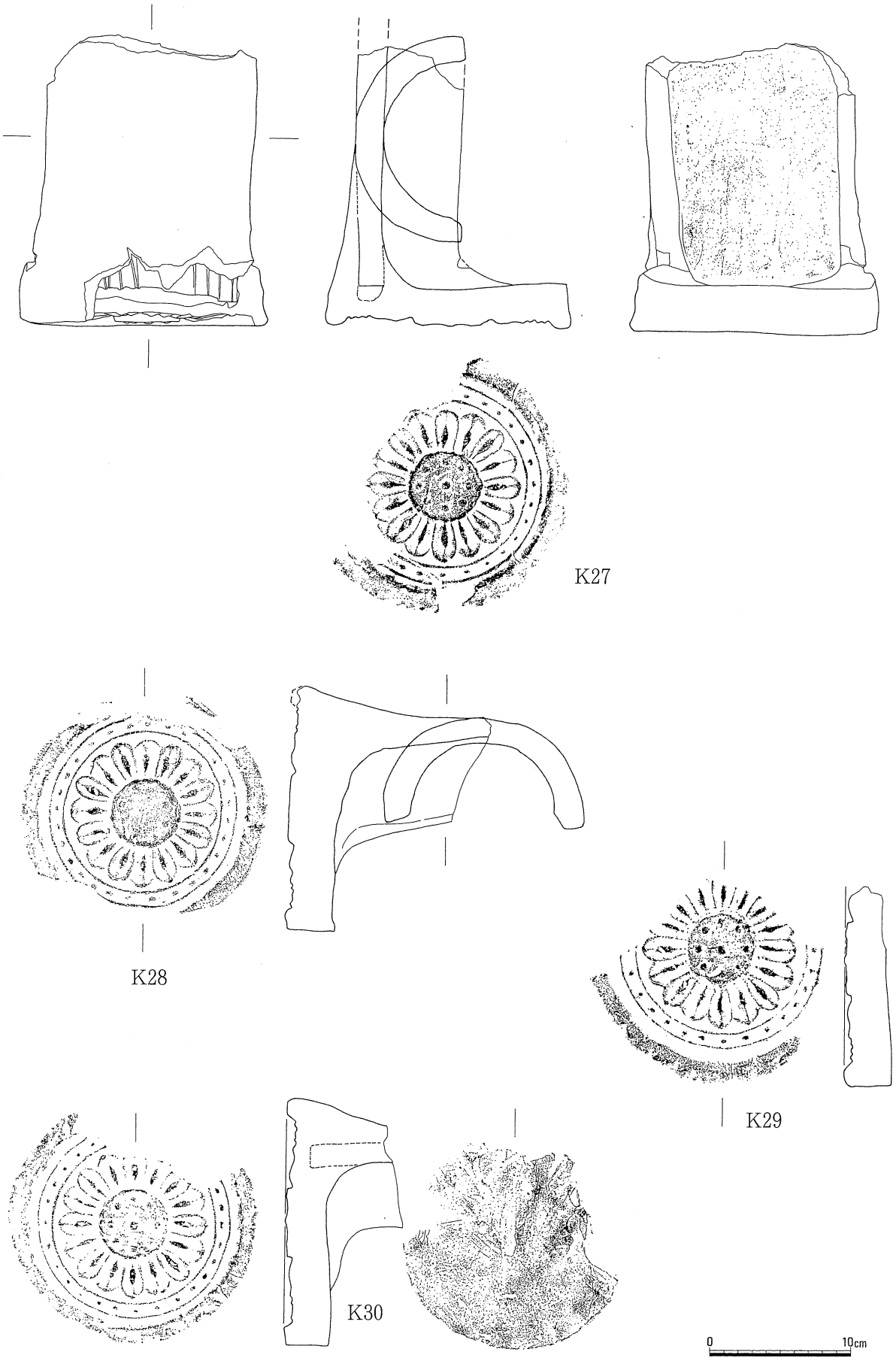
４－２：間弁１の中央と間弁４の中央をむすんで、ともに外縁にいたる傷Aが生じた段階。

４－３：第２段階の傷Aが割れに転じ、さらに間弁４の根元に割れに沿って傷Bが生じた段階。割れた瓦笵を使用したため、水平方向と同時に垂直方向にも“ずれ”が生じている。K34・K36・K37・K39。

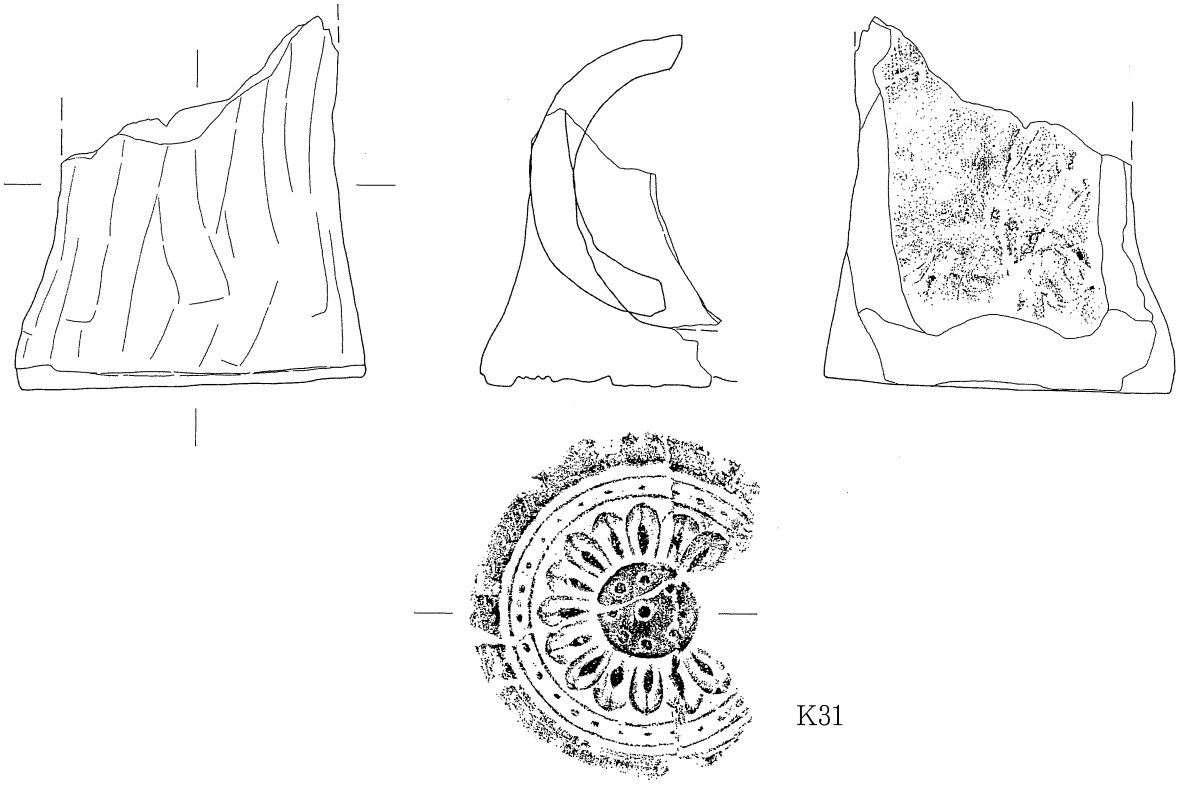
４－４：間弁４の弁先と圏線の間に割れに沿って傷Cが生じ、中には間弁１に傷Dを生じるものもあ



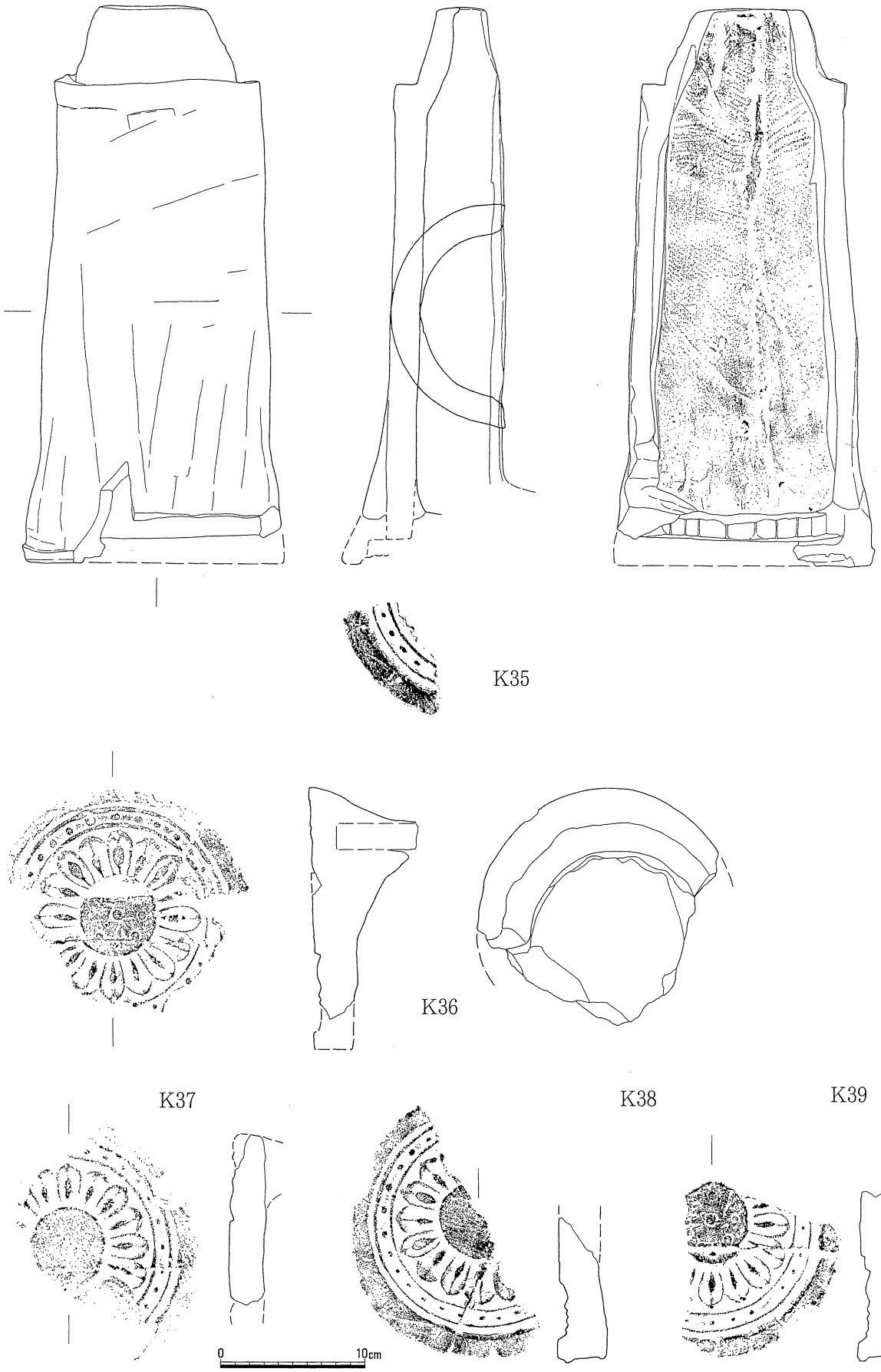
第136図　軒丸瓦４類、６Ａ・６Ｃ類笵傷進行図



第137図　軒丸瓦４類(1)



第138図　軒丸瓦４類(2)



第139図　軒丸瓦４類(3)

る段階。丸瓦の接合は第１段階では上端から８㎜第４段階では３㎝の位置となり、笵傷の進行に伴い丸瓦の接合位置が下がっている。K31～K33・K38。

軒丸瓦４類は統一新羅系の瓦とされ、紋様構成、特に蓮弁の表現が上淀廃寺式(教昊寺式)との類似が指摘されている(4)。また、平城宮6151A型式との類似性も指摘されている(5)。

軒丸瓦５類（第140図）　複弁八葉蓮華紋軒丸瓦(K40～K45)。１次調査で賞田廃寺第４様式軒丸瓦としたものである。瓦当径は16.8㎝、中房は直径5.4㎝の凹形で蓮子を５＋８に配し、圏線と溝を巡らす。蓮弁の外周がくぼみ、子葉や弁区外周・間弁が突出するなど、陰陽逆転した瓦笵が用いられている。瓦当厚は中央部で2.9～3.2㎝である。外区内縁は１重の圏線で、外縁は直立する素紋の平縁である。丸瓦は広端面の幅約11㎝高さ5.3㎝厚さ1.2㎝に復原できる。丸瓦の接合位置は低く、上端から2.3㎝離れた溝に差し込まれる。瓦当面から１㎝離れた外周には突線ないし段差が観察される。また、圏線と外縁との間に隣り合って２箇所に幅広の笵傷がある。１次調査分もあわせて６点出土している。いずれも土師質ないし焼きのあまい軟質の須恵質である。類例は岡山市居都廃寺で出土している(6)。

軒丸瓦６類（第140～142図）　複弁八葉蓮華紋軒丸瓦(K46～K62)。１次調査で賞田廃寺第５様式軒丸瓦とした瓦である。圏線で囲った平板な中房内には１＋８の蓮子を置く。弁区には子葉の突出した複弁とＹ字形の間弁を配する。外区内縁は２重圏線で、平縁の外縁には凸三角形を配する平城宮6225型式系統の軒丸瓦である。須恵質で堅緻に焼き上がったものもあるが、砂質で焼きのあまいものが多い。Ａ・Ｂ・Ｃの３者に細分できる。

６Ａ類(K46～K56)は瓦当径約17㎝中房径6.2㎝、外縁の凸三角形は32。弁区は中ふくらみで外側へ沈み込む。蓮弁の先端はとがり気味で圏線はやや幅広で上端が丸い。６Ａ類は平城宮6225Ａ型式とよく似ている(7)が、間弁の左に右弁の覆線を持つ弁が１つあるのが特徴である。丸瓦の接合位置は上端から３㎝離れている。丸瓦の広端部の幅は約13.5㎝である。笵傷の進行により４段階に区分できる(第136図)。

６Ａ－１：無傷。６Ａには砂質で焼きがあまいために瓦当面の遺存状態の悪い個体が特に多く、明らかに傷がないといえる資料がない。

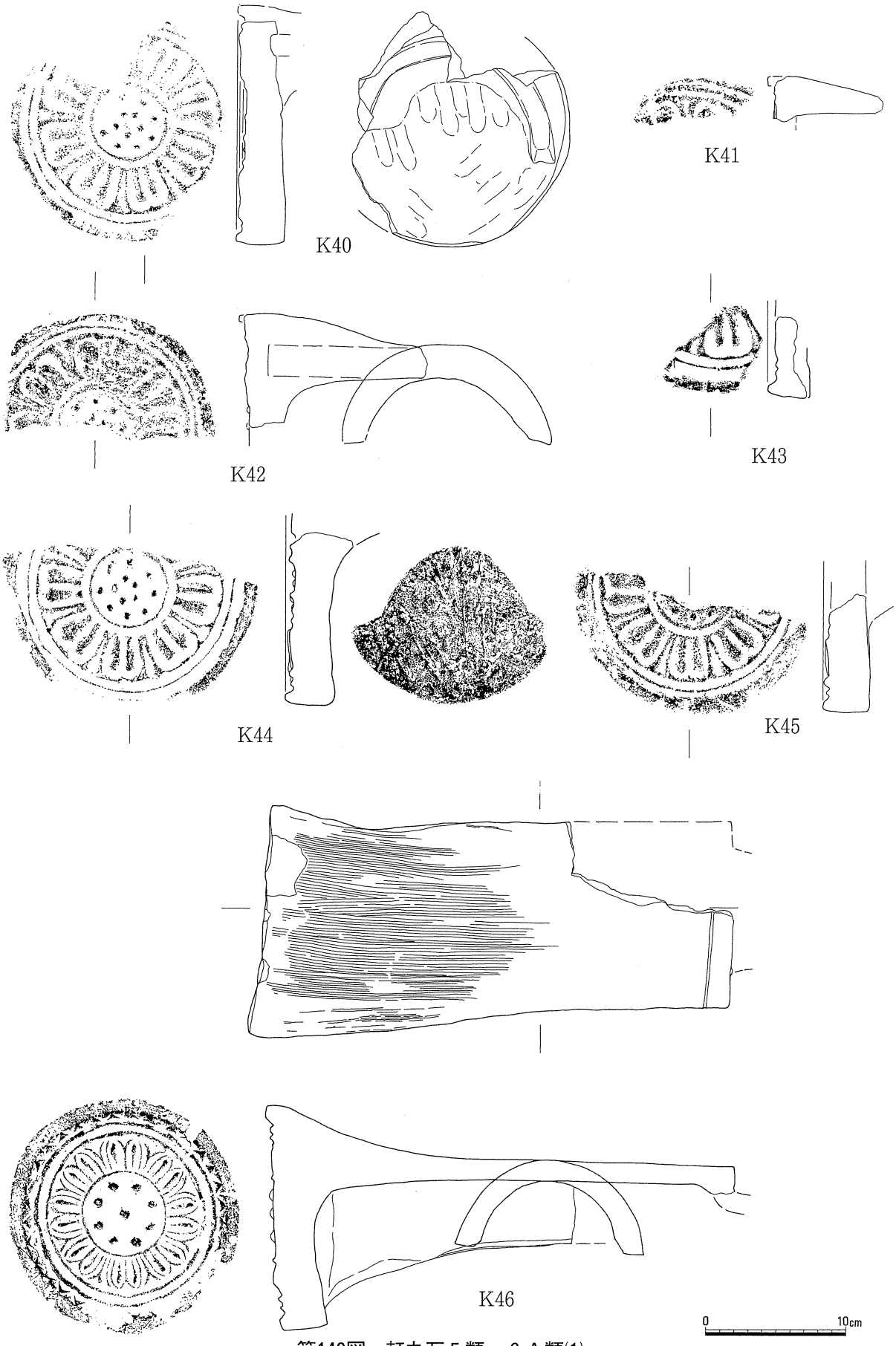
６Ａ－２：前述の間弁(間弁１、その左を複弁１とする)の左隣の間弁８を直径上に通り両外周に及ぶ傷Ａがつく。K51・K53。

６Ａ－３：間弁５の上方の凸三角形の右角に前段階の傷Ａに沿いさらに太く傷Ｂがつき、複弁８の右弁上方の凸三角形の底辺右半に傷Ｃが付く。K46～K48・K50・K54。

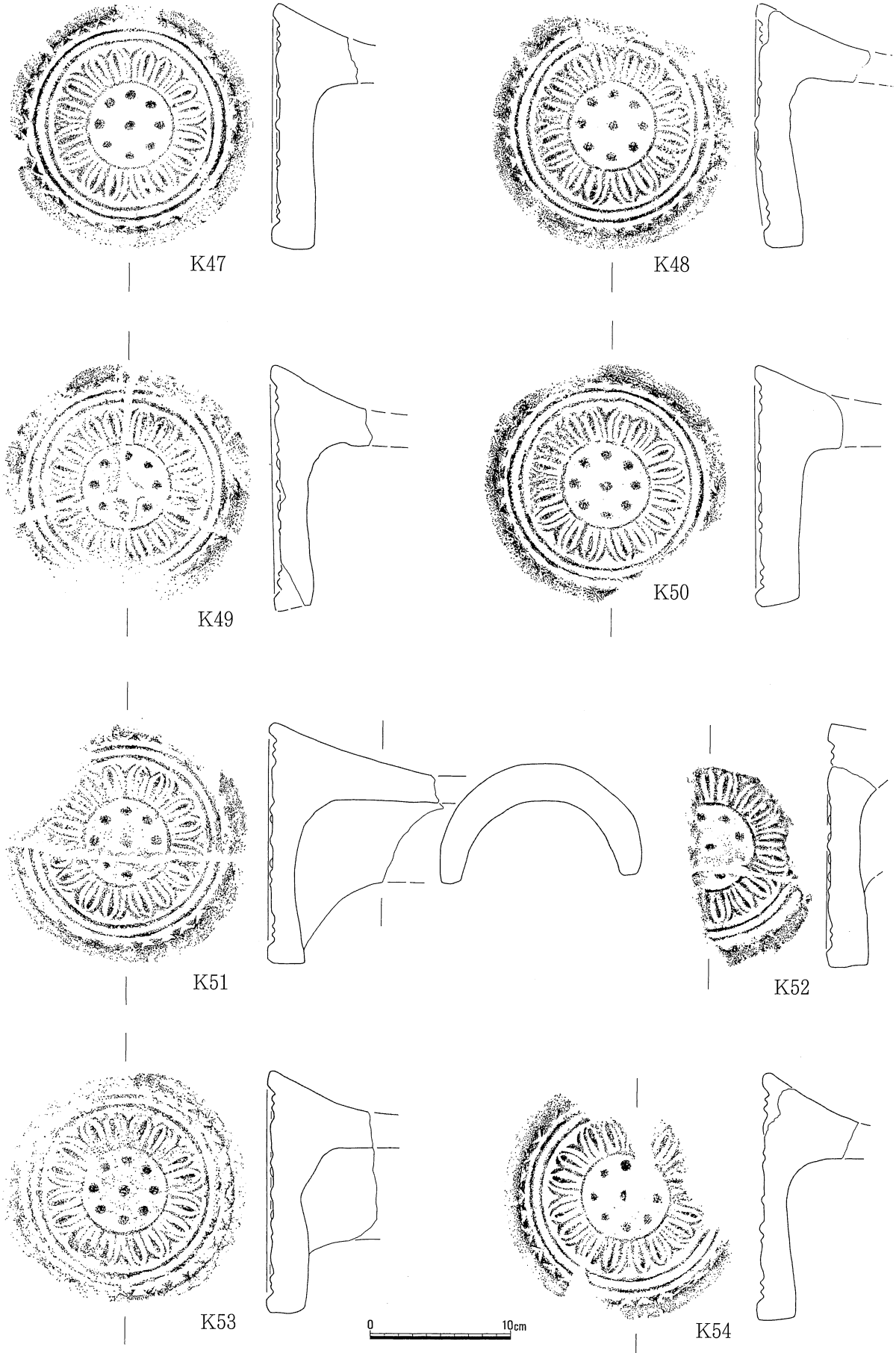
６Ａ－４：間弁８の左手先と圏線の間に傷Ｄが付く。K55・K56。

６Ｂ類(K57～K59)はやや大形で完形品がないが復原すると瓦当径約19㎝。弁区は平坦である。蓮弁・圏線等の紋様は突出し幅も広く力強い。Ｙ字形の間弁は大きく手を広げ、左手先は右弁左輪郭線とつながって右弁の頂点を形成し、右弁右輪郭線はその内側でやや小さく左輪郭線と接合する点が特徴である。花弁の先端はとがり気味で圏線は６Ａ類と同様にやや幅広で上端が丸い。丸瓦の接合位置は上端から５㎝近く離れる。笵傷は右弁の先２本の圏線間に平行する２本の傷がある。

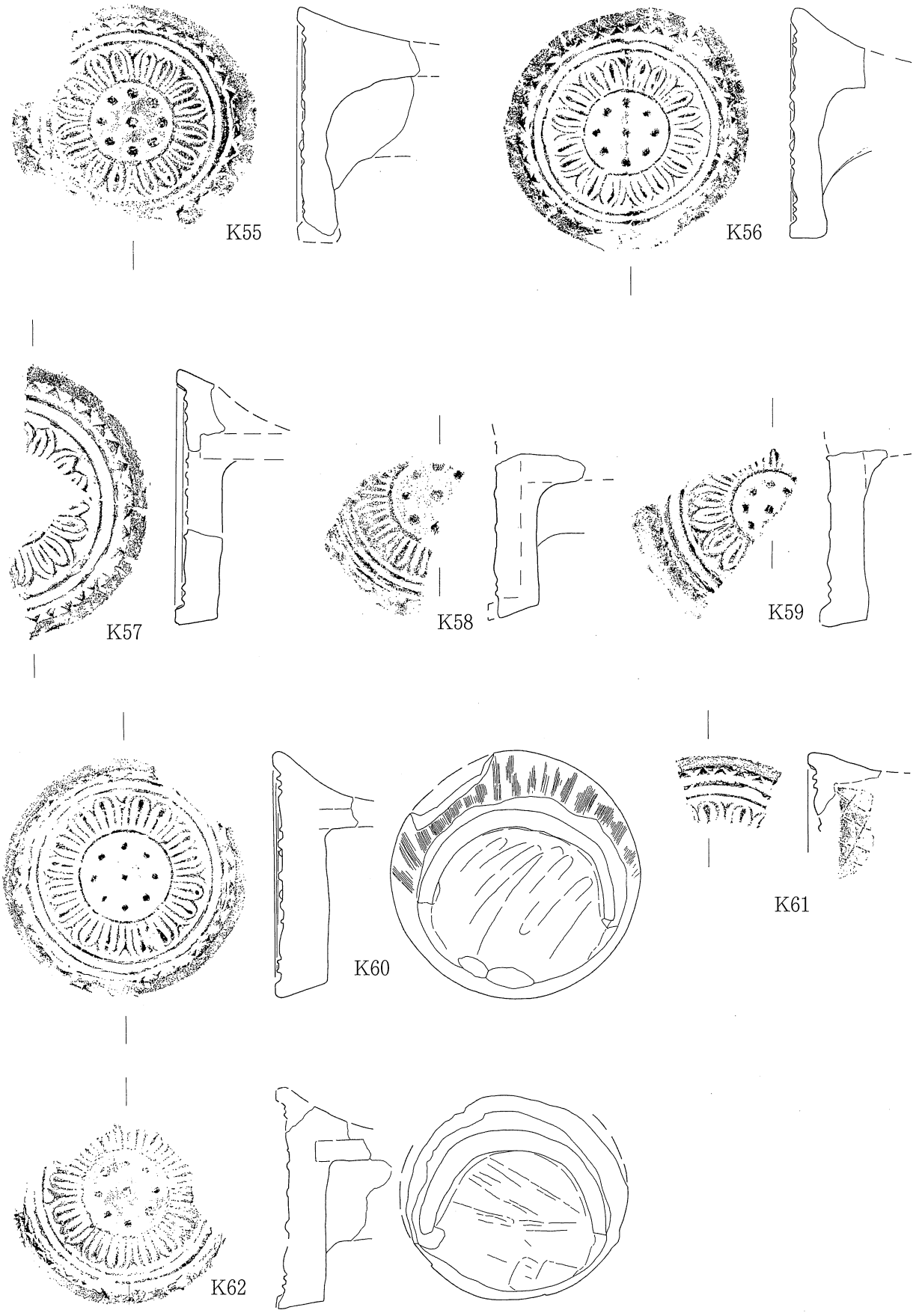
６Ｃ類(K60～K62)は瓦当径約17.2㎝中房径6.5㎝、外縁の凸三角形は32。弁区は６Ａ類と同様である。やや大きめの中房に小さめの蓮子、蓮弁の先端は丸く圏線は幅狭く直立している点などが特徴で、平城宮6225Ｃ型式とよく似ている。側面下半は円周方向に数度に分けケズリを行っている。丸瓦



第140図　軒丸瓦５類・６Ａ類(1)



第141図　軒丸瓦６Ａ類(2)



第142図　軒丸瓦６Ａ類(3)・６Ｂ類・６Ｃ類

の接合位置は上端から約４㎝離れている。接合する丸瓦は内法幅10.5～11㎝高さ６㎝厚さ1.2～1.5㎝である。ほぼ完形品が２点出土しており、それぞれを笵傷の進行により６Ｃ－２・６Ｃ－３とする(第136図)。

６Ｃ－１：無傷の段階。出土資料はない。

６Ｃ－２：左弁の一つの付け根に左斜め下方向の傷Ａと、同じ左弁の子葉の延長方向圏線間に左斜め下方向の傷Ｂがみられる。Ｋ60。

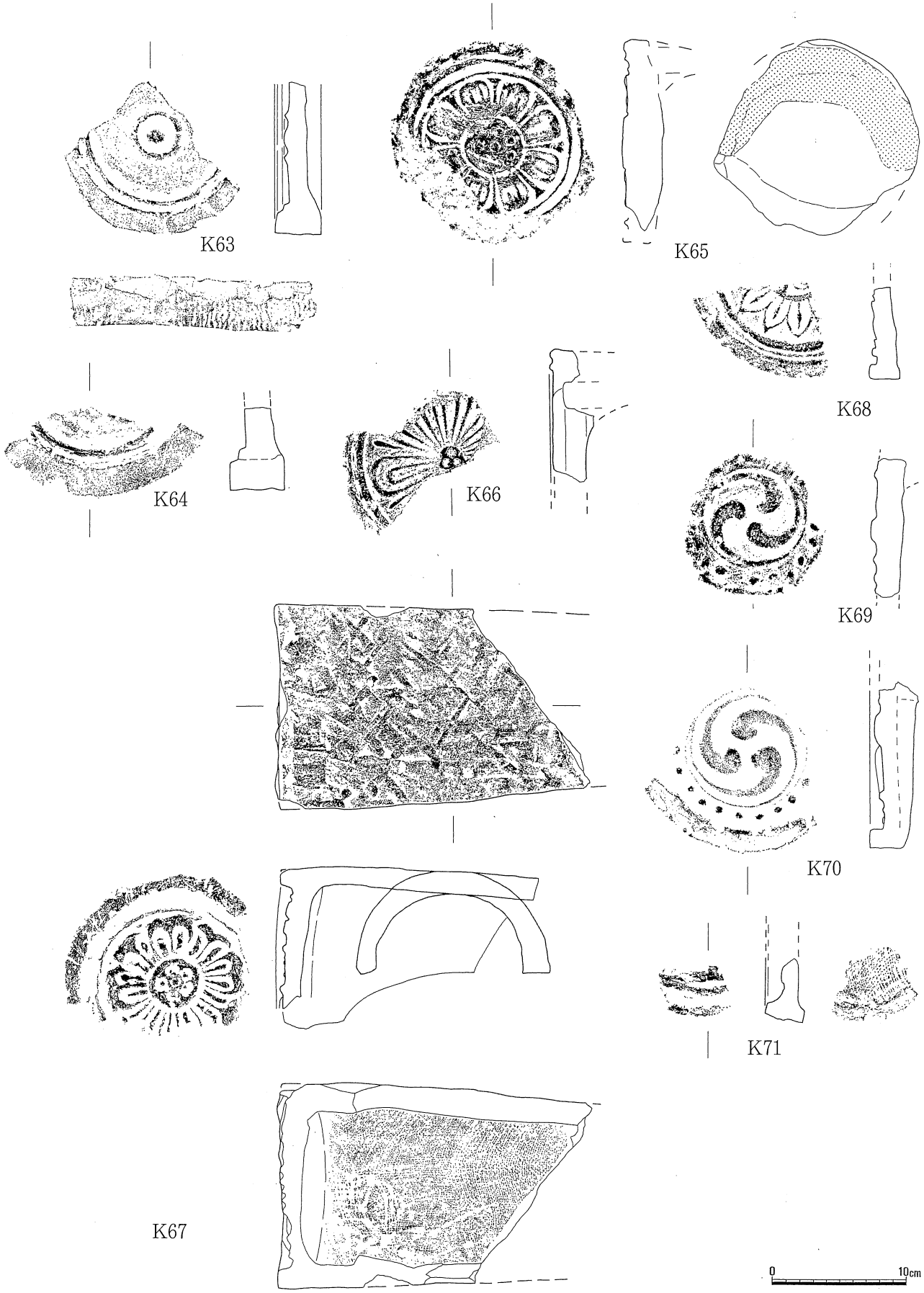
６Ｃ－３：先の左弁右隣の間弁のＹ字左手先と圏線の間に傷Ｃができる。Ｋ62。

軒丸瓦７類（第143図）　重圏紋軒丸瓦(Ｋ63・Ｋ64)。直径1.8㎝高さ３㎜の半球形の中房に断面三角形の圏線が直径４㎝で囲む[8]。外縁は平縁の素縁であるが、内側に幅５～８㎜の段が巡る。凹面外縁も外面同様に突出し、段から内側は指ナデが施される。外周には瓦当面側を中心にヘラケズリを施すが不十分で縄叩き目痕跡が残っている。外縁に沿った粘土接合痕跡や布目痕跡から、丸瓦円筒の内側に瓦当を接合して、不要部分を切り取った作り方を観察できる。２点出土しているが、瓦当径約14㎝のＫ63と16㎝のＫ64に分かれる。焼成はともに須恵質で特にＫ63は良質の須恵器に近い。Ｋ63は内区の厚さ1.2～1.5㎜外縁の厚さ3.4㎜、Ｋ64は内区の厚さ２㎝外縁の厚さ4.2㎝である。

軒丸瓦８類（第143図）　複弁八葉蓮華紋軒丸瓦(Ｋ65)。１次調査では白鳳瓦として報告している。今回は出土がなく１次調査時の１点のみである。瓦当径は15.4㎝で瓦当厚は弁央部分で2.6㎝である。中房はやや突出して直径4.3㎝、周囲に圏線が巡る。蓮子は１＋８の配置に直径７㎜の竹管状のスタンプ紋を押す。蓮弁は中央がくぼんで先端が突出し、周囲の縁取りを行う。２つの子葉は貼り付け粘土により表現されている。くさび形の間弁の足は中房にまで届く。外区内縁は圏線、外縁は残りが悪いが幅の狭い平縁と考えられる。丸瓦は外縁から５㎜弱離れた幅２㎝ほどの浅い溝に接合される。瓦当裏面はややふくらみを持つ。幡多廃寺創建瓦のやや退化した紋様形態である。

軒丸瓦９類（第143図）　重弁七葉蓮華紋軒丸瓦(Ｋ66)。今回の調査で初めて１点のみ出土した。瓦当径約16㎝で、瓦当厚は弁央部分で2.5㎝である。中房・蓮子は低くつぶれており不明瞭であるが、中房径は復原すると2.5㎝である。蓮弁と子葉は同形のものをともに低い突線で表現されており、間弁も低い突線で直線表現している。外区は幅４㎜の圏線と幅５㎜程度の狭い外縁とでなる。瓦当裏面には補足粘土をなでつけた痕跡が残っている。丸瓦は上部外縁が欠損しているため明確ではないが、上端から２㎝以上離れた幅２㎝深さ１㎝の溝に接合される。類例は岡山市吉井廃寺[9]や岡山市百間川米田遺跡[10]などで出土している。

軒丸瓦10類（第143図）　複弁四葉蓮華紋軒丸瓦(Ｋ67)。今回の調査で初めて１点のみ出土した。瓦当径約14㎝である。直径3.6㎝の凸型の中房に竹管状のものを深く押しつけた蓮子を１＋５に配置する。蓮弁は肉厚の弁中に縁取りした子葉をおく。間弁も蓮弁と同様の手法で、蓮弁から左弁の左半分と右弁の右半分をとった形をしている。外区は圏線と幅1.2㎝高さ１㎝の平縁の外縁からなる。瓦当裏面に回る布目痕跡や粘土接合痕跡から、杵型に丸瓦部分とともに粘土をかぶせ、あとから外縁部分に粘土を貼り付けて成形していることが分かる。丸瓦凸面には大菱形の叩き痕が残る。焼成は硬質の須恵質で、胎土には１～３㎜程度の砂粒がよく目立つ。類例は長船町服部廃寺[11]や岡山市ハガ遺跡[12]にみられる。



第143図　軒丸瓦７類～15類

軒丸瓦11類（第143図）　単弁一二葉蓮華紋軒丸瓦（K68）。蓮弁を細い凸線で表現する。子葉も凸線であるが、中央部がややふくらみ気味のものもある。間弁はない。中房は不明で、外区は圏線と平縁の外縁からなる。１次調査で１点のみ出土している。

軒丸瓦12類　宝相華紋軒丸瓦。破片のため全形は不明だが、細隆起線で大きな木葉中に葉脈を表現して表８葉・裏８葉を配していると思われる。１次調査で１点のみ出土している。

軒丸瓦13類（第143図）　三つ巴紋軒丸瓦（K69）。外縁を欠くため瓦当径は不明である。左巻きの三つ巴紋で、巴の頭部は丸くなってはいるが幅1.2cmと肥大化はしていない。外区内縁には珠紋を配す。金堂最上層瓦溜まりから１点、西塔の新しい造成土から１点出土している。

軒丸瓦14類（第143図）　三つ巴紋軒丸瓦（K70）。右巻きの三つ巴紋で、巴の東部は幅２cmと肥大化している。外区内縁には珠紋を巡らす。外縁は素紋の直立縁で幅1.5cmの平縁である。瓦当径は約16cmである。

軒丸瓦15類（第143図）　不明（K71）。小片のため瓦当紋様や瓦当径は不明である。杵型１本作りで、やや粗い布目痕跡が裏面に残る。厚さ1.4cmと薄手でやや不良の瓦質焼成である。

２．軒平瓦

軒平瓦は１次調査２次調査あわせて431点出土し、20類に分類した。

軒平瓦１類（第144～153図）　顎凸帯軒平瓦（K72～K86）。模骨痕のある軒平瓦で、１次調査で賞田廃寺第２様式軒平瓦としていたものである。いわゆる朱線の観察される個体が多い。素紋の瓦当の顎部に幅２cm前後高さ１cm強の凸帯を貼り付けている。凸帯貼り付けの前に瓦当面を厚くするためか幅５cm前後厚さ数mmで薄く粘土を貼っている。凸帯の大きさや瓦当面からの位置、下貼り粘土の貼り方などは個体差がある。凸帯の両端は瓦側面に向け低くなっているので、貼り付けは分割後とみられる。凸帯の位置や凸面広端部側の叩き目ナデ消しの有無などによりＡ～Ｅに細分できる。

１Ａ類（K72～K79）の叩き目は１辺0.8～１cmの格子または菱形で、凸帯下貼り粘土部分まで残る。凸帯の接合傷は横方向の平行線を４～５本刻んでいる。全長42.8～43.7cm広端部幅35.8cm狭端部復原幅29～30cm厚さ1.8～2.7cmで、重さは狭端部に欠損のあるK72で5.8kgである。K72・K74～76では朱線が瓦当面から16～20cmの位置に残り、K72では側面にも回っている。

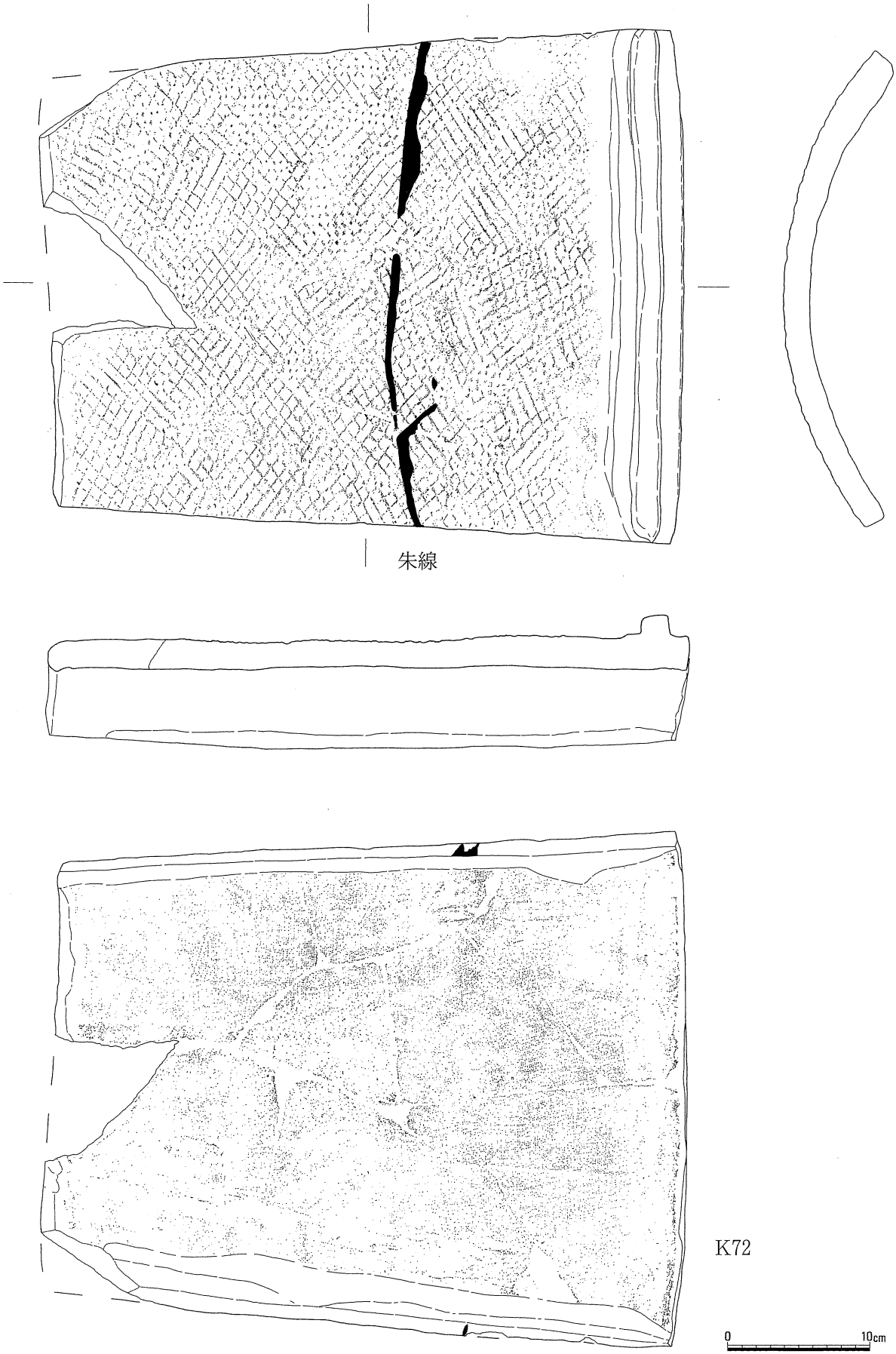
１Ｂ類（K80）は１辺１～1.5cmで縦位のやや扁平な菱形叩き目を施す。

１Ｃ類（K81）は軒平瓦１Ａ類・軒平瓦１Ｂ類の２種の叩き目を施す。朱線の位置は瓦当面から17cm離れている。

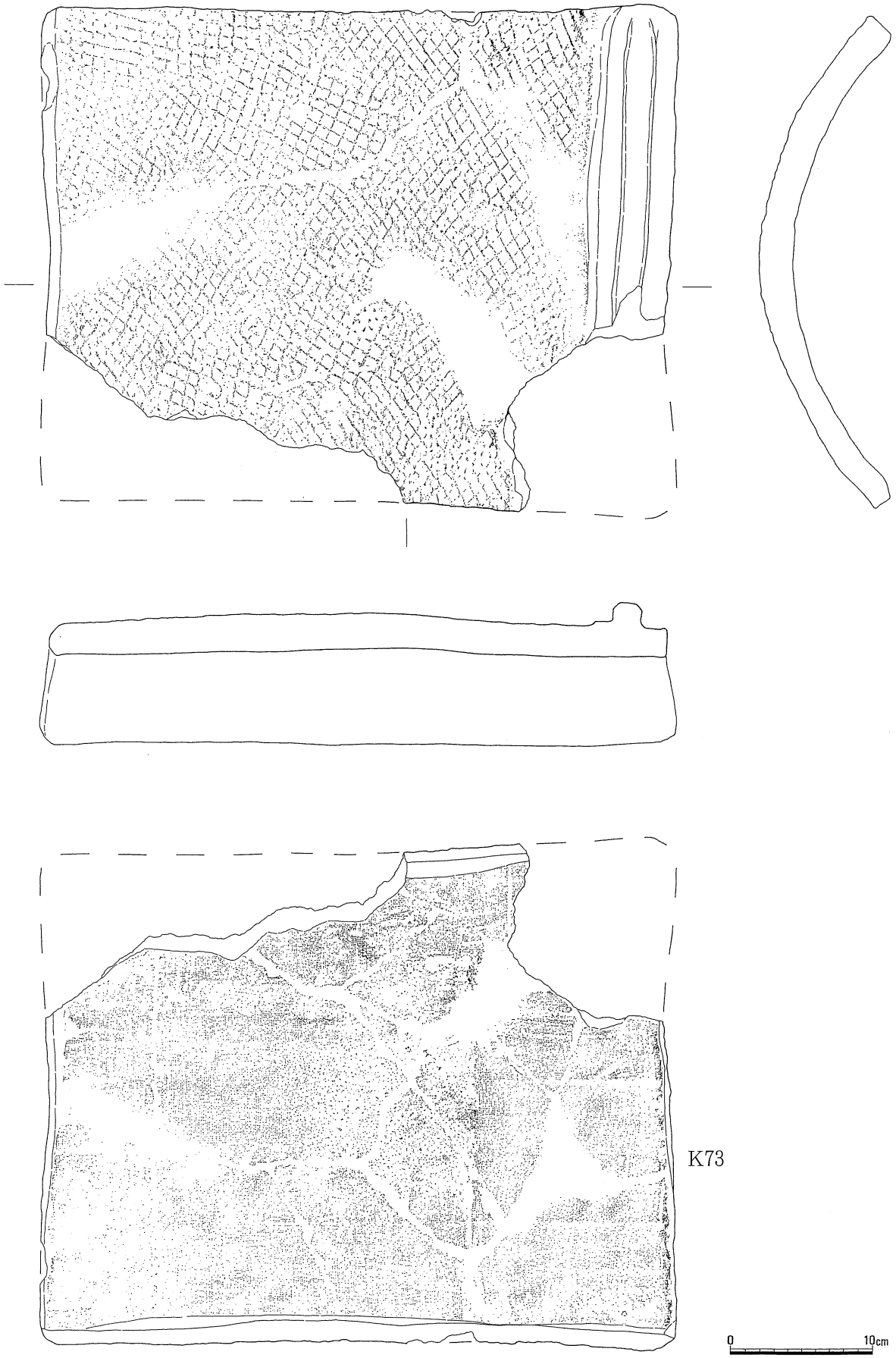
１Ｄ類（K82～K84）は１辺1.5～1.7cmの菱形叩き目で、瓦当面から13cm前後のあたりまで叩き目痕跡のナデ消しを行う。広端部復原幅34cm厚さ1.8～2.4cmである。瓦当面から14～18cmの位置に朱線が残っている。

１Ｅ類（K85・K86）は瓦当面から４cm以上離れた位置に凸帯を施すものである。叩き目は軒平瓦１Ｄ類と同様である。小片のため顎部の凸帯の有無などは不明であるが、厚さ1.8～2.2cmである。

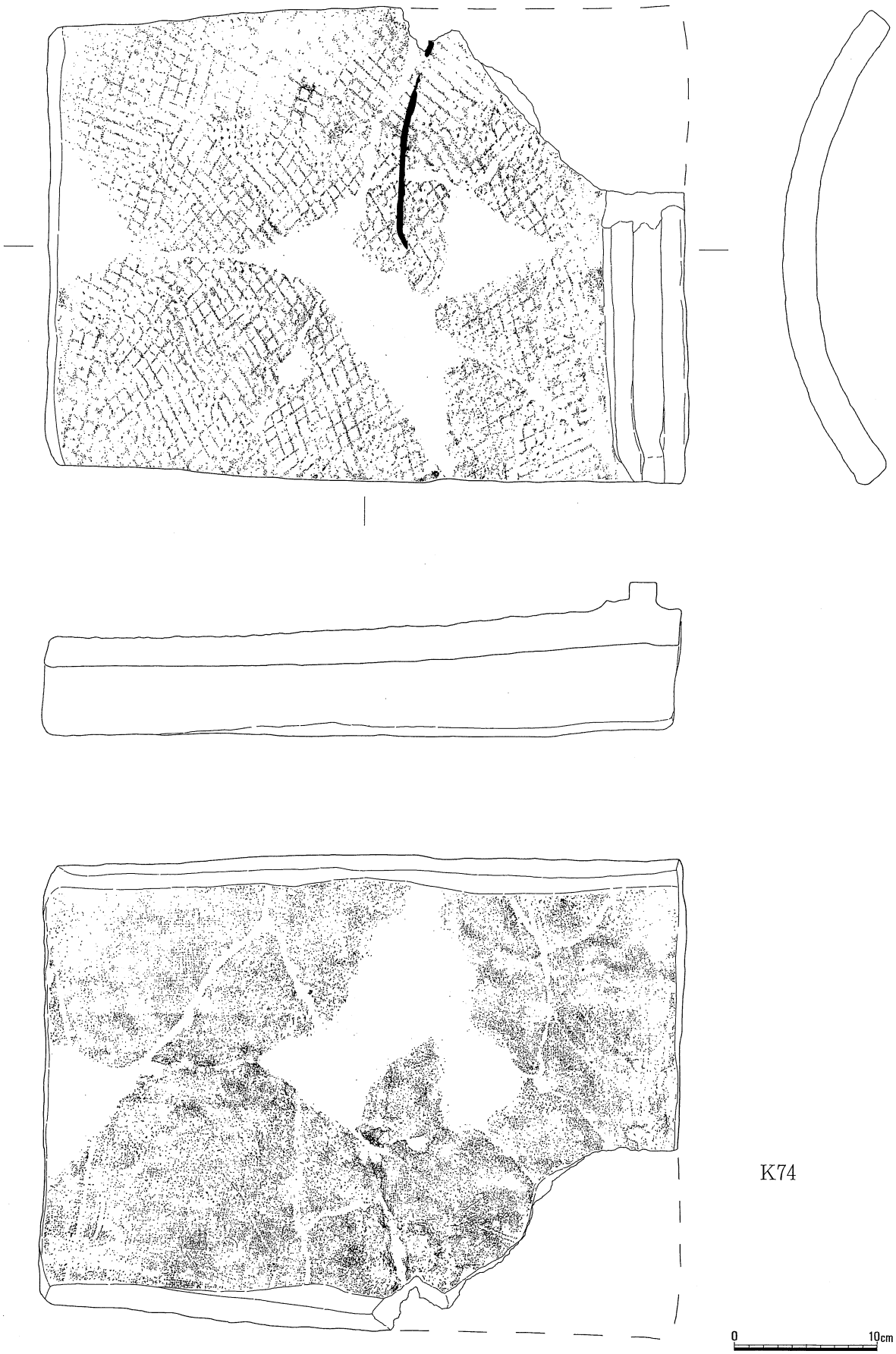
軒平瓦２類（第155～172図）　均整唐草紋軒平瓦（K87～K113）。凸面に縄目叩き施した一枚作りの軒平瓦で、１次調査で賞田廃寺第３様式軒平瓦としていたものである。瓦当面は左右に３転する唐草を束ねたようにして中心飾りとする。唐草の反転の仕方などからＡＢ２つに分かれる。



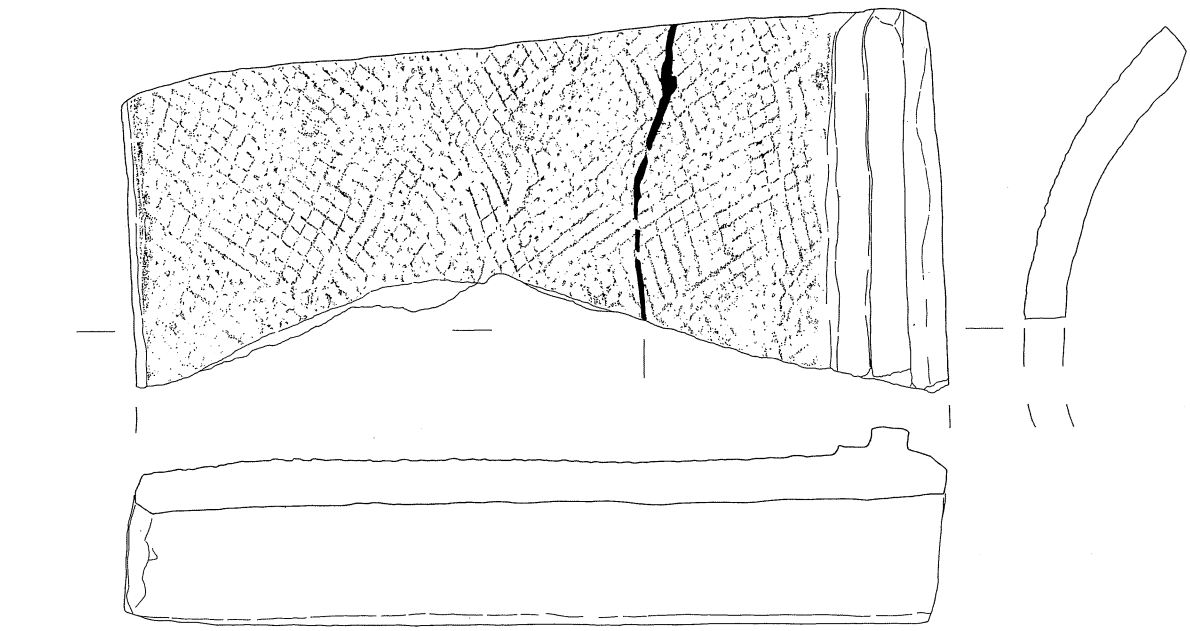
第144図　軒平瓦１Ａ類(1)



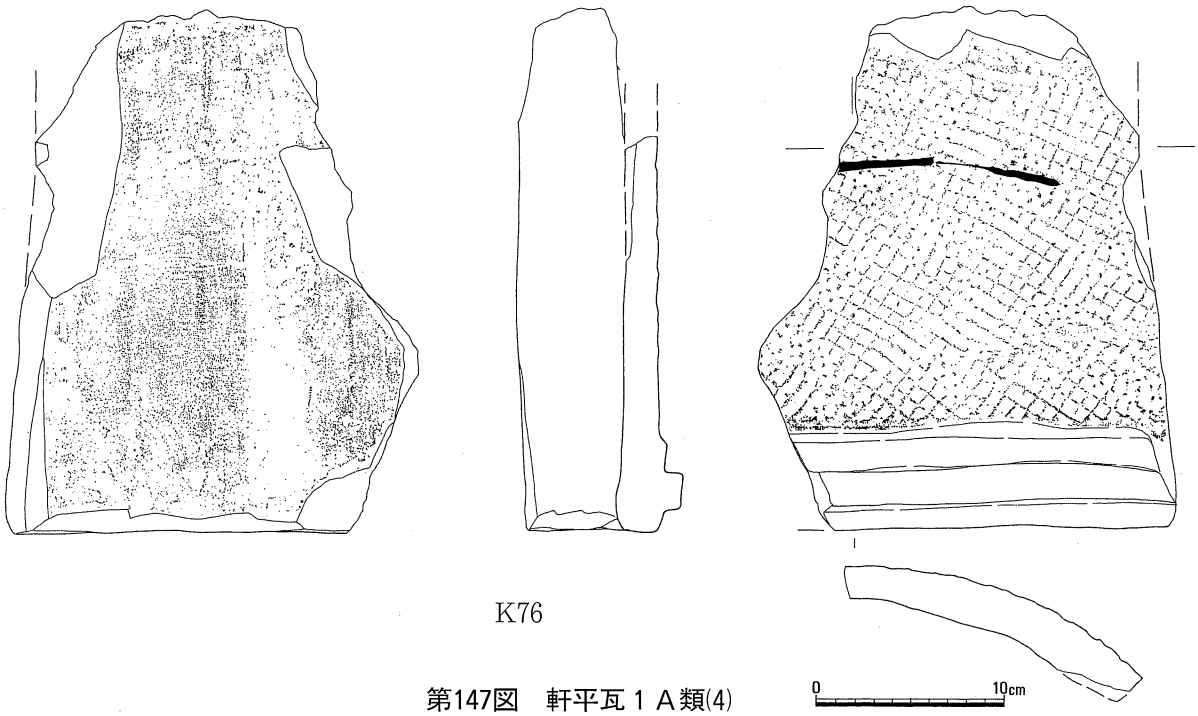
第145図　軒平瓦１Ａ類(2)



第146図　軒平瓦１Ａ類(3)



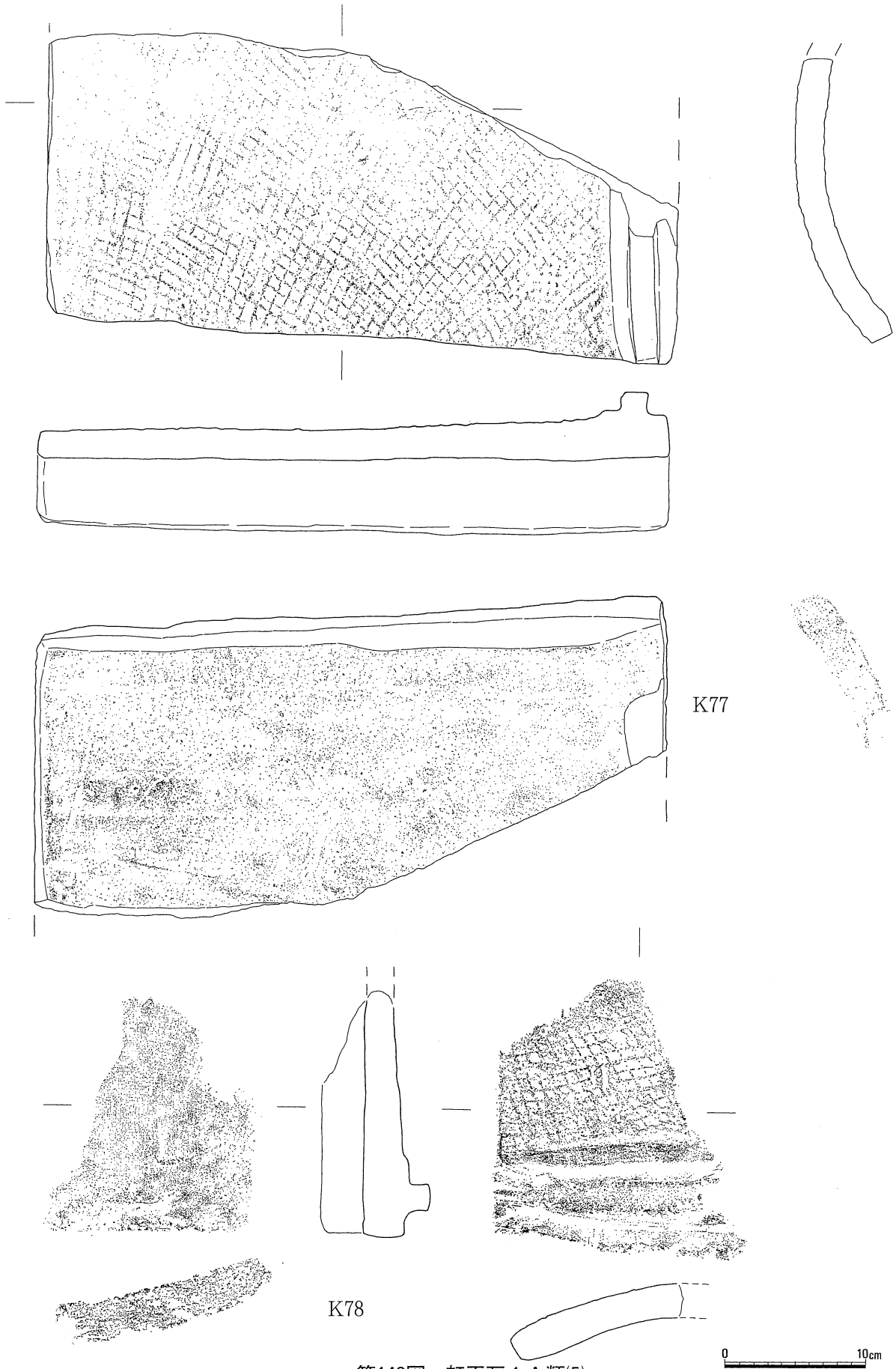
K75



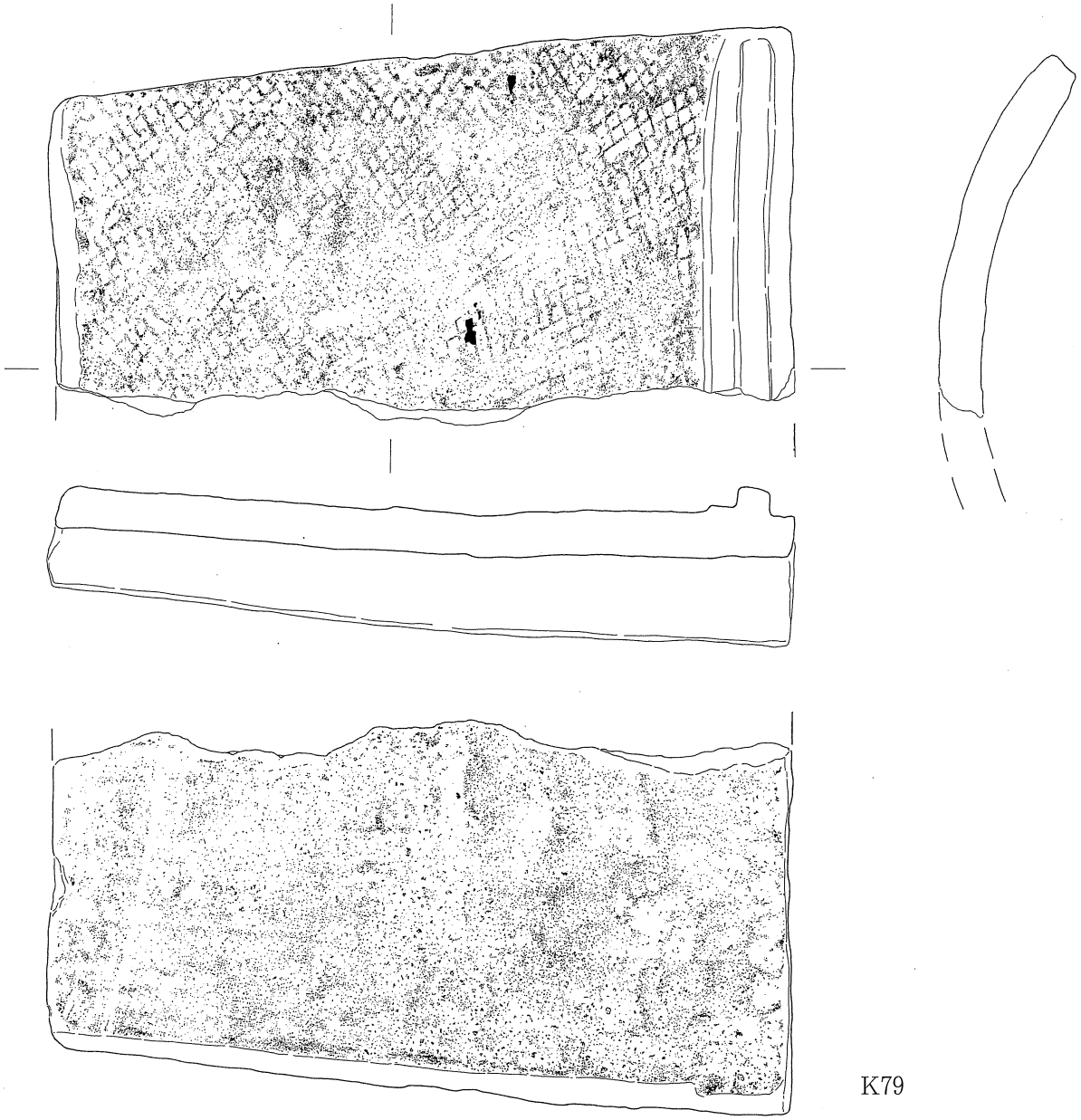
K76

0 10cm

第147図　軒平瓦１Ａ類(4)

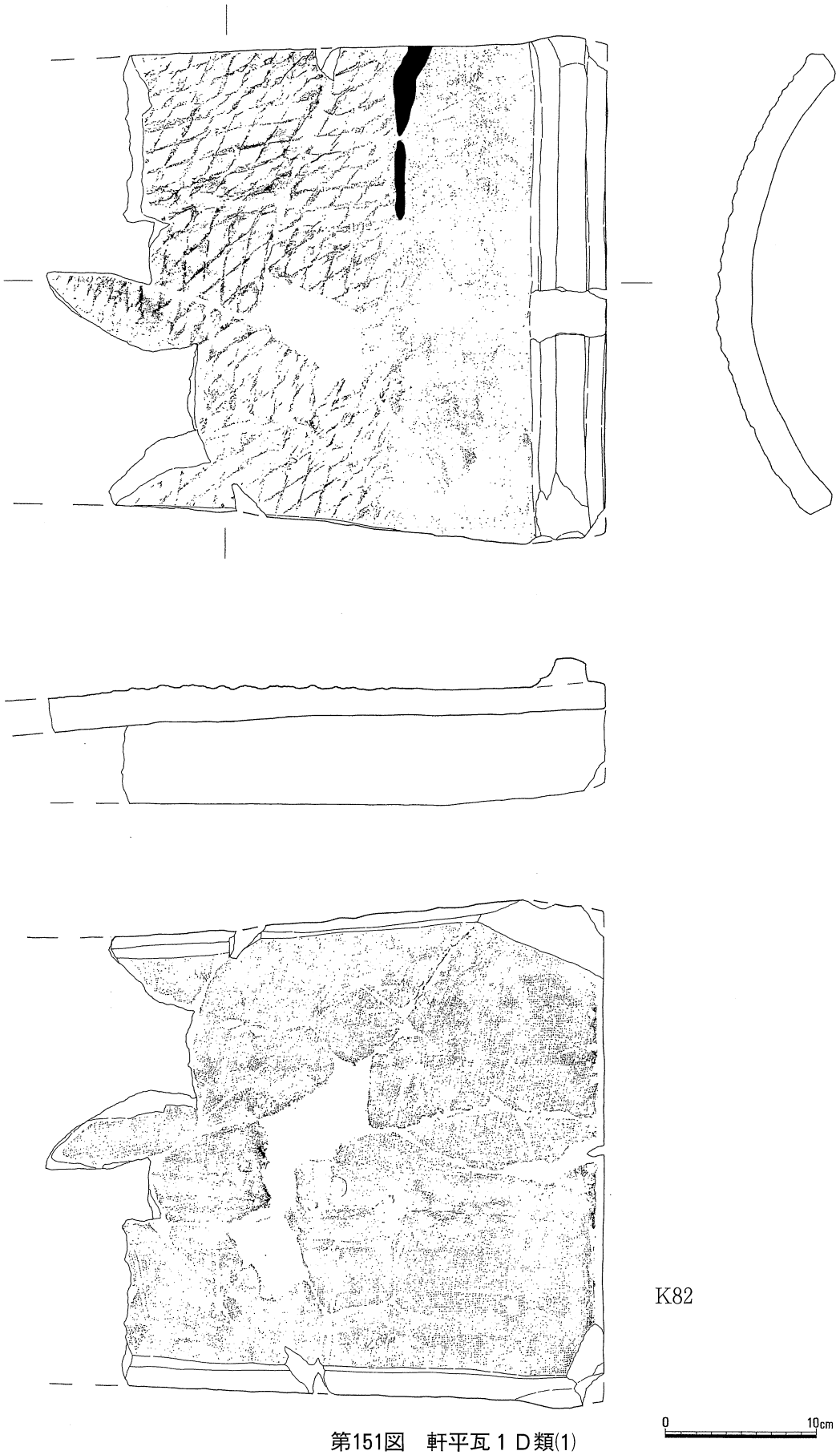


第148図　軒平瓦１Ａ類(5)

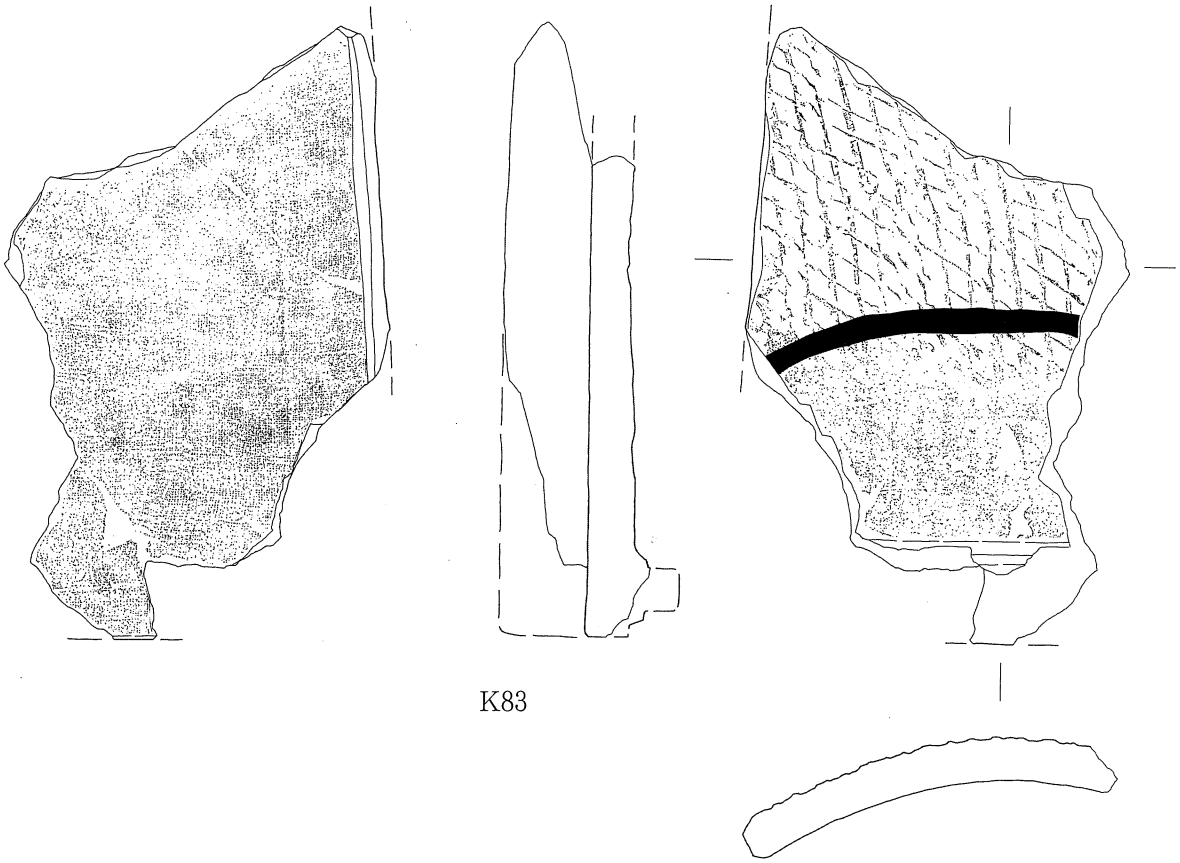


第149図　軒平瓦１Ａ類(6)・１Ｂ類

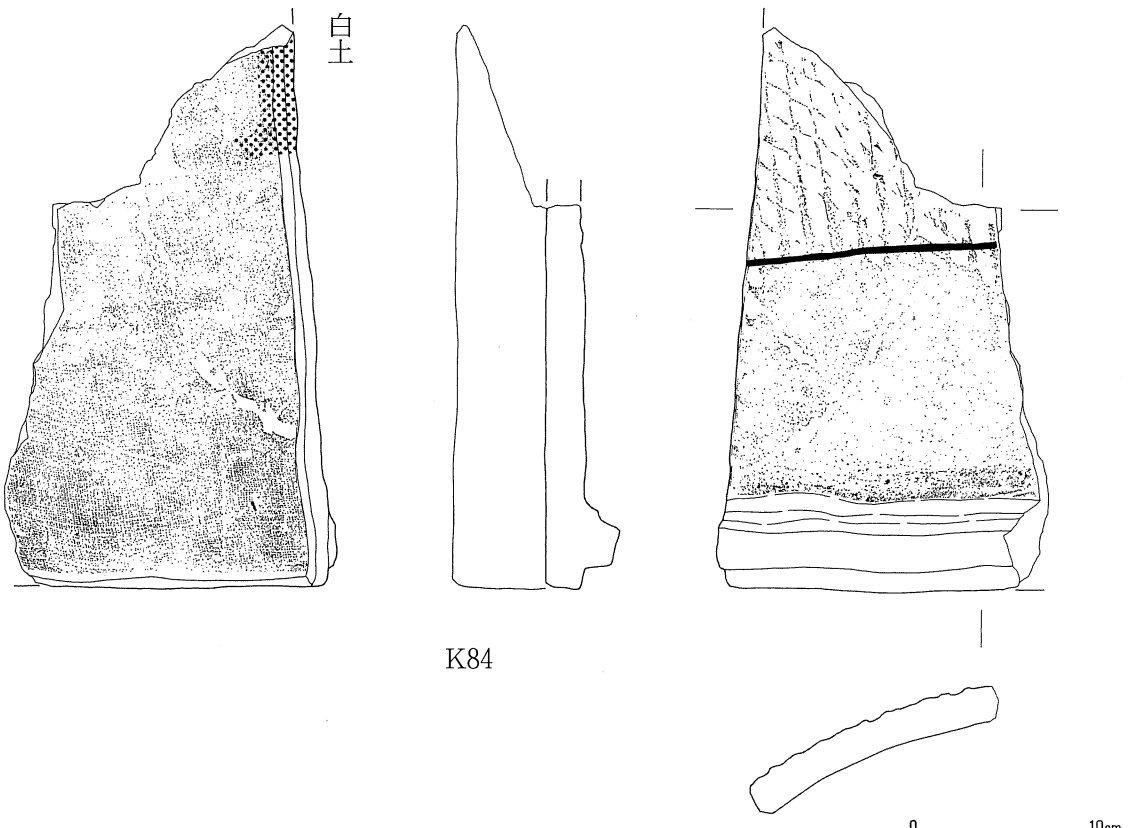
第150図　軒平瓦１Ｃ類



第151図　軒平瓦１Ｄ類(1)



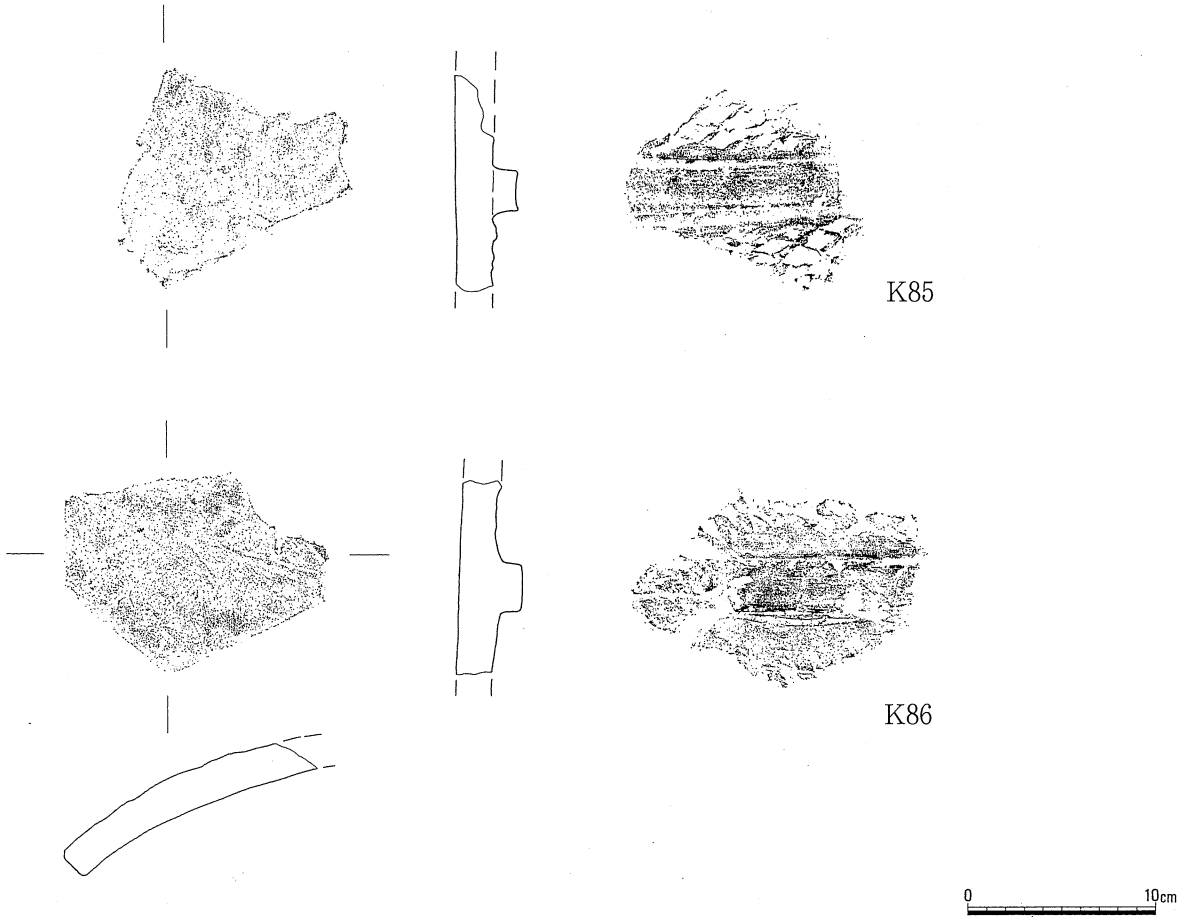
K83



K84

0 10cm

第152図　軒平瓦１Ｄ類(2)



第153図　軒平瓦１Ｅ類

２Ａ類（K87～K110）は、唐草を中心から外に向け第１単位・第２単位・第３単位と呼ぶと、第１単位は中心飾りの下から出た茎が上に向いたのち下向きに反転し、第２単位は上向きに第３単位は下向きに反転する。第１単位・第２単位は唐草が中心から出ていて、第１単位の反転までは２本が平行する。唐草の先端には先割れしたものがみられる。外区は界線と幅５㎜程度の平縁の素縁からなる。しかし、外縁の高さや外縁上部幅、下部が直立縁か斜縁かといった点については個体差がある。顎形態には、段額・面を持つ曲線顎・面を持たない曲線顎・直線顎がある。朱線はK94・K98・K99などで観察され、瓦当面から６～13㎝離れてついている。また、白土が付着する個体もみられ、K99では朱線と重なって弧状に残っている。

笵傷の進行は以下の通り。（第154図）

笵傷１段階：右第３単位の根元の界線と外縁の間に傷イがつく。

笵傷２段階：左第２単位と第３単位の分かれ目の子葉上方で、界線と外縁との間に傷ロがつく。

笵傷３段階：前段階にできた傷ロが太くなることに加え、左第１単位が中心飾りからでた下向きカーブ頂点の下方で界線と外縁との間に太めの傷ハがつき、左第３単位下向きカーブ頂点の下方で界線と外縁との間に太めの傷ニがつく。

笵傷４段階：右第１単位上向き頂部上方の界線と外縁との間に傷ホ・ヘがつく。

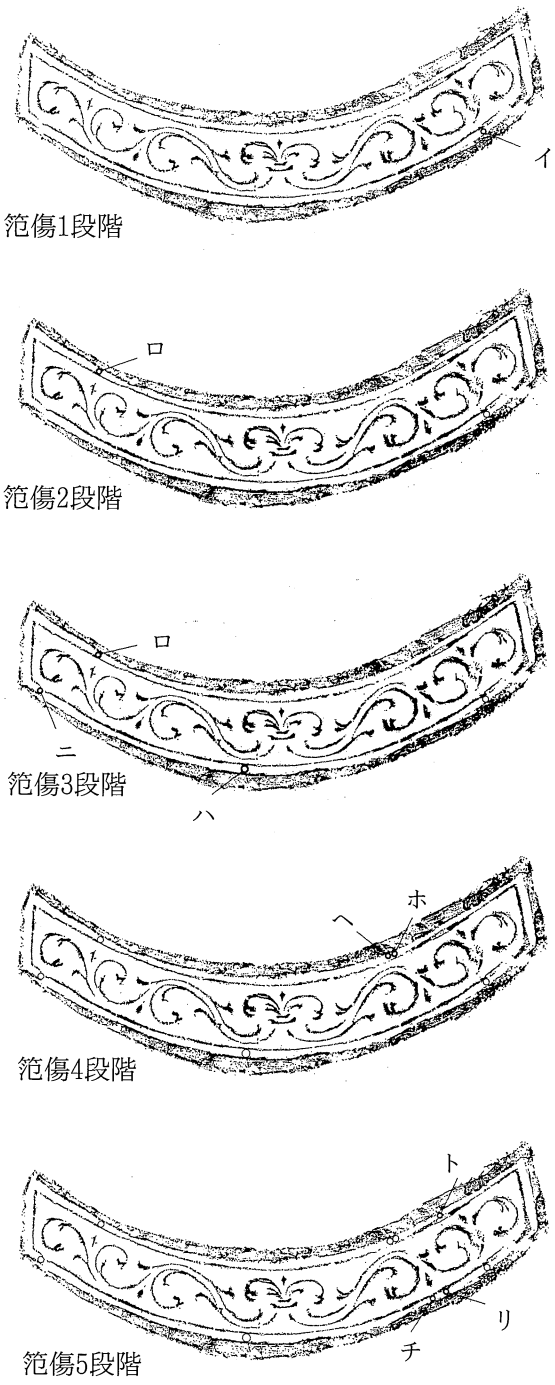
笵傷５段階：右第２単位上向き頂部上方の界線と外縁との間に傷トが、右第２単位と第３単位の分かれ目の子葉下方の界線と外縁の間に傷チとこれとやや右に離れて傷リがつく。ただし傷チ・リについては前段階についている可能性もある。

笵傷の進行と顎形態および凸面や側面の調整方法を合わせると次の７段階に分類可能である。

２Ａ－１：顎部は幅2.5㎝の面を持った段額で瓦当面の笵傷はなし。凸面の縄叩き目は瓦当面から11～12㎝離れた箇所までナデ消される。側面は広くしっかりとした面を持つ。K87は瓦当側１／２弱の個体であるが、平瓦部分の厚みが3.8㎝あり、重さも4.55kgと重い。

２Ａ－２：顎部は幅２㎝の面を持った曲線顎である。瓦当面の笵傷がないこと、凸面の縄叩き目は瓦当面から11～12㎝離れた箇所までナデ消されること、側面は広くしっかりとした面を持つこと、平瓦に厚みがあり重量があることなど１段階と共通する点が多い。状態のよい個体ではこの段階で瓦笵の木目痕跡がみられる。K88は狭端部の一部を欠くが、狭端部で厚さが2.5㎝あり、重さは6.6kgである。K88～K91。

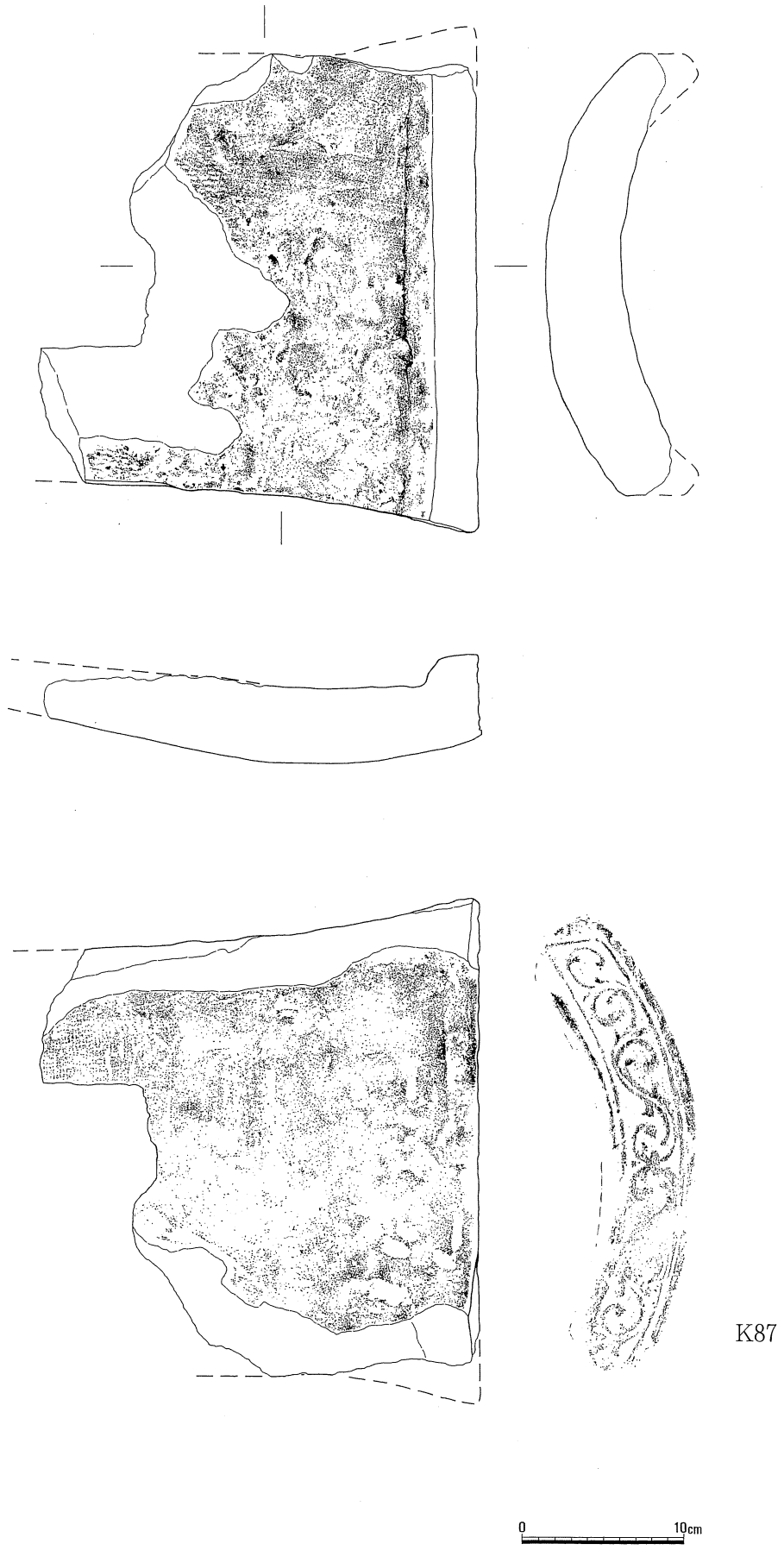
２Ａ－３：顎部は幅数㎜の面を持つ曲線顎で笵傷１段階。縄叩き目は瓦当面から９㎝のあたりまでナデ消される。側面は広くしっかりとした面を持つ。平瓦の厚みもあり重量感がある。K94は側縁部を欠いているが、狭端部の厚さ2.5㎝で、重さ5.65kgである。K93～K95。



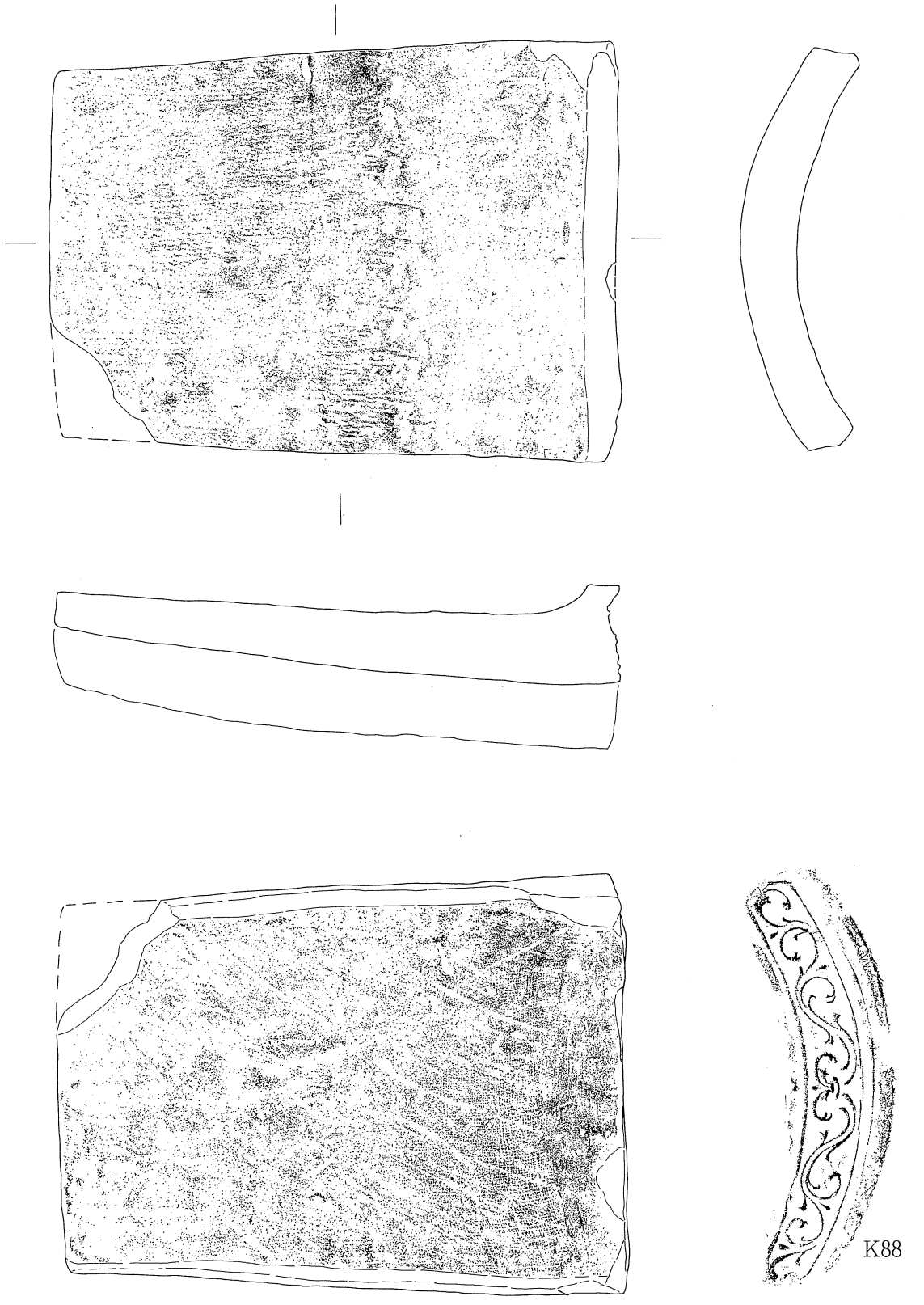
第154図　軒平瓦２Ａ類笵傷進行図

２Ａ－４：顎部は面を持たない曲線顎で瓦当面の笵傷は２段階。縄叩き目は瓦当面から６～11㎝あたりまでナデ消される。平瓦がやや薄くなるため側面の幅も狭くなる。狭端部での厚さは1.7～２㎝あり、重さはK96で5.35kg、K97で5.3kgである。K96～K98。

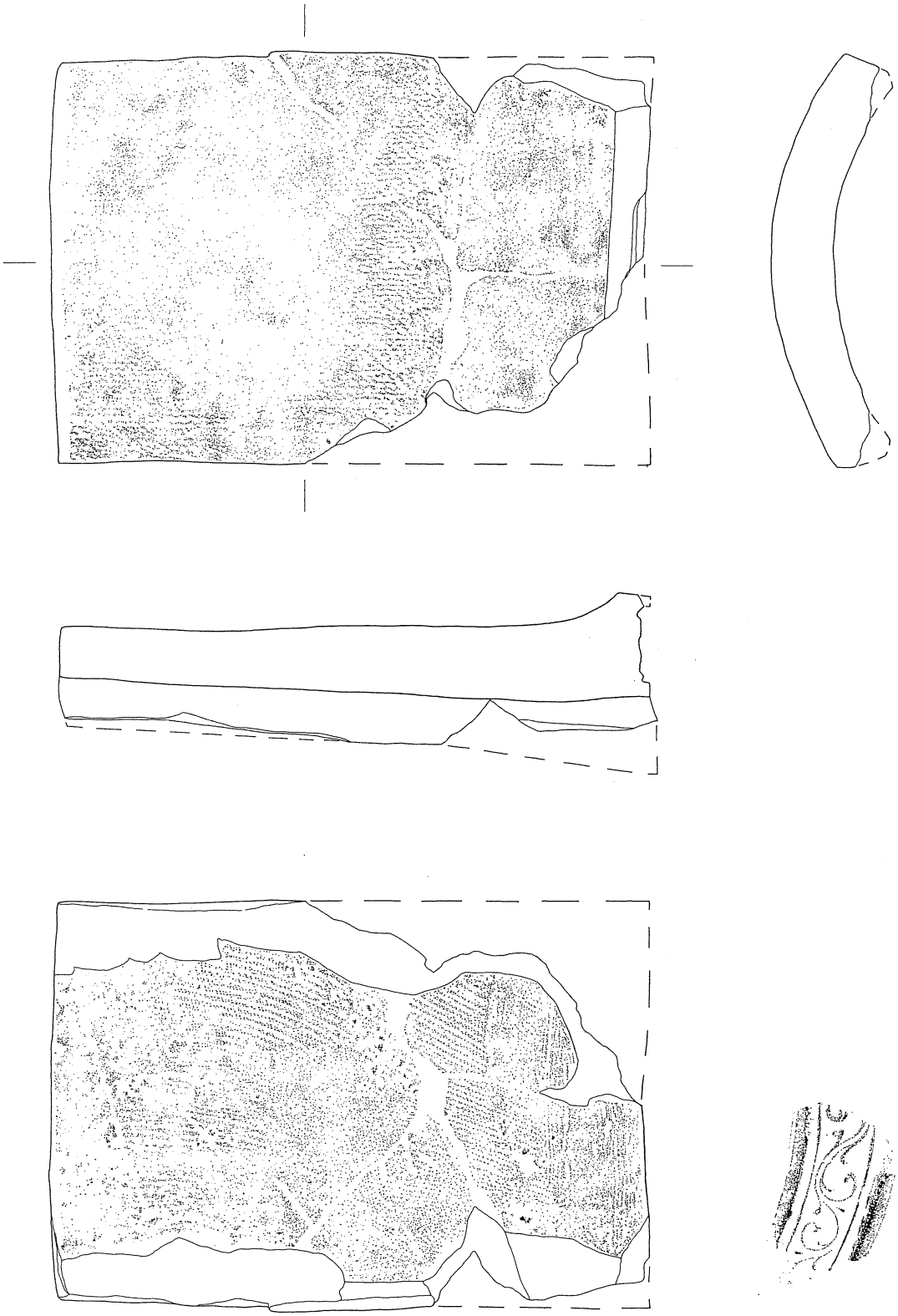
２Ａ－５：顎部は曲線顎ないし直線顎で瓦当面の笵傷は３段階。縄叩き目はナデまたは削りによって消されている。側面は凸面のナデや削り調整のため瓦当面側を除き幅が著しく狭くなったり丸く



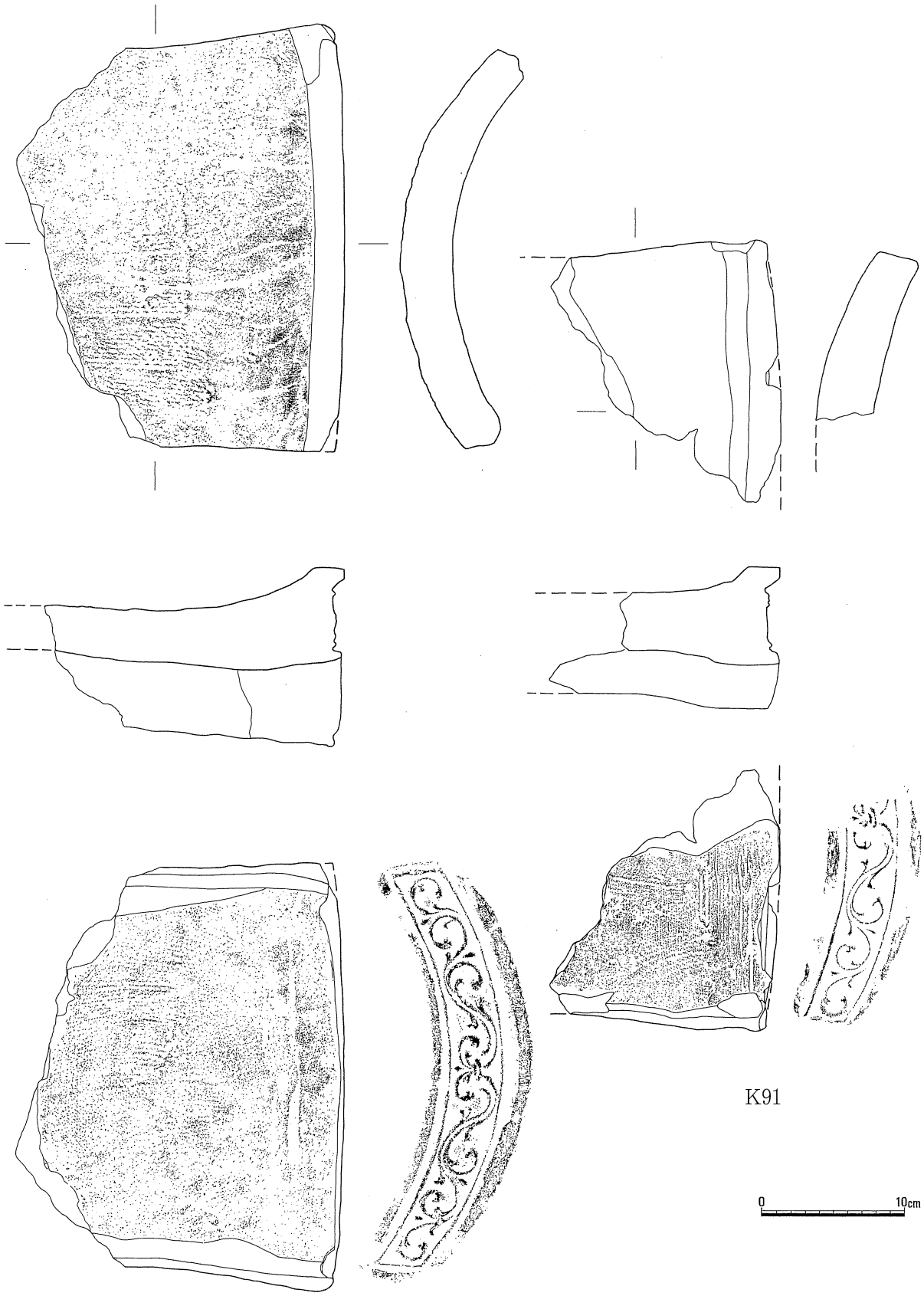
第155図　軒平瓦２Ａ類(1)



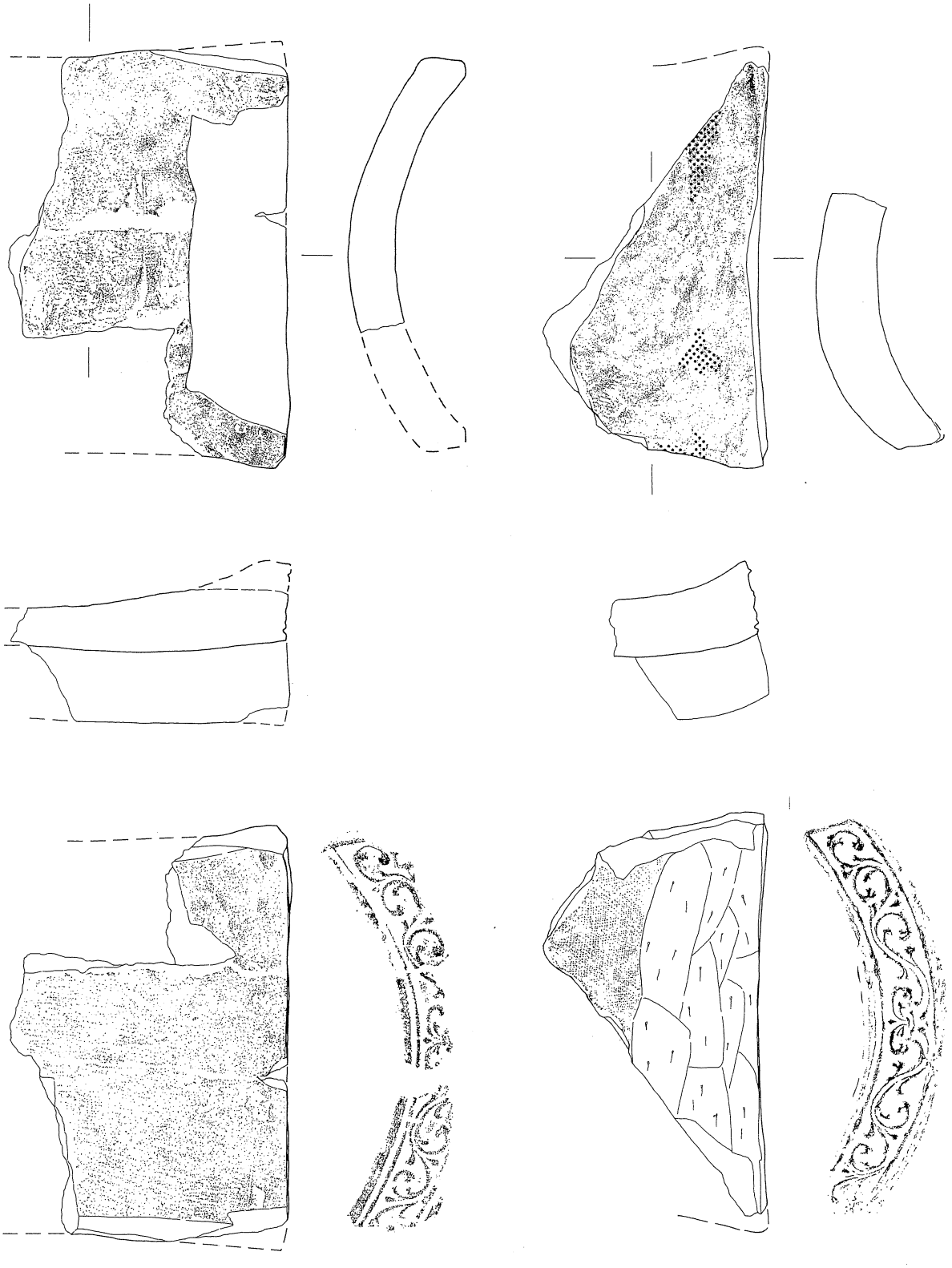
第156図　軒平瓦２Ａ類(2)



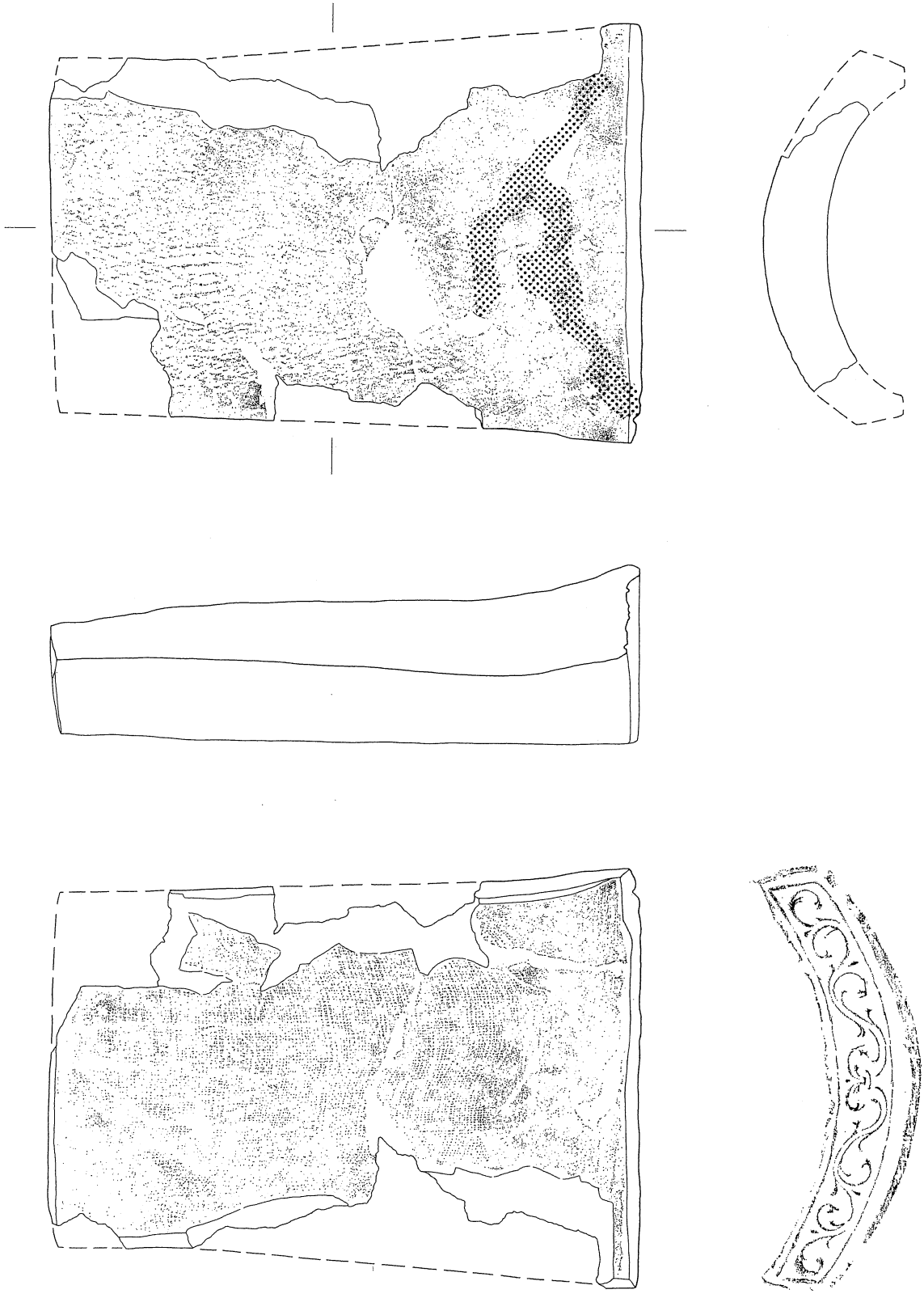
第157図　軒平瓦２Ａ類(3)



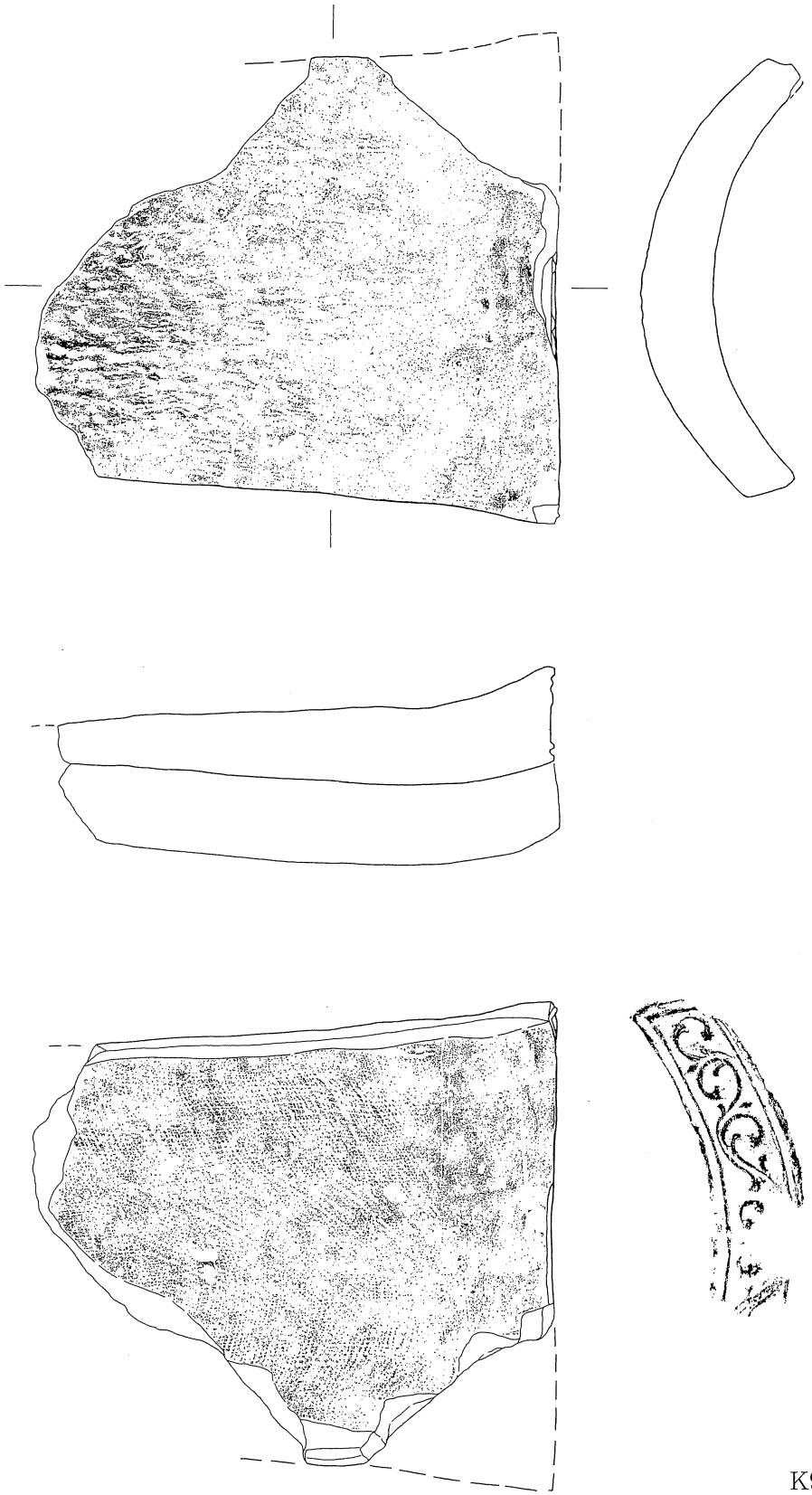
第158図　軒平瓦２Ａ類(4)



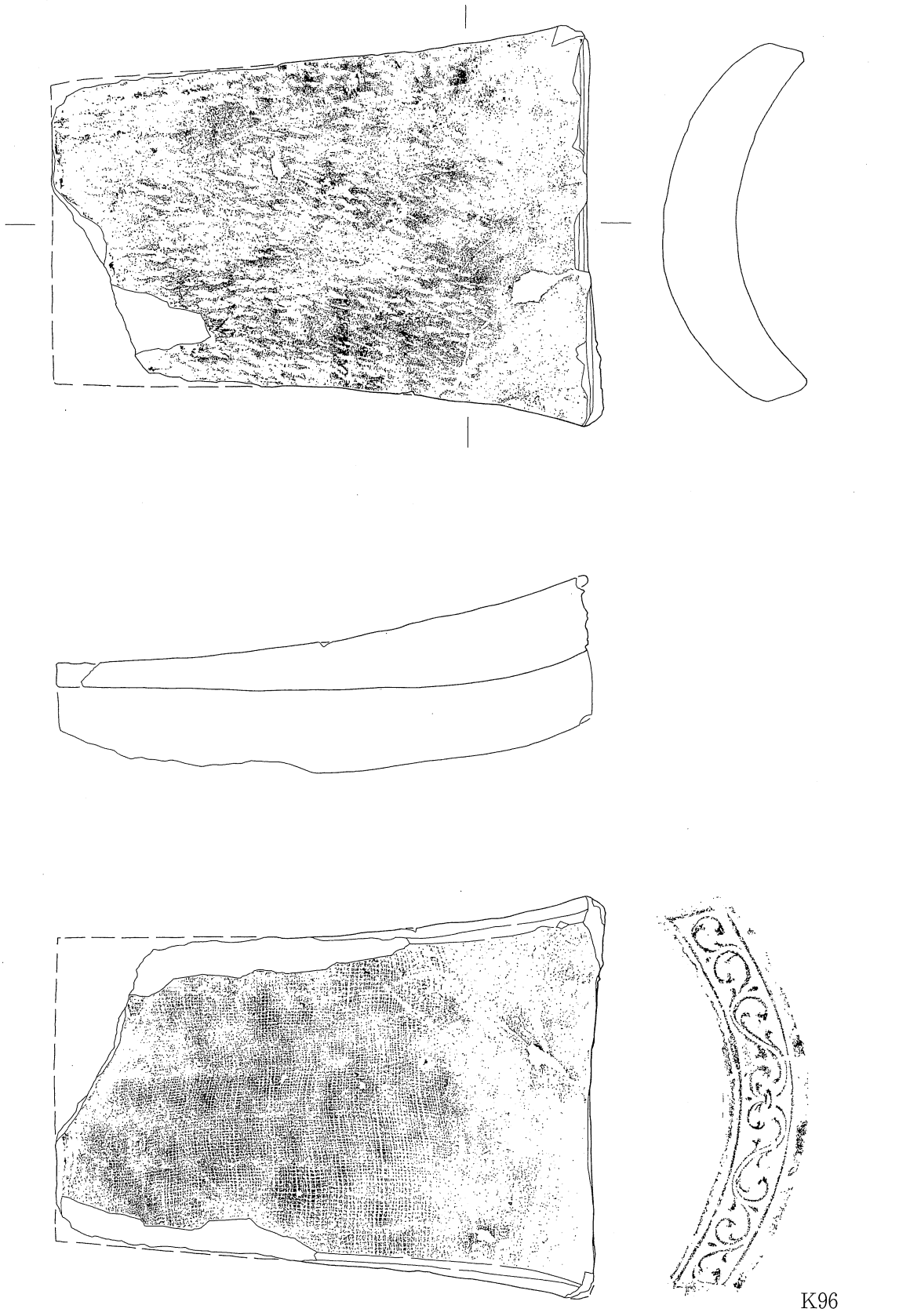
第159図　軒平瓦２Ａ類(5)



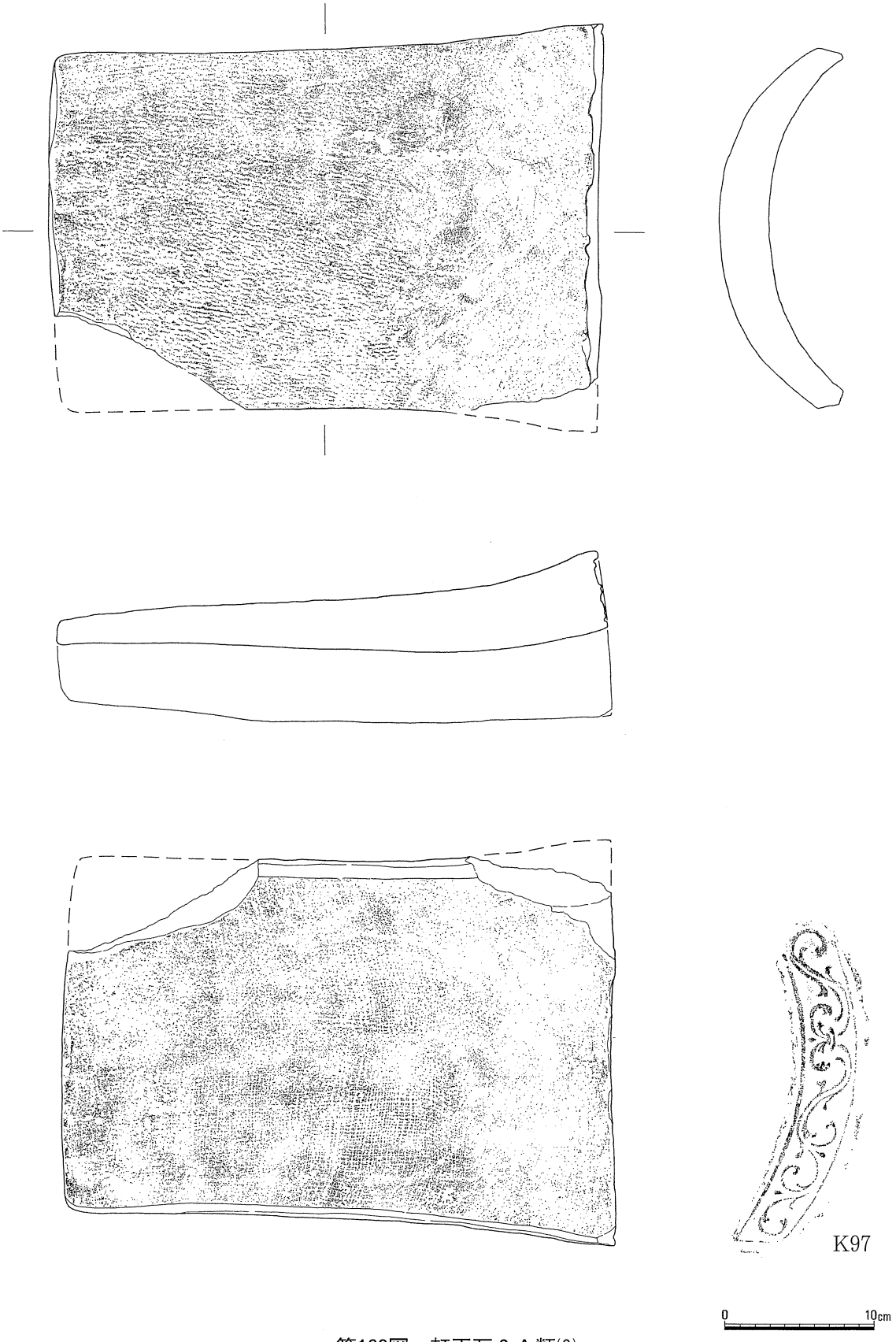
第160図　軒平瓦２Ａ類(6)



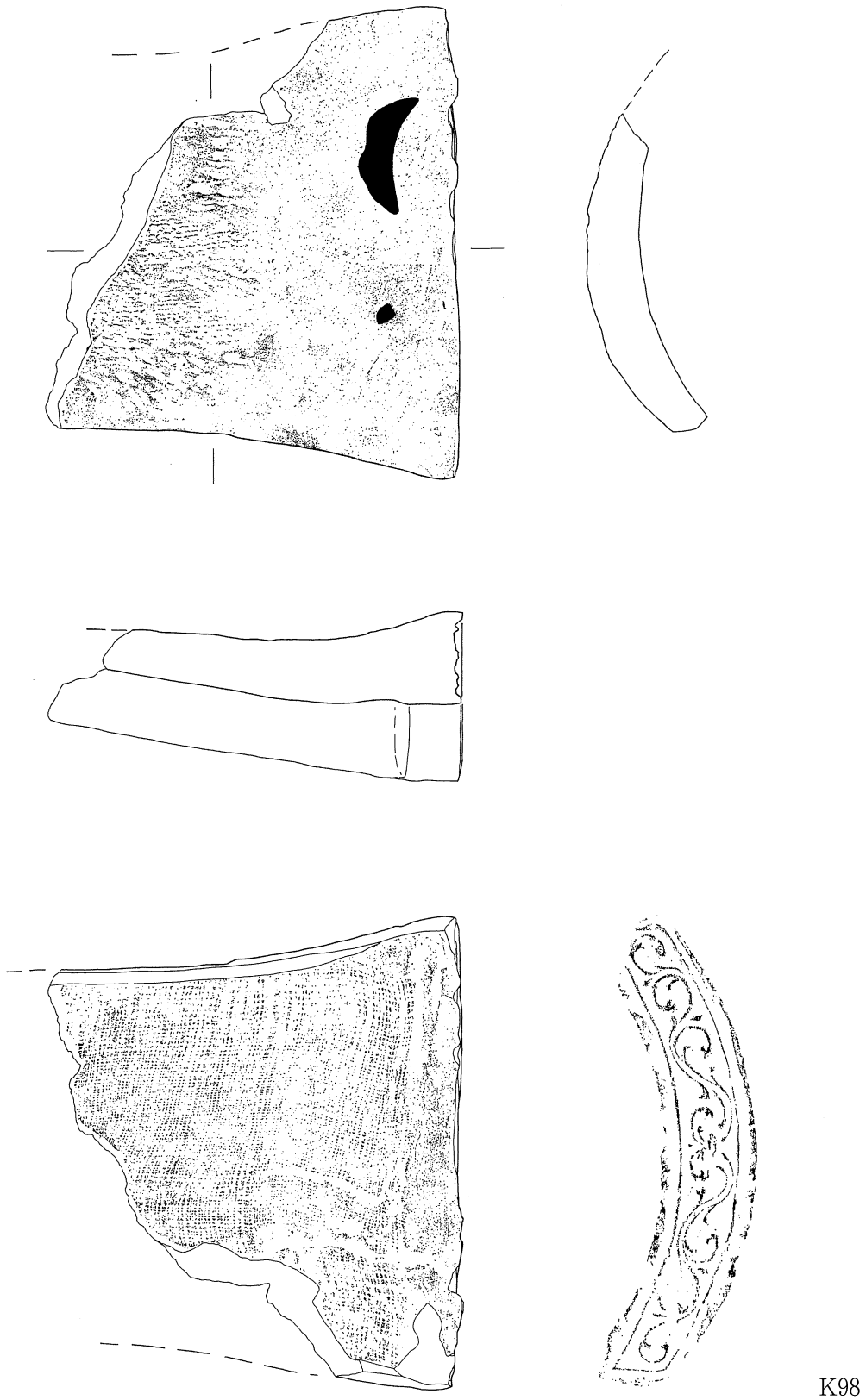
第161図　軒平瓦２Ａ類(7)



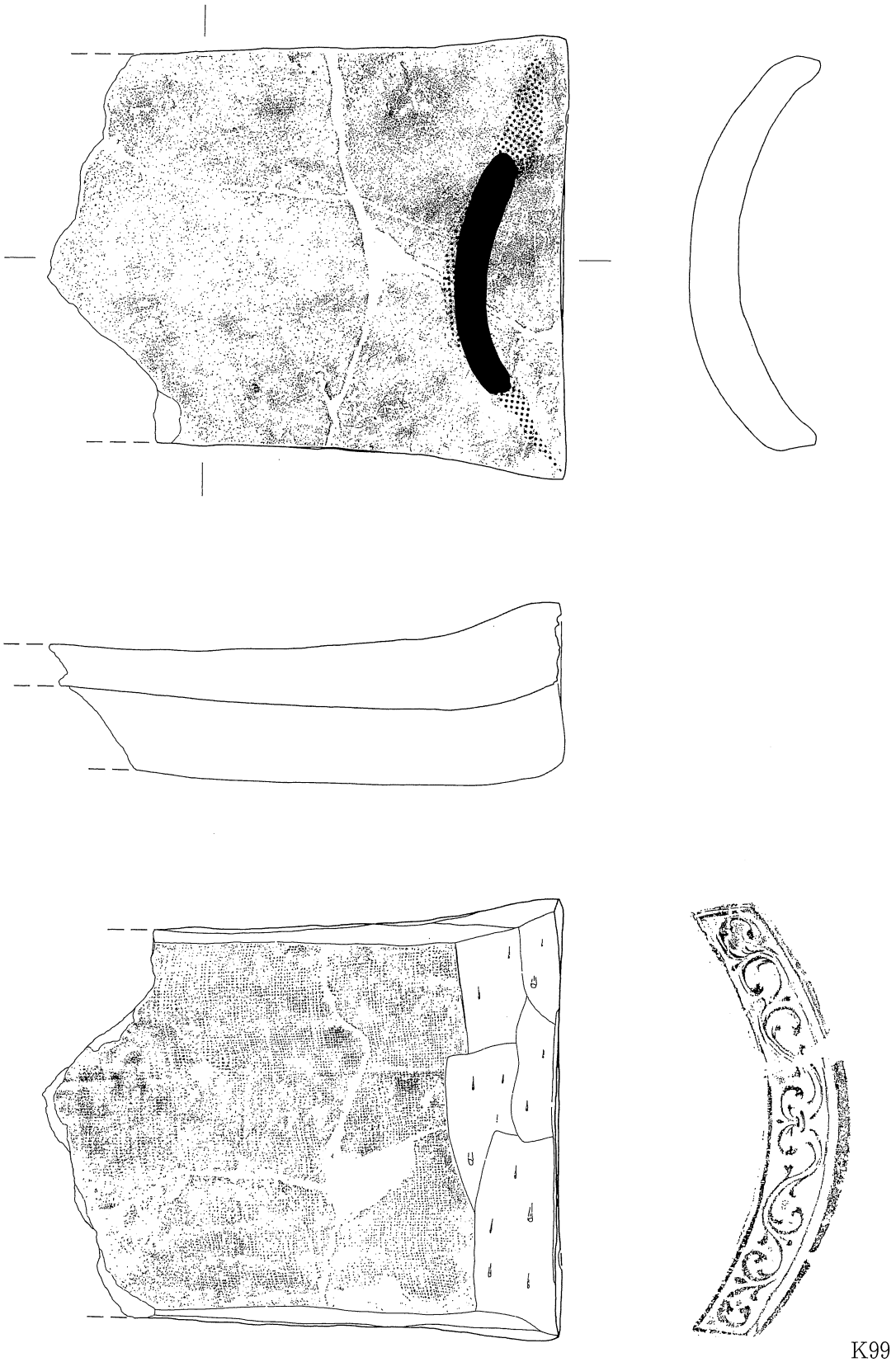
第162図　軒平瓦２Ａ類(8)



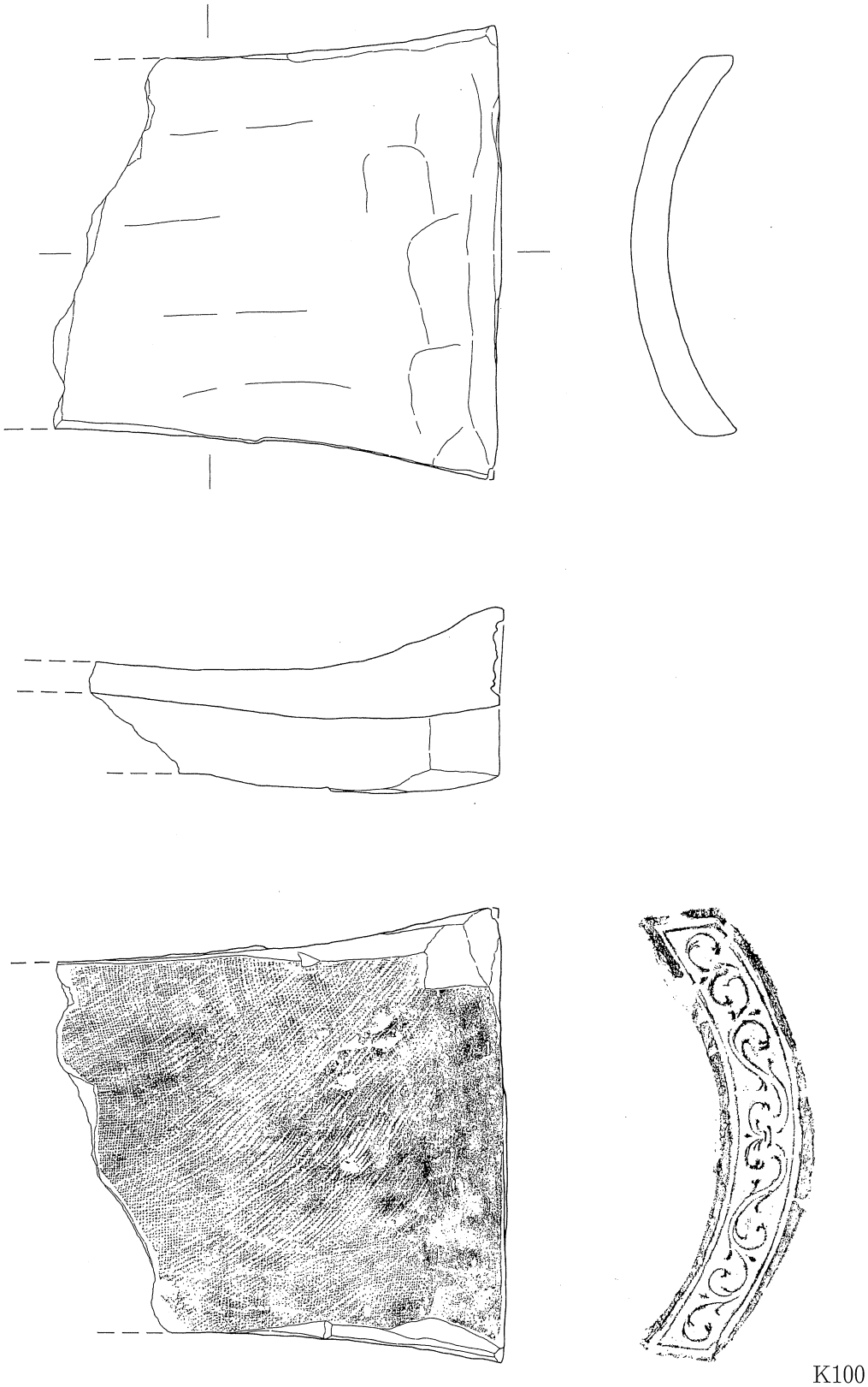
第163図　軒平瓦２Ａ類(9)



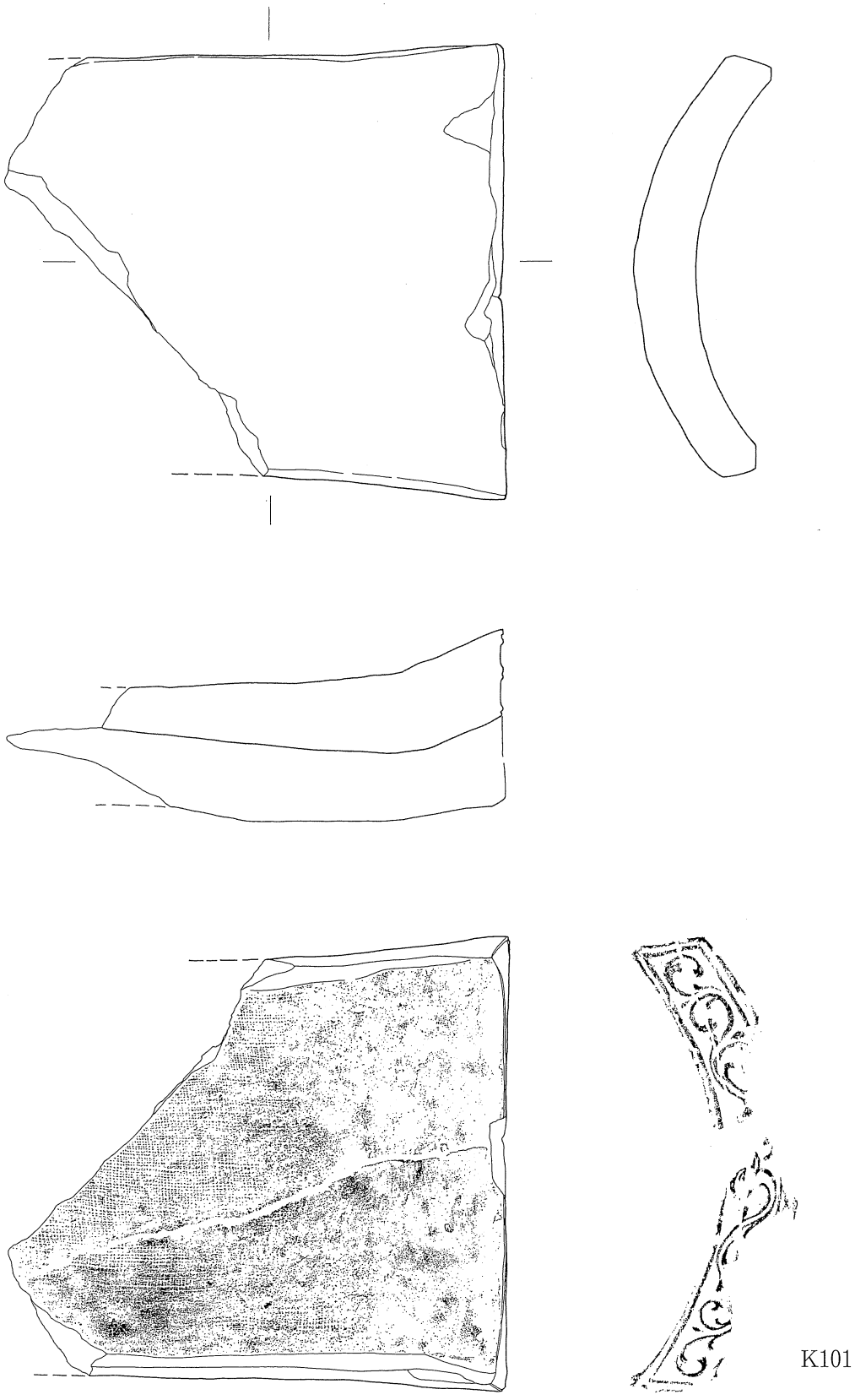
第164図　軒平瓦２Ａ類(10)



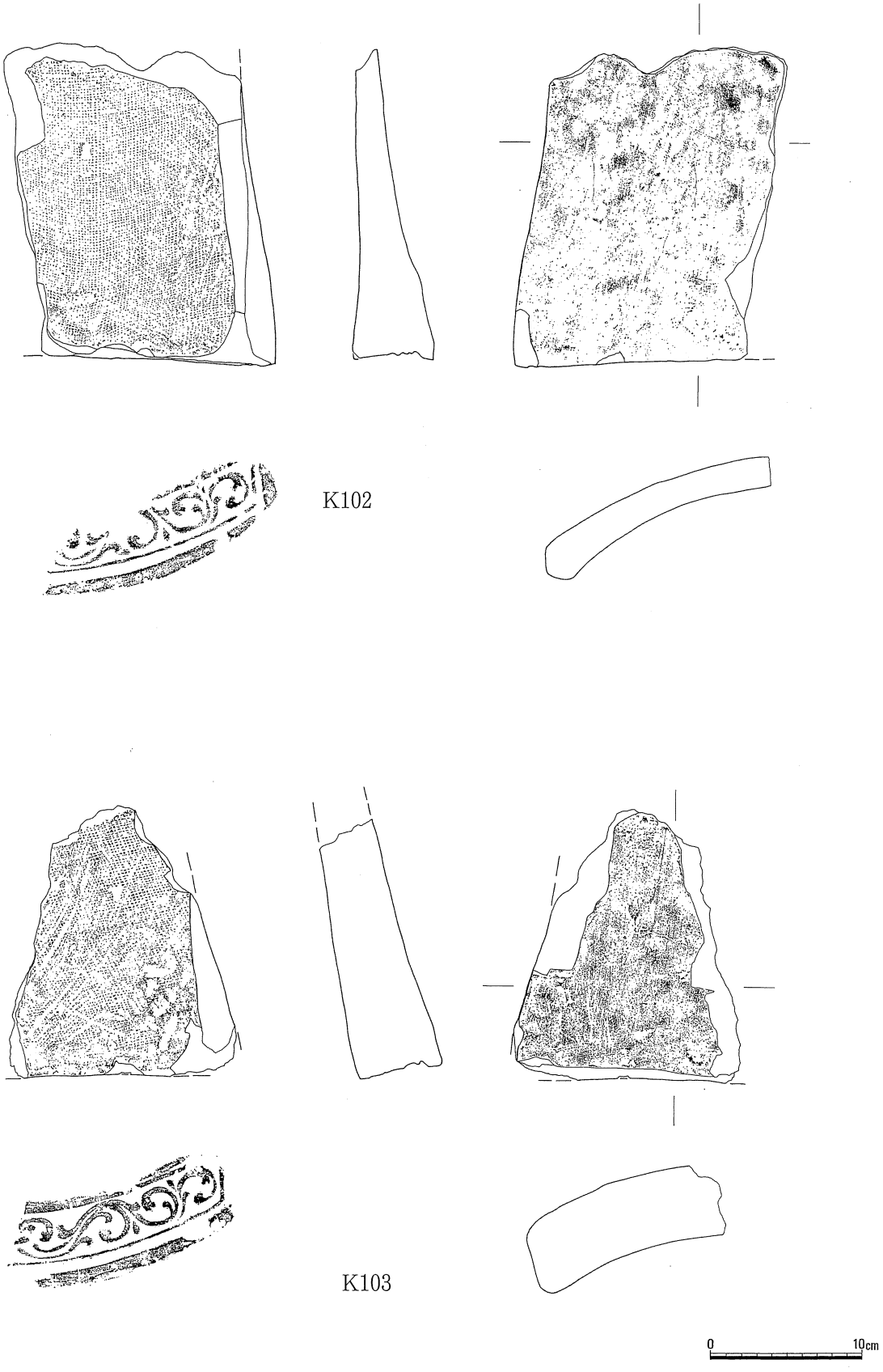
第165図　軒平瓦２Ａ類(11)



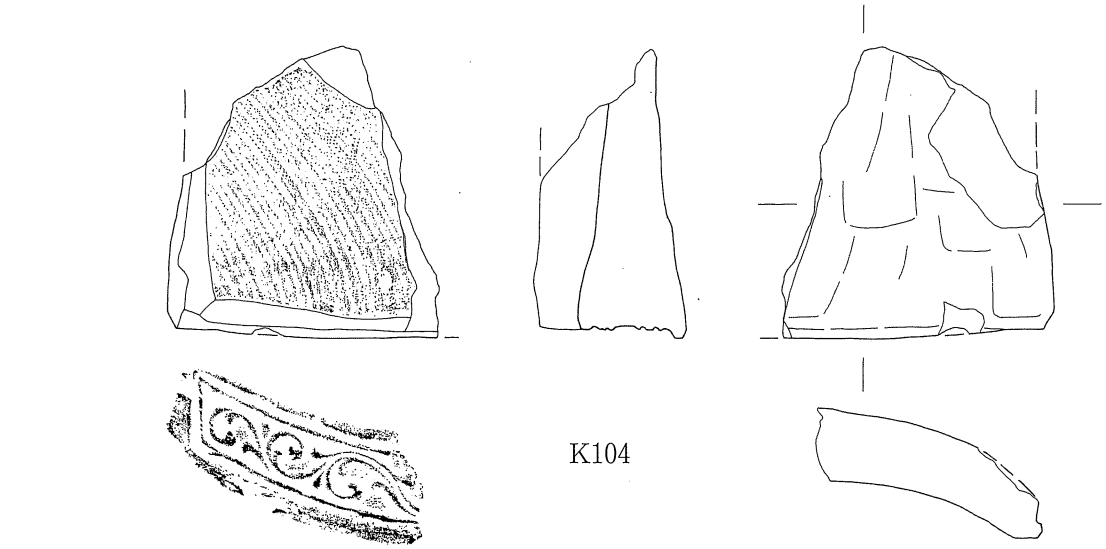
第166図　軒平瓦２Ａ類(12)



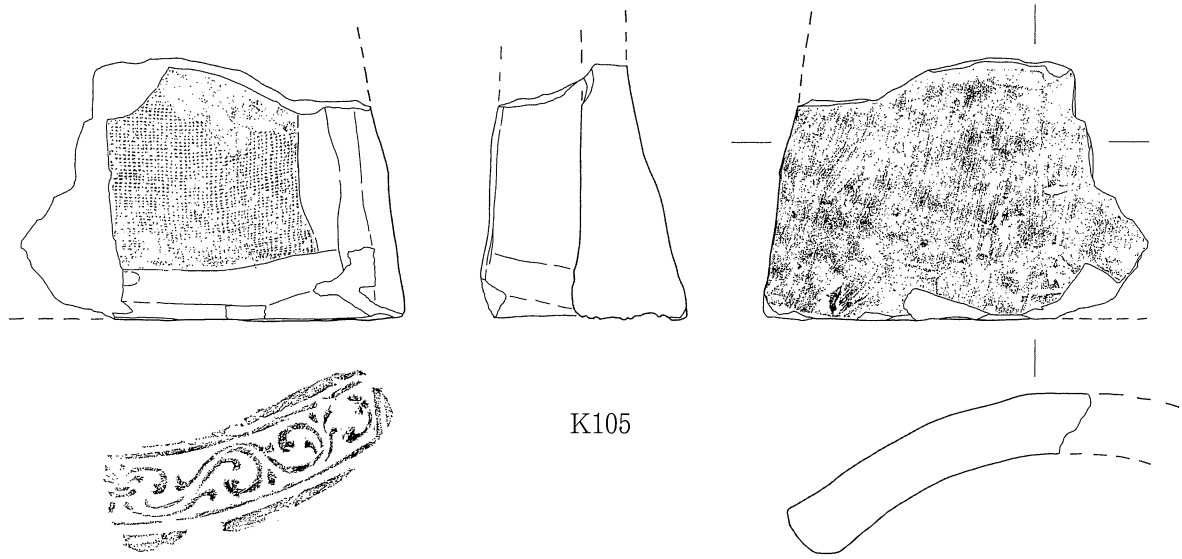
第167図　軒平瓦２Ａ類(13)



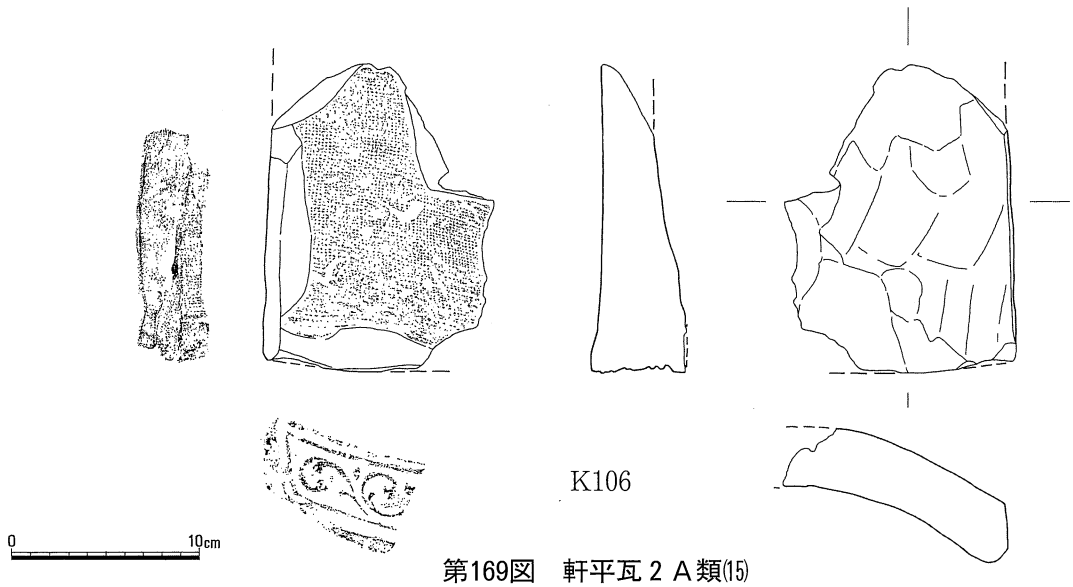
第168図　軒平瓦２Ａ類⑭



K104



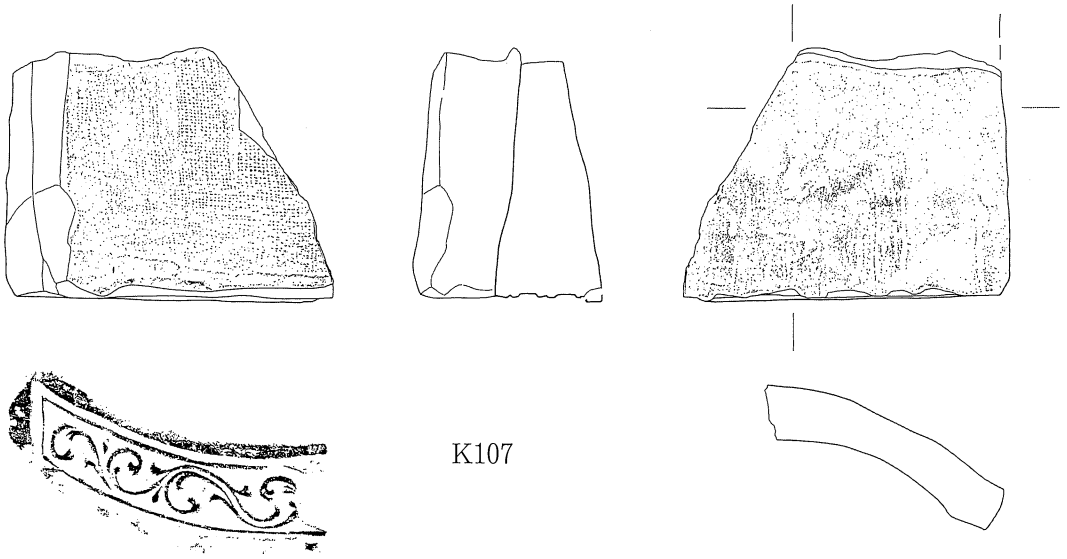
K105

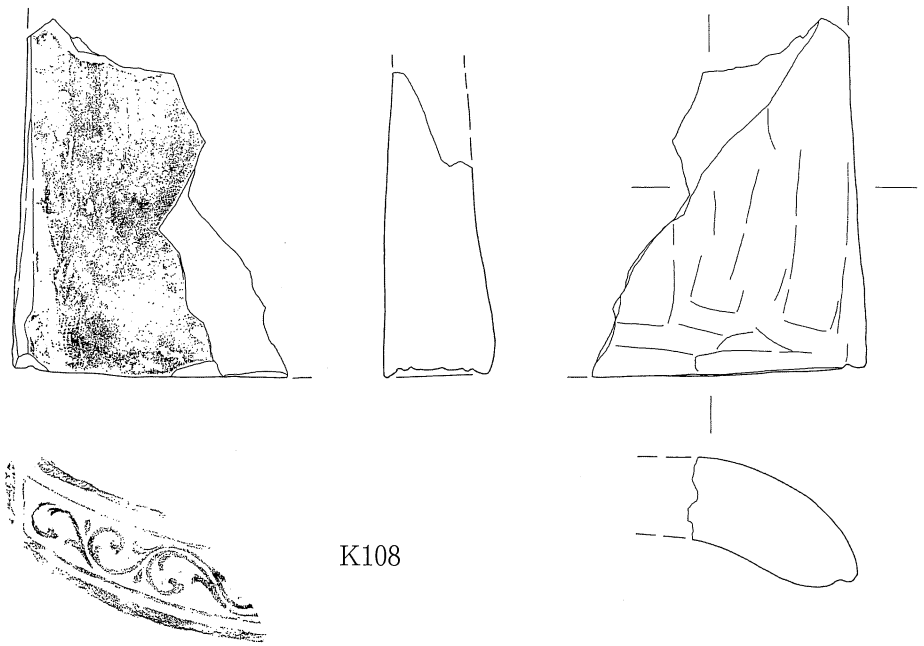


K106

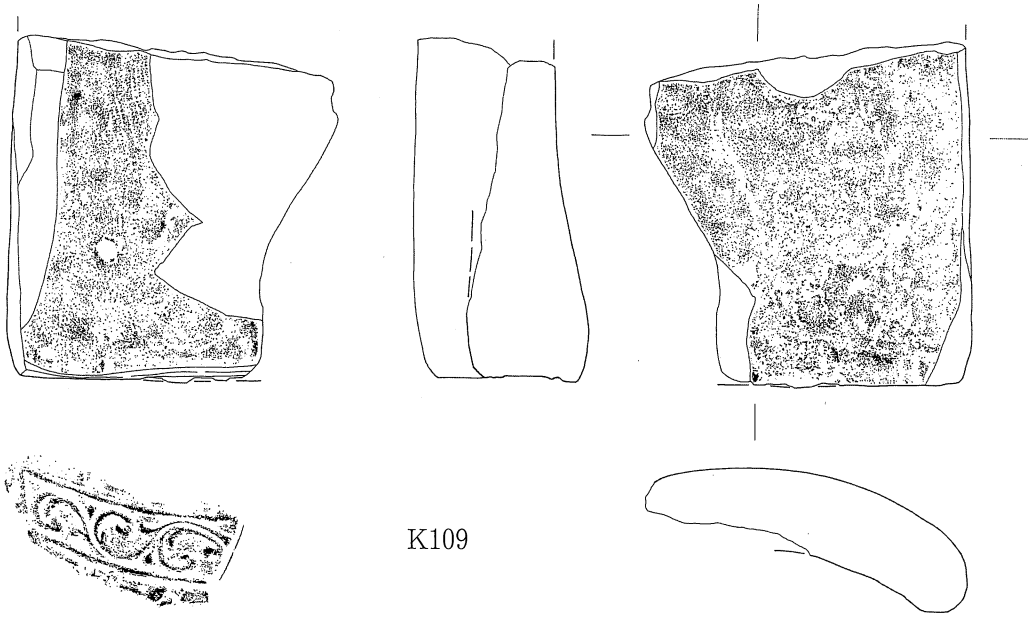
0 10cm

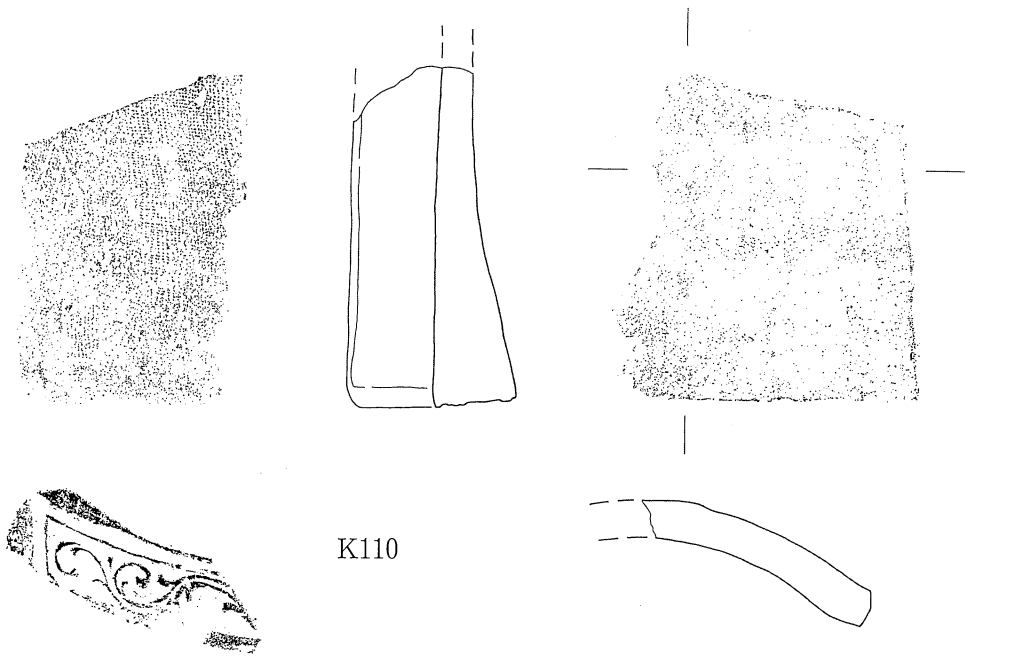
第169図　軒平瓦２Ａ類(15)



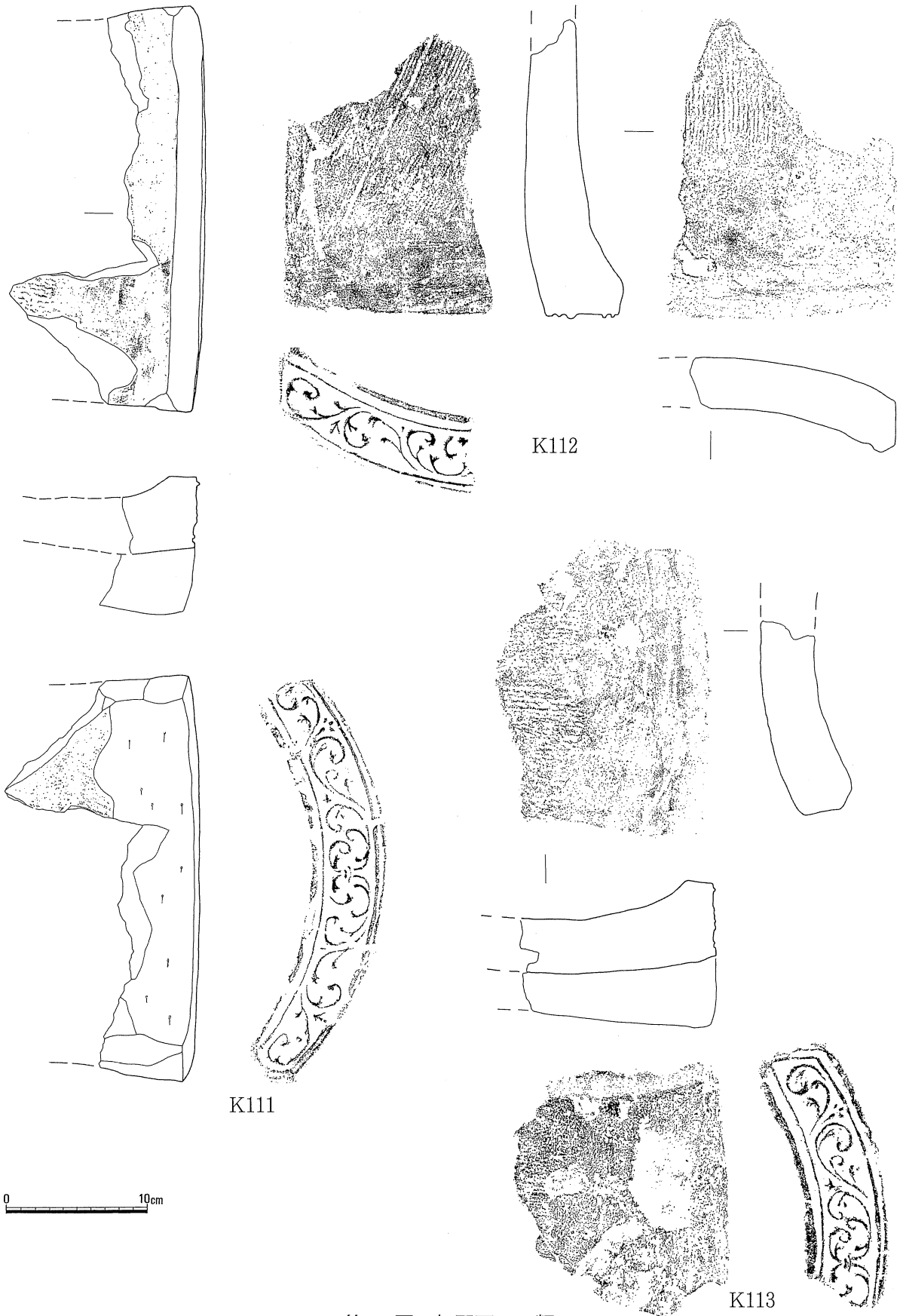


第170図　軒平瓦２Ａ類(16)





第171図　軒平瓦２Ａ類(17)



第172図　軒平瓦２Ｂ類

なったりとがり気味になったりする。平瓦中央部分での厚さは2～2.7cmと薄手である。K99・K100。

2A－6：顎部は曲線顎ないし直線顎で、薄手のものは凸面のヘラ削りのため直線顎になるものが多い。瓦当面の笵傷は4段階。

2A－7：顎部は曲線顎ないし直線顎で、薄手のものに直線顎が多い点は前段階と同じである。瓦当面の笵傷は5段階。K101～K105。

2A－5段階以後は瓦当面を含めて全形がわかる資料がないので流動的な部分を含まざるをえず、平瓦中央部の厚みが4～5cmと厚手で側面が丸くなる一群や瓦当面と瓦笵の形状が合わない個体、側面に布目痕跡がみられる個体の出現は2A－5段階以後と大枠でとらえておくことにする。

2B類(K111～K113)は、唐草を束ねた表現の中心飾りを持つなど2A類と似通った点もあるが、細部の表現や唐草の展開(2B類では第1単位が中心飾りから出てすぐに上向きに反転し、第2単位が下に第3単位が上にそれぞれ反転し2A類とは反転方向が異なる)などに違いがある。出土点数は少なく、1次調査分も合わせて4点出土している。顎部の形態はいずれも幅2cmの面を持った曲線顎で、瓦当面から10cm前後のあたりまで縄叩き目をナデ消している。

軒平瓦2類は軒丸瓦4類同様新羅系の瓦とされている(13)。

軒平瓦3類（第173図）　二重弧紋軒平瓦(K114～K116)。軒平瓦3類は瓦当厚や弧線の作り方により3分できる。

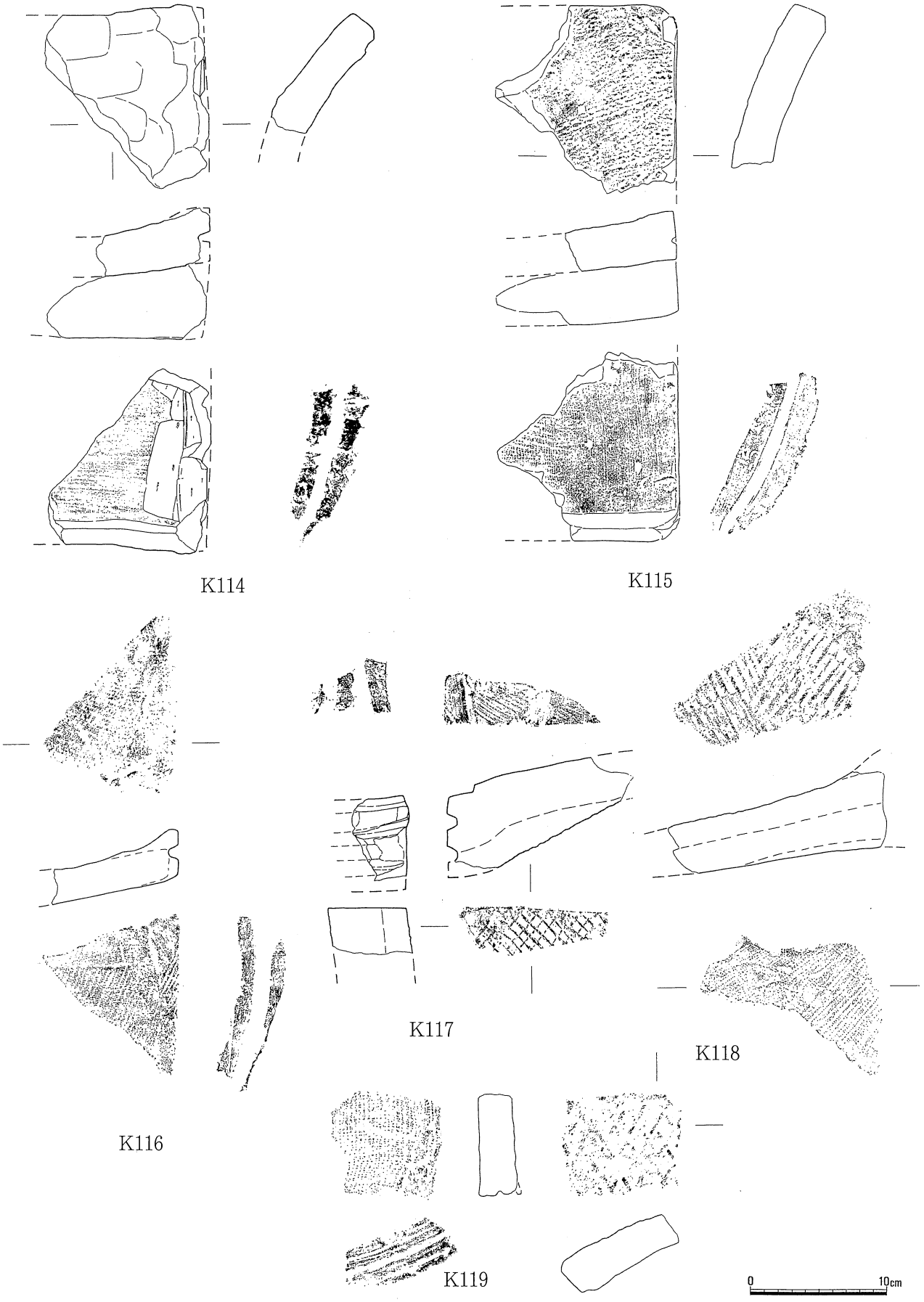
3A類(K116)は模骨痕のある二重弧紋軒平瓦で、瓦当厚4cm弧帯幅1.5cm溝幅1cmである。顎部は曲線顎で指押さえの後粗くなでている。凹面には布目痕跡が残り、瓦当側3cmほどを横方向にヘラ削りを行っている。小片のため叩き目は不明である。側面は丁寧にヘラ削りをほどこし、分割破面を残さない。焼成は灰色の須恵質である。1点のみ出土している。

3B類(K114)も模骨痕のある二重弧紋軒平瓦で、瓦当厚3cm弧帯幅1cm溝幅1cmである。顎部は曲線顎で、下段の弧線から下を三角形に粘土を貼り足して形成している。凸面は粗い指押さえの後ハケ状工具でなでている。凹面には布目痕跡や糸切り痕跡が残る。小片のため叩き目は不明である。焼成は灰色のやや軟質の須恵質である。

3C類(K115)は溝を棒状工具によるいわば手描きの二重弧紋軒平瓦で、瓦当厚3.8cm弧帯幅1.1～1.8cm溝幅6mmである。顎部は直線顎である。凸面には縄叩き目を施す。凹面には布目痕跡や糸切り痕跡が残り、瓦当面側を8～9cmの幅で横方向のヘラ削りを行う。このため明瞭な模骨痕跡は確認できない。側面は丁寧にヘラ削りを行い分割破面は残さない。焼成は堅緻な須恵質で、灰青色を呈する。

軒平瓦4類（第173図）　三重弧紋軒平瓦(K117～K119)。軒平瓦4類も軒平瓦3類と同様に瓦当厚や弧線の作り方などにより2つに分かれる。

4A類(K117・K118)は三重弧紋軒平瓦で、瓦当面の残りはよくないが瓦当厚約6cmである。凸面の叩き目は1辺5mmの格子叩きと平行叩きがある。凹面には布目痕跡や糸切り痕跡がのこり、瓦当面側の幅2cmほどを5mmの深さで厚く削っている。顎部は直線顎で厚さ5cmほどあるが、もとは3cmのものに粘土を足しているのが観察できる。K118は瓦当面を欠損しているが、破面からK117と同様の製作法がみられる。



第173図　軒平瓦３類・４類

4 B類(K119)は弧帯の幅は8～10㎜で最下段は4㎜ほどの三重弧紋軒平瓦であるが、上段の弧帯は幅広で中央部に細線がありこれを取ると中段の弧帯と同じ幅となるので四重弧紋とみた方がよいかもしれない。顎部は直線顎で、凸面には1辺1.5㎝の菱形叩き痕が瓦当部まで残る。凹面にはやや粗い布目痕跡と幅3㎝ほどの模骨痕があり、側面はヘラ削りされている。小片が1点のみ出土している。

軒平瓦5類（第174～184図）　均整唐草紋軒平瓦(K120～K153)。1次調査で賞田廃寺第5様式軒平瓦としていたもので、平城宮6663型式系統の瓦である。

5 A類(K120～K127)は12点出土し瓦当面を含め全形の分かる資料はないが、その瓦当紋様の主な特徴は、花頭形垂飾りの先端が十字形、中心葉が下の界線につく、左第1単位主葉と第1子葉の茎が長い、左第2単位の主葉の茎と第1子葉の茎が平行する、左第3単位の第1子葉が内転する、右第1単位主葉・第2単位主葉の巻が多い点などがあげられる。顎部の形態は多くが曲線顎であるが、幅5㎝の面を持つ曲線顎・ごく緩い曲線顎・直線顎がそれぞれ1点ずつある。凸面の叩き目はハケ状工具により強くナデ消しているのが大半であるが、ごく緩い曲線顎のK127は瓦当面から10㎝の所に縄叩き目が観察される。また、直線顎のK124には瓦当面まで縄叩き目が残っている。側面はどれも広い面を持っており、凸面と側面の境は明瞭できちんと角を持たせている。資料の残存度合いにもよるので単純な比較はできないが、平瓦の厚さは2～5㎝あって面を持つ曲線顎・緩い曲線顎・直線顎の個体は4㎝以上と厚い。焼成は10点が堅緻な須恵質である。

5 B類(K128)は左側のみの破片であるが、5 Aとよく似ている。ただし、左第2単位の主葉の巻きが小さい点、第1子葉が主葉から離れ上界線に近づく点、第3単位第1子葉の巻きがあまい点などが違いとしてあげられる。1点のみ出土している。

5 C類(K129～K151)の特徴は、花頭形垂飾りの先端がT字形、中心葉が上の界線につく、右第1単位主葉と第1子葉の茎が長く、右第3単位第2子葉を欠く点などである。また、焼成があまく遺存状態の悪い個体が多い。朱線はK129・K131・K136・K137・K140・K142などにみられ、瓦当面から17～20㎝離れている。5 C類は笵傷の進行により右半分では1～4段階に、左半分では5・6段階に分かれるが、完形品がないので5・6段階は3・4段階との関係は不明である。(第185図)

5 C－1：無傷の段階であるが、出土していない。

5 C－2：右第2単位と第3単位の間上方の第2界線と外縁の間にやや離れて2本つく。顎部は曲線顎である。平瓦部では凸面と側面の境が不明瞭になっている個体がみられる。K131・K144・K147。

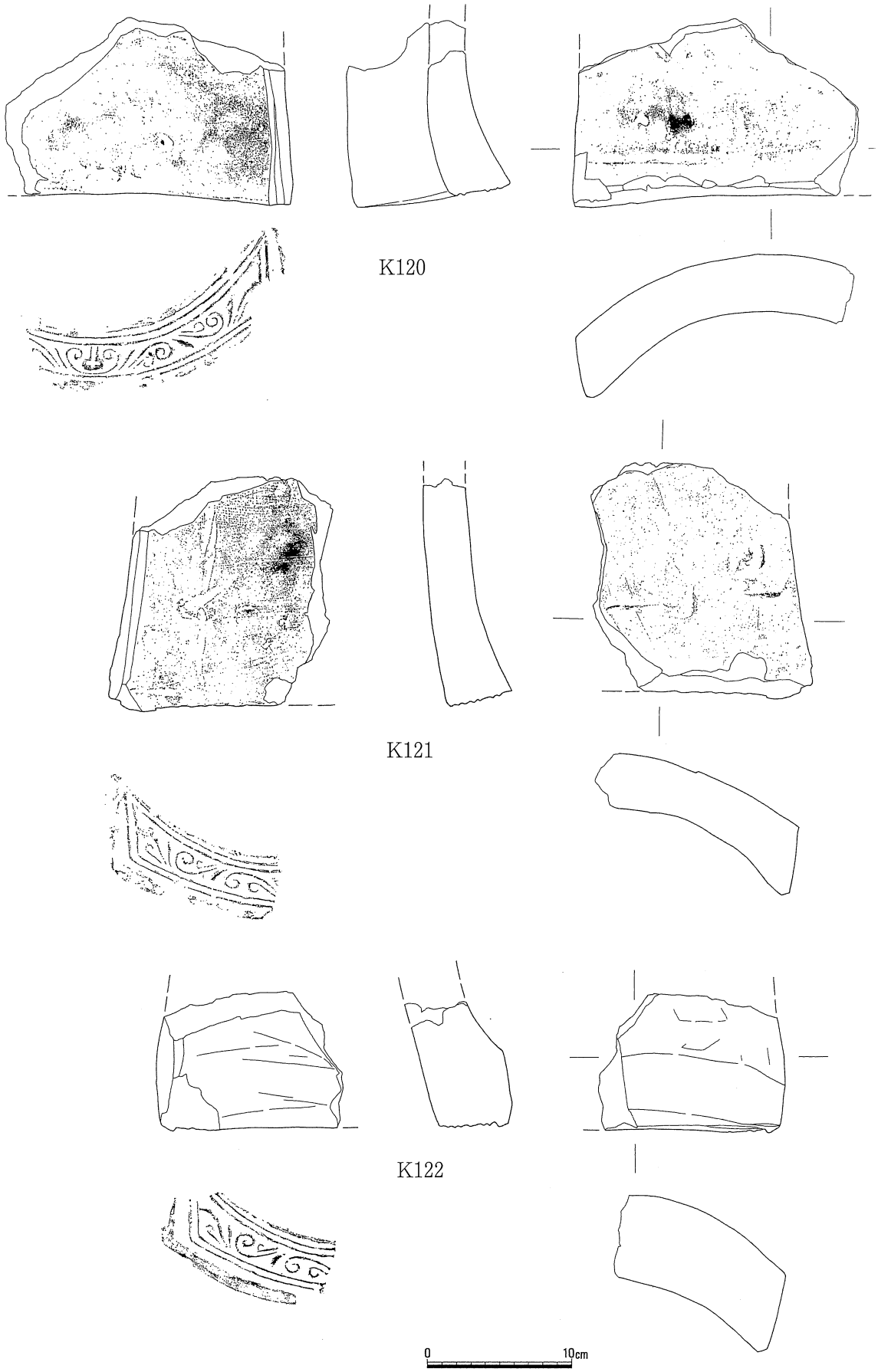
5 C－3：右第2単位第2子葉の先やや右側第2界線と外縁との間に1つできる。K132。

5 C－4：右第3単位の主葉の先端を左上から右下方向にともに外縁まで傷が付き、あるいは笵割れをおこしているともみられる。K142・K148・K151。

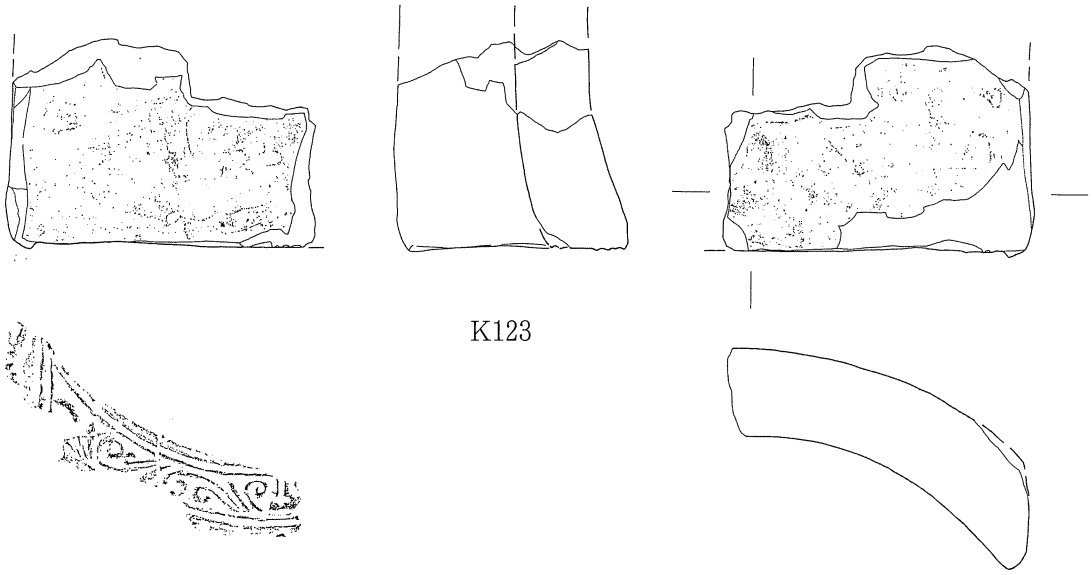
5 C－5：左第3単位主葉と第1子葉の間の根元付近に1つ現れる。K134・K145。

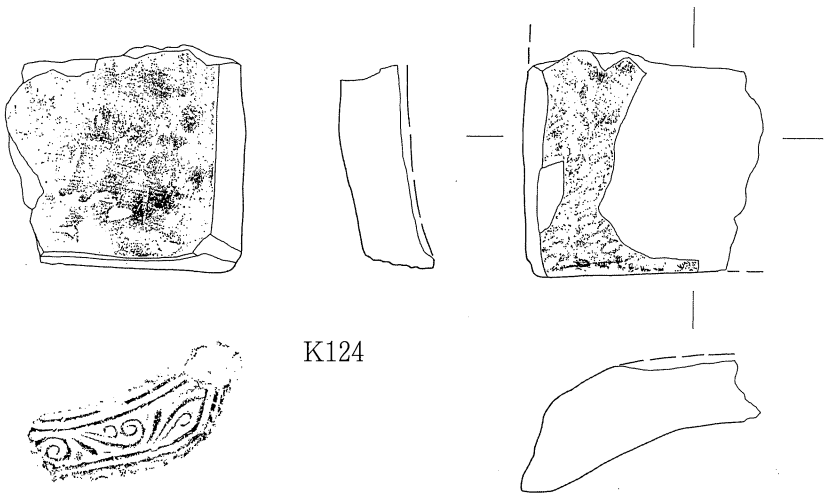
5 C－6：左第3単位第1子葉の下方第2界線と外縁の間に1つ現れる。

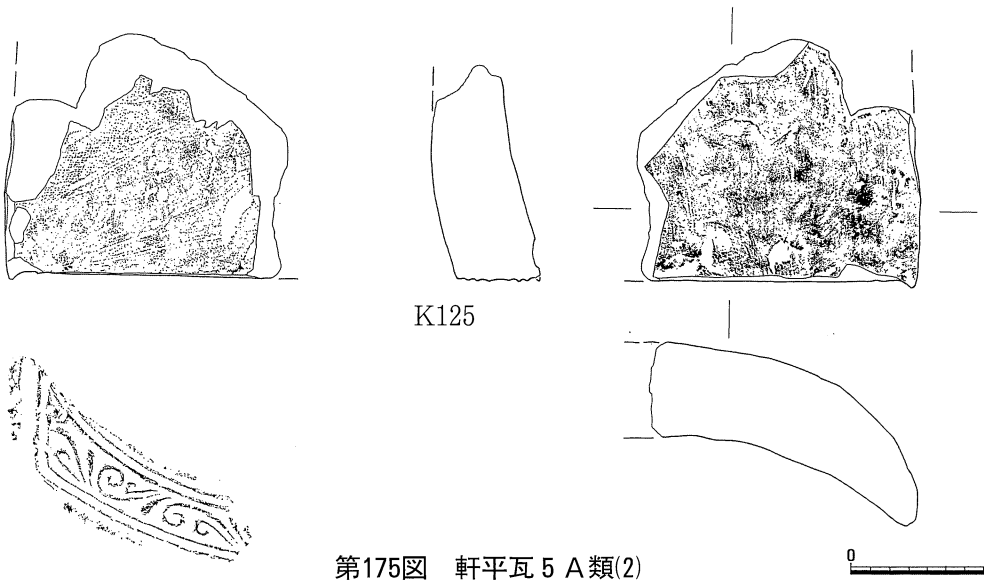
5類D(K152)は左側半分の破片であるが、中心葉の巻きが小さい、第2単位第1子葉が小さく上の界線につく、第3単位第1子葉の巻きがつぶれているなどの点を特徴として挙げることができる。小片も含め3点出土している。



第174図　軒平瓦５Ａ類(1)

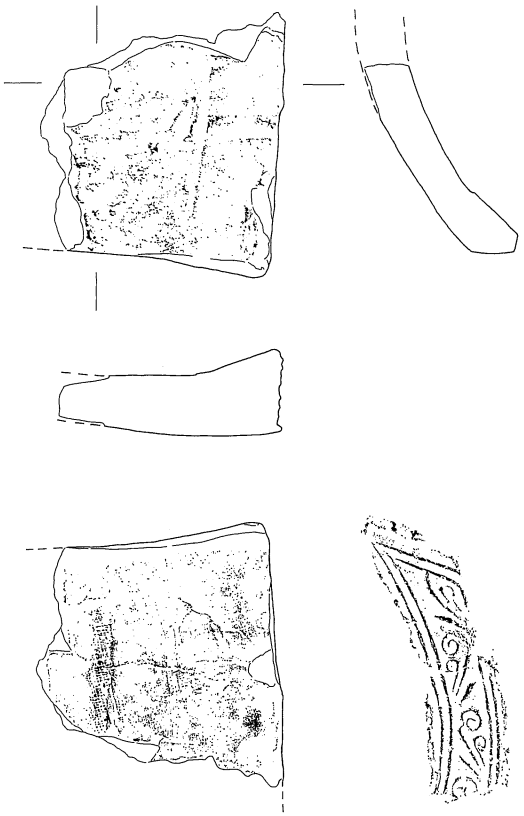




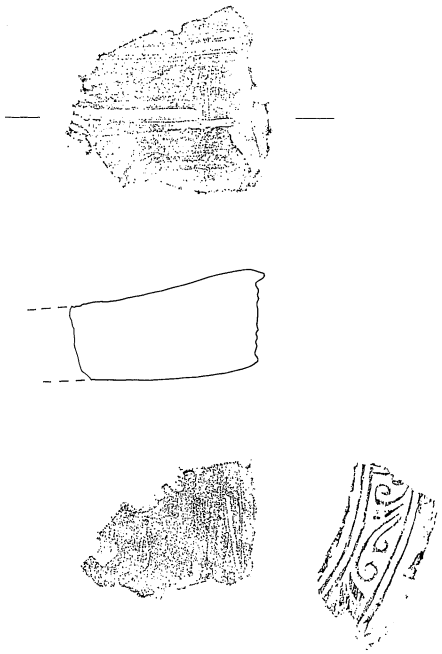


第175図　軒平瓦５Ａ類(2)

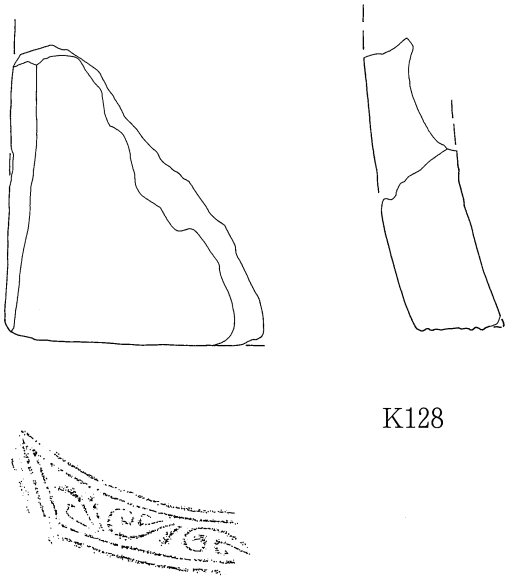
0　10cm



K126



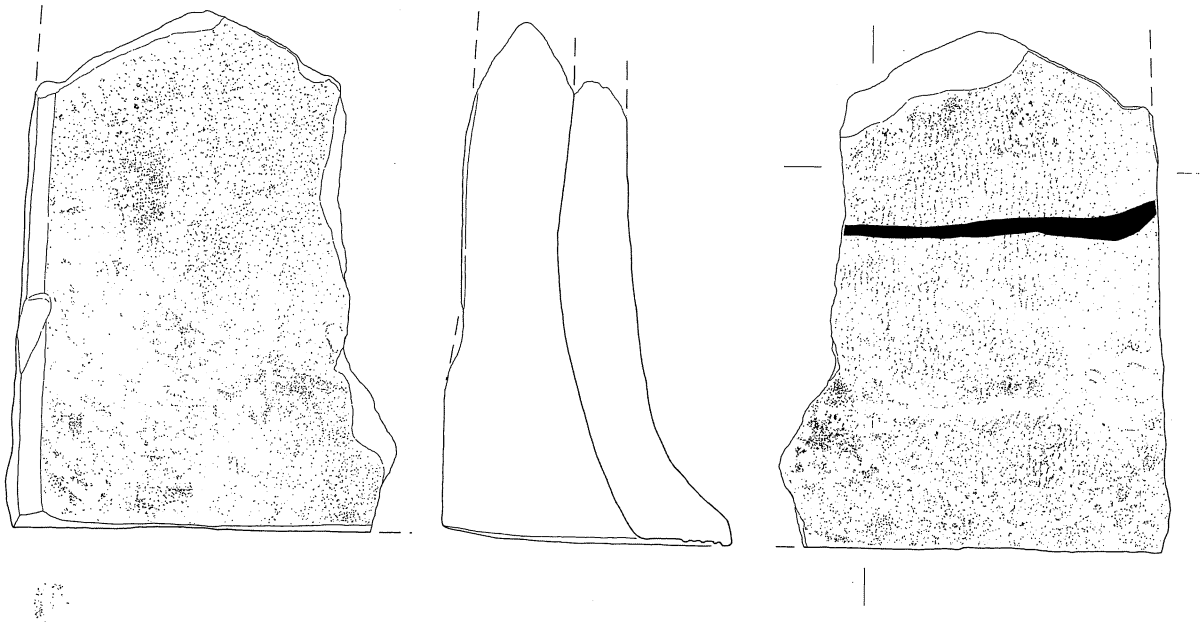
K127



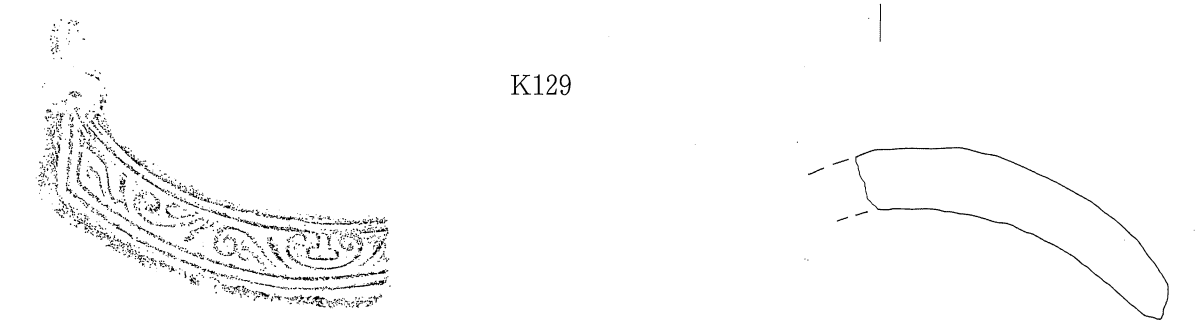
K128

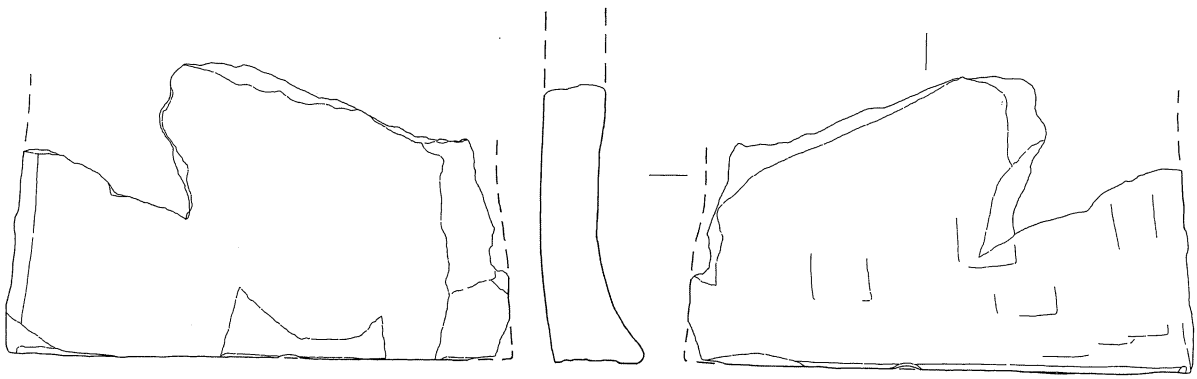
0 10cm

第176図　軒平瓦５Ａ類(3)・５Ｂ類

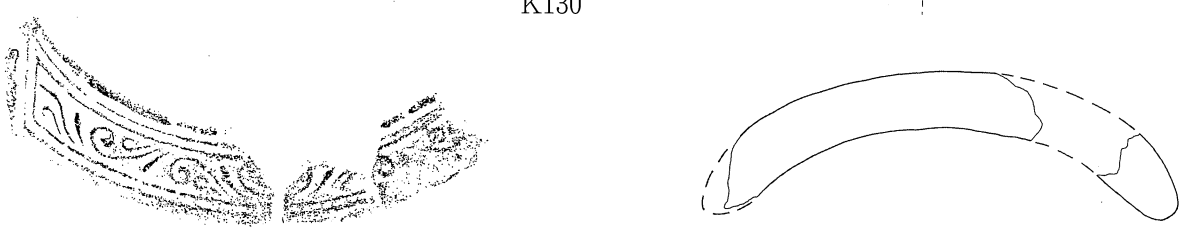


K129

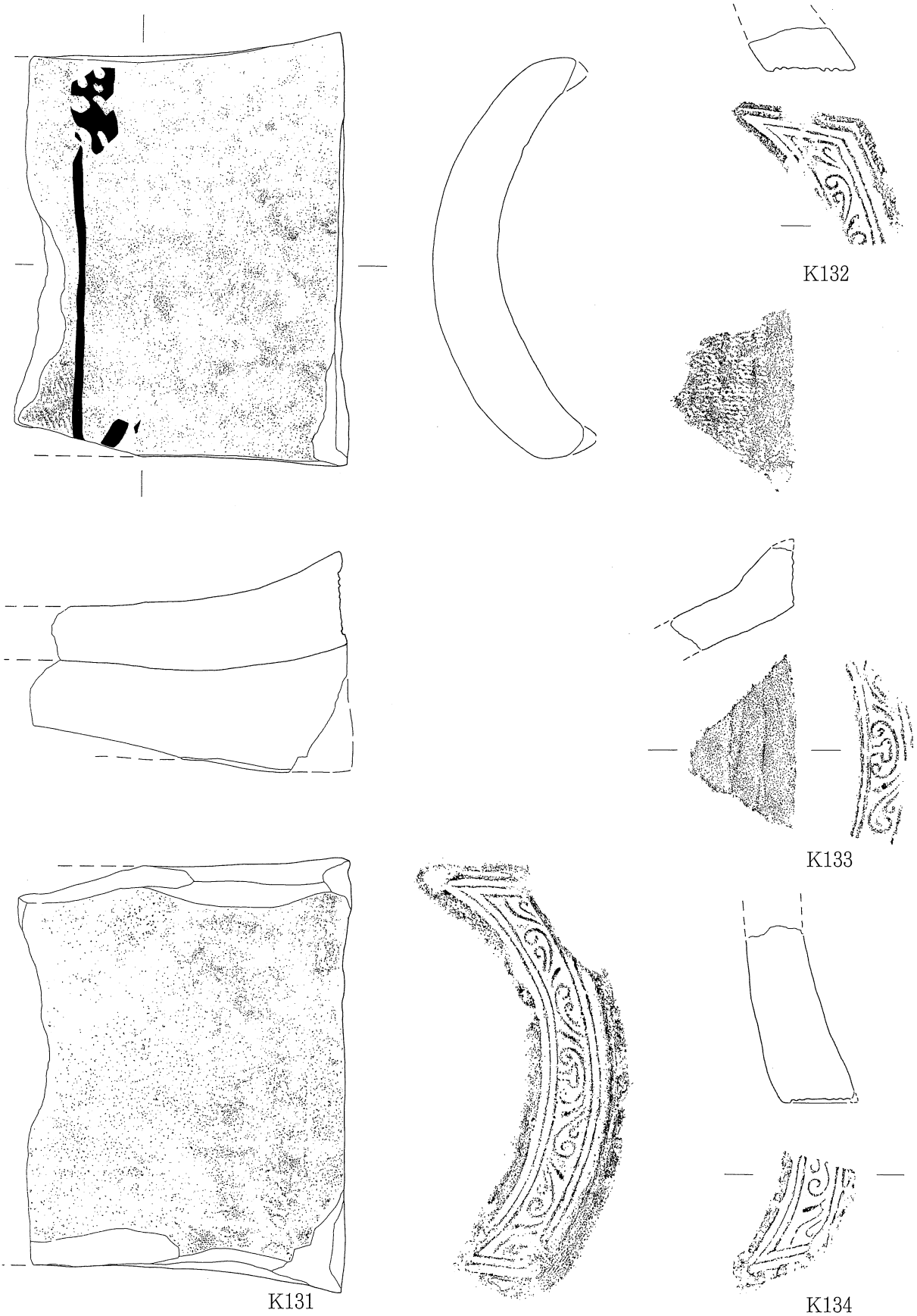




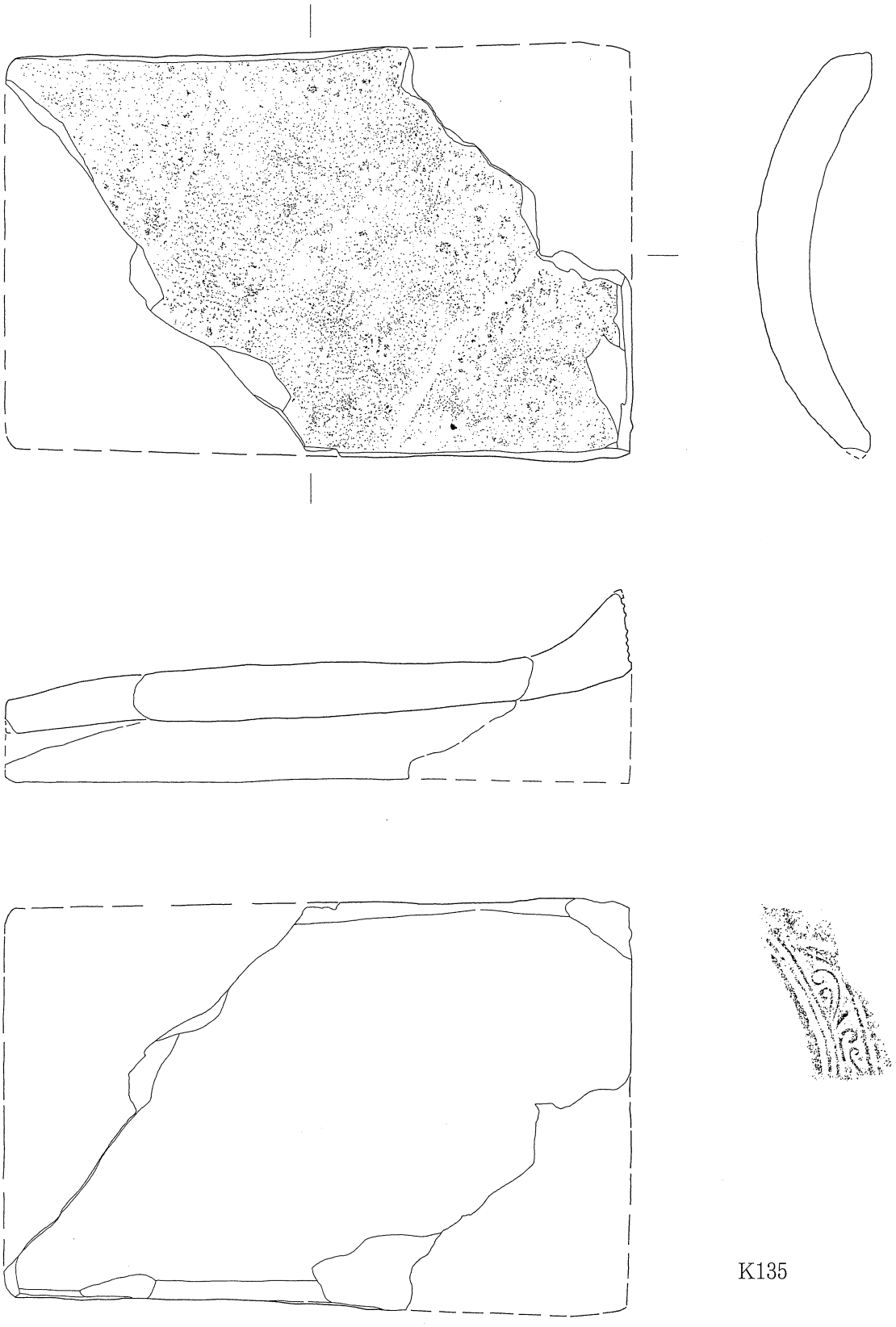
K130



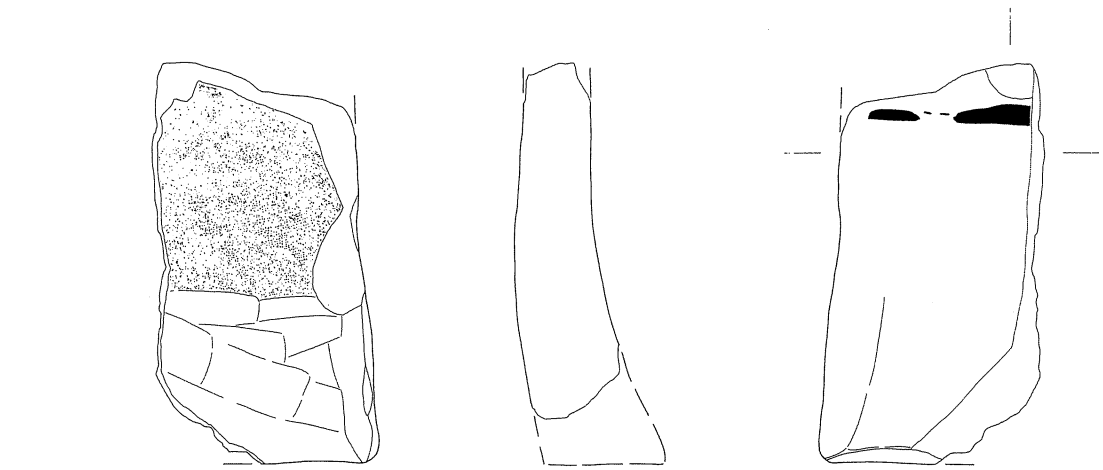
第177図　軒平瓦５Ｃ類(1)



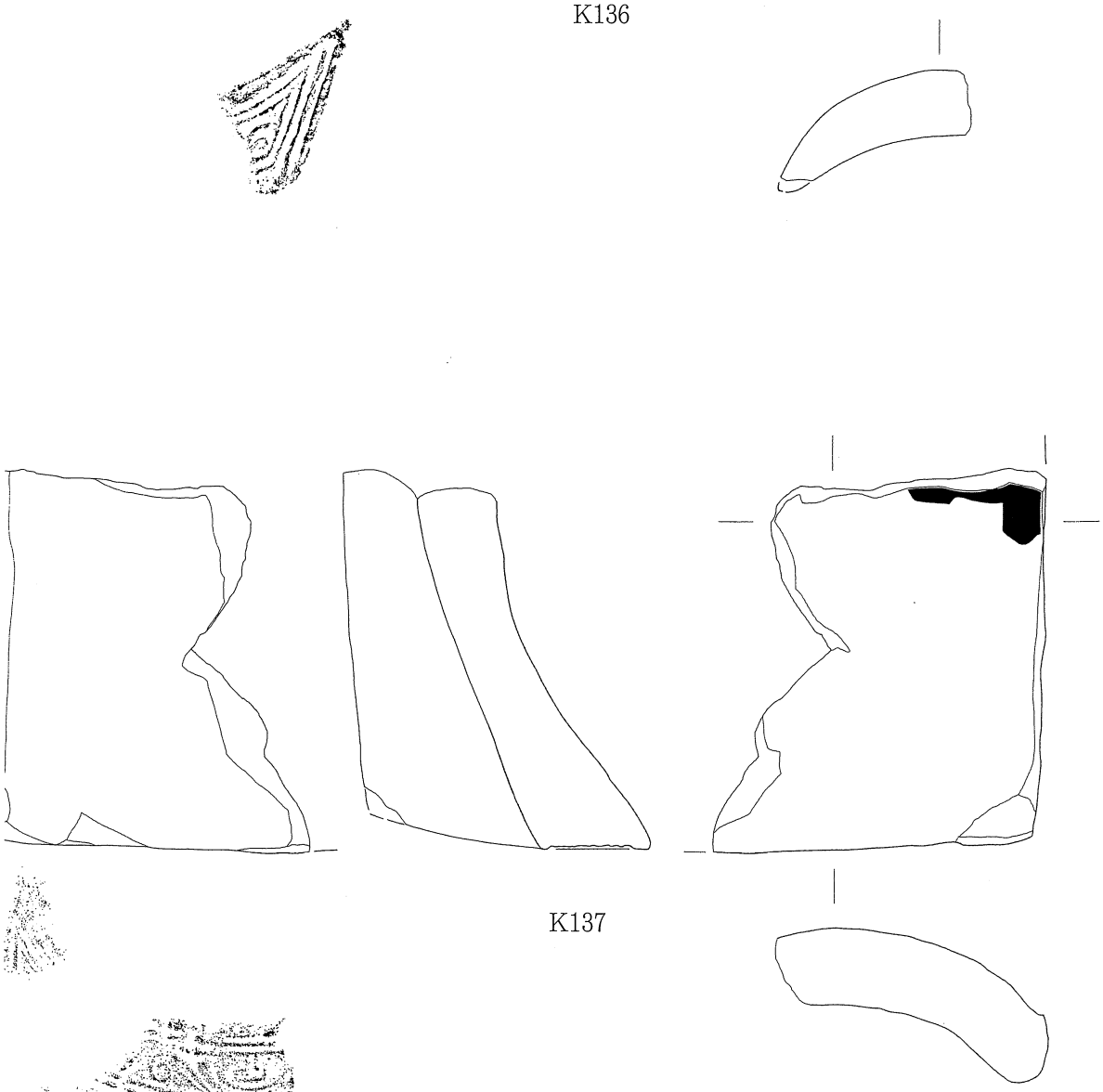
第178図　軒平瓦５Ｃ類(2)



第179図　軒平瓦５Ｃ類(3)

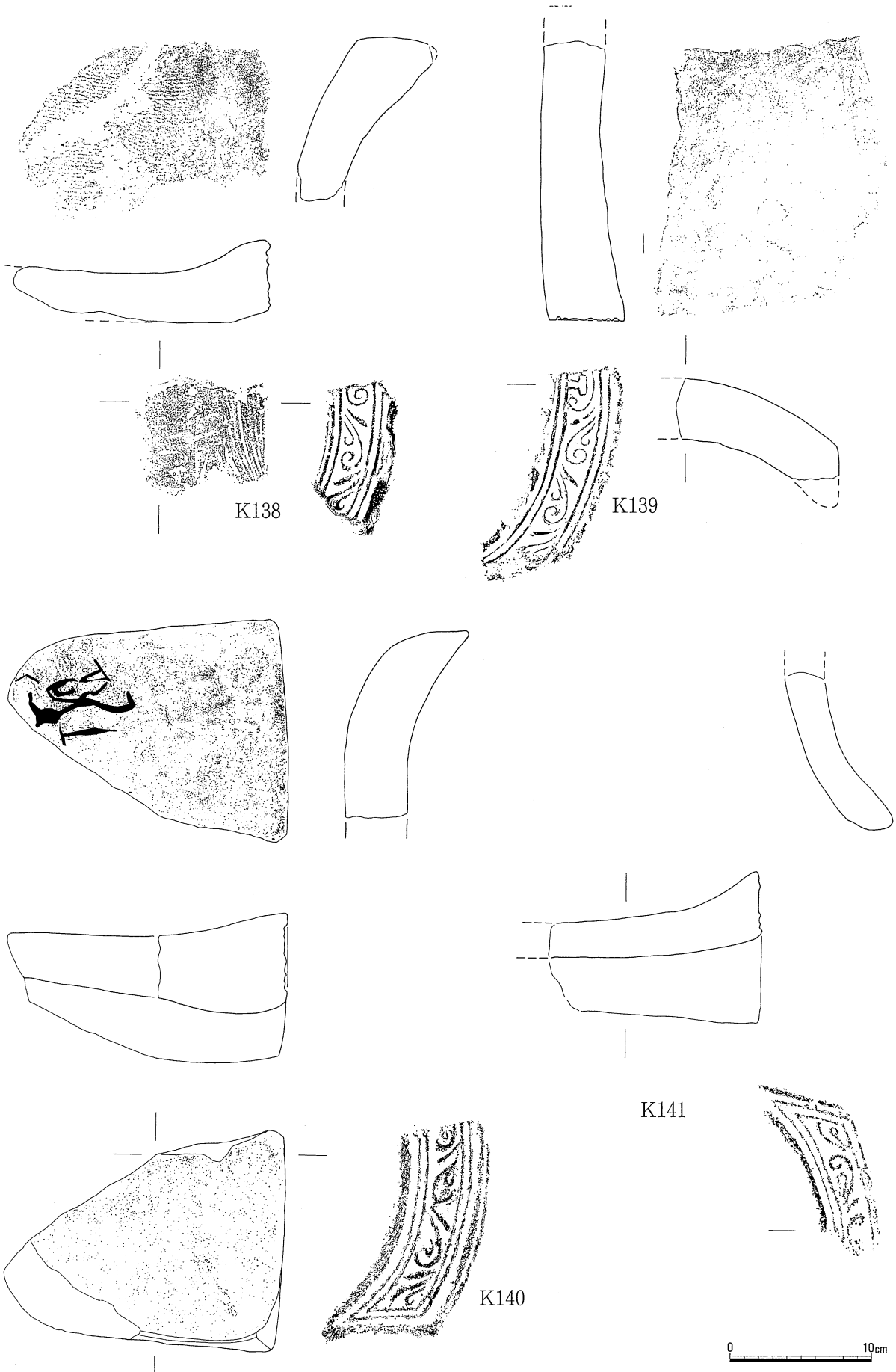


K136

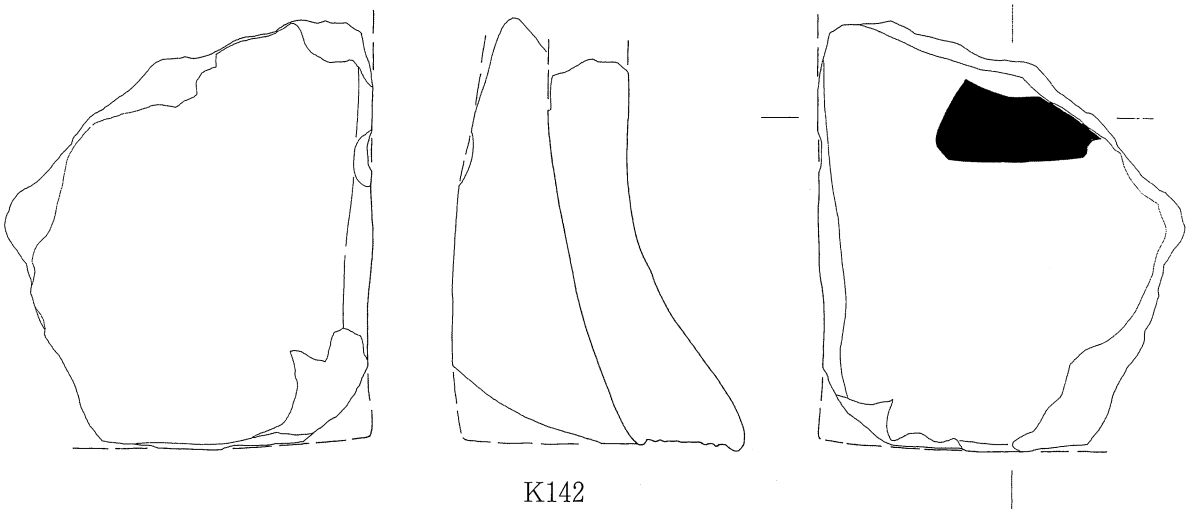


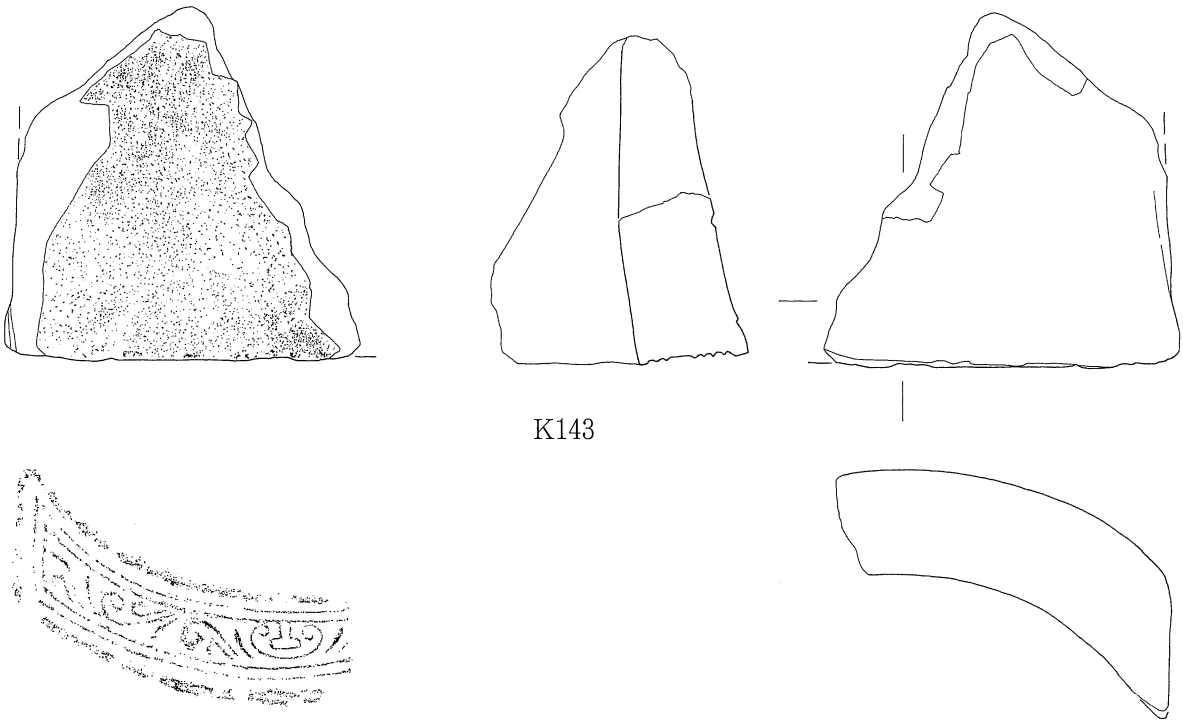
K137

第180図　軒平瓦５Ｃ類(4)

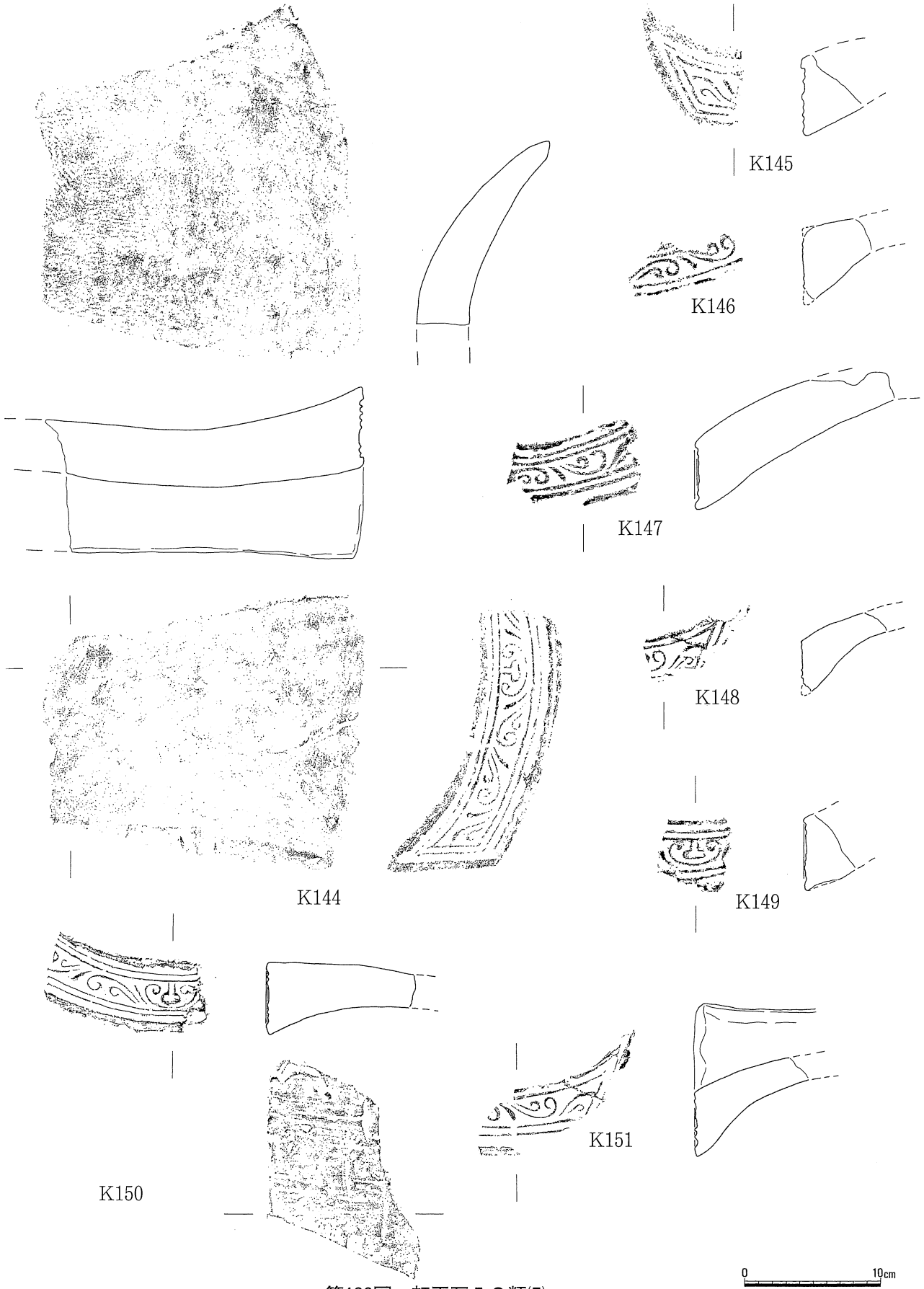


第181図　軒平瓦５Ｃ類(5)

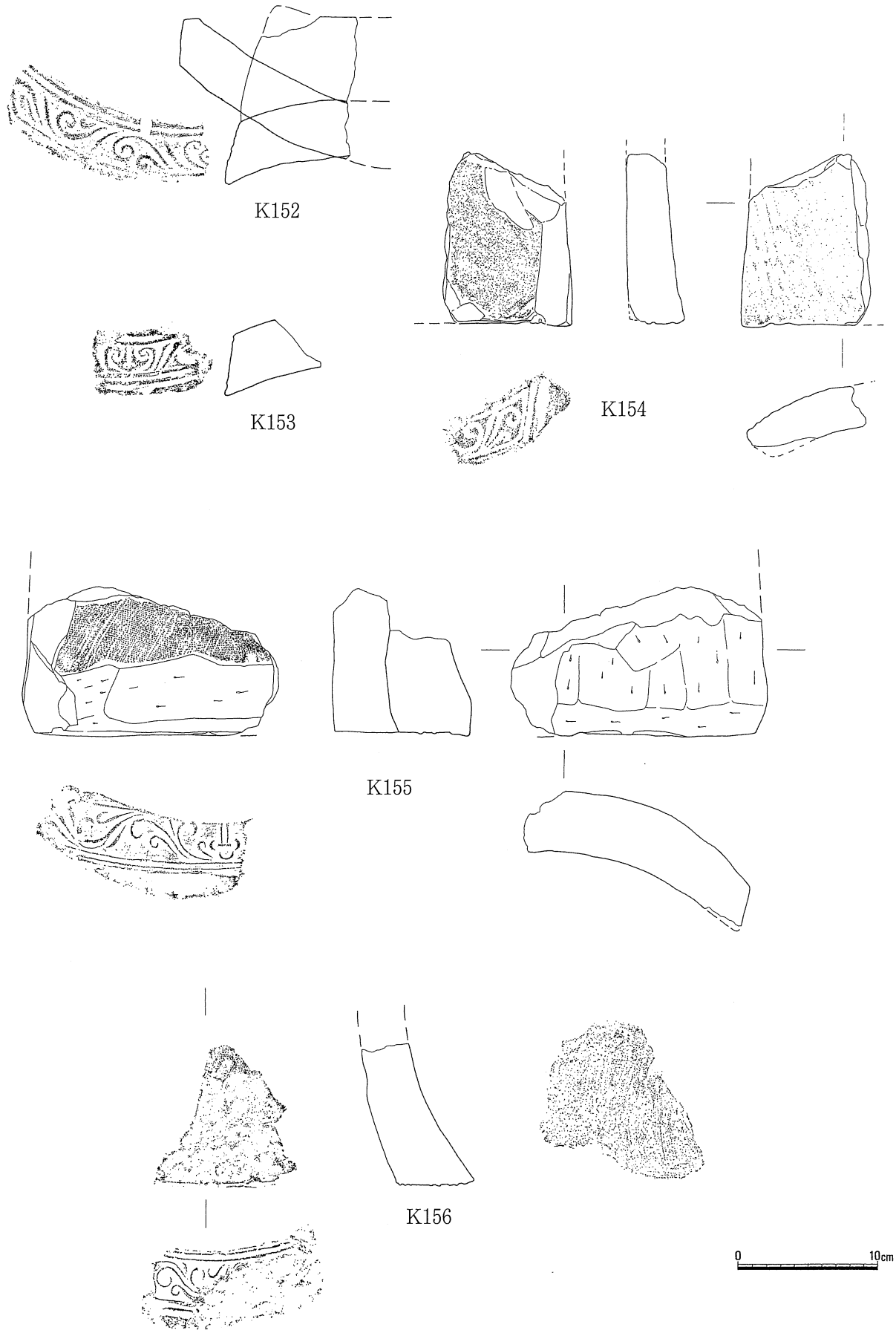




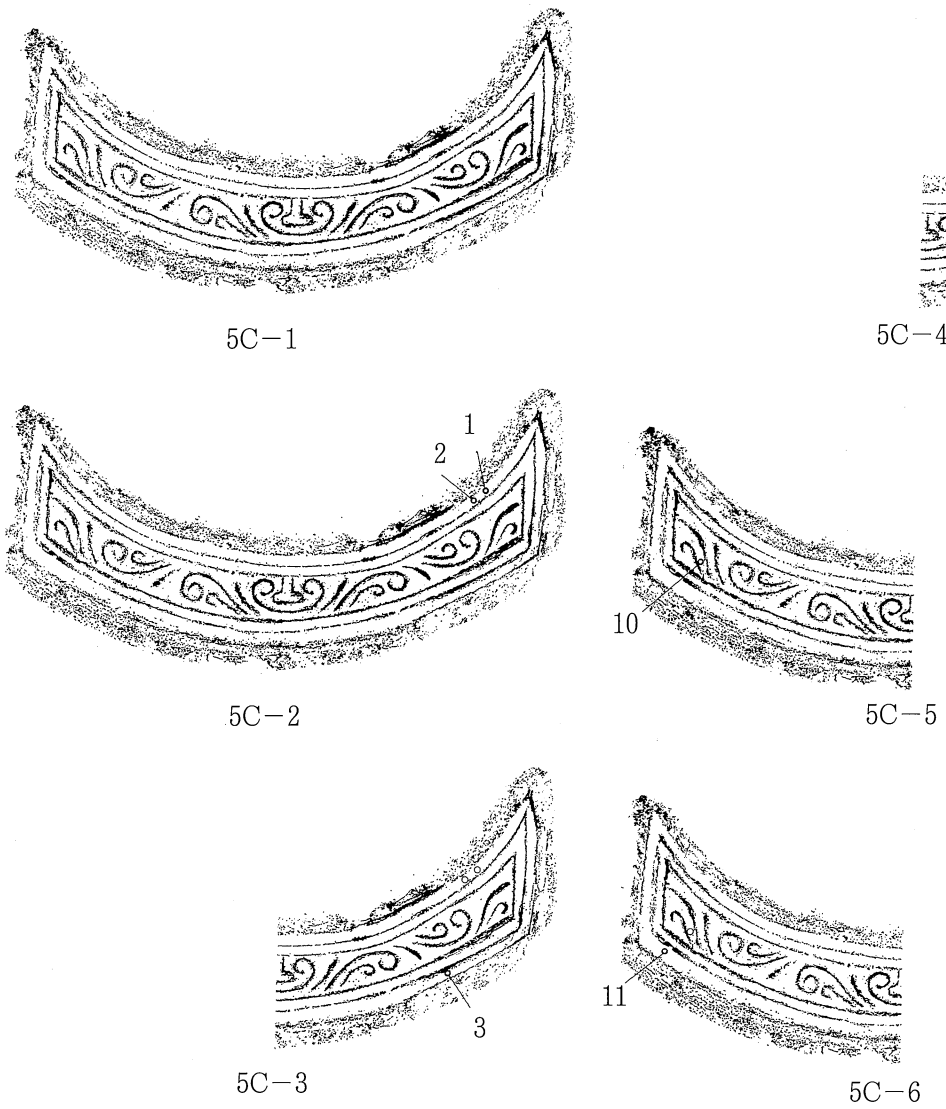
第182図　軒平瓦５Ｃ類(6)



第183図　軒平瓦５Ｃ類(7)



第184図　軒平瓦５Ｄ・５Ｅ類・６類～８類



第185図　軒平瓦５Ｃ笵傷進行図

５Ｅ類(Ｋ154)は瓦笵が陰陽逆転したもので、右側１／４程度の破片である。第３単位は３葉がそろっている。右側部第２界線と外縁との間に太い傷がある。瓦笵と瓦当面の形状にずれがある。顎形態は直線顎で、凸面の叩き目は太い荒縄状のものが瓦当面に接して残る。

軒平瓦６類（第184図）均整唐草紋軒平瓦(Ｋ153)。平城宮式系統の軒平瓦であるが、中央部の小片のため全体は不明である。中心飾りは花頭形垂飾り先端横がのびて中心葉の巻きに連なる。中心葉は中心部分がわずかに離れている。第１単位は第１子葉第２子葉とも直線的に斜め60°方向にのびている。顎形態は曲線顎である。

軒平瓦７類（第184図）均整唐草紋軒平瓦(Ｋ155)。平城宮式系統の軒平瓦で、左側半分の破片である。中心飾りは上から降りてきた２本線の先端に短い横線が付く。その左右と下を半月形の弧線が囲む。中心葉は根元が左右に離れ、小さな子葉が内側につく。第２単位・第３単位はそれぞれ主葉から連続して展開する。顎形態は面を残した曲線顎である。瓦当面の形状と瓦笵の形状とにずれが生じている。また、瓦笵の木目も観察される。岡山市居都廃寺[14]から類例が出土している。

軒平瓦８類（第184図）　均整唐草紋軒平瓦（K156）。平城宮式系統の軒平瓦とみられる。単位が短いのが特徴であるが、小片のため展開は不明である。２重界線を持ち、顎形態は曲線顎である。瓦笵の木目が観察される。厚さは瓦当面から５㎝離れた部分で４㎝である。１次調査で１点のみ出土している。

軒平瓦９類（第186図）　唐草紋軒平瓦（K157）。右側１／２弱の破片１点のみの出土である。右端上部は瓦笵からはずした後、紋様をナデ消しヘラで描き直している。このため元々の紋様が読みとりにくいが、ヘラ描きされた部分の紋様の重なりによる粘土の盛り上がりからすると、右方向の偏行唐草紋であったかもしれない。瓦当面は瓦笵の形状とややずれが生じている。顎形態は曲線顎に近い直線顎で、凸面の叩きは瓦当面にほぼ接している。

軒平瓦10類（第186図）　均整唐草紋軒平瓦（K158）。左側１／２の破片のため中心飾りは不明である。少なくとも３転する単位を持ち、各単位は主葉の巻きの外側を大きく子葉が取り囲む。外区は界線と幅の狭い外縁から成る。平瓦は４㎝と厚めで、凸面は4.5㎝の顎部を残すように縦方向の縄叩き目を行った後、横方向の縄叩きを施す。

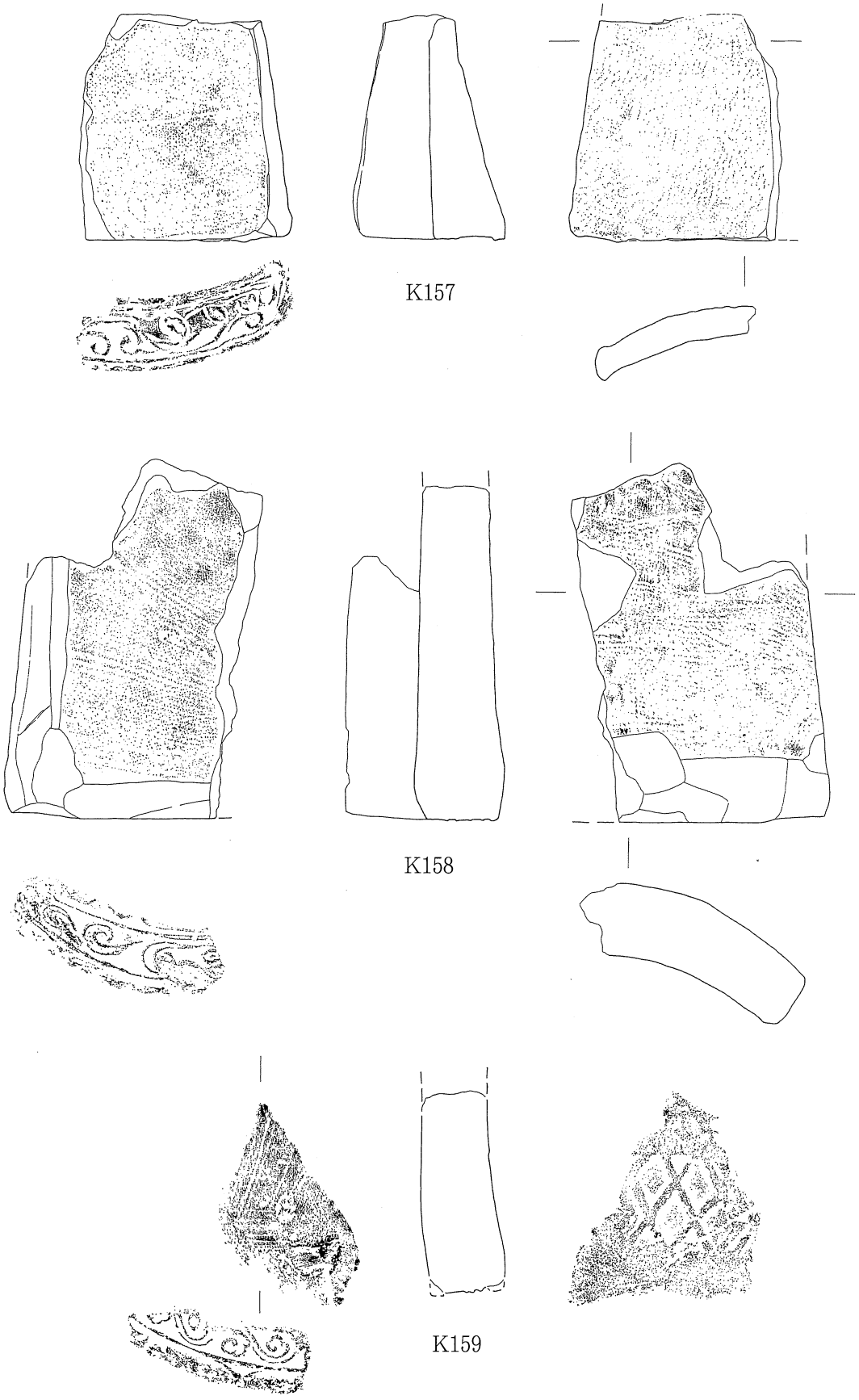
軒平瓦11類（第186図）　均整唐草紋軒平瓦（K159）。中心飾りは不明である。唐草は上下２本からなり、巻きによる分かれ目から派生する。唐草の巻きの部分は３連の弧状で雲形を呈する。外区は界線とやや突出する外縁から成る。顎部は直線顎で、凸面には１辺が2.5㎝の縦方向の大菱形叩きを施す。やや軟質で灰白色の須恵質である。西塔西の瓦溜まりから１点のみ出土している。

軒平瓦12類（第187図）　唐草紋軒平瓦（K160）。中心飾りは花の横断面を表現したような形を取る。唐草の葉は太く肉厚である。外区は界線で囲む。幅2.4㎝高さ９㎜の凸帯をつけた平瓦に幅２㎝の顎部を貼り付けており、上外区は平瓦広端面と凸帯側面とで２段の外縁となっている。顎部貼り付け粘土は瓦当面から12㎝の部分にまで及ぶ。焼成は堅緻な須恵質である。金堂瓦溜まりから１次調査時に１点のみ出土している。

軒平瓦13類（第187図）　均整唐草紋軒平瓦（K161・K162）。中心飾りは大振りな横置きのＣ字紋様の中心に水滴状の垂飾りをおく。唐草は左右に２転し、第１単位から延びた子葉は中心飾りの根元まで折り返す。第２単位の先は左右の上部角に接近する。外縁は平縁で瓦当厚は５㎝である。瓦当部は包み込み式で形成され、顎部は段顎である。凸面の叩き目痕跡は不明である。胎土には大粒の石英・長石粒を含み青灰色に堅緻に焼成されている。姫路市本町遺跡出土ＢＲ９[15]が近似した紋様であるが、ＢＲ９では左第１子葉が中心飾りから右第１子葉が中心葉から派生しているのに対して、本例は中心飾りと中心葉の分かれ目部分から派生している点が異なる。

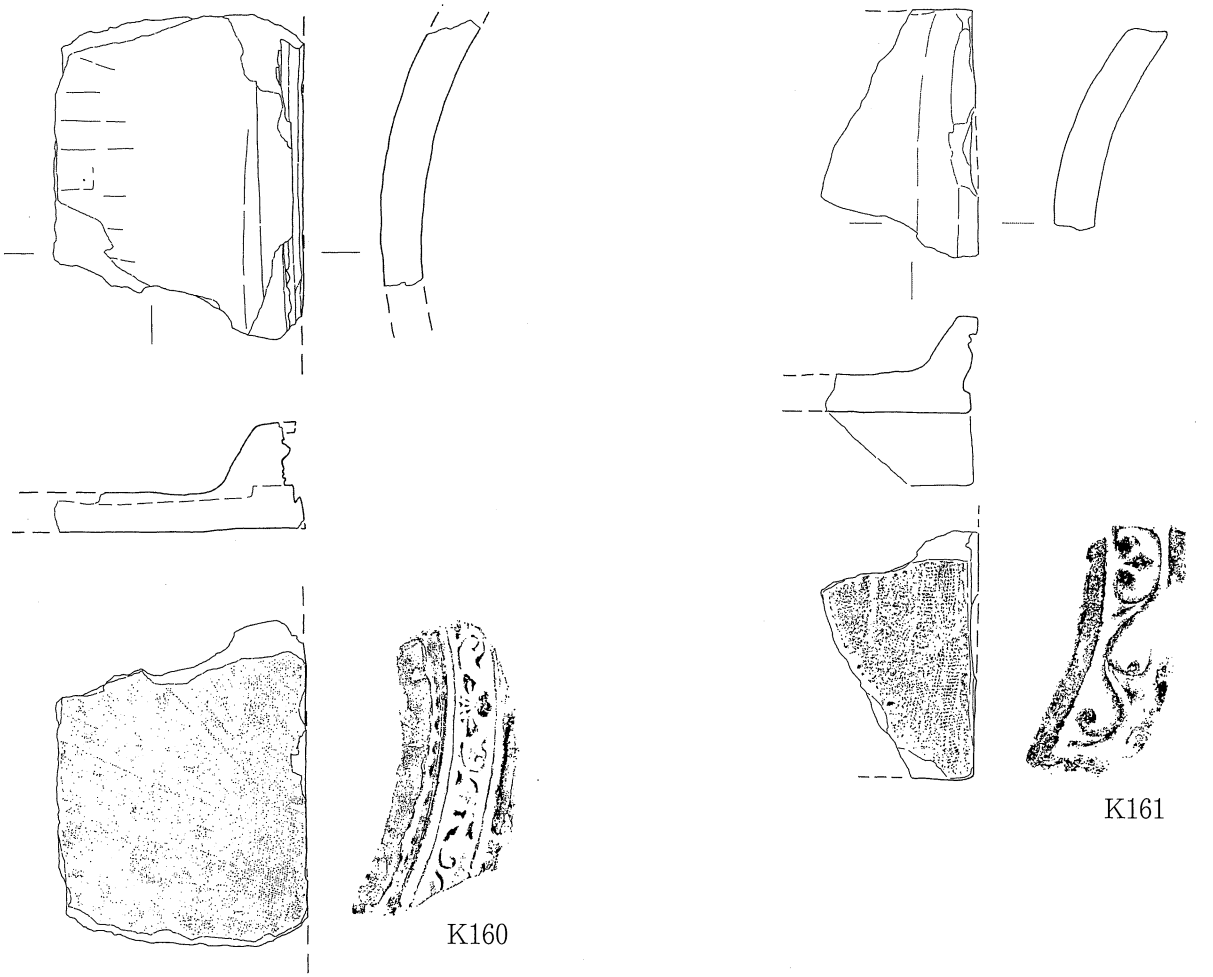
軒平瓦14類（第187・188図）　均整唐草紋軒平瓦（K163～K165）。唐草は陰紋である。外区は界線で囲み上外区には上向き凸鋸歯紋を配するものと配さないものとがある。３点出土しているがいずれも左右の端部付近の破片で、中心飾りは不明である。端部での唐草の巻きは上向きと下向きの両者がある。左端部の破片２点は、外区鋸歯紋の有無の違いはあるが、唐草紋様は一致しており、鋸歯紋は別に施されたとみられる。顎部は浅い段顎で、平瓦凸面には粗い長方形叩き痕が残り叩き板の幅は４㎝である。焼成はやや不良の瓦質である。

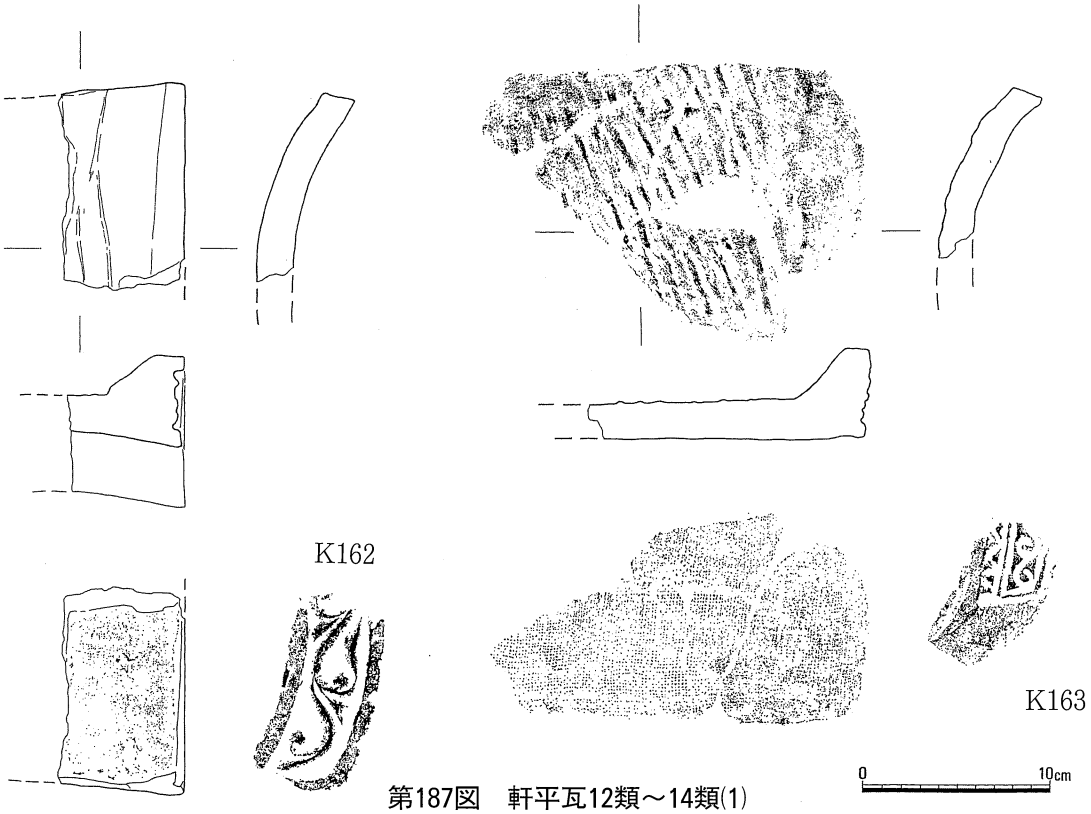
軒平瓦15類（第188図）　均整唐草紋軒平瓦（K166・K167）。中心から右側にかけての破片のため全形は不明であるが、中心飾りは背中合わせに左右の唐草が巻きを作る。中心飾りから延びた唐草は子葉を持たず、左右で３転以上する。曲線顎で瓦当部分は斜めに貼り付けている。



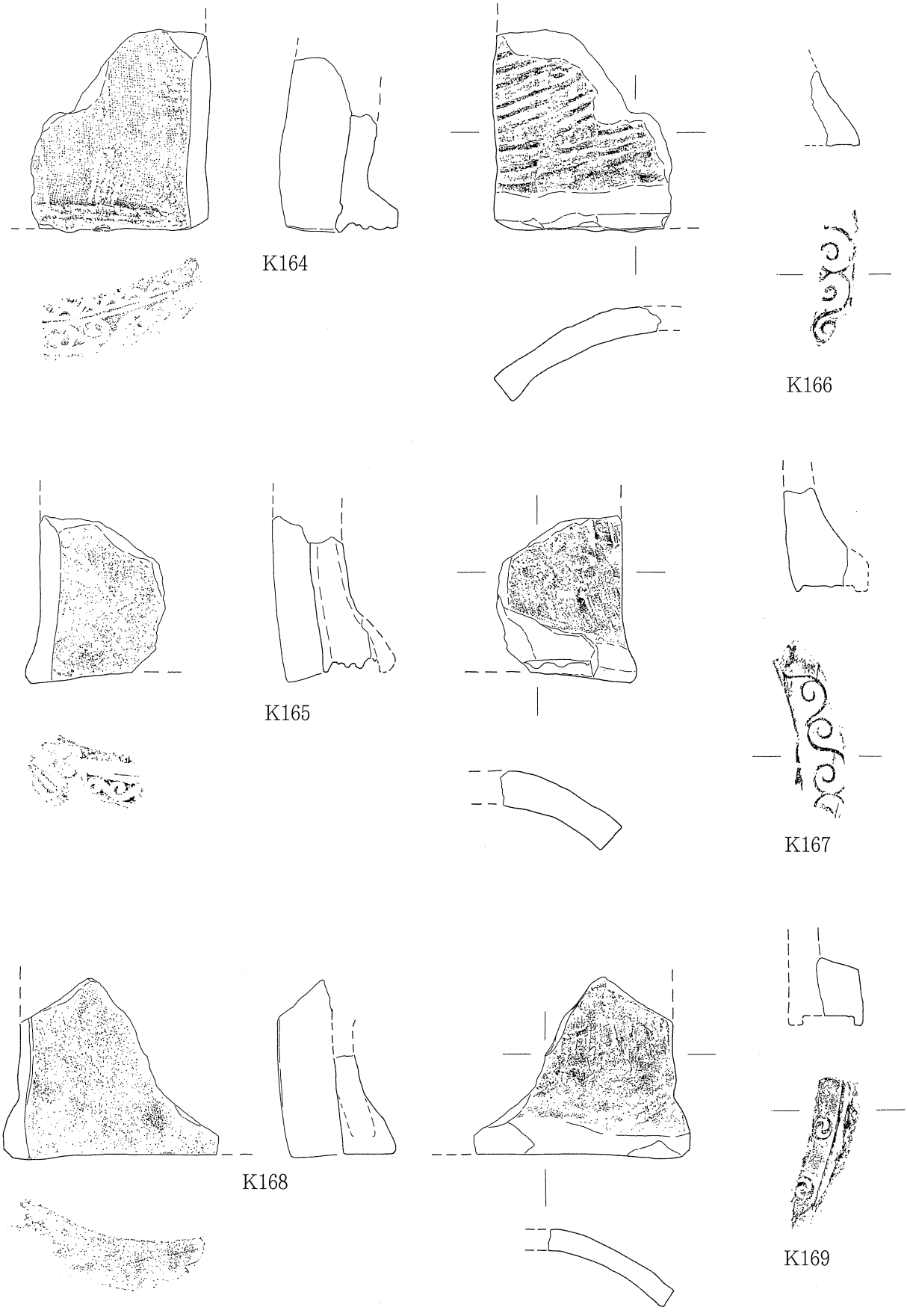
第186図　軒平瓦 9 類～11類

0　10cm

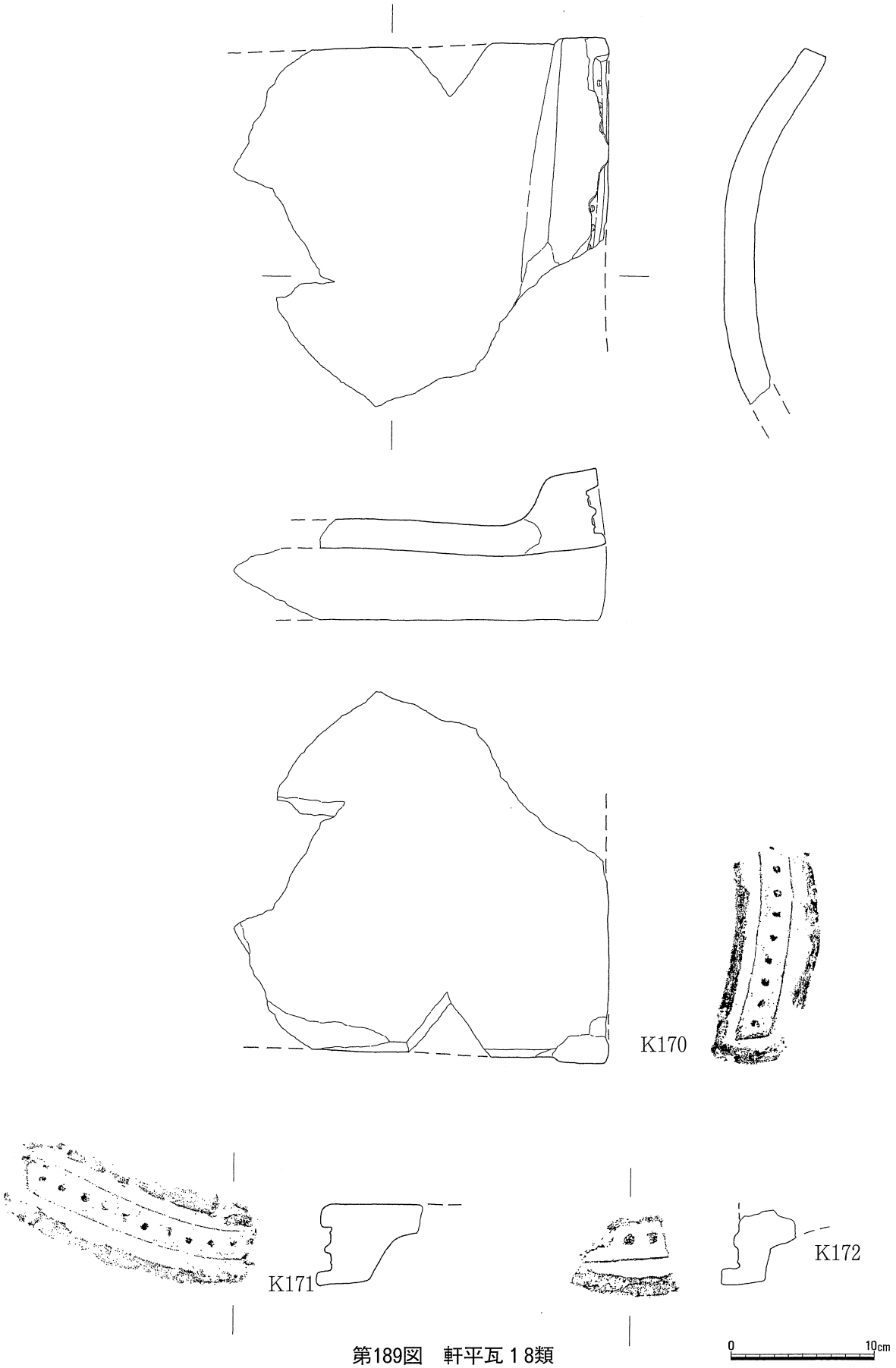




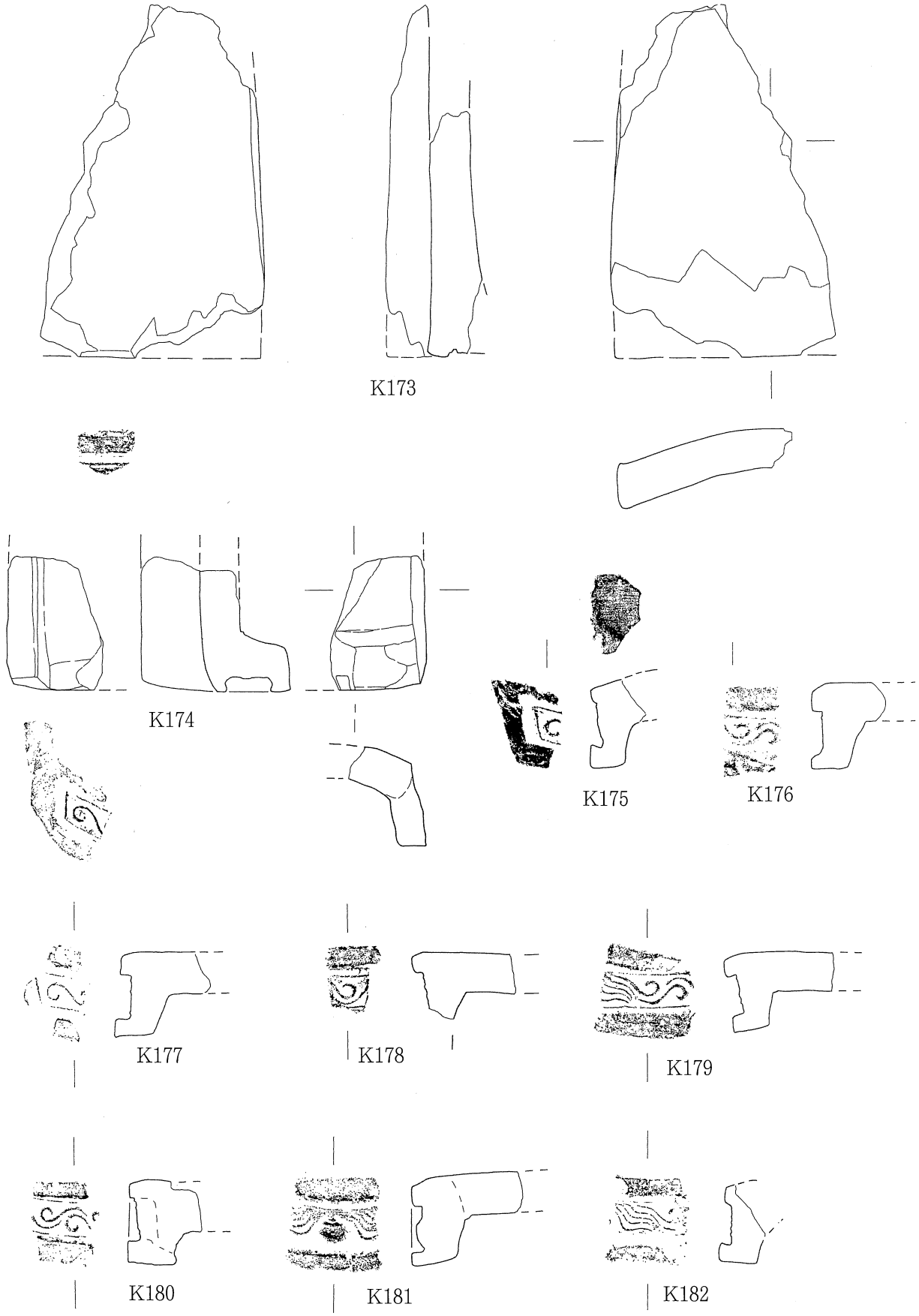
第187図　軒平瓦12類～14類(1)



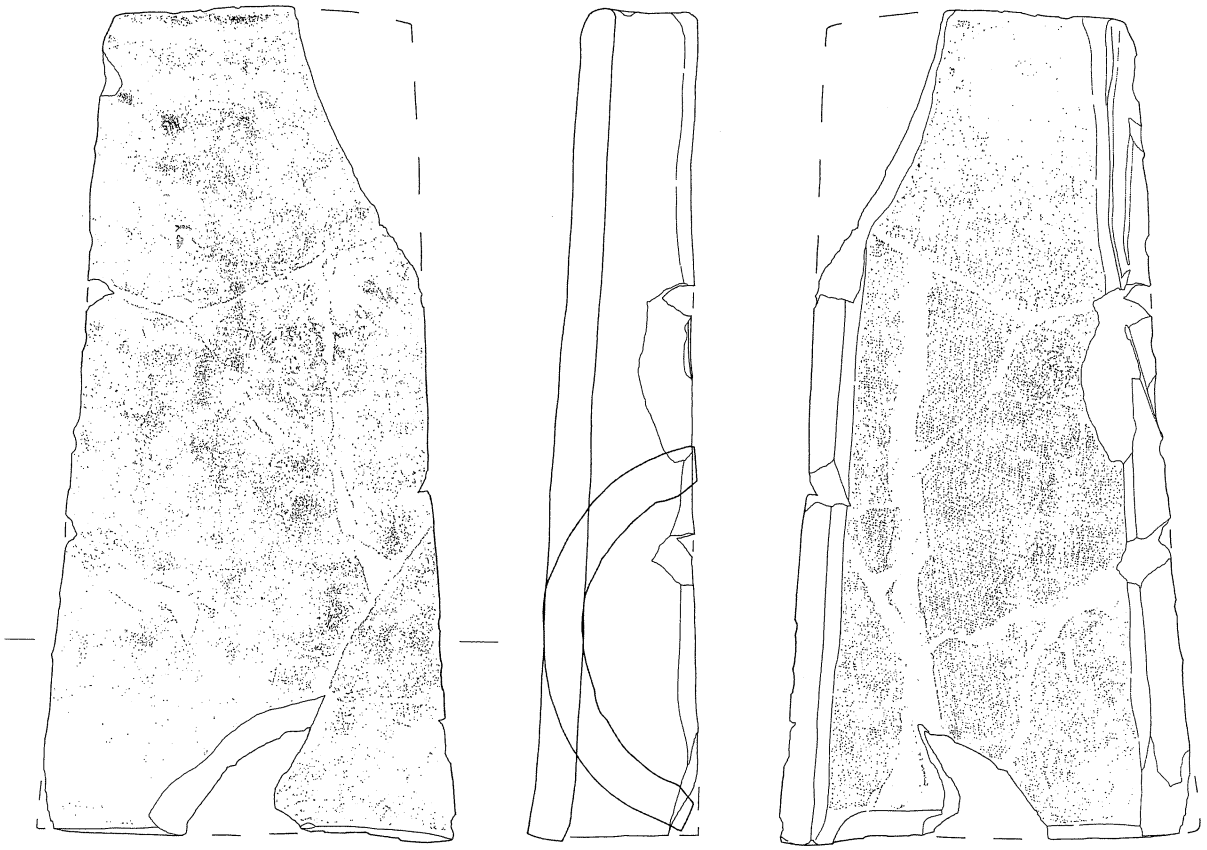
第188図　軒平瓦14類(2)・15類～17類



第189図　軒平瓦１８類



第190図　軒平瓦19類・20類



第191図　行基丸瓦１類(1)

軒平瓦16類（第188図）　素紋軒平瓦（K168）。瓦当部は包み込み式で厚さ3.7㎝に形成するが紋様を施さず、横方向のヘラ削りを行っている。凸面は調整が粗く凹凸が残り、１辺３㎝程度の菱形叩き目痕がわずかに観察される。凹面には布目痕跡や糸切り痕跡がのこる。平瓦は厚さ1.2㎝と薄い。焼成はやや軟質の瓦質である。瓦当紋様が押し忘れられたものとみられる。

軒平瓦17類（第188図）　連巴紋軒平瓦（K169）。左巻きの二つ巴紋を2.6㎝の間隔を持たせて配置し、下外区の界線に接している。巴の頭部は肥大化せず、端部はやや丸みがみられるものの直線的である。下外縁は幅５㎜で５㎜突出している。段顎が貼り付け部分から剥落した破片のため、瓦当面全形や平瓦部分については不明である。焼成は白色の須恵質である。

軒平瓦18類（第189図）　連珠紋軒平瓦（K170～K172）。左側半分の破片のため珠紋の数は不明だが、直径７㎜の半球形の珠紋を８㎜間隔で連続して配置し界線で囲む。顎部は幅3.5㎝の面を持った段顎である。平瓦部凸面には離れ砂が残っている。瓦質焼成である。

軒平瓦19類（第190図）　不明軒平瓦（K173）。瓦質の平瓦であるが、上外区がわずかに残るのみで、内区と外区の境に沈線を引いているのがわかる。

軒平瓦20類（第190図）　宝珠唐草紋軒平瓦（K174～K182）。中央部分の破片で、肉彫りの宝珠の両横に４本の水波紋をおく。第１単位第２単位の唐草はそれぞれ水波紋の上２本から連続する。唐草の反転は３単位とみられる。外区には界線をもうける。顎部は段顎で瓦当を貼り付けている。小片ばかりのため水波紋を持つ菊花唐草紋軒平瓦の破片が含まれている可能性もある。

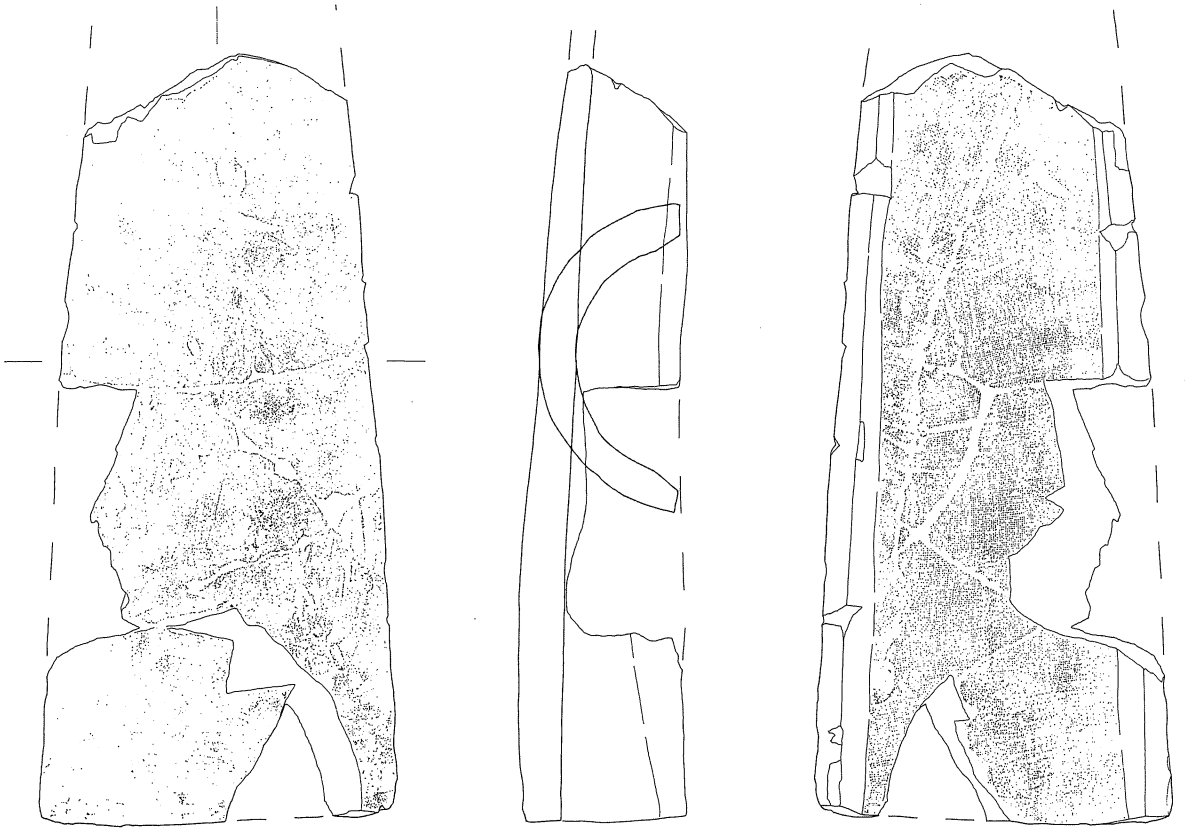
３．丸瓦

丸瓦には行基丸瓦と玉縁丸瓦があるが、双方ともほとんどが破片で完形に復原できるものは少ない。このため完形近く復原できるものを中心に分類し、広端部や狭端部・玉縁部の破片でも特徴あるもので補った。行基丸瓦を13類、玉縁丸瓦を６類、狭端部が無くどちらか不明の丸瓦を２類に分類したが、玉縁丸瓦は個体差として把握すべきものが含まれている可能性もある。

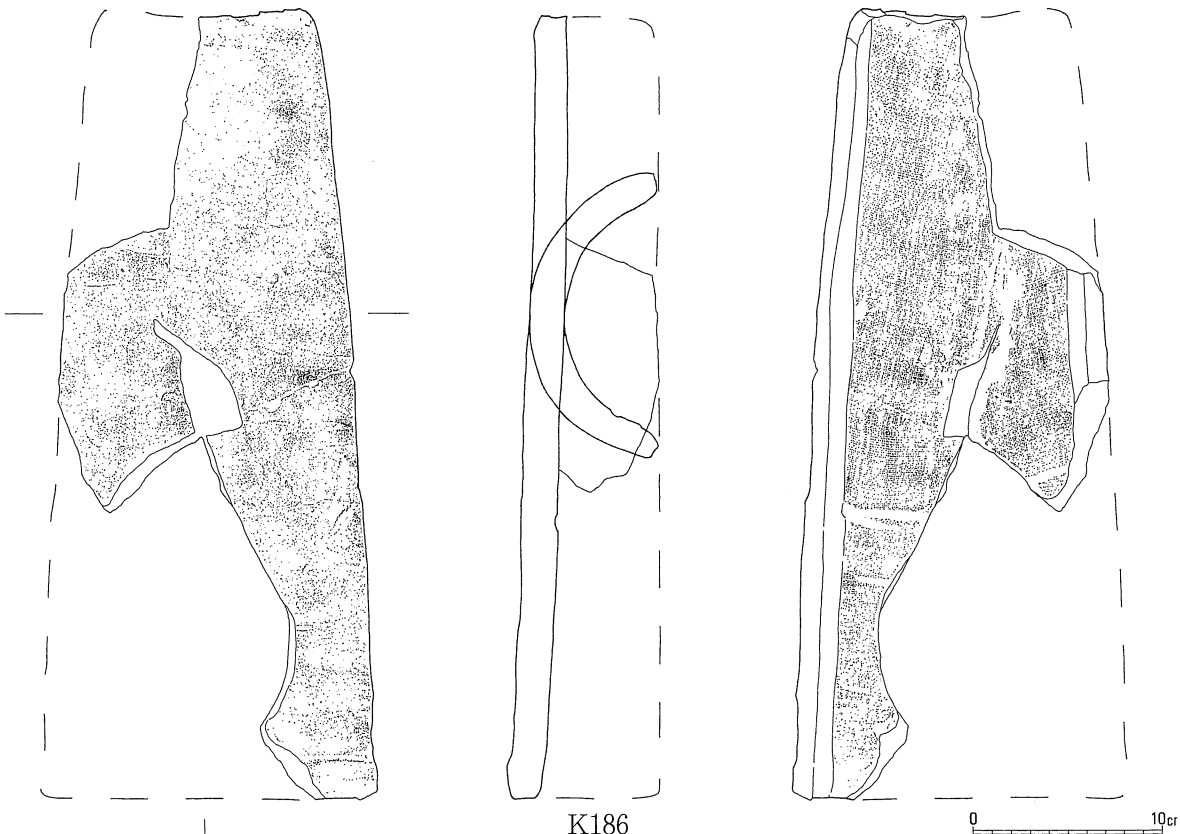
行基丸瓦

行基丸瓦１類（第191～195図）　K183～195は、凸面の回転ナデが十分に行われず、小さな格子叩き目痕跡や幅２～５㎝の平坦面を残す。広端部側は特にナデが省略され叩き目痕跡がそのまま残っていたり、広端部からのヘラケズリが追加で行われているものもある。狭端部側は端から５㎝ほどが特に丁寧にナデ調整され、丸くすぼまり気味に仕上げられているものと、垂直にヘラ切りされているものとがある。側面部には分割破面を残さない。凹面は不調整で細かな布目痕跡が残り、一部で縦方向の指ナデが見られる。粘土板接合痕が観察されるものもある。また、部分的に幅４㎜程度の模骨痕跡状のくぼみが観察できるものもある。面取りは広端部を行うものとそのままのものとがあり、側縁部では１㎝前後のものが多いが３㎝に及ぶものもある。焼成は灰白色でやや軟質のものと灰色ないし青灰色の硬質で須恵器に近いものとがある。全長41～43㎝、広端部幅18～20㎝高さ８～９㎝、狭端部幅13～14㎝高さ６～７㎝、厚さ1.3～2.3㎝である。軒丸瓦１・２類に対応する。

行基丸瓦２類（第196～201図）　K196～K207は、凸面を回転ナデにより丁寧に調整されて叩き目は不明であるが、わずかに叩きによる平坦面を残すものもある。数㎜幅で側縁部の面取りを行うものも

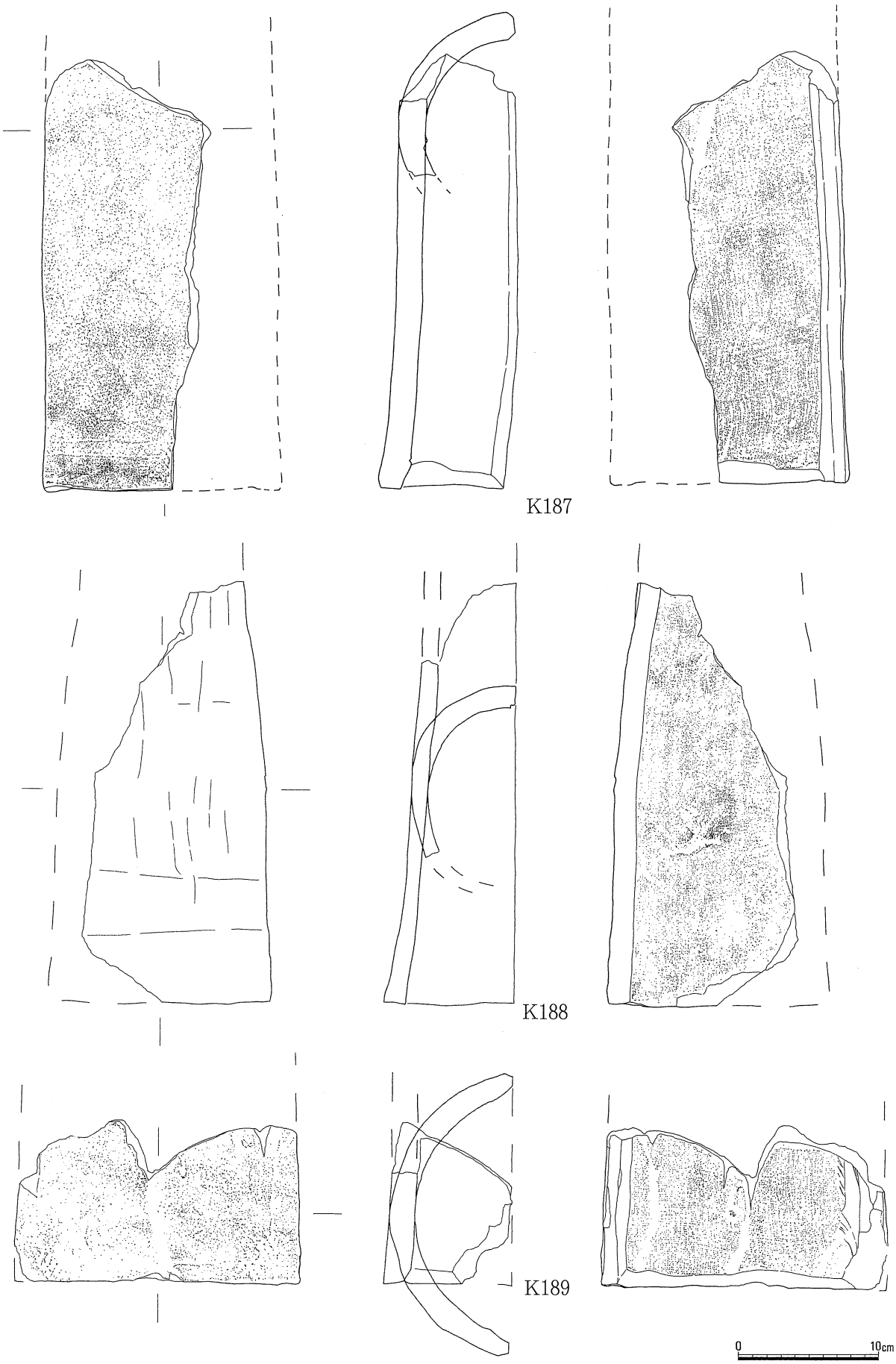


K185

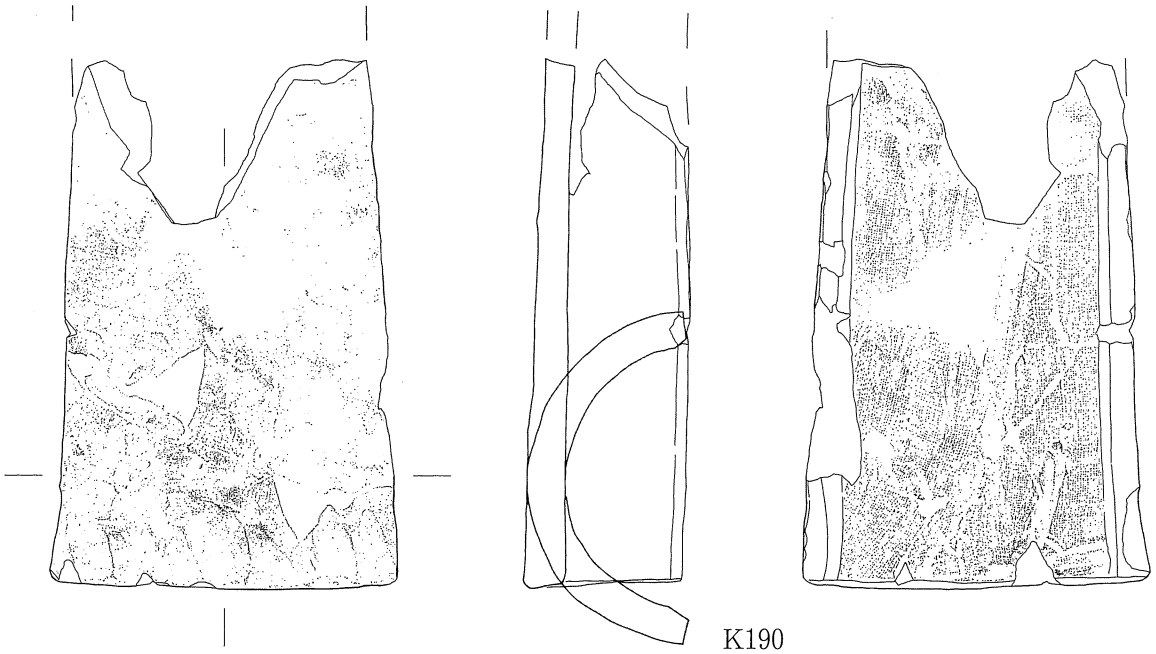


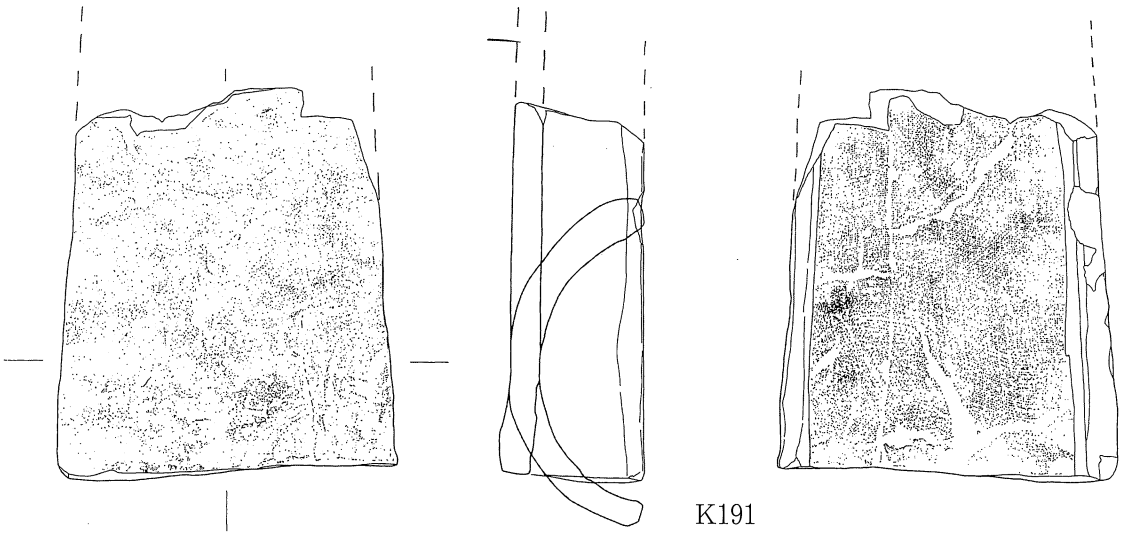
K186

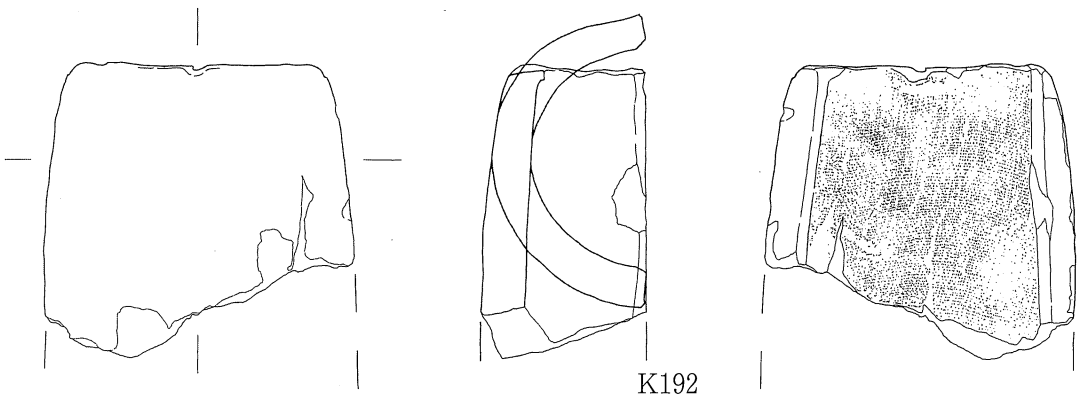
第192図　行基丸瓦１類(2)



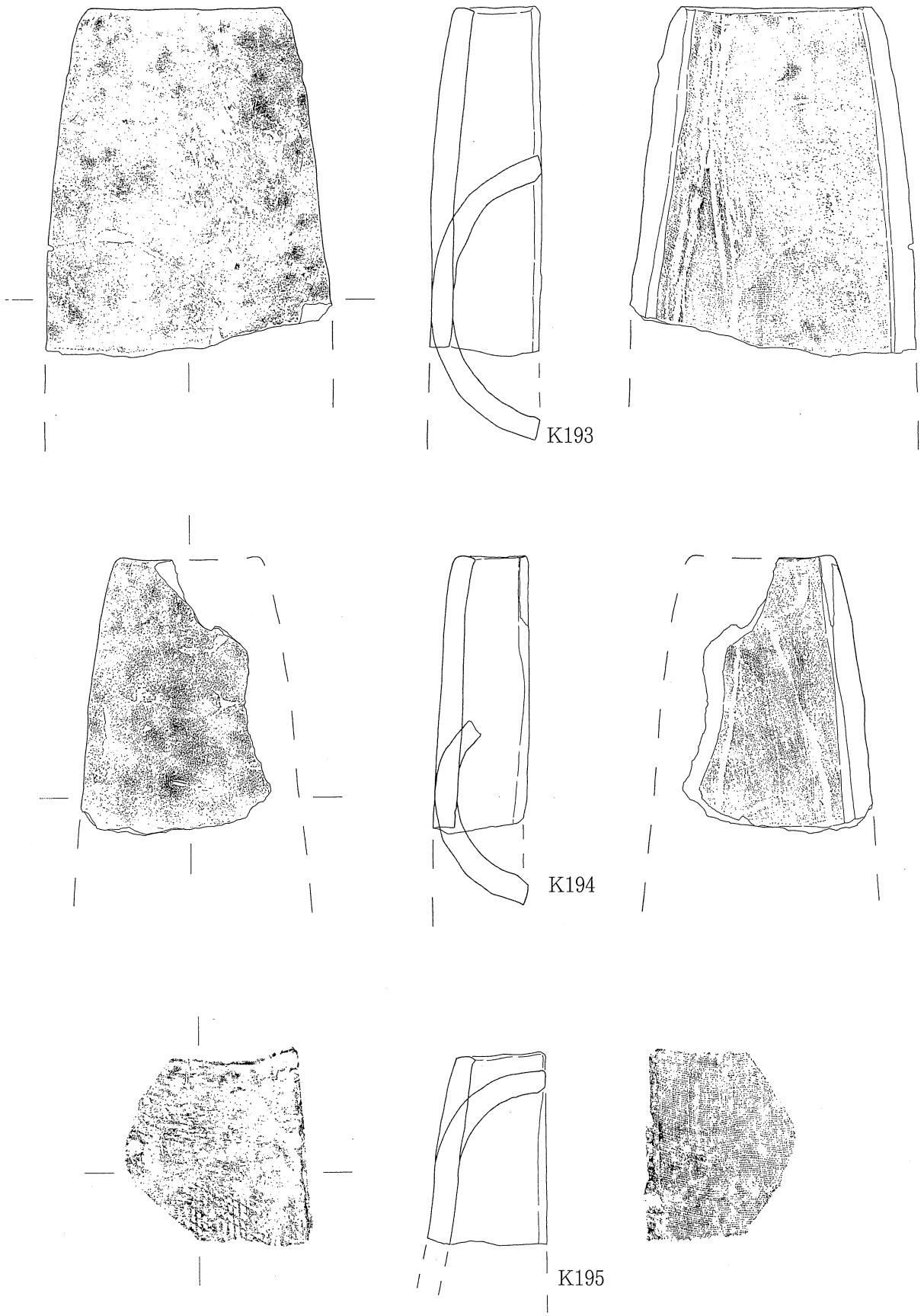
第193図　行基丸瓦１類(3)





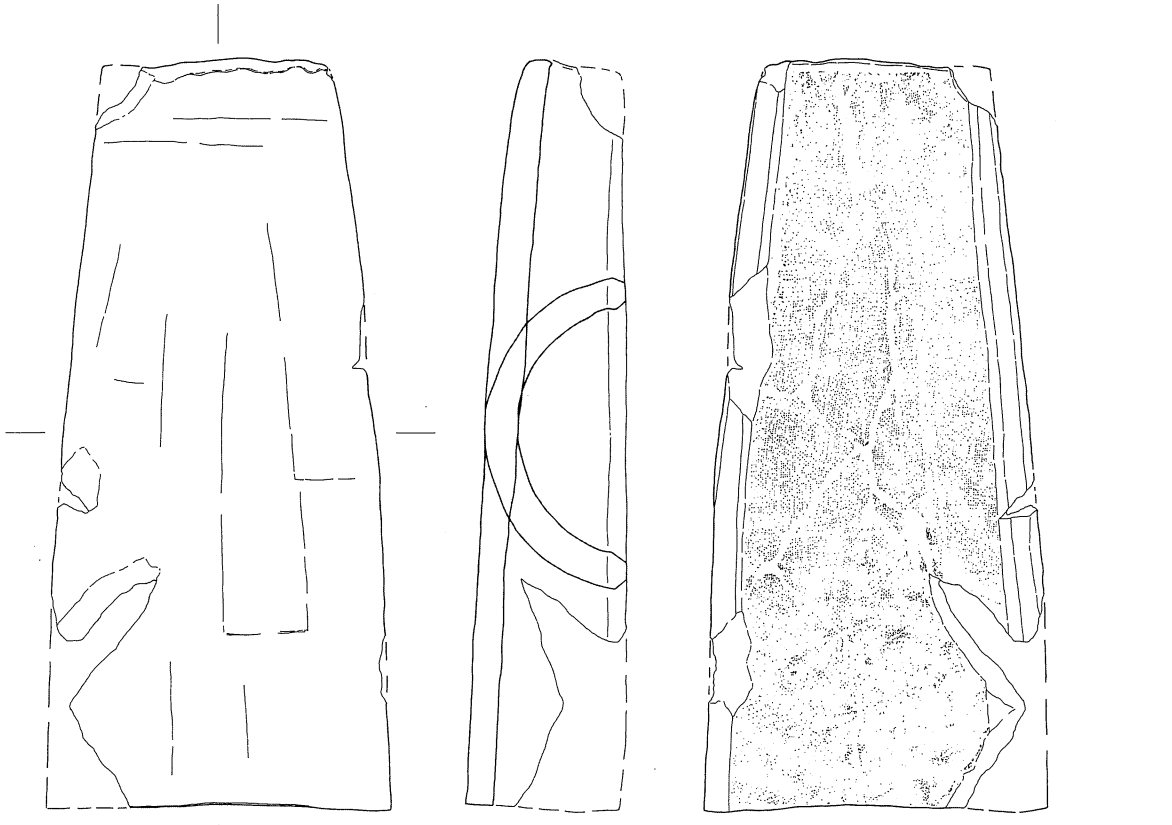


第194図　行基丸瓦１類(4)



第195図　行基丸瓦１類(5)

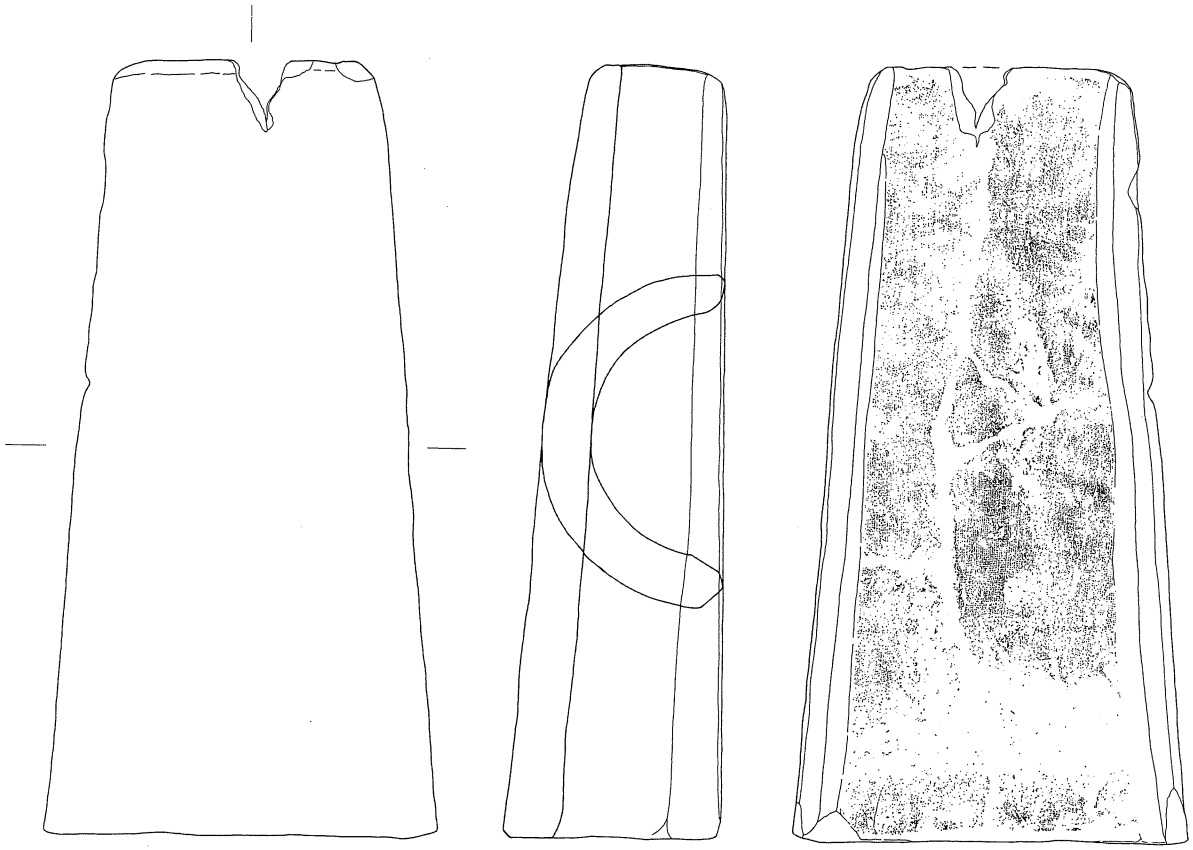
K196

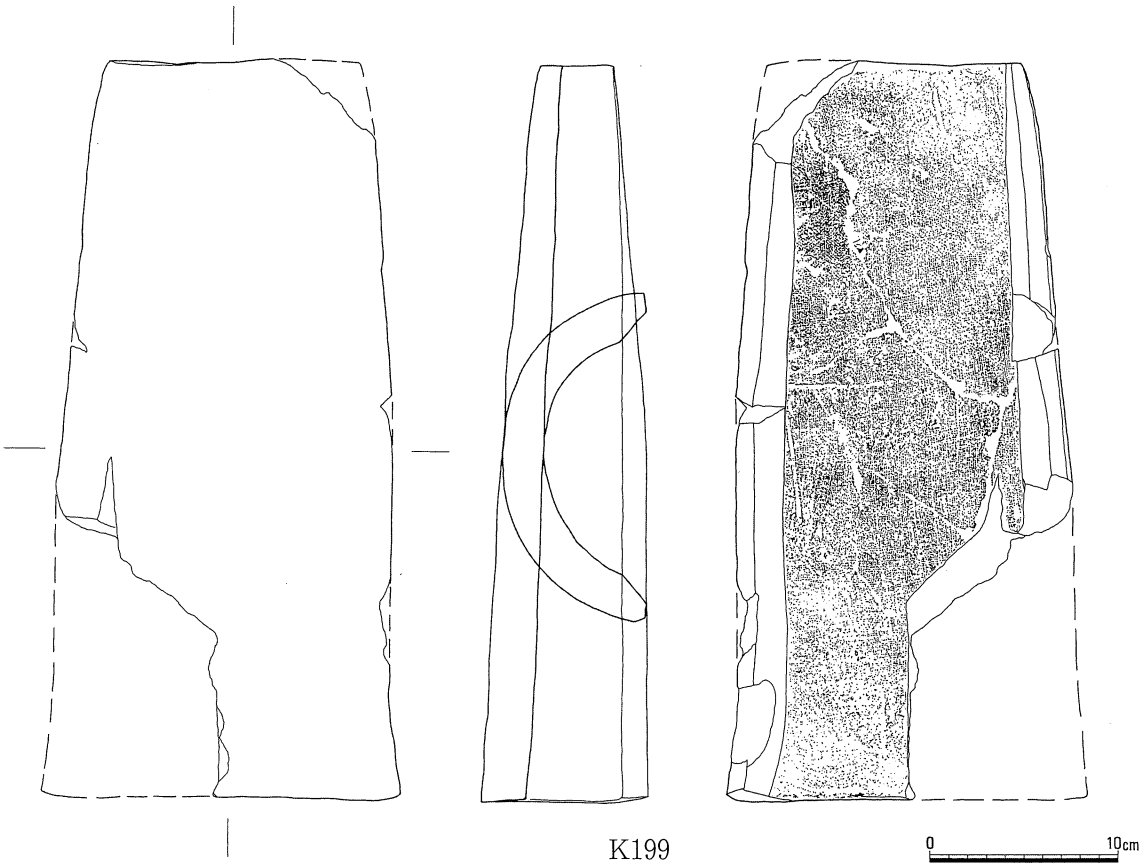


K197

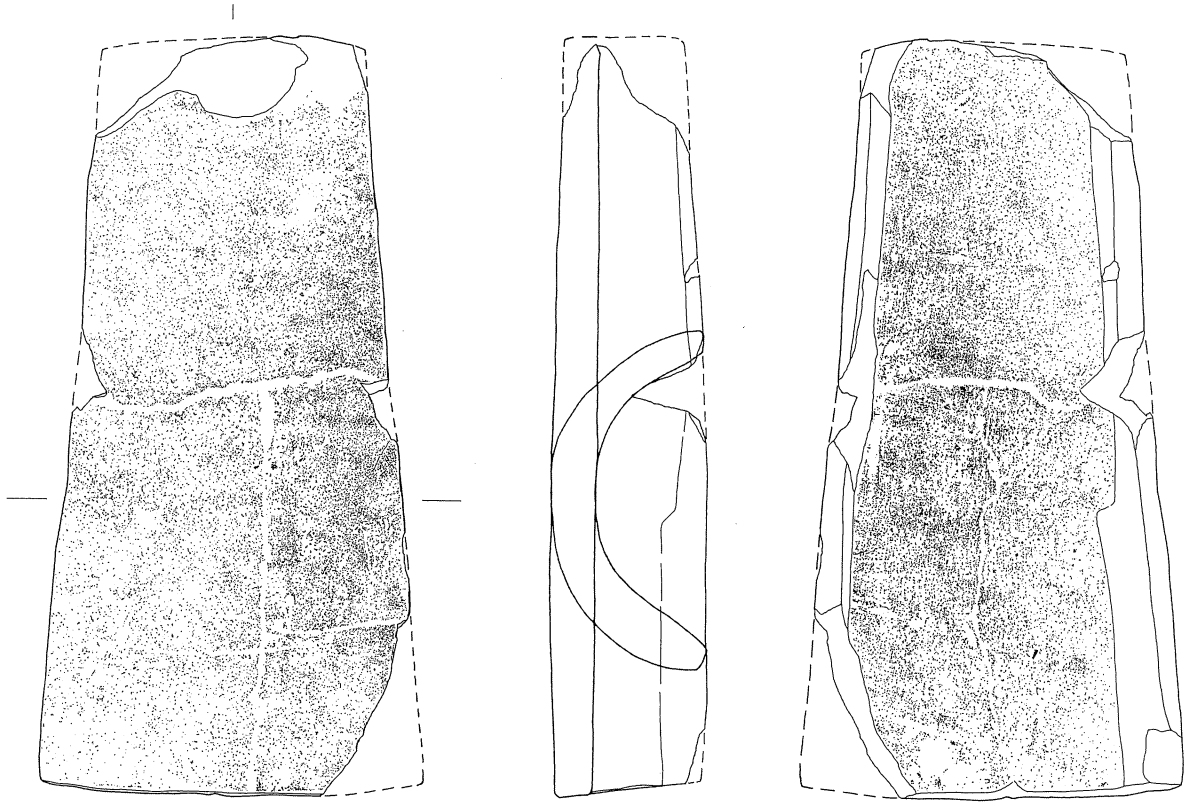
0 10cm

第196図　行基丸瓦２類(1)

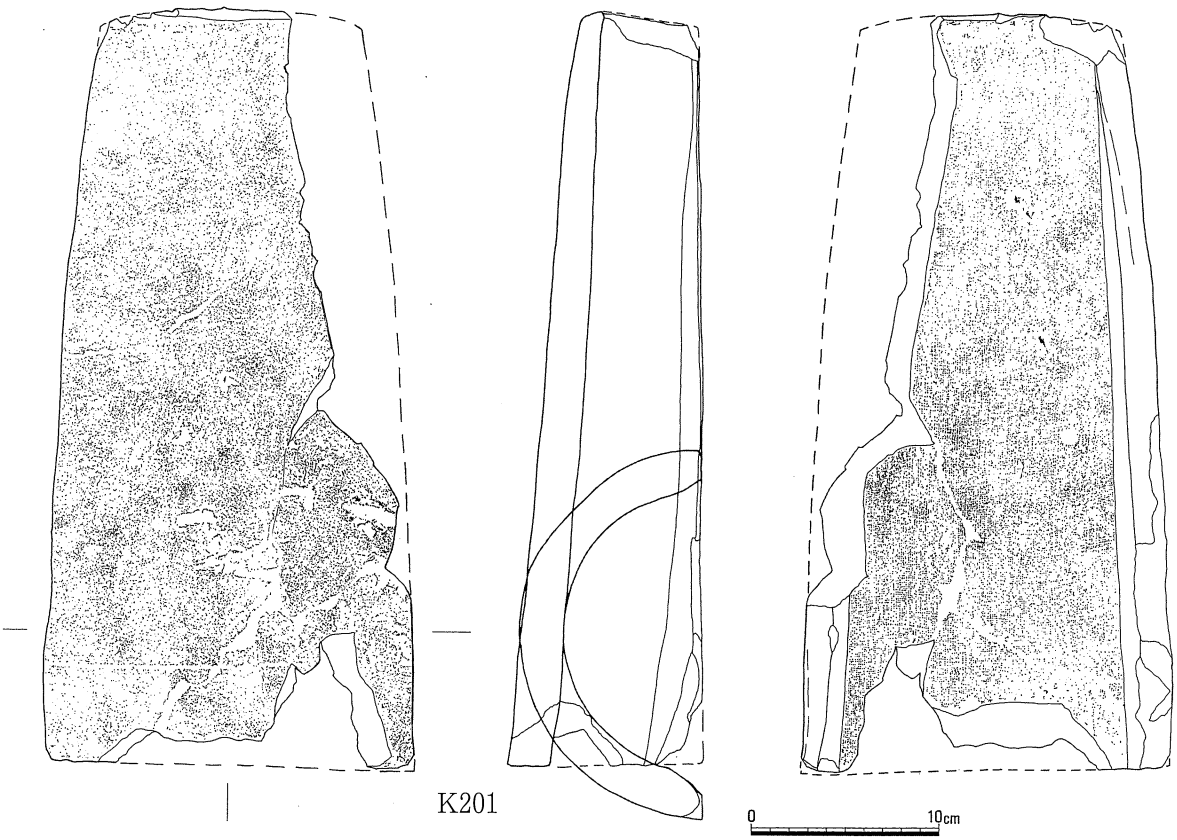




第197図　行基丸瓦２類(2)



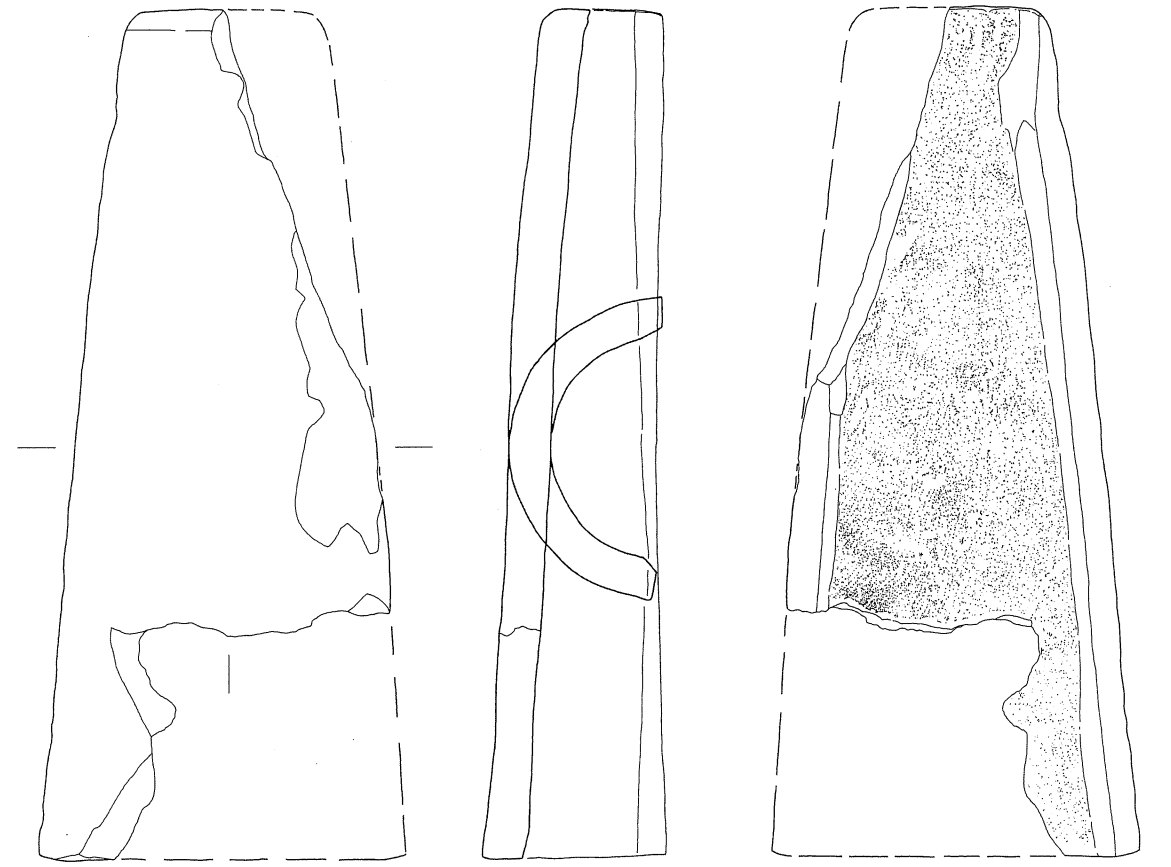
K200



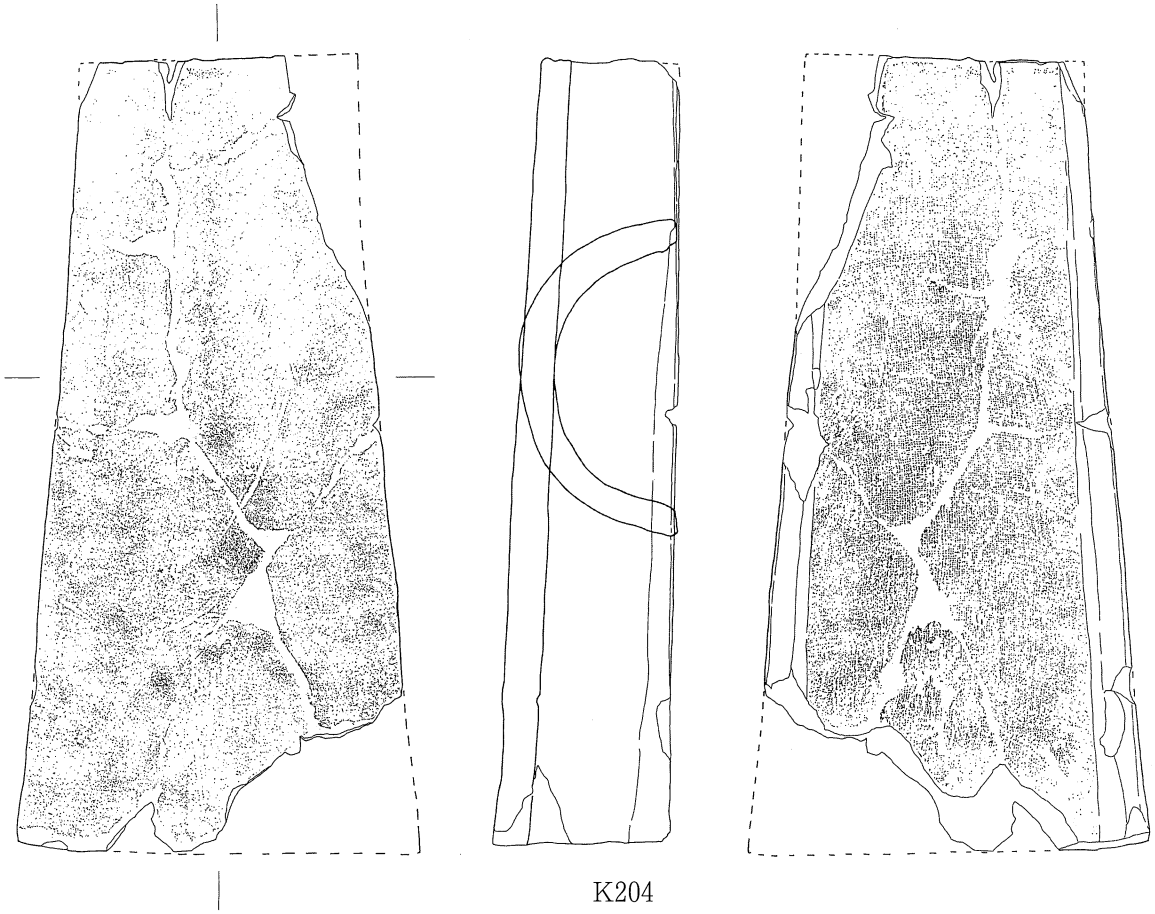
K201

0 10cm

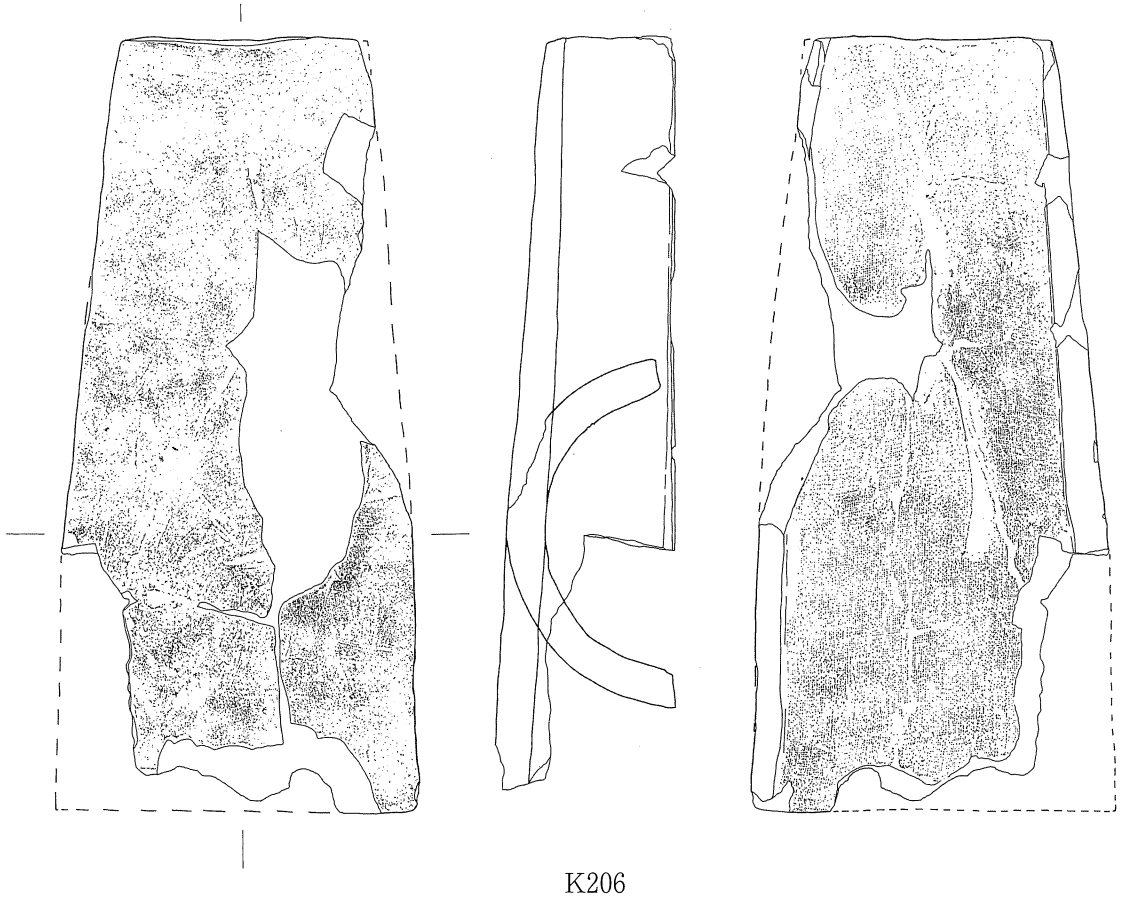
第198図　行基丸瓦２類(3)



第199図　行基丸瓦２類(4)



第200図　行基丸瓦２類(5)



第201図　行基丸瓦２類(6)

みられる。側面部には数少ないが部分的に分割破面を残すものもある。狭端部は丁寧にヘラ削りするものと不調整のものとがある。凹面は不調整で布目痕跡が残り、幅５㎝ほどの粘土帯痕跡が観察できるものもある。面取りは広端部側では行わず、側縁部側では幅0.5～３㎝である。灰色で胎土に砂粒を含みやや硬質で須恵質、褐色系で胎土はシルト質やや硬質の土師質、橙色系で胎土は砂粒を含みやや軟質の土師質の大まかに３者がある。全長39.3～41.5㎝、広端部幅18～20.5㎝高さ9.7～11㎝、狭端部幅14㎝高さ６～７㎝、厚さ1.5～３㎝、厚手のほぼ完形品で重さ4.4kgである。軒丸瓦３類に対応する。

行基丸瓦３類（第202図）　K208は狭端部側の破片のため全形は不明であるが、凸面は縦方向の縄叩き目痕跡を回転ナデ調整によりナデ消してはいるものの、叩きによる平坦面は残っている。狭端部側には不調整部分が残る。凹面は不調整で細かい布目痕跡や糸切り痕跡が残る。側面は凹面側からヘラ削りが行われ中央に稜が走り、さらに凹面側を幅１㎝以下で面取りを行っている。狭端部側は粘土が柔らかいうちに立てたためか粘土の盛り上がりが見られる。軟質の須恵質であるが、焼成不良の個体と思われる。厚さ2.2㎝である。

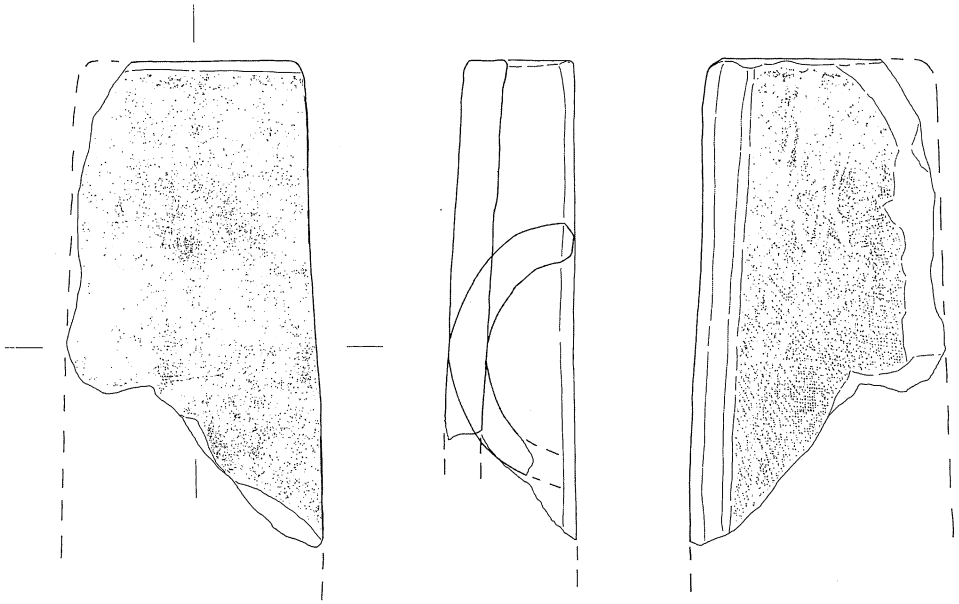
行基丸瓦４類（第202図）　K209は凸面の器壁が荒れて詳細は不明ながら回転ナデ調整痕はみえる。凹面は不調整で布目痕跡や糸切り痕跡が残っている。広端部の面取りは行わないが、側縁部は１㎝弱の面取りを行う。焼成不良の須恵質ないし瓦質であるが、焼け戻りかもしれない。全長37㎝、広端部復原幅16㎝高さ7.5㎝、狭端部幅12.5㎝高さ5.3㎝、厚さ1.5～２㎝である。

行基丸瓦５類（第202・203図）　K210～K218は破片ばかりで全形のわかるものはないが、凸面のナデ調整を行わず縦方向の縄叩き目痕跡が残り、凹面は不調整で布目痕跡が残っている。焼成は硬質の須恵質。広端部復原幅15㎝高さ7.5㎝、狭端部復原幅９㎝高さ４㎝、厚さ1.5～2.3㎝である。全面に縄叩き目痕跡が残る５Ａ類(K210～K216)と、２～３㎝の幅で縄叩き目痕跡を残す部分と削り取る部分を交互に持つ５Ｂ類(K217・K218)にわかれる。５Ａ類の凹面には布目痕跡や糸切り痕跡がのこり、広端部・側縁部の面取りは0.5～２㎝の幅で行う。側面には分割破面を残さない。５Ｂ類の凹面にも布目痕跡が残り、側縁部を幅１㎝で面取りする。

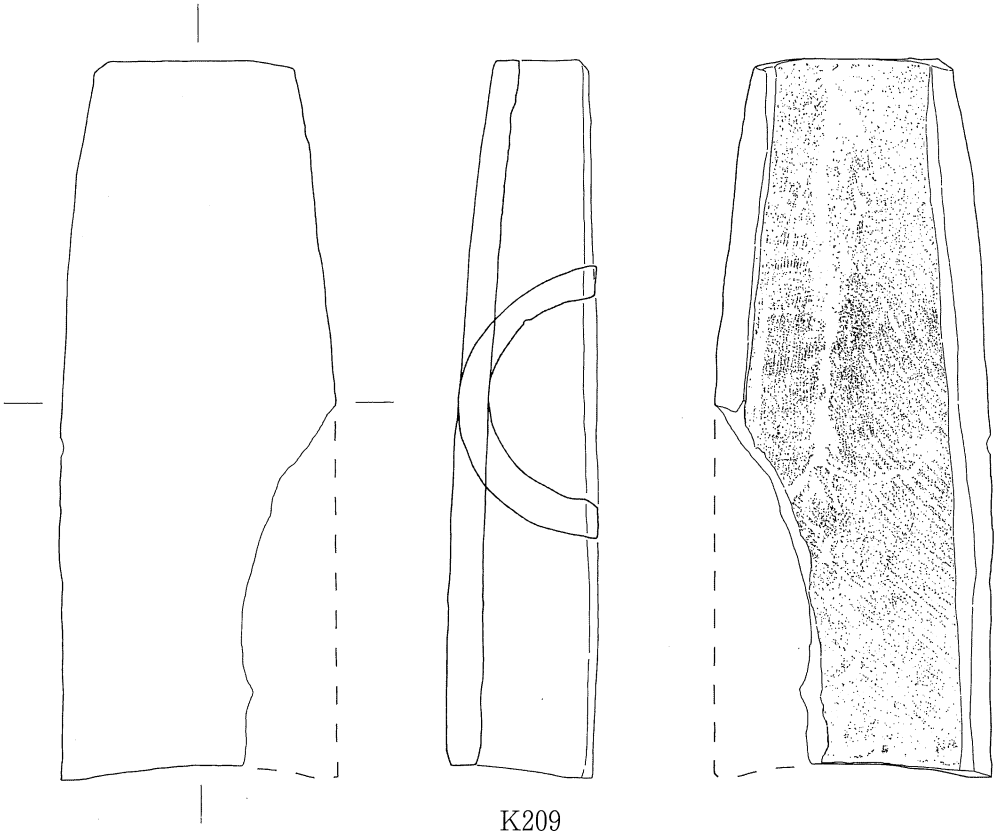
行基丸瓦６類（第204図）　K219は硬質の須恵質で灰緑色の自然釉がかかっている。凸面は粗いナデ調整により叩き目痕跡を消しているが、丁寧に仕上げていないため表面の凹凸や叩きによる平坦面は残っている。凹面は不調整できわめて粗い布目痕跡と糸切り痕跡が残り、広端部及び側縁部の面取りを行っている。全長37.4㎝、広端部幅16.5㎝高さ７㎝、狭端部幅12㎝高さ4.7㎝、厚さ1.7～2.5㎝、重さ2.7kgである。

行基丸瓦７類（第204・205図）　K220～K222は凸面に回転ナデ調整を行って叩き目痕跡を消している。凹面は不調整できわめて粗い布目痕跡や糸切り痕跡がのこり、端部の面取りは四周に行われる。質感は硬質の須恵質で行基丸瓦６類とよく似ているが、行基丸瓦６類が広端部から狭端部へ均等に幅を減じるのに対し、行基丸瓦７類は狭端側１／３のあたりから急激に狭まる点が異なる。色調は淡灰緑色と淡い小豆色とがある。K220は淡灰緑色の須恵質で全長32.5㎝、広端部復原幅15.5㎝高さ６㎝、狭端部幅11㎝高さ5.5㎝、厚さ２～2.5㎝である。K222は淡い小豆色の須恵質で全長31.2㎝、広端部幅16㎝高さ５㎝、狭端部復原幅10㎝高さ４㎝、厚さ1.6～2.4㎝である[16]。

行基丸瓦８類（第206図）　K223は全長30㎝と短く側縁は直線的で広端幅と狭端幅の差があまりない。凸面は回転によるナデ調整で、広端部は粘土が柔らかいうちに立てたためか粘土の盛り上がりが



K208

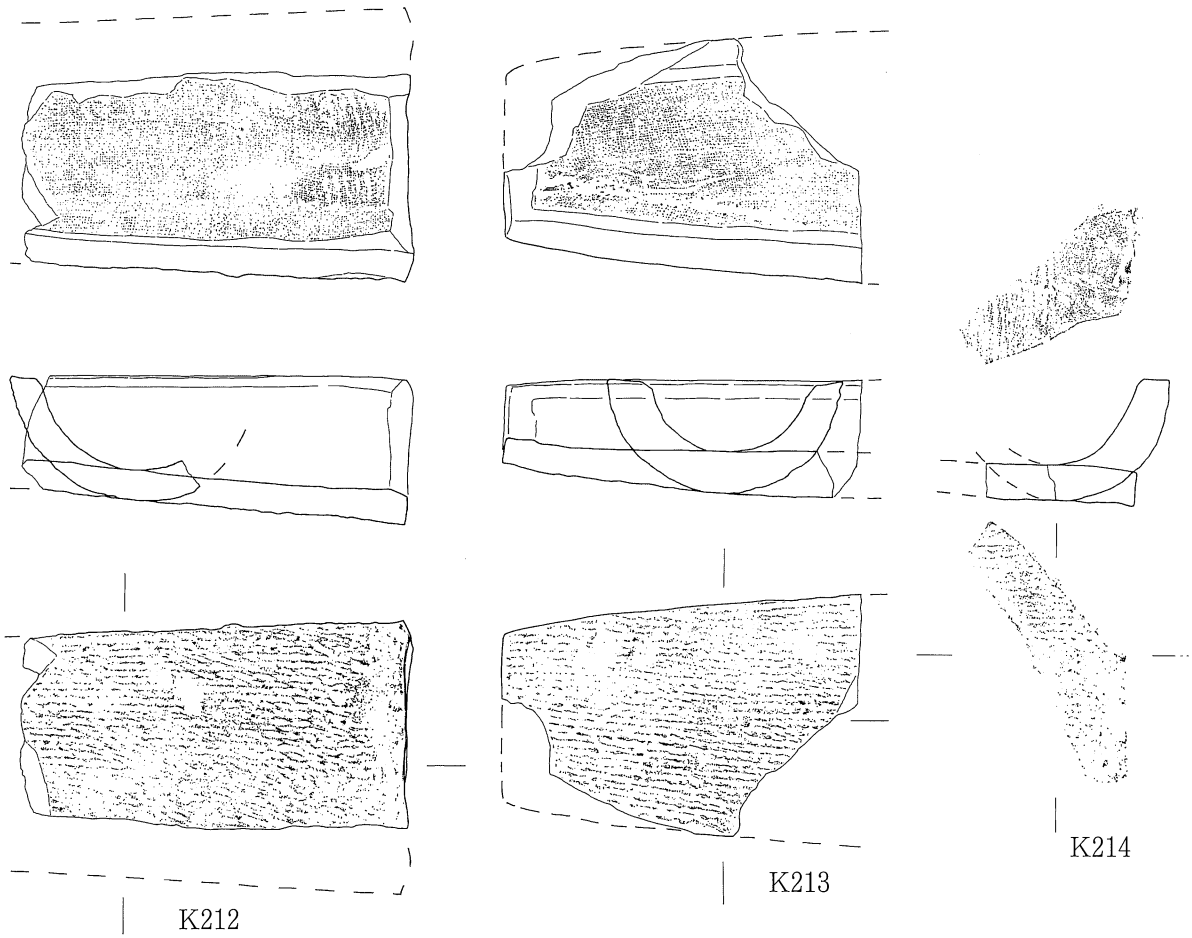


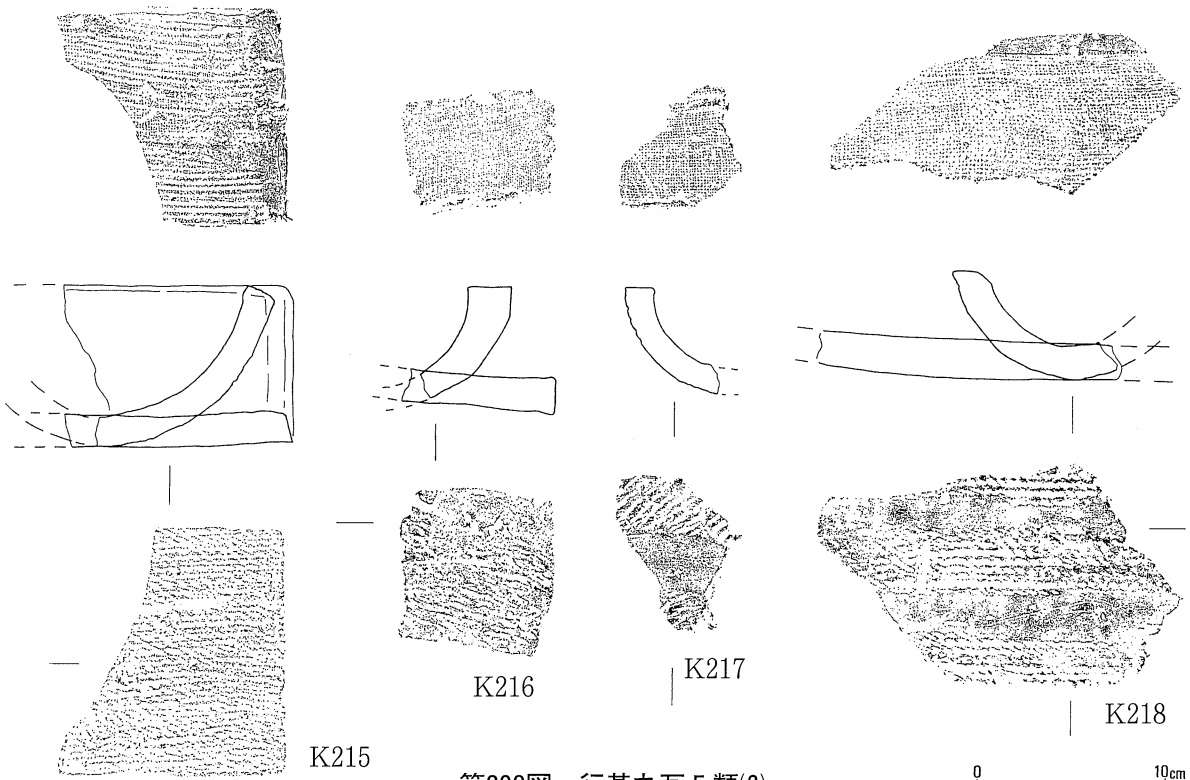
K209

K210

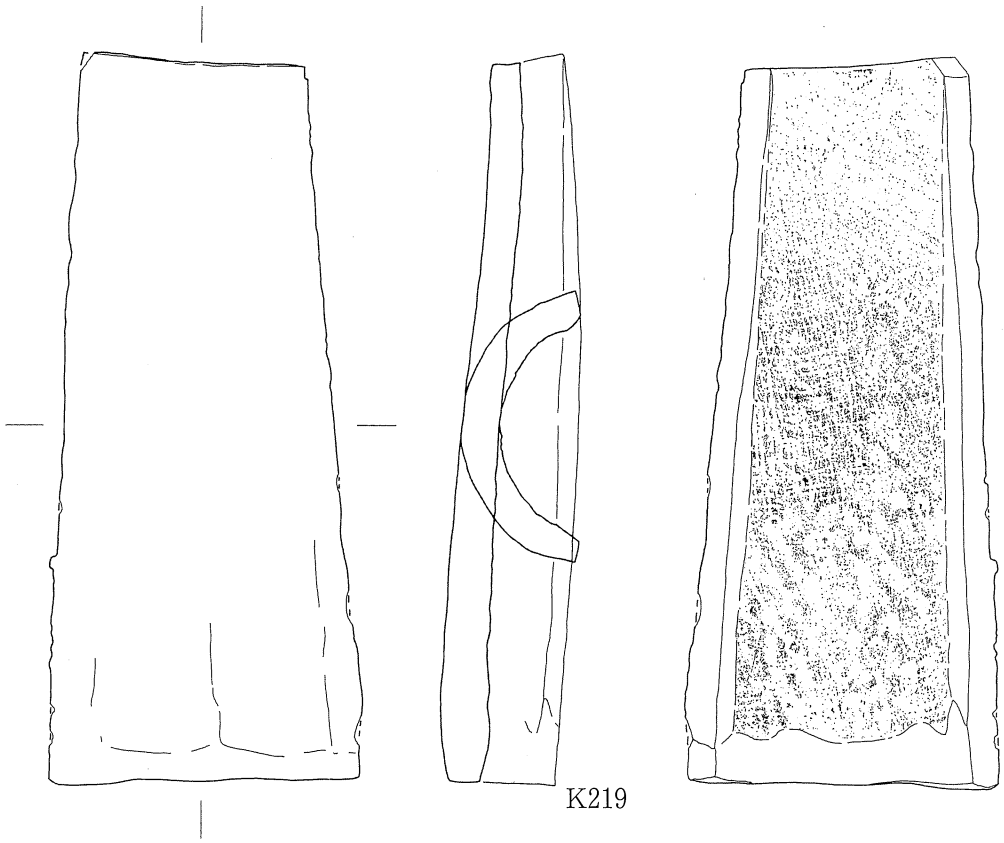
K211

第202図　行基丸瓦３類・４類・５類(1)

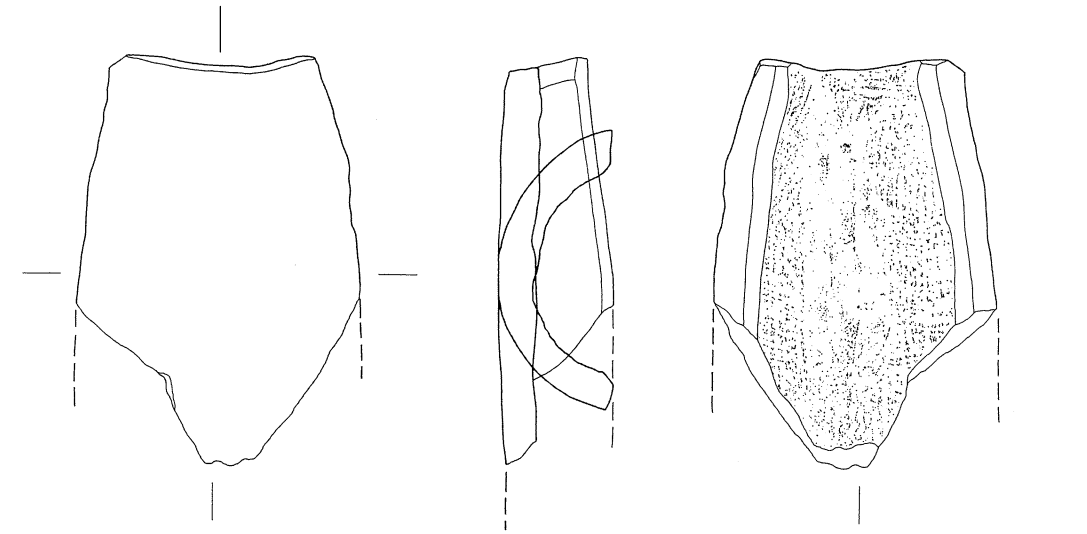




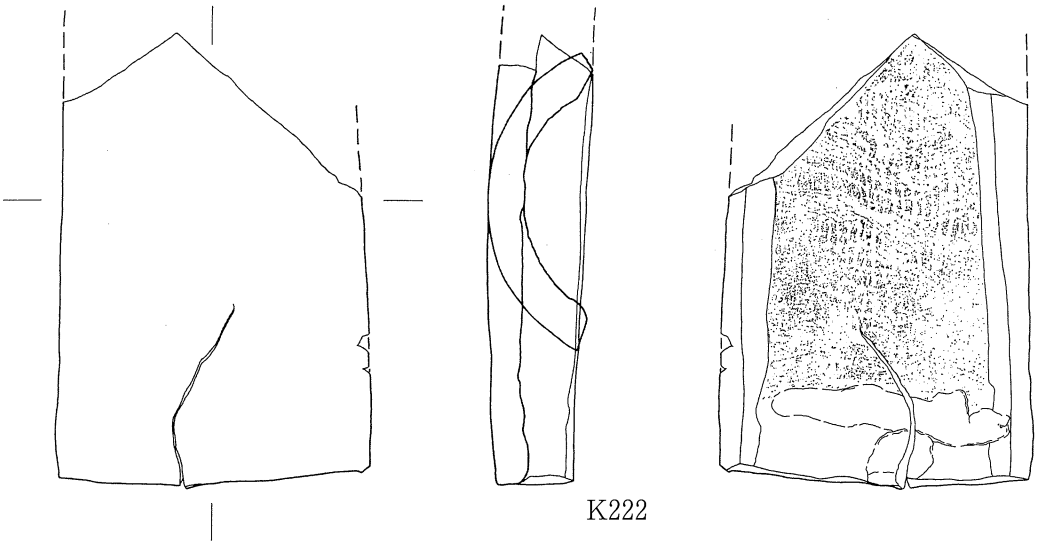
第203図　行基丸瓦 5 類(2)



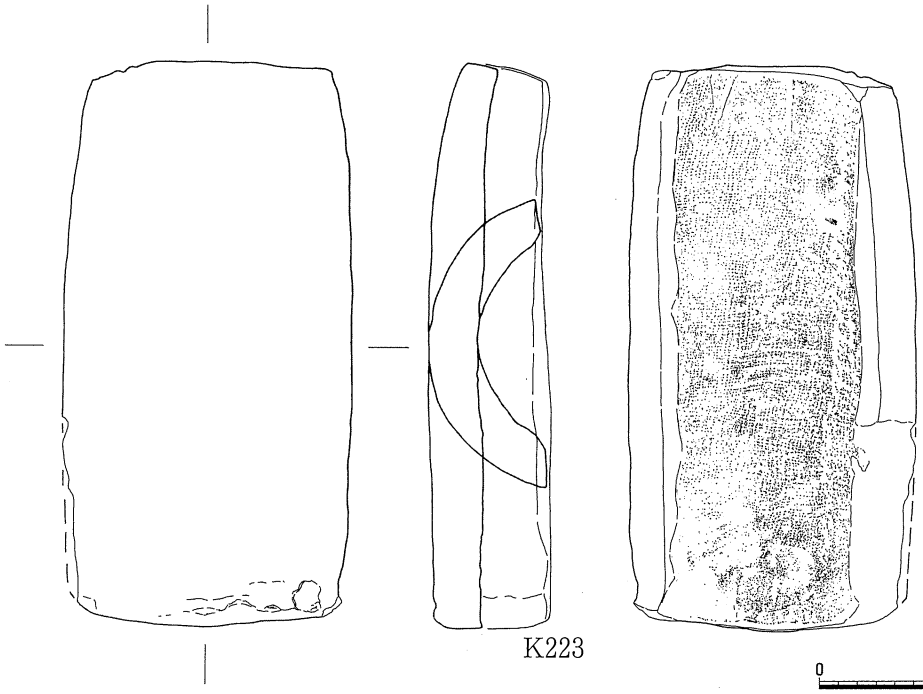
第204図　行基丸瓦 6 類・ 7 類(1)



K221



K222



K223

0 10cm

第205図　行基丸瓦７類(2)・８類

見られる。狭端部は端面から３㎝ほどからややすぼまっている。凹面は不調整で粘土紐積み上げ痕跡が残る。布目痕は細かい。うすい小豆色で硬質の須恵質である。広端部復原幅14㎝高さ６㎝、狭端幅13㎝高さ4.5㎝、厚さ2.2～2.7㎝重さ2.45kgである。

行基丸瓦９類（第206図）　K224は狭端部がなく全形は不明であるが、やや軟質の須恵質で胎土に白色粘土が薄層をなしているのが特徴である。凸面は長軸方向に工具でなでて叩き目痕跡を消し、広端部側を幅１～２㎝でヘラ削りを行っている。凹面は不調整で布目痕跡が残り、一側縁のみ面取りをしている。

行基丸瓦10類（第206図）　K225はやや硬質の土師質である。全長は約30㎝と短く、狭端部は丸くすぼめている。全体に作りが雑で、凸面は回転ナデ調整をしてはいるが、凹凸が著しくナデの及ばない凹部には布目痕跡が残っている。凹面には布目痕跡がみられる。広端部の粘土剥落箇所で布目痕跡が観察されるため、型は広端部まで及んでいたと思われる。端部の面取りは行っていない。全長30.2㎝、広端部幅15.1㎝高さ7.5㎝、狭端部幅11.5㎝高さ５㎝、重さ1.5kgである。

行基丸瓦11類（第206図）　K226は狭端部の小片のため詳細は不明であるが、瓦質の瓦で凸面は長軸方向にヘラ削りを行い叩き目痕跡を消している。凹面は不調整で布目痕跡が残り、残存部分では側縁部や狭端部の面取りは行われていない。

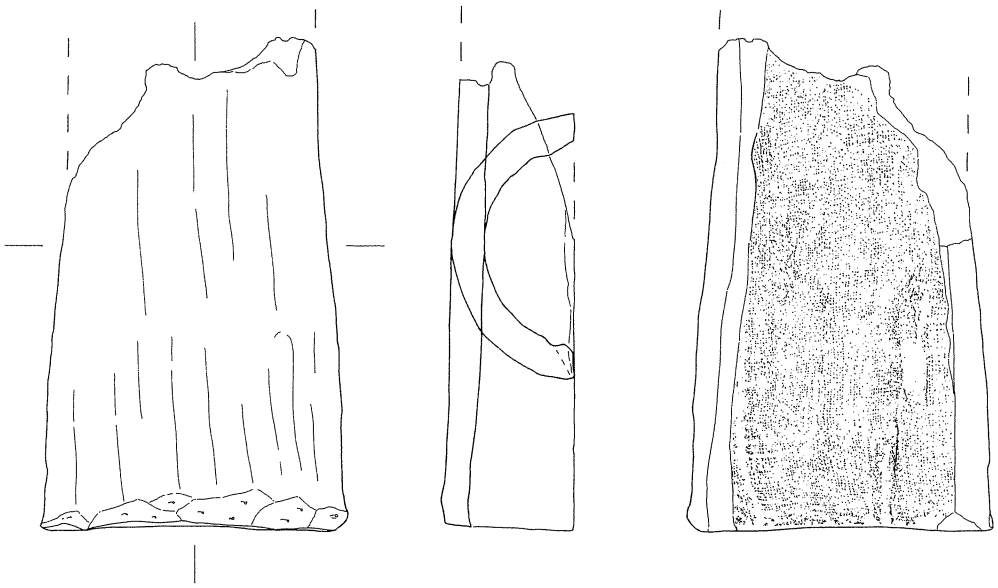
行基丸瓦12類（第207図）　K227は狭端部は遺存していないが、破面の付近で高さがわずかに減じているので行基丸瓦と判断した。行基丸瓦８類のように狭端部直前で幅が狭くなると思われる。ただし、広端部から狭端部への幅が顕著に狭まっていかないことから玉縁丸瓦の可能性も残る。筒部凸面には１辺1.2㎝の横位菱形叩き目痕跡及び叩き締め成形時の平坦面や稜が残る。凹面には布目痕跡が残る。広端部の面取りは５㎜ほどで、縁の面取りは５㎜～1.5㎝である。側面には分割破面は残さない。やや硬質の土師質で、筒部現存長34.4㎝、広端部幅16㎝高さ９㎝である。

行基丸瓦13類（第207図）　K228・K229は須恵質で胎土中の白色粘土により縞模様を呈するのが特徴であるが、焼成不良とみられる土師質のものもある。凸面はナデ調整により仕上げているが、雑な仕上げで１辺1.2㎝の方形叩き目痕跡や叩きによる稜・凹凸などが残る。凹面には布目痕跡や糸切り痕跡がみられる。広端部や狭端部の面取りはみられないが、側縁では側面部が残らないほどの面取りを行うものがみられる。厚さは1.2～２㎝と幅がある。

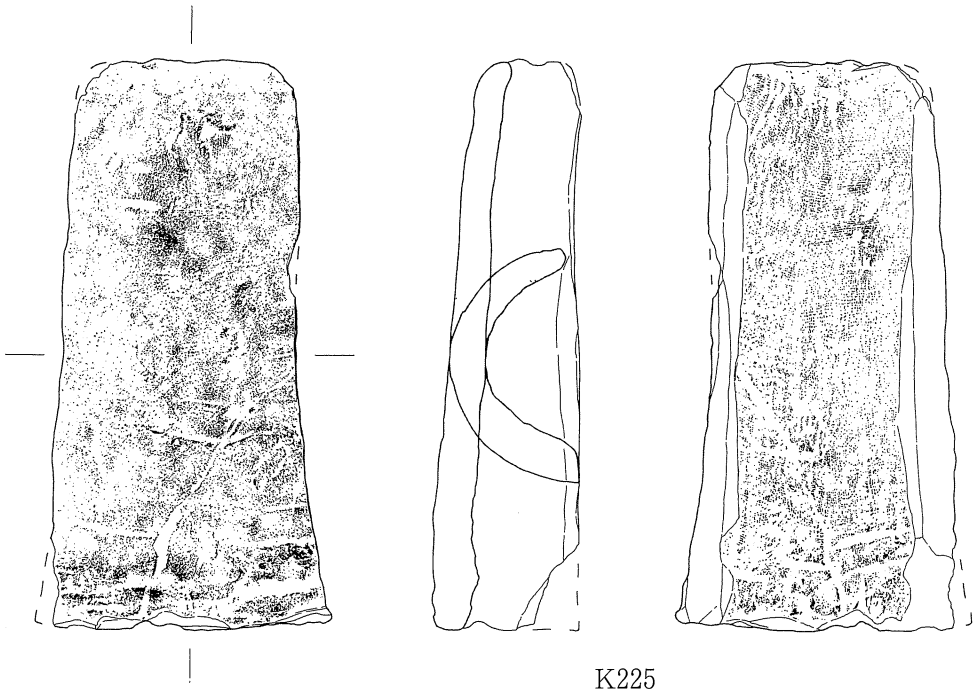
玉縁丸瓦

玉縁丸瓦１類（第208図）　K232は筒部凸面の縦方向の縄叩き目痕跡を回転によるナデ調整を行って消してはいるが、部分的に叩き目が残っている。凹面は不調整で、布目痕跡や糸切り痕跡が残る。広端部の面取りは４㎝、側縁の面取りは１～1.5㎝である。側面には分割破面を残さない。玉縁部端面のヘラケズリは雑で凹面側に幅５㎜高さ３㎜で山形のケズリ残しがある。やや軟質の須恵質である。全長38㎝、広端部復原幅15㎝高さ8.5㎝、狭端部幅13.6㎝、玉縁部長５㎝端部幅10㎝高さ5.7㎝である。

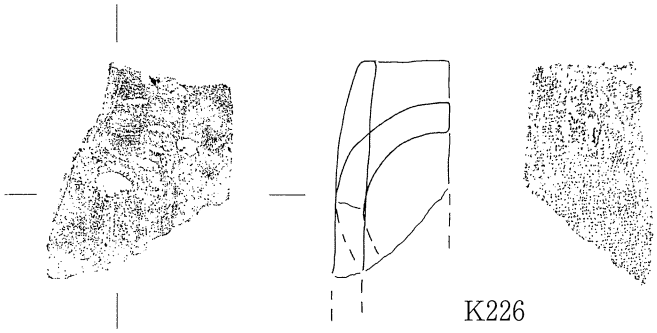
玉縁丸瓦２類（第208図）　K233は筒部凸面は回転によるナデ調整により縦方向の縄叩き目痕跡をナデ消しているが、部分的に残っている箇所がある。また、広端部側１㎝ほどは不調整部分がある。凹面は不調整で布目痕跡や糸切り痕跡が残る。広端部の面取りは2.5㎝、側縁部の面取りは１㎝ほどである。側面はヘラケズリにより分割破面を残さない。玉縁部凸面には幅３㎜深さ２㎜の水切り溝が１本ある。玉縁部端面はヘラ削りを行っているが凹面側には削り残しがみられる。やや軟質の須恵



K224



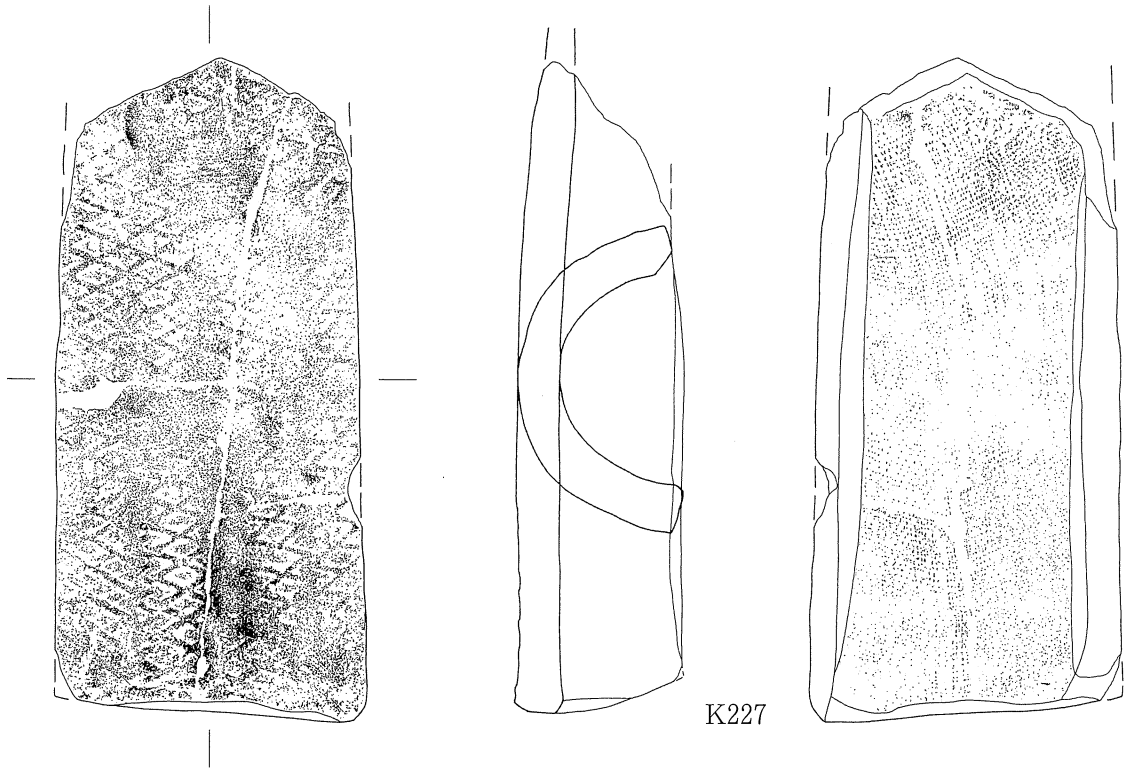
K225

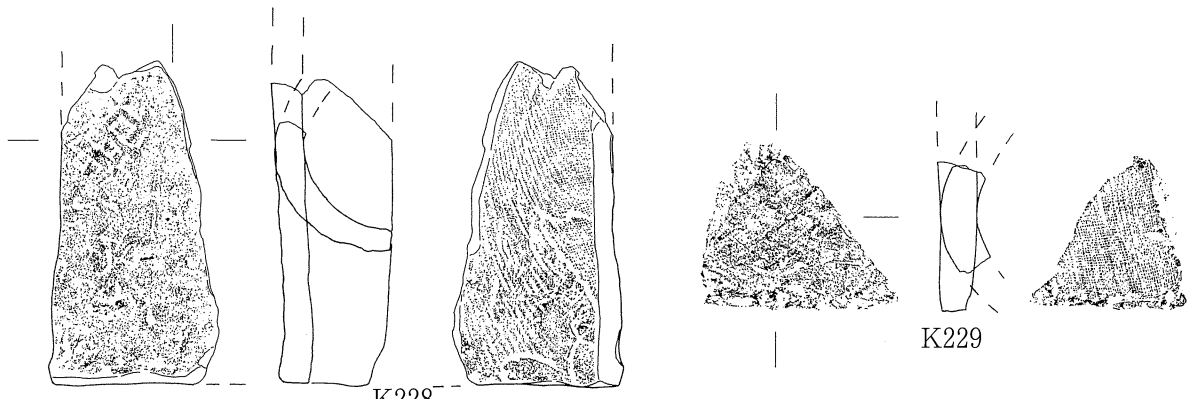


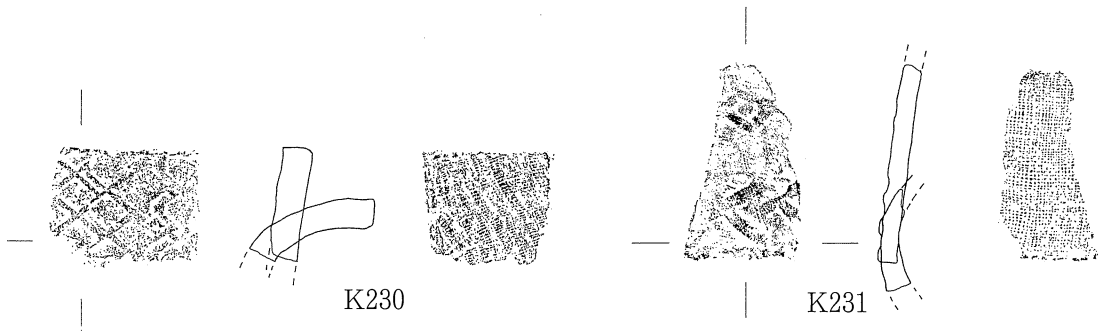
K226

0 10cm

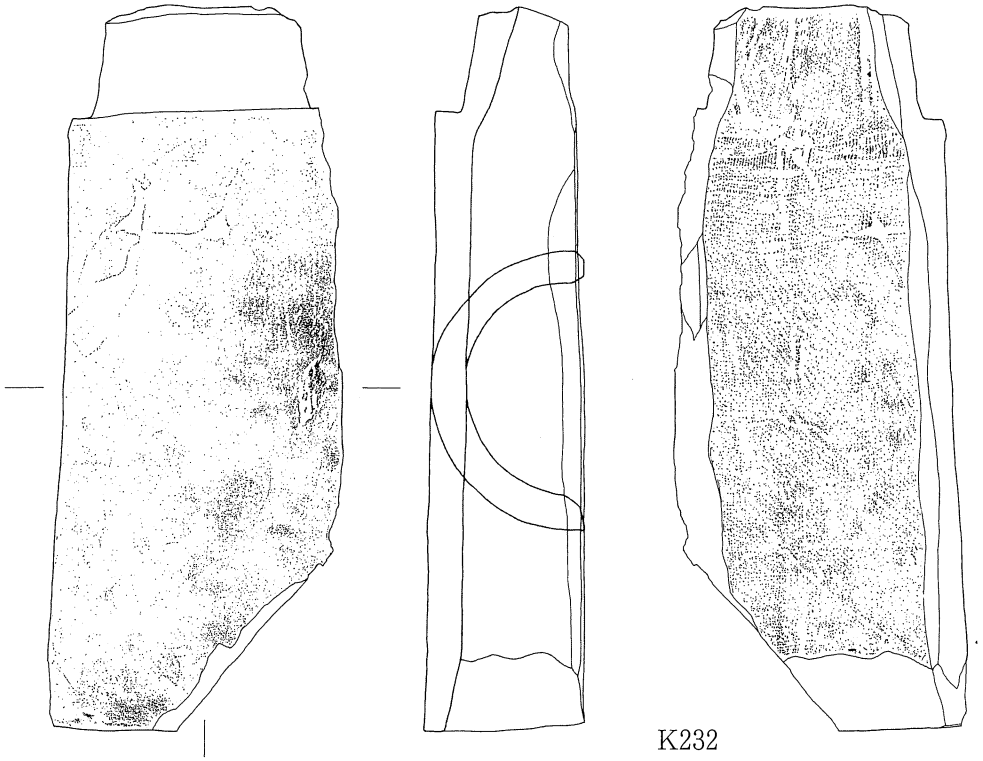
第206図　行基丸瓦 9 類～11類



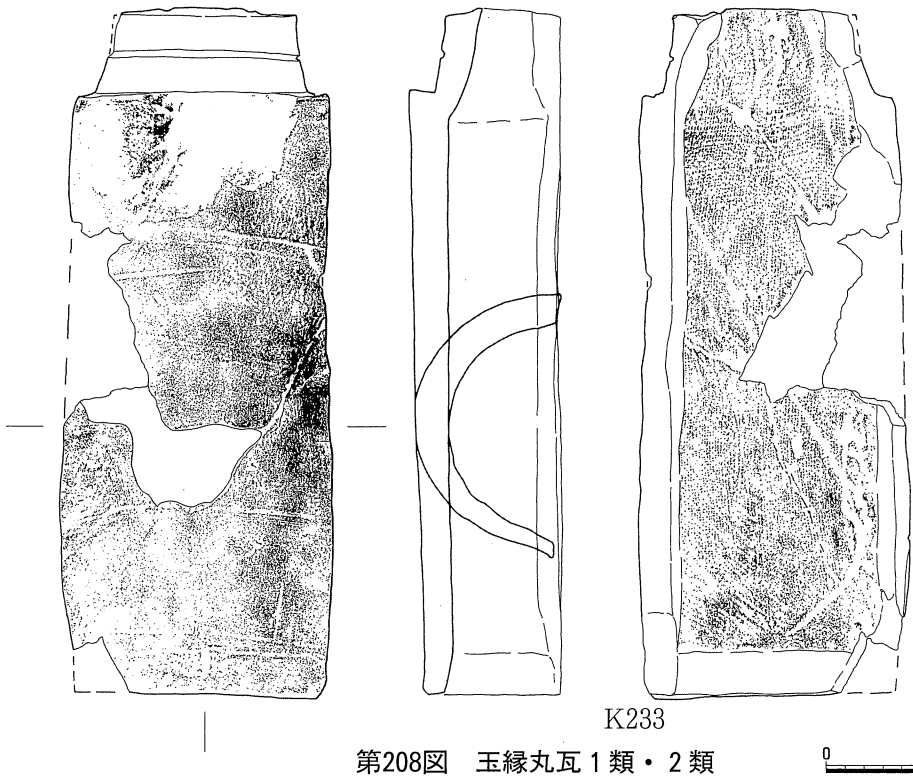




第207図　行基丸瓦12類・13類、不明丸瓦１類・２類　0　10cm



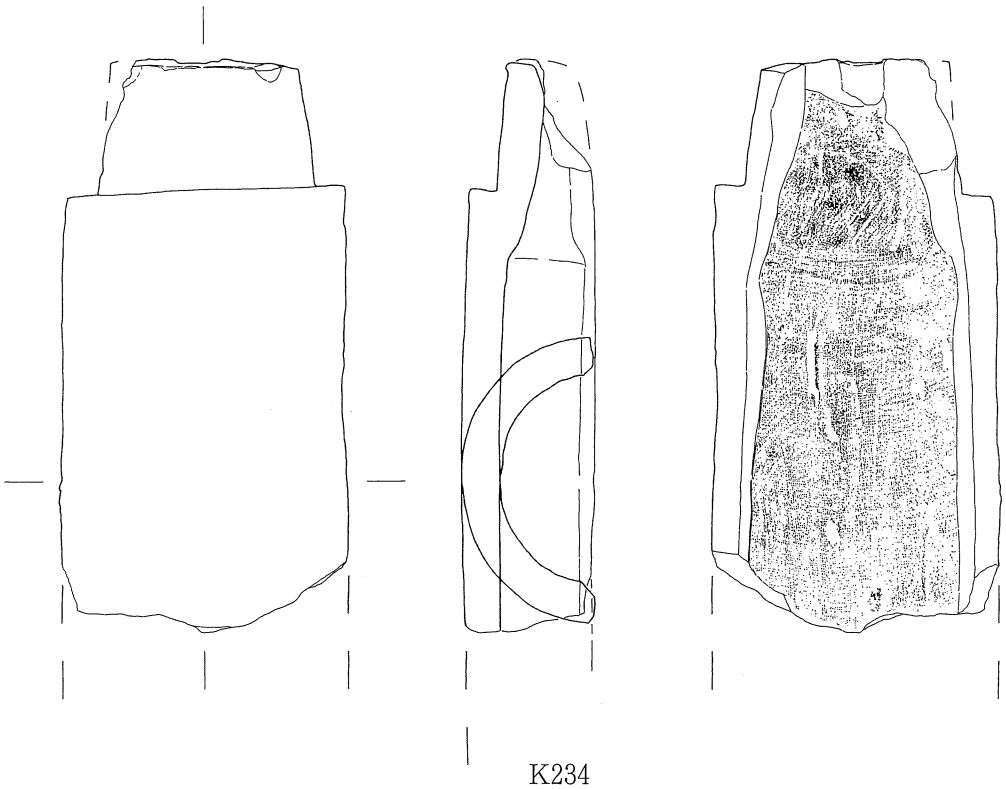
K232



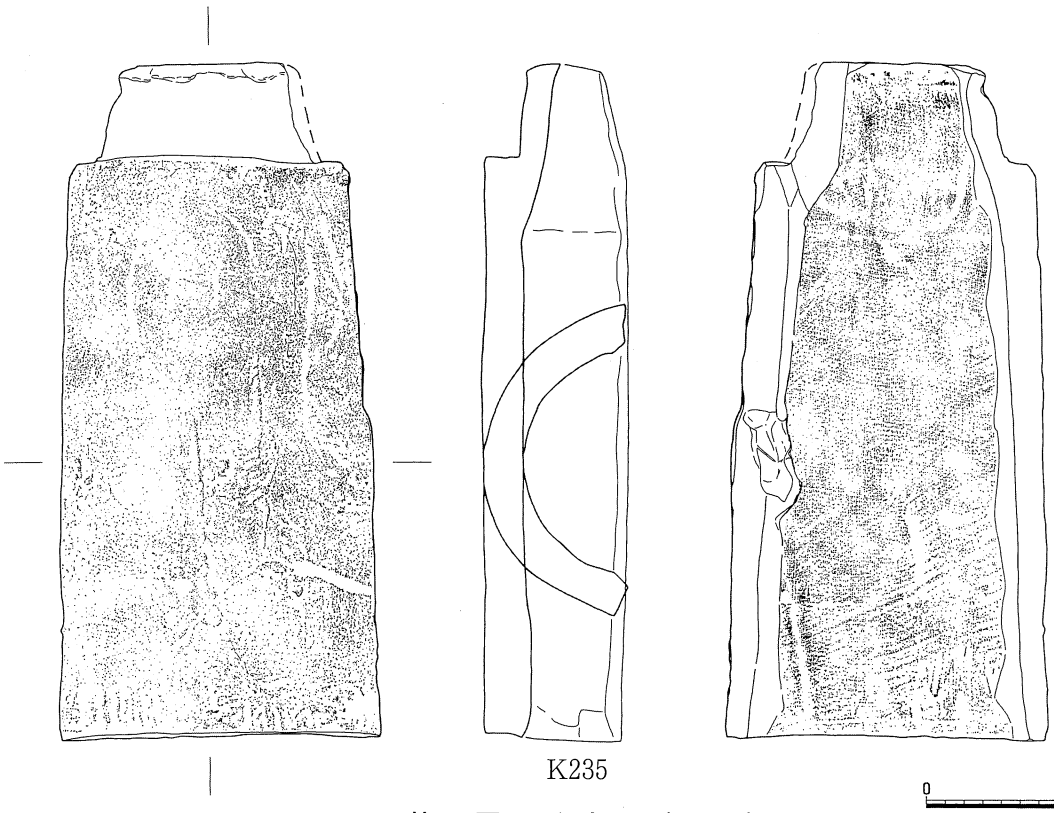
K233

第208図　玉縁丸瓦１類・２類

0　10cm



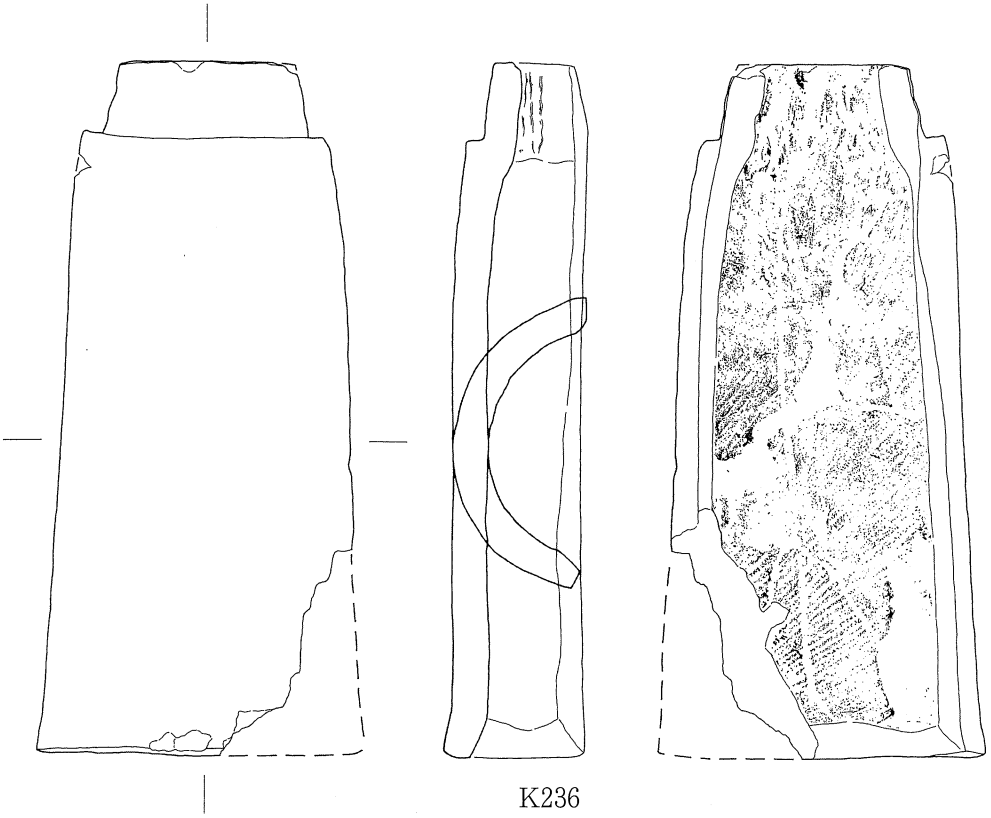
K234



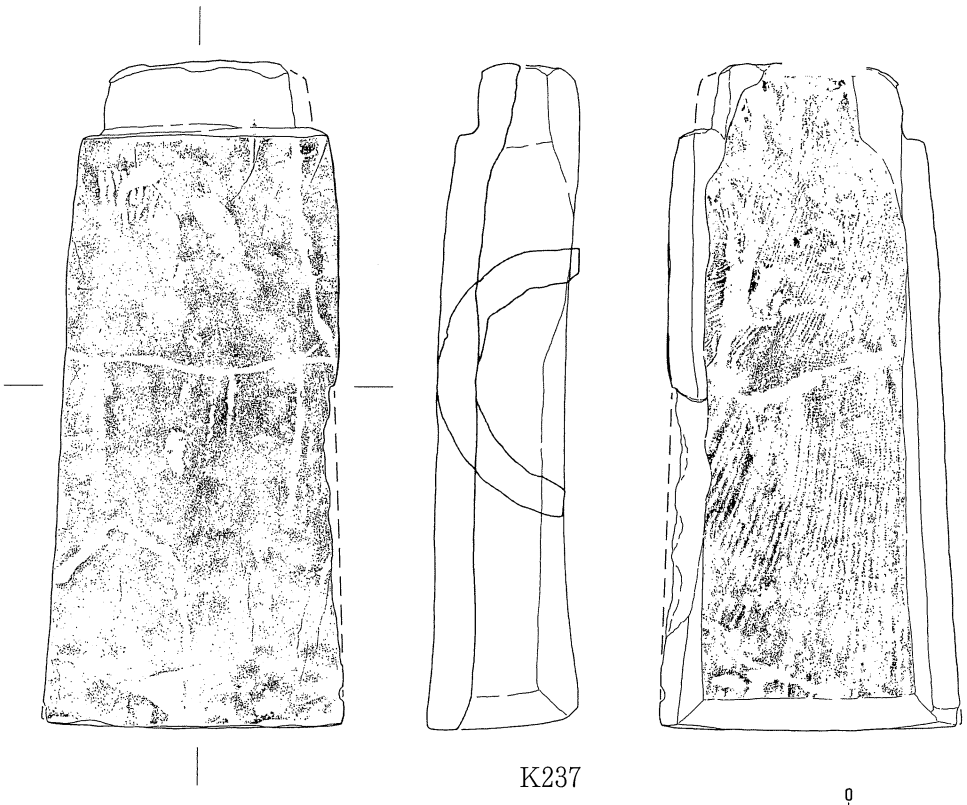
K235

0 10cm

第209図　玉縁丸瓦３類・４類



K236

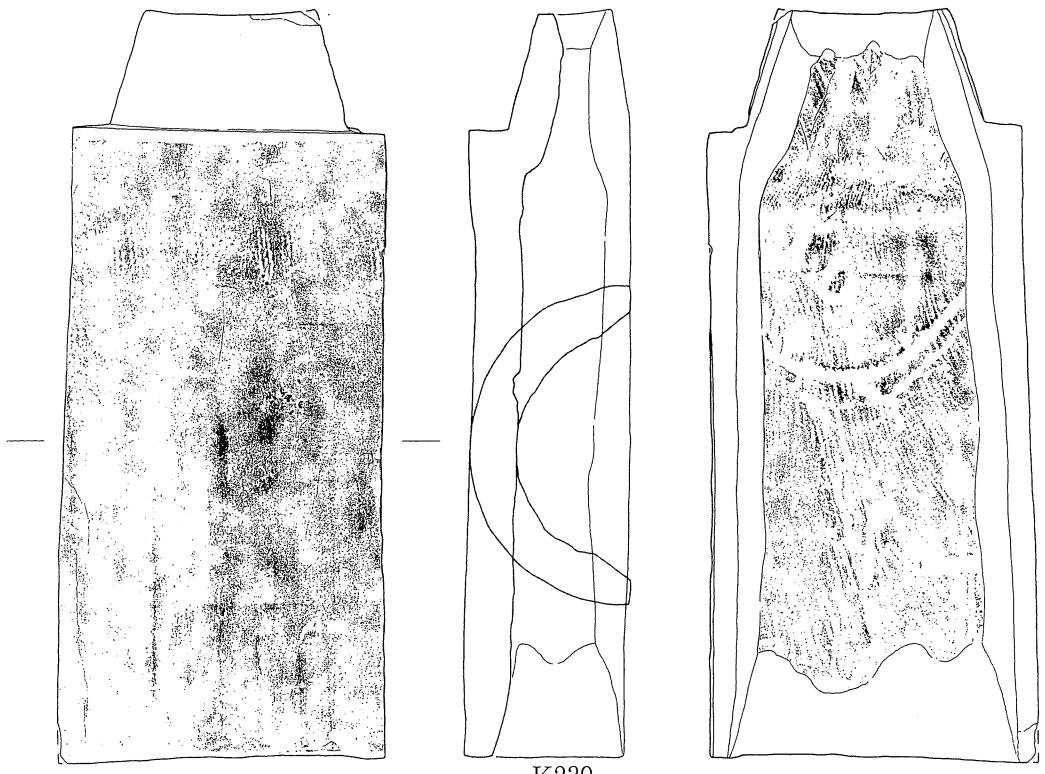


K237

0 10cm

第210図　玉縁丸瓦５類

K238



K239

0 10cm

第211図　玉縁丸瓦 6 類

質である。全長36㎝、広端部復原幅14㎝高さ７㎝、狭端部幅13.5㎝、玉縁部長４㎝端部復原幅10㎝高さ5.5㎝である。

玉縁丸瓦３類（第209図）　K234は狭端側１／２の破片のため全形は不明であるが、筒部凸面は丁寧にナデ調整を施し、叩き目痕跡は見られない。凹面は不調整で布目痕跡や糸切り痕跡が残る。側縁は0.5～1.5㎝の面取りを行う。側面は凸面側に弧状に分割破面が残り、凹面側から切っているのが分かる。玉縁部端面はつぶれて凸面側に粘土が盛り上がっている。須恵質である。狭端部幅14.6㎝、玉縁部長6.7㎝端部復原幅9.5㎝高さ５㎝である。

玉縁丸瓦４類（第209図）　K235は筒部凸面にはナデ調整を行うが、雑で縦方向の縄叩き目痕跡が残ったり、整形・調整時の粘土のめくれがみられる。凹面は不調整で布目痕跡や糸切り痕跡が残る。広端部の面取りは1.8㎝、側縁部の面取りは１～２㎝で粘土のめくれがみられる。側面には分割破面が広端部から狭端部まで残り、凹面側から切っているのがわかる。玉縁部端面はつぶれて凸面側に粘土が盛り上がっている。須恵質である。全長35㎝、広端部幅16.8㎝高さ7.8㎝、狭端部幅14.6㎝、玉縁部長５㎝端部復原幅９㎝高さ5.5㎝、重さ2.8kgである。

玉縁丸瓦５類（第210図）　K236・K237は土師質で器壁の残りが悪いが、筒部凸面は縦方向の縄叩き目痕跡が残っている。凹面には布目痕跡や糸切り痕跡が残る。広端部の面取りは幅1.5㎝、少し雑でヘラの及ばないところから２㎝のところまで波打つような面取りの仕方である。側面には分割破面を残さない。胎土に赤褐色砂粒を含むのが特徴的である。K237は全長35㎝、広端部幅15.8㎝高さ８㎝、狭端部幅13.2㎝、玉縁部長3.4㎝端部復原幅9.5㎝高さ5.5㎝、重さ2.3kgである。

玉縁丸瓦６類（第211図）　K238・K239は筒部凸面は縦位縄叩き目を施した後、縦方向にヘラケズリを行うが、部分的に叩き目が残る。凹面には布目痕跡や糸切り痕跡・吊り紐痕跡がある。広端部の面取りは広く、幅６㎝、側縁の面取りは幅1.5㎝～2.5㎝である。玉縁部端部凹面にも幅２㎝の面取りを行う。瓦質で焼成は良好である。K239は全長38.8㎝、広端部幅17㎝高さ９㎝、狭端部幅16.6㎝、玉縁部長６㎝端部幅9.3㎝高さ５㎝、重さ3.6kgである。

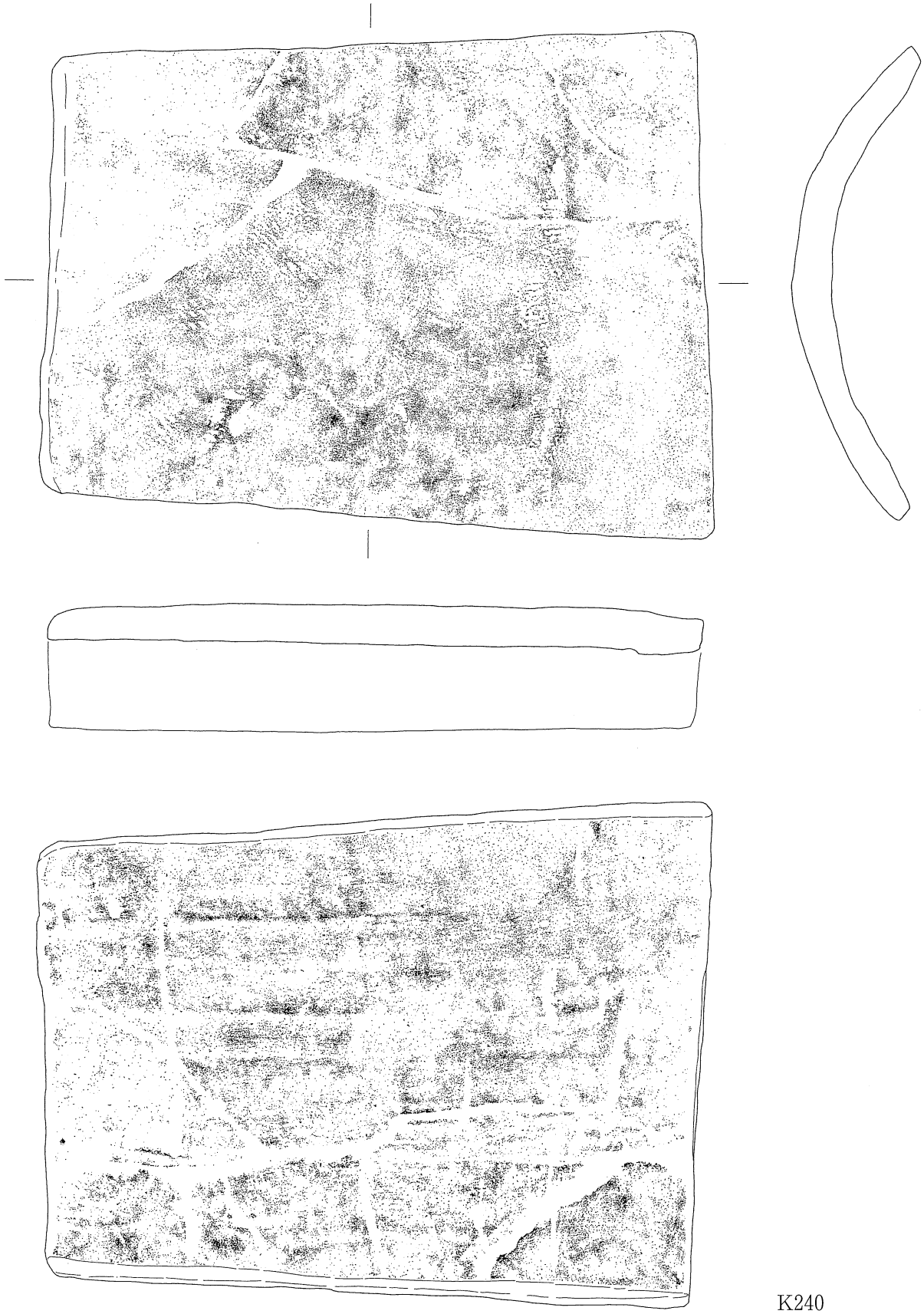
不明丸瓦１類（第207図）　K230は広端部の小片のため全形や玉縁の有無ともに不明であるが、凸面には１辺1.7㎝の方形に近い菱形の叩き目痕跡が、凹面には布目痕跡や糸切り痕跡が残る。残存部分では広端部や側縁部に数㎜程度の幅で面取りを行っている。側面には分割破面を残さない。

不明丸瓦２類（第207図）　K231は広端部の小片のため全形や玉縁の有無も不明であるが、凸面には１辺1.8㎝の太い菱形の叩き目痕跡が、凹面には布目痕跡が残る。残存部分では広端部の面取りを行っていない。瓦質で厚さは１㎝と他に比べて薄作りである。

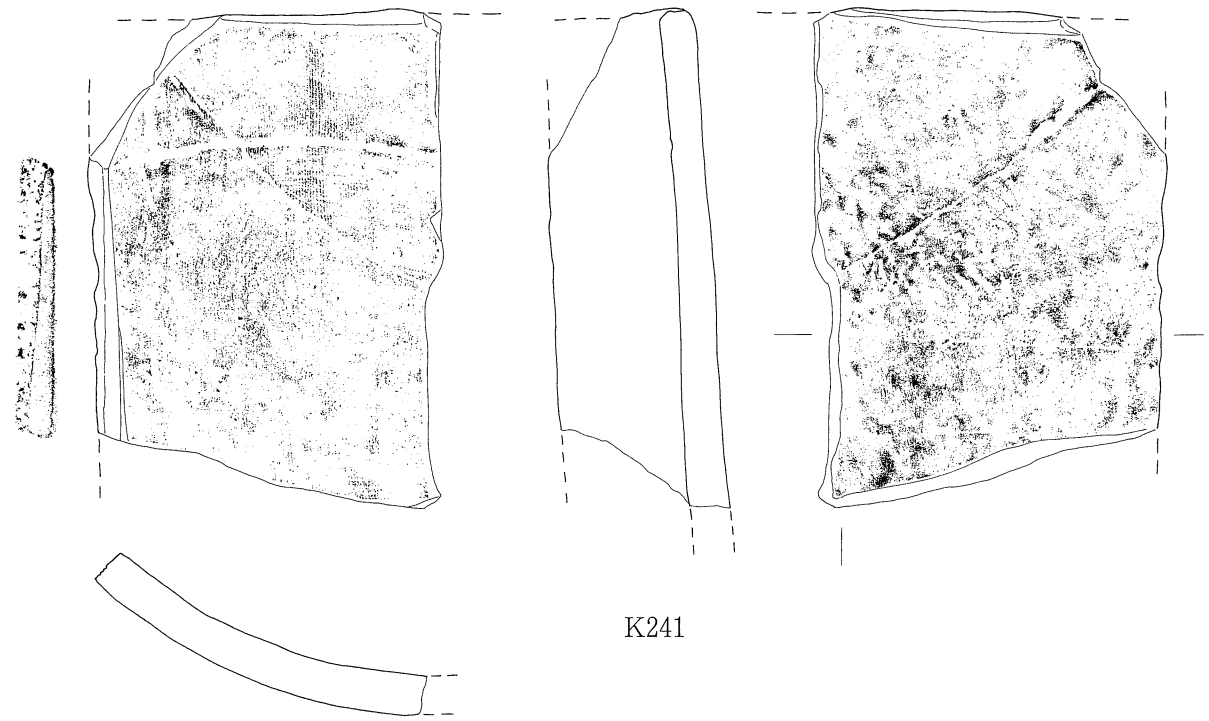
４．平瓦

平瓦は全形のわかるものが限られているため、叩き目を基準として23類に分類する。

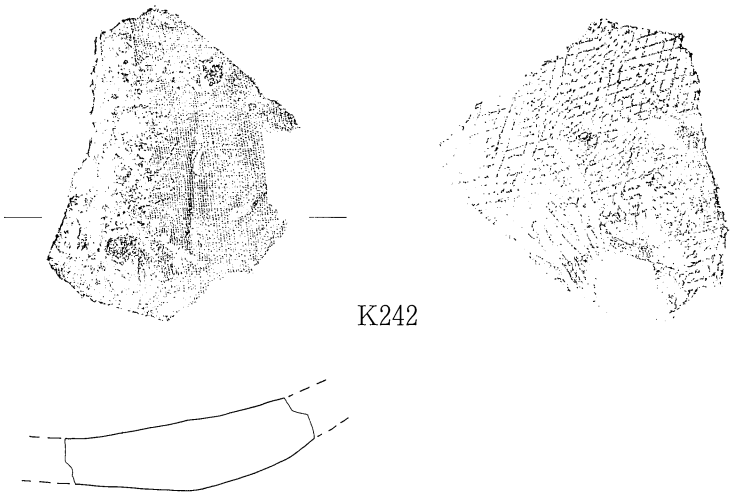
平瓦１類（第212・213図）　格子・小菱形叩き目＋ナデ消し（K240～K243）。模骨痕跡のある平瓦で、凸面は１辺３～５㎜の格子ないしは菱形の叩き目をナデ消しているが、ナデが浅かったり及ばないところがあるなど不十分なため叩き目痕跡が残っている。硬質の須恵質と灰白色の軟質とがあり、狭端部がすぼまるようになでるものや、側面に分割破面が残るものもある。丸瓦１類に対応する。唯一完形のK240では、全長45.0㎝広端部幅35.0㎝狭端部幅30.0㎝厚さ２～３㎝重さ6.4kgである。凸面には



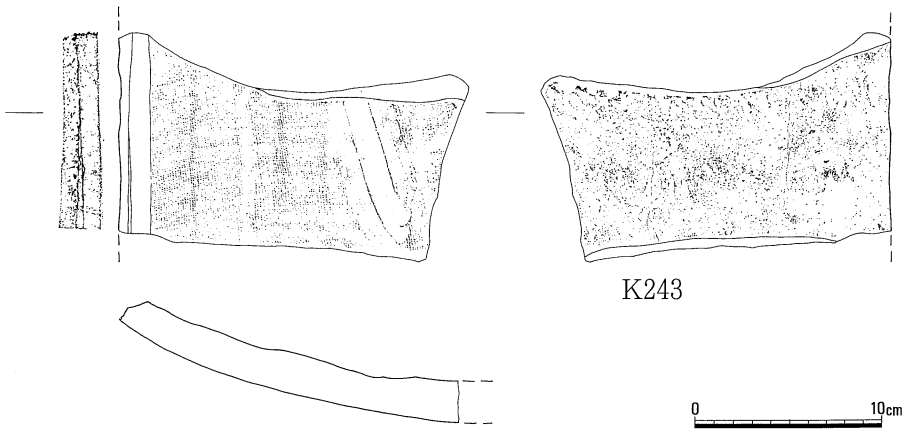
第212図　平瓦１類(1)



K241



K242



K243

0 10cm

第213図　平瓦１類(2)

細格子・小菱形２種類の叩き目痕跡が見られ、ランダムにナデ消している。凹面には遺存状態は悪いが布目痕跡や幅３～４㎝の模骨痕跡が見られる。端部の面取りは広端部と両側縁には２～３㎝の幅で行われるが狭端部には行われない。狭端部は面を持たず丸くすぼまる。K243は端部を欠失した破片で、凸面には小格子叩き目を施したのちヘラ状の工具で叩き目痕跡を消しているが、残存部分では消している部分は少ない。

平瓦２類（第214～244図）　格子叩き目、菱形叩き目（K244～K274）。模骨痕跡のある平瓦で、狭端部凸面の稜をなでて丸くしたり、広端部の両角を斜めに落としている個体が多くみられるのが特徴で、金堂創建の平瓦である。叩き目によりＡ～Ｆの６つに細分できる。

２Ａ類（K244～K266）は１辺８㎜程度の方形ないしは方形に近い菱形の叩き目で、凸面の広端部や側縁部に面取りを行うものもある。凹面には布目痕跡や幅２～３㎝の模骨痕跡がみられ、中には指頭圧痕があるものもある。広端部の面取りは行われないが、側縁部や狭端部では行うものと行わないもの双方がある。側面には分割破面を残さない。全長42.5㎝広端部幅32～34㎝狭端部幅29～31㎝厚さ2.2～3.4㎝である。重さは比較的軽いK247で5.8kg、狭端部に欠損があるが厚手のK256で7.8kgである。軒平瓦１Ａ類に対応する。金堂創建瓦のうち最も点数が多い。

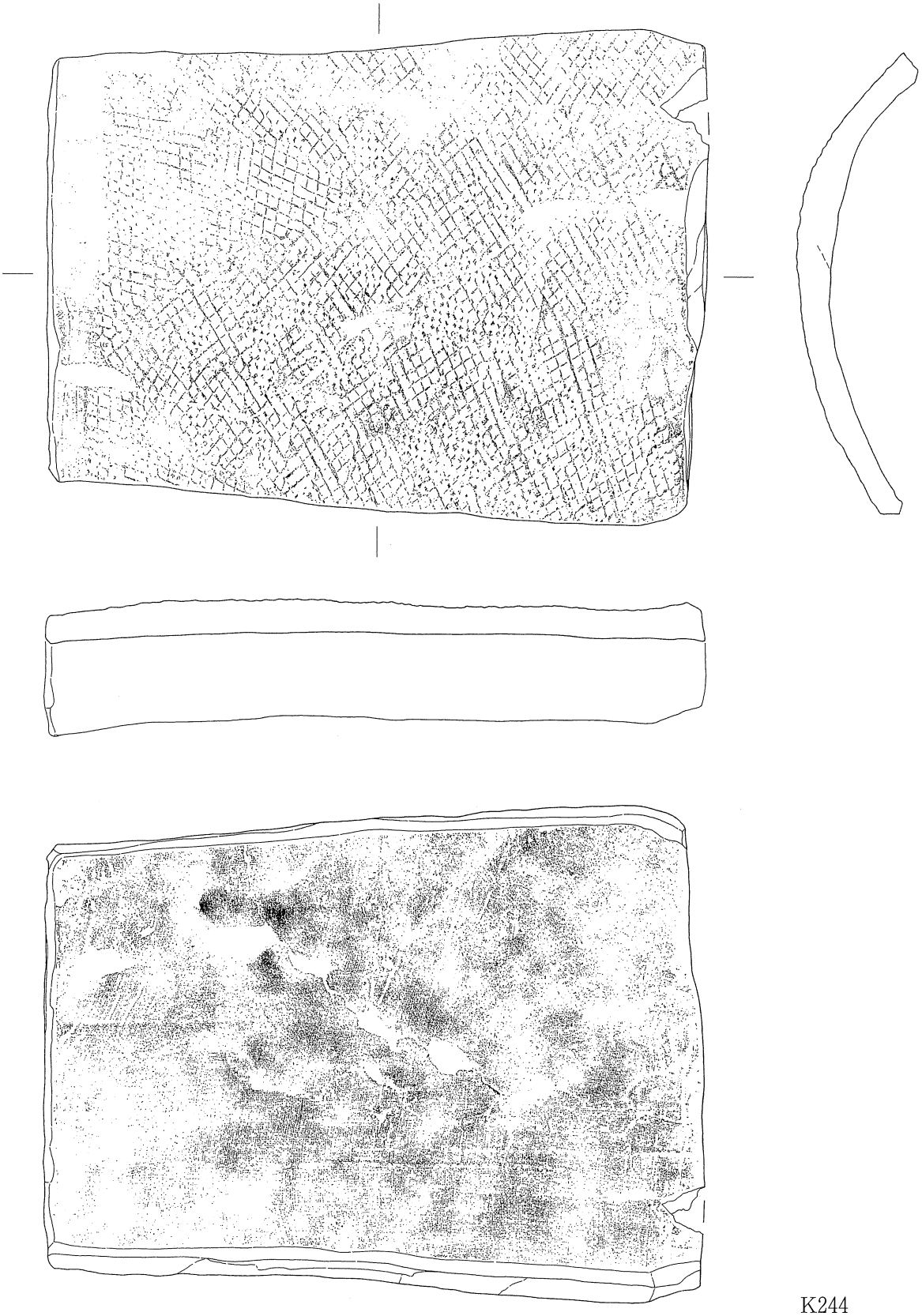
２Ｂ類（K267・K268）は凸面には１辺１㎝程度のやや扁平な菱形の叩き目を縦位に施す。凸面広端部には面取りを行い、狭端部はなでて稜を取る。側縁部の面取りは行わない。凹面には布目痕跡や幅2.5～３㎝の模骨痕跡が残る。面取りは四方を４～８㎜程度行う。側面には分割破面を残さない。K268は全長42.8㎝狭端部幅29㎝厚さ1.5～２㎝である。軒平瓦１Ｂ類に対応する。

２Ｃ類（K269）は平瓦２Ａ類と平瓦２Ｂ類の２種類の叩き目が用いられている。凸面の面取りは行われないが、広端部側を１㎝幅でなでたり、狭端部の稜をなでて丸くしている。凹面には布目痕跡や幅2.5～３㎝の模骨痕跡が残る。側面のヘラ削りはやや浅く、分割破面の凹部が残っていたり、凹部が残らなくとも分割截面とに段差が生じている。全長43.5㎝広端部復原幅33㎝狭端部復原幅28㎝厚さ1.8～2.4㎝である。軒平瓦１Ｃ類に対応する。

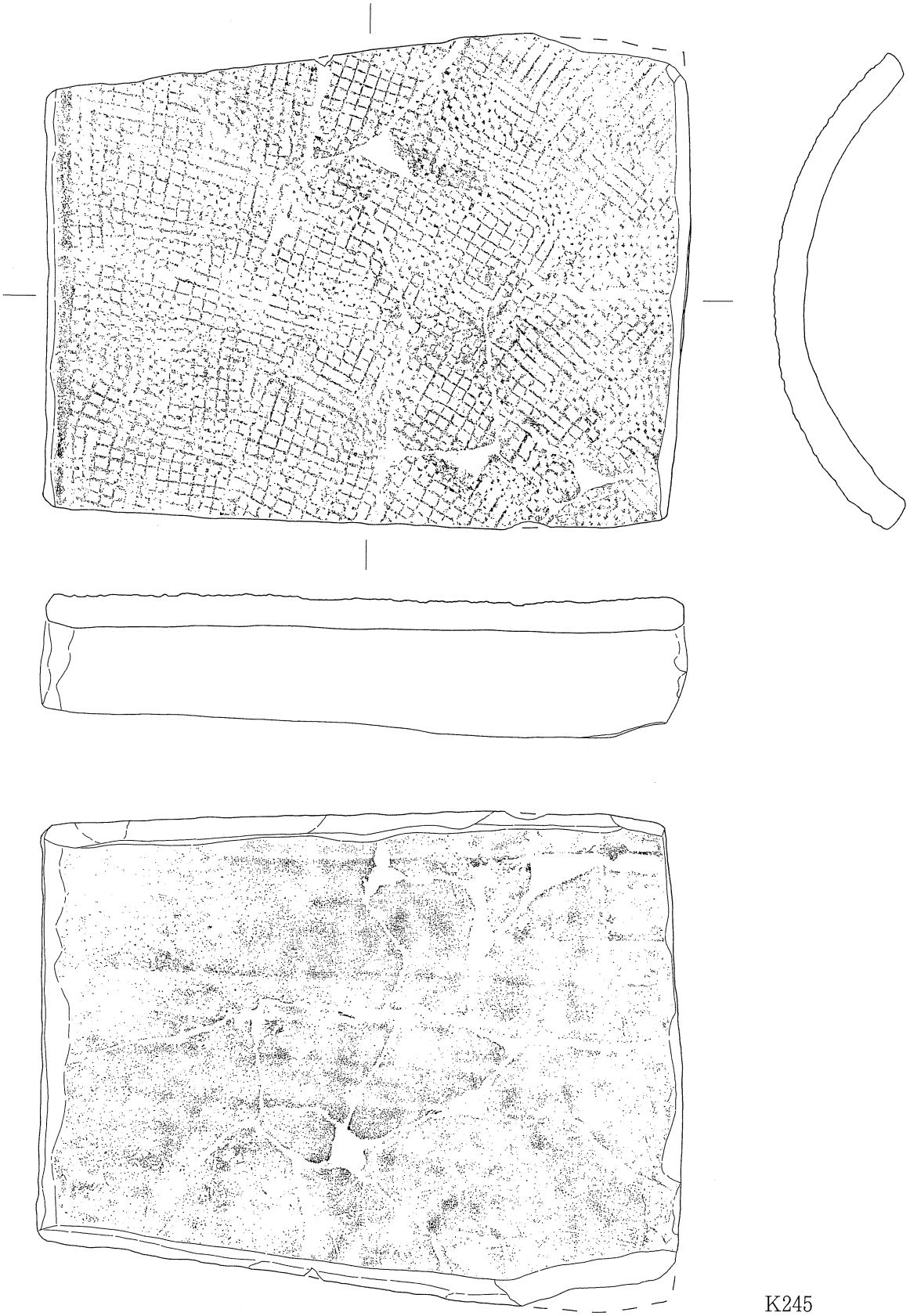
２Ｄ類（K270・K271）は１辺1.5㎝のやや扁平で太い菱形の叩き目を横位ないし斜位に施す。凸面は狭端部を一部なでたりヘラ削りを行ったりしているが、そのほかは端部に手を加えない。凹面には布目痕跡や幅2.5～３㎝の模骨痕跡が見える。面取りは狭端部側を幅１㎝弱で行う。側面には分割破面を残さない。全長45.3㎝広端部幅32㎝狭端部幅30㎝厚さ1.5～2.4㎝である。

２Ｅ類（K272）は平瓦２Ａ類と平瓦２Ｄ類の２種類の叩き目を施す。凸面狭端部は稜を取っている。凹面には布目痕跡や幅３㎝ほどの模骨痕跡がみられる。面取りは広端部側と狭端部側に行い、側縁部はほとんど行わない。側面には分割破面の凹部が残る箇所がある。

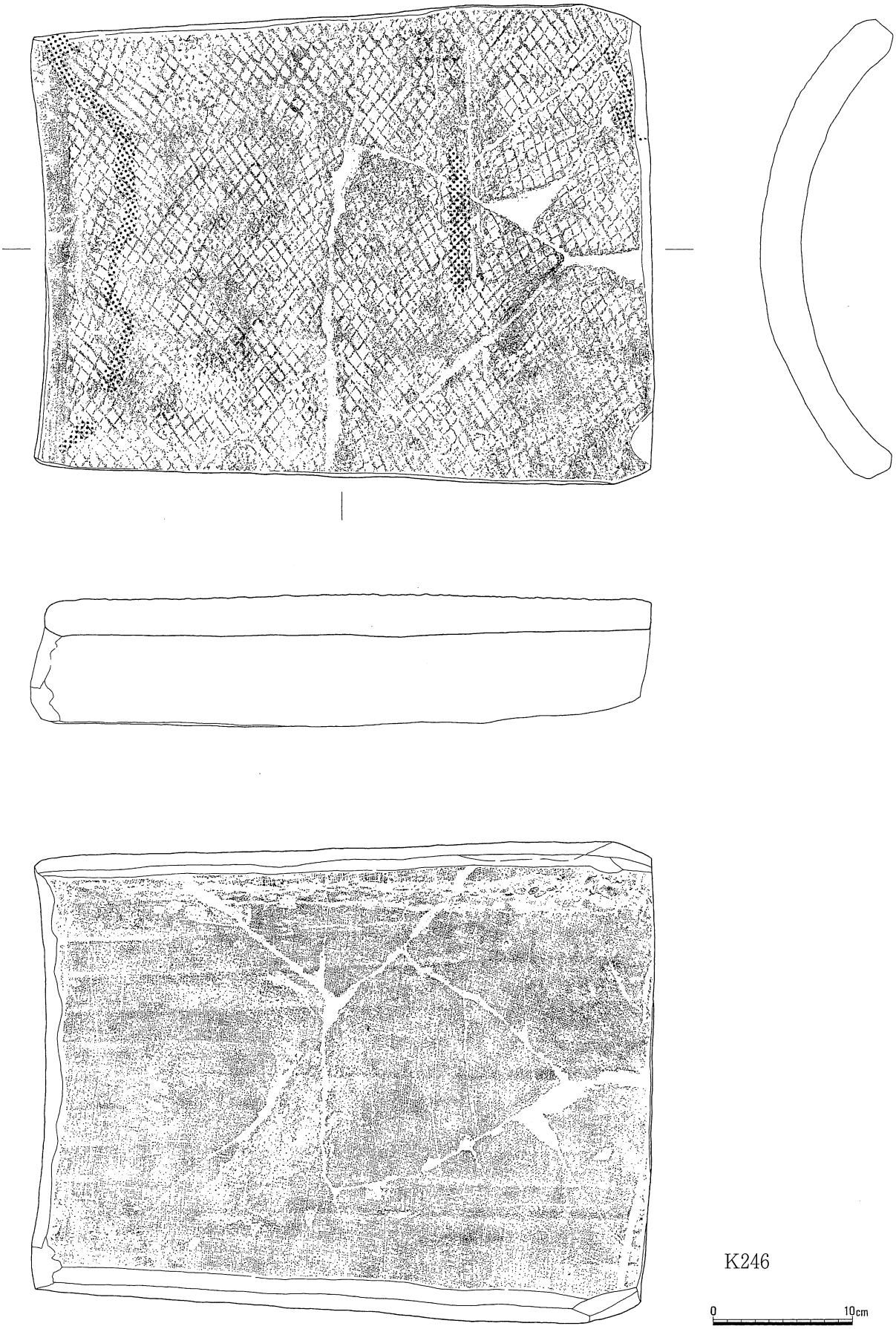
２Ｆ類（K273・K274）は１辺１㎝で刻線の太い菱形と平瓦２Ｄ類の２種類の叩き目を施し、広端部側10～12㎝をナデ消している。凸面には面取りを施さないが、狭端部で稜を取り丸くなでつけている。凹面には布目痕跡や幅2.5～３㎝の模骨痕跡がみられ、両側縁に面取りが施される。側面には分割破面を残さない。全長42㎝広端部幅30.5㎝狭端部幅31.5㎝厚さ2.3～2.8㎝で、広端部や側縁部に欠損があるが重さ6.5kgである。軒平瓦１Ｄ類では１辺１㎝の菱形叩き目の出土をみていないが、広端部側のナデ消しや１辺1.5㎝の菱形叩き目などからすると、軒平瓦１Ｄ類と平瓦２Ｆ類が対応関係と捉えられる。



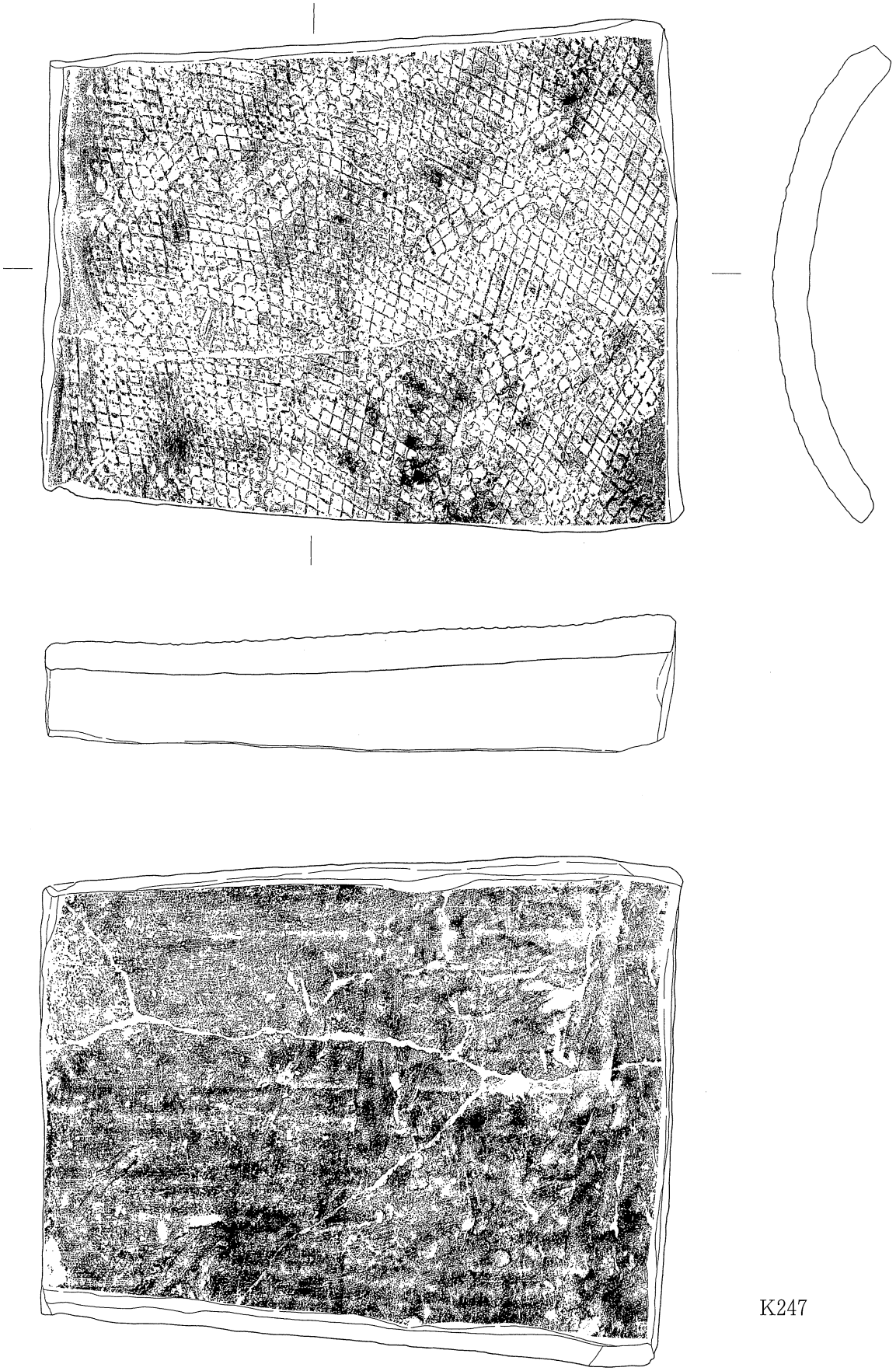
第214図　平瓦２Ａ類(1)



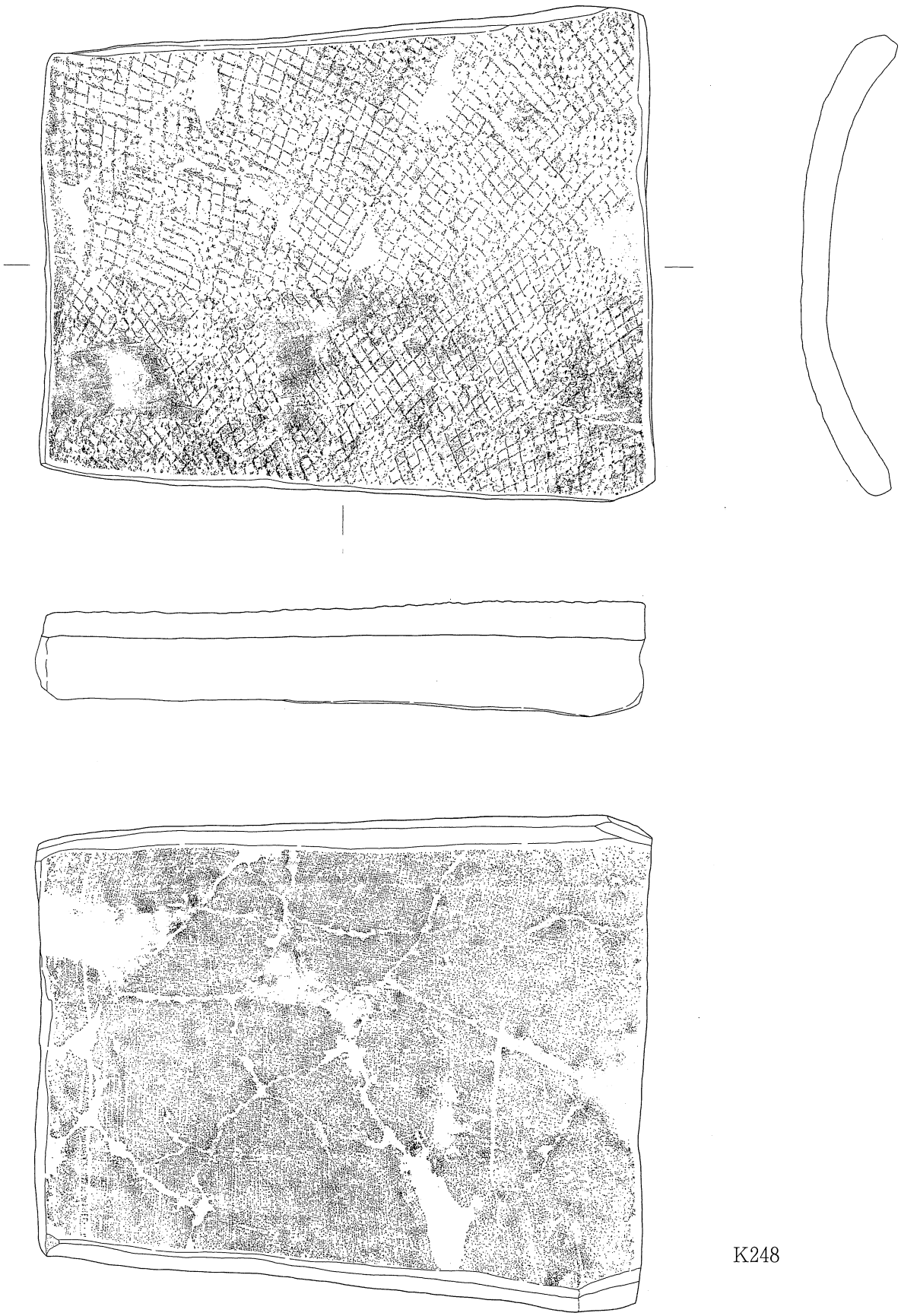
第215図　平瓦２Ａ類(2)



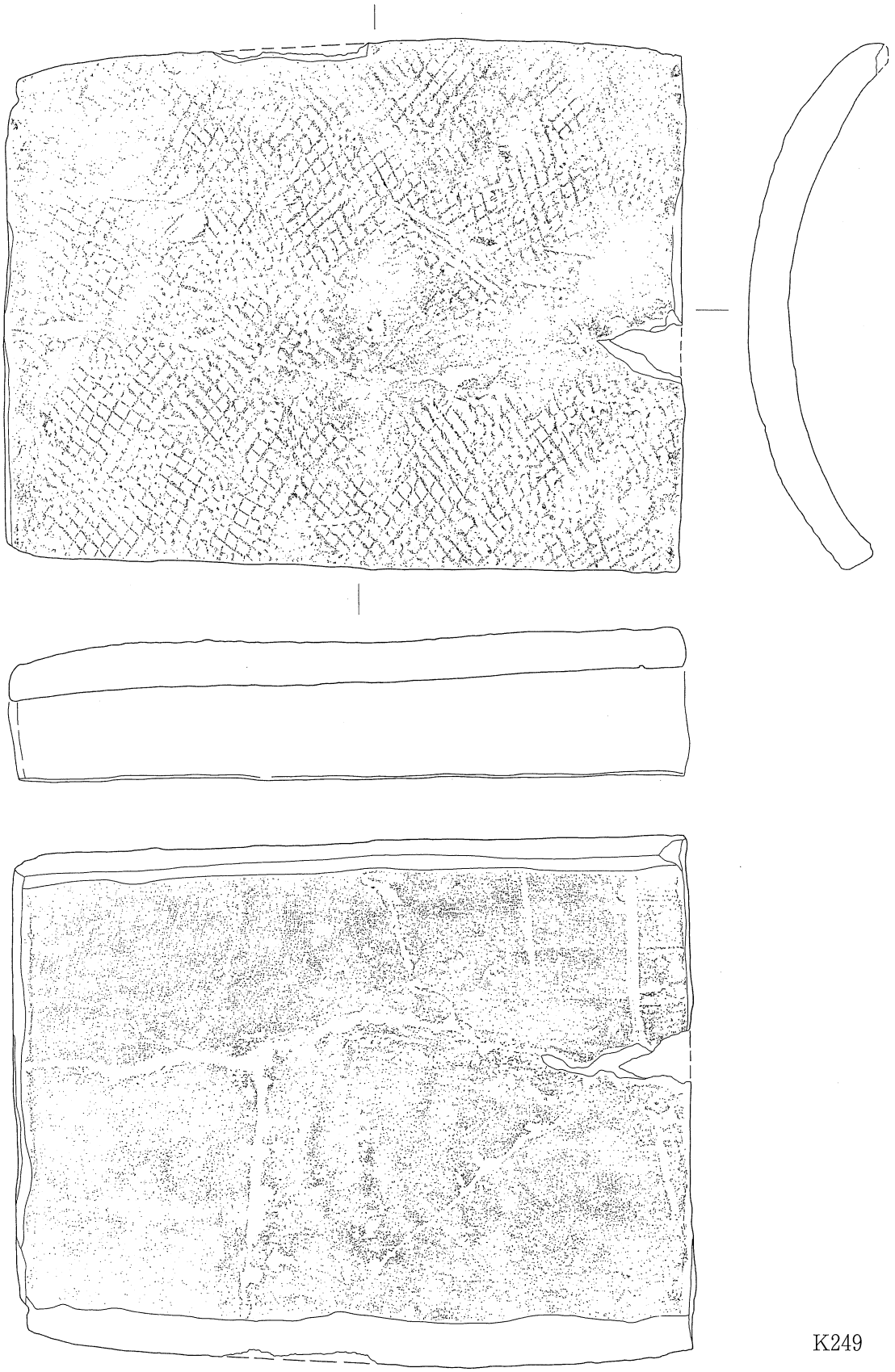
第216図　平瓦２Ａ類(3)



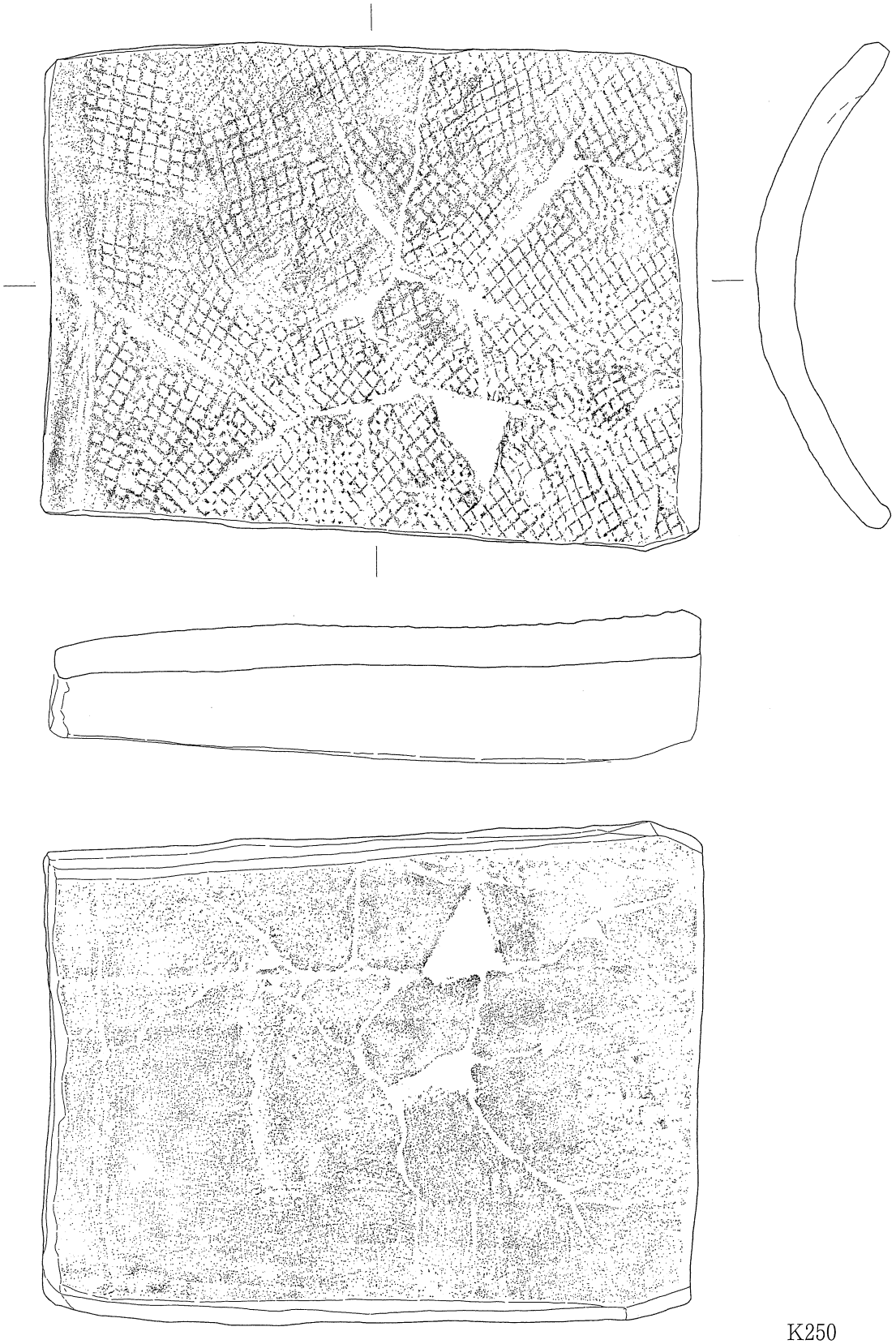
第217図　平瓦２Ａ類(4)



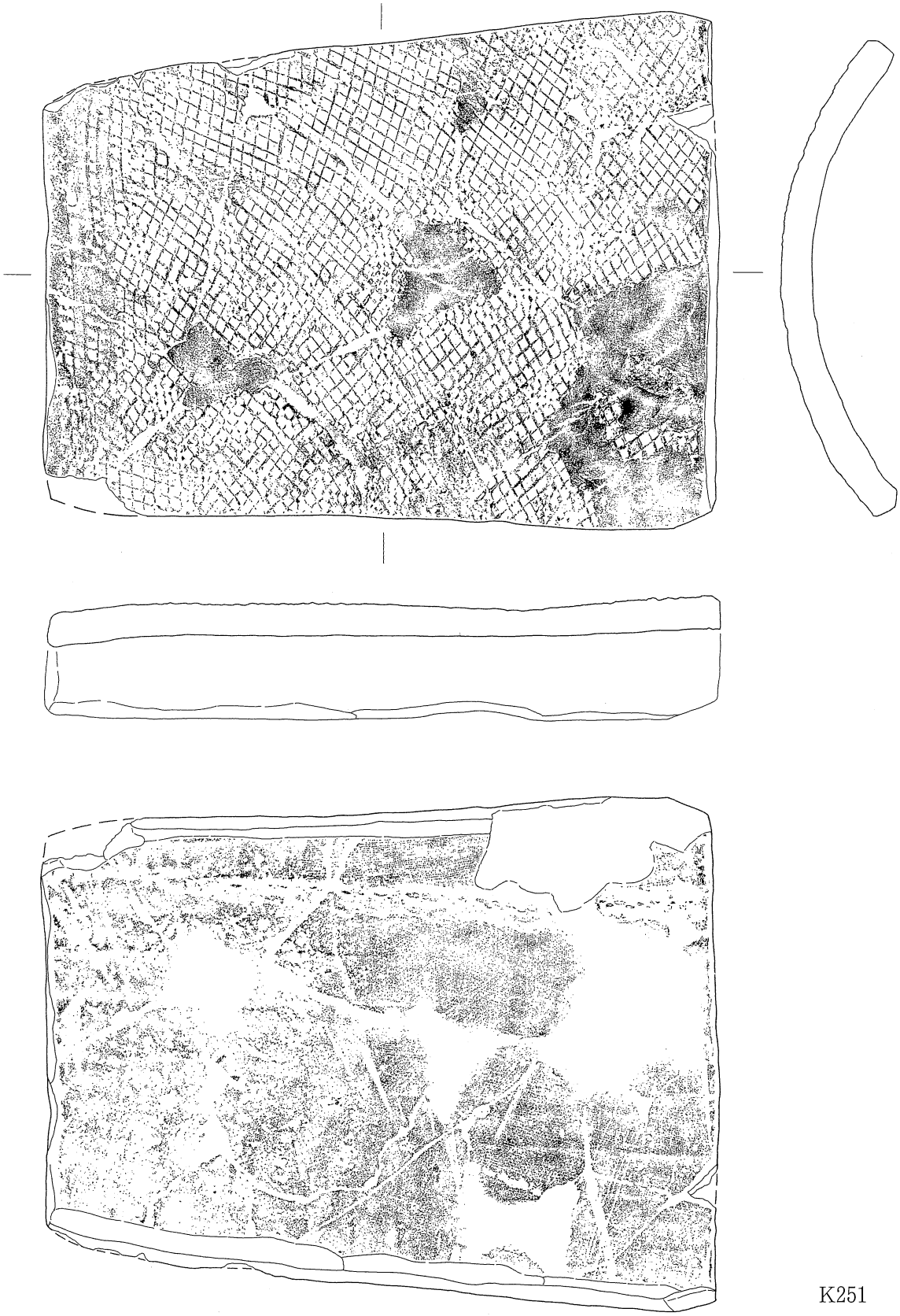
第218図　平瓦２Ａ類(5)



第219図　平瓦２Ａ類(6)



第220図　平瓦２Ａ類(7)



第221図　平瓦２Ａ類(8)